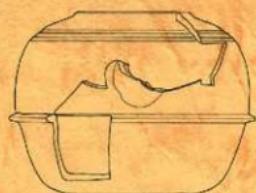
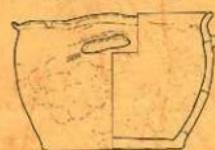
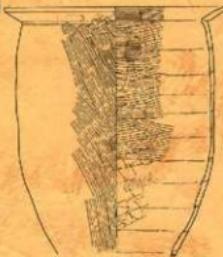
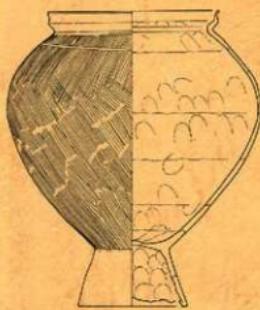


下 西 番 遺 跡  
西 番 遺 跡  
影 井 遺 跡  
保 坂 家 屋 敷 墓

— 国道411号（塩山東バイパス）建設工事に伴う発掘調査報告書 —



2002. 3

山梨県教育委員会  
山梨県土木部

下 西 番 遺 跡  
西 番 遺 跡  
影 井 遺 跡  
保 坂 家 屋 敷 墓

— 国道411号（塩山東バイパス）建設工事に伴う発掘調査報告書 —

2002. 3

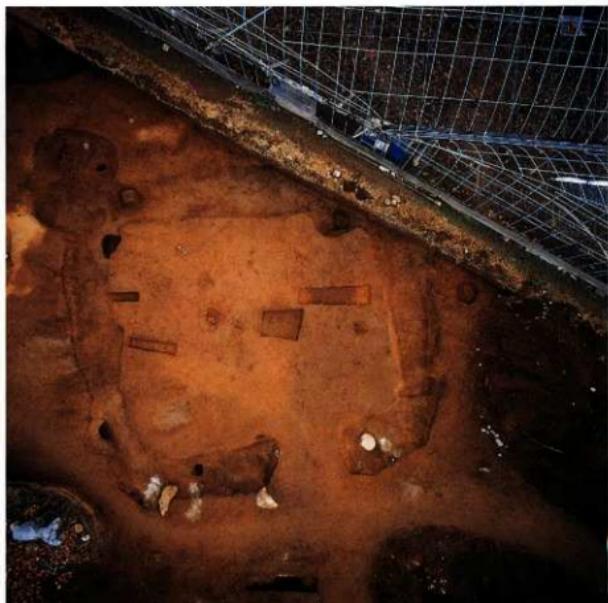
山梨県教育委員会  
山梨県土木部

『下西畠遺跡・西畠遺跡・影井遺跡・保坂家屋敷墓』正誤表

ページ	誤	正
例言	2. ……第8章考察第1項を石神が、第2項を保坂が、第3項を須長愛子が行った。	2. ……第8章考察第1項を石神が、第2項を須長愛子が、第3項を保坂和博が行った。
39p	第24図 第1号方形周溝墓(65~68)・第3号方形方形周溝墓(73~76)・第4号方形周溝墓(77~81)出土遺物	第24図 第1号方形周溝墓(65~68)・ <u>第2号</u> 方形方形周溝墓(73~76)・ <u>第3号</u> 方形周溝墓(77~81)出土遺物



98 下西烟遺跡全景



97 下西烟遺跡第 3 号方形周溝墓



影井遺跡遠景  
(後は大菩薩様)



骨壺



土瓶



造構外出遺物

## 序

本書は、1997年度から1999年度（平成9年～11年）に実施した塩山市に所在する下西畠遺跡・西畠遺跡・影井遺跡・保坂家屋敷墓の発掘調査報告書であります。

この調査は、山梨県土木部が行う一般国道411号（通称塩山東バイパス）建設工事に伴うもので、甲府盆地の東に位置する塩山市を重川に沿って南北に長く調査したものであります。この事業は今回の調査以降も継続して行われており、現在までに7遺跡が発掘調査されています。

今回最も早く調査に着手した下西畠遺跡では、縄文時代中期の住居跡1軒・土坑等、古墳時代前期の住居跡3軒・方形周溝墓4基、奈良・平安時代の住居跡3軒等が発見されました。とくに方形周溝墓は市内では西田遺跡に次いで2例目となり、古墳時代前期の共同墓地のあり方を知る上で重要な資料になりました。

西畠遺跡では、平安時代の住居跡7軒・溝2条、近世から近代の道路跡1条が発見されました。平安時代の住居跡は塩山東バイパス全体の発掘調査から見ても、比較的古い段階に位置づけられるものであり、当地域の平安時代の集落変遷を知る上ではすすことのできない資料を得ることができました。

影井遺跡では、平安時代の住居跡3軒、ピット群等が発見されました。住居跡からは把手のついた甕や小型化した皿など、11世紀後半から12世紀に位置づけられる遺物が多数出土いたしました。さらに、石鍋を模倣したと思われる土製の堀や鉄製の鈴の出土など、特筆すべきものが数多く見られます。遺物群は平安時代末から中世に移行する時期のものであり、これらから生活様式の変遷を見て取ることができます。その他本遺跡からは掘立柱建物跡と思われるピット群が確認されました。鉄製の鈴とあわせて、この遺跡が交通の要所であったことが推測されるであります。

保坂家屋敷墓では、15基の墓石を含む20基の石像物を調査したものです。墓石は古いものでは江戸時代初期、最も新しいものは明治時代が見られます。これらは各時代背景を如実に表しております。また墓石移築後の発掘調査では、墓坑はほとんど見られませんでした。保坂家には現在も400点を越える数多くの古文書が残されているなど、文献からのアプローチも可能であります。今後これらの資料と照合すれば、当時の風俗習慣などがさらに明確になるものと思われます。

以上これら4遺跡の発掘調査は、それぞれ貴重な成果を出すことができたと考えております。今後周辺地域の調査研究におおいに期待したいと思うところであります。

末筆ながら、調査にあたって御協力いただいた関係者、関係機関ならびに調査・整理作業に従事された多くの方々に厚くお礼を申し上げる次第でございます。

2002年3月

山梨県埋蔵文化財センター  
所長 大塚 初重

例 言

1. 本書は、一般国道411号（通称塩山東バイパス）建設工事に先立って、1997（平成9）年度～1999（平成11）年度に山梨県埋蔵文化財センターが実施した、塩山市に所在する下西畠遺跡・西畠遺跡・影井遺跡・保坂家屋敷墓の発掘調査報告書である。
  2. 本書の編集は保坂和博・小林（石神）孝子が行った。執筆については第1章調査の経過と概要から第7章影井遺跡までを小林（石神）が、第8章考察第1項を石神が、第2項を保坂が、第3項を須長愛子が行った。
  3. 写真撮影は、遺構については小林（石神）孝子・米山真・古屋勝之が、遺物については村石真澄・小林稔（山梨県埋蔵文化財センター）・日本写真家協会会員塚原明夫氏・小川忠博氏が撮影した。
  4. 保坂家屋敷墓から出土した人骨については聖マリアンナ医科大学平田和明教授に鑑定を委託した。
  5. 保坂家屋敷墓の墓石実測・銘文拓本作業は（株）バスコに委託した。
  6. 下西畠遺跡・西畠遺跡・影井遺跡より出土した石器実測作業は（株）シン技術コンサルに委託した。
  7. 本報告書にかかる出土品・記録図面・写真等は一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。  
ただし、保坂家屋敷墓より出土した人骨・副葬品等については、保坂幸義氏に返却した。

## 凡 例

- 遺構・遺物の縮尺は原則として次のとおりである。  
住居跡1/60 貯蔵穴・土坑・カマド1/30 方形周溝墓1/160 土器微細図1/20 墓石1/10 縄文土器  
1/6 古墳・平安時代土器・石器1/3 石鎚・土製品・銭2/3
  - 挿図中のスクリーントーンは下記の内容を示す。  
焼土・・■■■■■ 地面・・||||||| 糜・・■■■■■ 土器実測図赤色部分・・■■■■■
  - 挿図中のドットマークは下記のマークを示す。
 

●…縄文土器・古式土師器・土師器	○…須恵器	■…灰釉陶器・綠釉陶器
□…内面黒色土器	▲…石製品	△…鉄器
  - 土器実測図のうち、断面図の表現は下記の通りである。  
白…土器・古式土師器・土師器 黒…須恵器 紺…灰釉陶器・綠釉陶器
  - 遺構断面中のレベルポイント部分にある数字は標高を表す
  - 本文中97年下西畠遺跡・98年下西畠遺跡は調査年度が異なるため、それぞれ報告してあるが、遺構ナンバーは連続で設定した。

# 塩山バイパス関係遺跡報告書目次

第3節 平安時代出土土器概観 ..... 149

序

例言

凡例

目次

第1章 調査の経過と概要 ..... 1

第1節 調査に至る経緯 ..... 1

第2節 発掘調査の概要 ..... 1

第1項 発掘調査の経過 ..... 1

第2項 調査組織及び協力機関 ..... 2

第2章 環 境 ..... 3

第3章 下西畠遺跡の調査（97年度） ..... 7

第1節 環 境 ..... 7

第2節 住 居 跡 ..... 7

第3節 土 坑 ..... 7

第4節 方形周溝墓 ..... 8

第5節 溝 ..... 10

第6節 遺構外の遺構と遺物 ..... 10

第4章 下西畠遺跡の調査（98年度） ..... 50

第1節 環 境 ..... 50

第2節 住 居 跡 ..... 50

第3節 竪穴状遺構 ..... 51

第4節 土 坑 ..... 51

第5節 溝 ..... 51

第6節 遺構外出土遺物 ..... 51

第5章 西畠遺跡の調査 ..... 72

第1節 環 境 ..... 72

第2節 住 居 跡 ..... 72

第3節 溝 ..... 73

第4節 道路跡 ..... 74

第5節 ピット群 ..... 74

第6章 影井遺跡の調査 ..... 99

第1節 環 境 ..... 99

第2節 住 居 跡 ..... 99

第3節 ピット群 ..... 100

第4節 遺構外出土遺物 ..... 100

第7章 保坂家屋敷墓 ..... 117

第1節 環 境 ..... 117

第2節 墓 石 ..... 117

第3節 墓 坑 ..... 119

第4節 遺 物 ..... 120

第5節 ま と め ..... 120

第8章 保坂家屋敷墓遺跡出土人骨について ..... 141

第9章 考 察 ..... 142

第1節 下西畠遺跡方形周溝墓 ..... 142

出土土器について ..... 142

第2節 影井遺跡出土の「鉢」について ..... 146

## 表目次

第1表	97下西畠遺跡土器観察表	11
第2表	石器・石製品観察表	13
第3表	土製品観察表	14
第4表	鉄器観察表	14
第5表	銭貨観察表	14
第6表	98下西畠遺跡・古墳時代土器観察表	53
第7表	奈良・平安時代土器観察表	54
第8表	石器観察表	55
第9表	金属製品観察表	56
第10表	銭貨観察表	56
第11表	西畠遺跡土器観察表	75
第12表	石器石製品観察表	77
第13表	鉄製品観察表	77
第14表	影井遺跡土器観察表	101
第15表	石器観察表	102
第16表	鉄器観察表	102
第17表	銭貨観察表	102
第18表	保坂家屋敷墓石塔分類表	120
第19表	屋敷墓変遷表	121
第20表	墓石銘文表	140

## 挿図目次

第1図	遺跡の位置（1/25,000）	4
第2図	調査遺跡平面図・エレベーション図	5~6
	97下西畠遺跡	
第3図	第1号住居跡	15
第4図	第2号住居跡	16
第5図	第3号住居跡	17
第6図	土坑①（1号～3号土坑）	18
第7図	土坑②（4号～7号土坑）	19
第8図	第1号方形周溝墓	20
第9図	第1号方形周溝墓遺物分布図	21~22
第10図	第2号方形周溝墓	23
第11図	第2号方形周溝墓遺物分布図	24
第12図	第3号方形周溝墓	25
第13図	第3号方形周溝墓遺物出土状況	26
第14図	第3号方形周溝墓遺物分布図	27~28
第15図	第4号方形周溝墓	29
第16図	第4号方形周溝墓遺物出土状況	30
第17図	第4号方形周溝墓遺物分布図	31~32
第18図	1～3号住居跡出土遺物	33
第19図	1～3号住居跡出土遺物	34
第20図	第3号住居跡出土遺物	35

第21図	1・2・3・6・7号土坑出土遺物	36
第22図	第1号方形周溝墓出土遺物①	37
第23図	第1号方形周溝墓出土遺物②	38
第24図	第1号・第3号・第4号方形周溝墓出土遺物	39
第25図	第3・4号方形周溝墓出土遺物	40
第26図	第4号方形周溝墓出土遺物	41
第27図	遺構外出土遺物①	42
第28図	遺構外出土遺物②	43
第29図	遺構外出土遺物③	44
第30図	石器①	45
第31図	石器②	46
第32図	石器③	47
第33図	石器（打斧）	48
第34図	石器・土偶・土製品・鉄製品	49
98下西畠遺跡		
第35図	第4号住居跡	57
第36図	第5号住居跡	58
第37図	第6号住居跡	59
第38図	第7号住居跡	60
第39図	第8号住居跡	61
第40図	第1号竪穴状遺構	62
第41図	第8・9土坑・1号溝	63
第42図	第4号住居跡出土遺物	64
第43図	第4号・5号・6号住居跡出土遺物	65
第44図	第6号・8号住居跡 第1号竪穴状遺構出土遺物	66
第45図	8号土坑・4号溝・遺構外出土遺物	67
第46図	遺構外出土遺物①	68
第47図	遺構外出土遺物②・石器①	69
第48図	石器②	70
第49図	遺構外出土遺物	71
西畠遺跡		
第50図	西畠遺跡全体図	78
第51図	第1号住居跡	79
第52図	第2号住居跡	80
第53図	第3号住居跡	81
第54図	第4号住居跡	82
第55図	第5号住居跡	83
第56図	第6号住居跡	84
第57図	第7号住居跡	85
第58図	溝	86
第59図	道路跡	87
第60図	ピット群	88
第61図	第1号・第2号住居跡出土遺物	89
第62図	第2号・第3号住居跡出土遺物	90
第63図	第3号住居跡出土遺物	91
第64図	第3号・第4号住居跡出土遺物	92
第65図	第4号・5号・6号住居跡出土遺物	93
第66図	第7号住居跡出土遺物①	94
第67図	第7号住居跡出土遺物②	95
第68図	第7号住居跡	
第69図	第2号溝・遺構外出土遺物	96
遺構外出土遺物・石器		97
石器・石製品・鉄製品		98
影井遺跡全体図		103
第72図	第1号住居跡	104
第73図	第2号住居跡	105
第74図	第3号住居跡	107
ピット群		109
第76図	第1号住居跡・第2号住居跡	111
第77図	第2号住居跡出土遺物	112
第78図	第2号住居跡	
第3号住居跡出土遺物		113
第79図	第3号住居跡出土遺物	114
第80図	第3号住居跡・遺構外出土遺物	115
石器・鉄器・鉄製品		116
保坂家屋敷墓周辺図		123
屋敷墓全体図（図と方位共通）		123
墓域平面図		124
石造物側面図		125
石造物①（1：5実測図のみ）		127
石造物②（1：5実測図のみ）		128
石造物③（1：5実測図のみ）		129
石造物④（1：5実測図のみ）		130
石造物⑤（1：5実測図のみ）		131
石造物⑥（1：5実測図のみ）		132
石造物⑦（1：5実測図のみ）		133
石造物⑧（1：5実測図のみ）		134
石造物⑨（1：5実測図のみ）		135
石造物⑩（1：5実測図のみ）		136
トレンチ配置図・セクション図		137
出土遺物②		138
出土遺物①		139
下西畠遺跡方形周溝墓出土土器		145
第100図	鈴出土分布図	146
第101図	県内出土の鈴	147
付図	下西畠遺跡全体図	
写真図版		
図版1～図版8	下西畠遺跡	
図版9～図版11	西畠遺跡	
図版12～図版14	影井遺跡	
図版14～図版15	保坂家屋敷墓	

## 第1章 調査の経過と概要

### 第1節 調査に至る経緯

一般国道411号は通称青梅街道とも呼ばれ、東京都青梅市から塩山市街を通過し、やがて甲府市へ至るルートである。県内外からの需要も年々増加しており、また塩山市街では生活に極めて密着しているため、交通量は非常に多い。このため昭和63（1988）年には県土木部より塩山東バイパス建設工事の事業計画が、県教育委員会に提出された。塩山東バイパスは塩山市千野の新千野橋南から塩山市南端に位置する西広門田橋までを結ぶ国道411号のバイパスである。すでに昭和63年から平成元年にかけて新千野橋の南側において縄文時代前期及び平安時代の集落跡である獅子之前遺跡が調査されている。平成10（1998）年には全路線の約1／3にあたる千野橋南からJR線南側の駅前通りまでが供用開始となっている。

平成8（1996）年には、塩山土木事務所（現岐東地域振興局塩山建設部）の依頼により、JR塩山駅の南側部分（全路線の約2／3）の最初の試掘調査として、赤尾地区の下西畠遺跡が着手された。下西畠遺跡はすでに周知の遺跡として知られており、試掘調査においても広く遺跡の存在が認められたため、翌年97年10月より発掘調査が着手された。また下西畠遺跡発掘中の97年10月には西畠遺跡の試掘調査が着手され、平安時代の住居跡が確認されたため、翌98年には発掘調査が実施された。さらに98年には影井遺跡の試掘調査も行われ、翌99年には発掘調査が行われた。一方保坂家屋敷墓はすでに屋敷墓の存在が確定していたため、試掘調査は行わず、98年には石塔の調査を、99年には発掘調査を実施した。

### 第2節 発掘調査の概要

#### 第1項 発掘調査の経過

今回発掘調査を実施した4遺跡はJR線の南側に位置し、重川右岸の河岸段丘上に重川に沿うように所在する。遺跡は北から南へ保坂家屋敷墓・西畠遺跡・下西畠遺跡・影井遺跡のように位置している。以下にそれぞれの遺跡の概要を記す。

**保坂家屋敷墓** 本遺跡は塩山市赤尾675他に所在し、標高は398m前後を測る。平成10（1998）年6月22日から12月24日まで（株）バスコにより既存の石塔の実測・図化作業及び銘文の調査を、平成11（1999）年4月26日から5月26日まで発掘調査を行った。面積は約100m<sup>2</sup>を測る。保坂家屋敷墓はもともと保坂幸義氏の屋敷の一角に所在し、先祖の墓石が据えられていたが、戦後の農地改革や生活道の整備等により、現在は屋敷から分断されるかたちで所在する。墓域内には15基の墓石と5基の庚申塔等の供養塔が立地し、墓石には2名から4名の戒名が見られる。最も古いものは「元和元戌午」（1615年）のものが確認できる。発掘調査の結果から墓石の直下ではなく、墓地の北東に所在する桜の下から遺髪を納めた骨壺1点が、また庚申塔の後方の土中より壮年女性の遺骨1体が出土した。骨壺は大正期に位置づけられるもので、この時期まで墓地として利用されていたことを知ることができる。

発掘調査後、保坂家屋敷墓は塩山東バイパスの西側へ移築された。発掘調査時に出土した人骨及び副葬品等は、保坂家の直接の先祖のものであることを考慮し、保坂家屋敷墓に納められている。

**西畠遺跡** 本遺跡は塩山市赤尾680他に位置し、標高は397m前後を測る。平成10（1998）年11月4日から12月18日まで発掘調査を行った。面積は約700m<sup>2</sup>を測る。平安時代の住居跡7軒・溝1条・近世から近代にかけて利用されていた道路遺構等が確認された。地表面から確認面までは約0.3mから0.5mと非常に浅く、後世の畑作業によってカクランが進んでおり遺構の残存状況は良好とはいえない。調査区西側は度重なる洪水に見まわれた状況を看取することができ、平安時代の集落が洪水を避けた台地の少し奥で営まれていたことを知ることができる。住居跡からは9世紀後半に位置づけられる杯や甕、耳皿等が出土した。平安時代においては塩山バイパスの調査の中では比較的古い時期に位置づけられる集落である。近世から近代の道路遺構は戦後の道路整備により使われなくなったものであると思われる。

**下西畠遺跡** 本遺跡は塩山市赤尾769他に位置し、標高は392m前後を測る。平成9年10月13日から12月22日及び平成10年5月19日から7月3日まで発掘調査を行った。面積は3,300m<sup>2</sup>を測る。調査の結果、縄文時代中期・古墳時代前期・奈良・平安時代の遺構をそれぞれ確認した。このうち縄文時代では中期初頭五領ヶ台式期の土坑4基、前業務沢式期の住居跡1軒等を、また古墳時代では前期末葉の住居跡2軒、方形周溝墓4基等、さらに奈良時代の住居跡1軒・平安時代の住居跡2軒を確認した。

このうち古墳時代前期末葉の方形周溝墓群は、塩山市では西田遺跡（現塩山警察署）に続き2例目となる。とくにこのうちの2基は陸橋部を東側周溝部中央部に持つ、県内でも例の少ないものである。周囲の当該期の集落との関係も興味深いものである。

奈良・平安時代の住居跡は遺跡の南東側にまとまって所在する。このうち第5号住居跡は8世紀中頃の甲斐型杯成立前後の時期の土器片が出土した。塩山東バイパスの奈良・平安時代の遺構の中では最も古相を呈するものの一つである。またそれ以外の住居跡は10世紀代に位置づけることができる。いずれも於曾地域の集落の変遷を考える上で、貴重な存在であると思われる。

**影井遺跡** 本遺跡は塩山市赤尾225他に位置し、標高は384m前後を測る。平成11(1999)年6月16日から7月16日まで発掘調査が行われた。面積は1,055m<sup>2</sup>を測る。調査では平安時代の住居跡3軒、平安時代から中世にかけての掘立柱建物跡であると思われるピット群を確認した。ピット群は一段高い台地上に位置し、住居跡群は台地下に位置する。住居跡は全体を検出できたものは皆無であるが、いずれも11世紀末から12世紀に位置づけられ、塩山東バイパス遺跡群で検出された平安時代の遺構の中では最も新しいものの一つである。とくに土器群は古代末から中世へかけて移行段階のものであり、この地域の土器変遷を知る上で非常に興味深いものである。

また、検出した3軒の住居跡は三者三様のカマド形態を保有していた。つまり第1号住居跡は煙出し部分が長い形態であった。2号住居跡ではこの地域では最もボビュラーな形態の石組みのもの、第3号住居跡では住居跡のほぼ中央にカマドが所在していた。3号住居跡については住居跡はカマドについても完掘に至らなかつたため詳しいことは不明であるが、古代末から中世にかけて変容していく住居形態の一資料になるものと思われる。

## 第2項 調査組織及び協力機関

調査主体 山梨県教育委員会

調査期間 山梨県埋蔵文化財センター

調査担当者 平成9年度 小林(石神)孝子(文化財主事)・米山真(文化財主事 現竜王北中学校教諭)

平成10年度 小林(石神)孝子・米山真

平成11年度 小林(石神)孝子・古屋勝之(副主査・文化財主事 現山梨南中学校教諭)

整理作業 平成12年度 保坂和博(主任・文化財主事)・須長愛子(臨時職員)

平成13年度 小林(石神)孝子(主任・文化財主事)

作業員・整理員 山下好・黒瀬信子・戸田ひろ・林周子・飯田みづほ・寺内みち子・望月哲夫・岡和子・萩原里江子・雨宮久美子・藤原美代子・久保田裕美・深沢茂子・山崎靖子・雨宮節子・栗原礼子・山本芳美・沢登洋子・飯富巻子・正木なつ子・深沢芳邦・加賀美昌友・一ノ瀬一浩・佐々木富士子・田辺君代・古屋茂美・千野富子・宮久保朝乃・鈴木八千代・熊谷真樹子・田辺秋太郎・熊谷智史・本田京子・福沢由佳・中川美千子・大森仁美・渡辺麗子・佐々木美由紀・須長愛子

協力者・機関 保坂幸義・保坂美江(赤尾保育園)・涌泉寺・飯島しづか・丹後裕美・飯島泉(塩山市教育委員会)・三澤達也(山梨市教育委員会)・梅原功一・畠大介(帝京大学文化財研究所)・平田和明(聖マリアンナ医科大学)・池上悟(立正大学文学部教授)・田尾誠敏(東海大学文学部非常勤講師)・池谷建材店・㈲東雲測量・㈱バスコ・㈱シン技術コンサル

## 第2章 環 境

本遺跡群の位置する塩山市は、山梨県の北東部に位置する。市の北東部には大菩薩を代表する山岳地帯が連なり、そこに水源を発する重川は扇状地を形成しながら南流し、やがて勝沼町地内で笛吹川と合流する。塩山市内においては、重川の左岸には山々が迫っているためか、右岸を中心に広く遺跡が展開されてきた。本遺跡群も例外ではなく、重川沿いに連続する大小の小山状の台地上に立地する。

塩山市内には多数の遺跡が所在する。特徴的なのはその地形から、市の北部の山間地には縄文時代の遺跡が数多く所在し、南側の重川扇状地上には弥生時代以降の遺跡が目立って立地することである。

縄文時代の遺跡は現在のJR線の北側、標高400メートルを超える山間地に主に立地しており、重郎原遺跡や安道寺遺跡等が知られている。これらの遺跡からは多数の中期の土器群が出土しており、当該期の大集落がこの地域に所在することを示唆している。また89年に調査の行われた獅子之前遺跡（第1図9）は、塩山東バイパスの起点部分に位置し、縄文時代前期末及び平安時代の集落が確認されたことで知られている。特に縄文時代前期末の集落跡では、諸磯a式・b式期の住居跡が検出されており、これらの調査から得られた資料は、山梨県の土器編年を考える上でも重要な位置を占めている。さらに本遺跡からは当該期の土偶なども出土している。

弥生時代末から古墳時代になると、遺跡の分布はJR線南側の扇状地部分でも数多く見られるようになる。現塩山警察署建設時および塩山バイパス建設時に調査の行われた西田遺跡（38）は、弥生時代末から古墳時代前期の集落及び古墳時代前期末の方形周溝墓群が確認された遺跡である。今回調査を行った下西畠遺跡（3）では、これらとはほぼ同時期の方形周溝墓群が検出された。2000・01年に調査の行われた五反田遺跡（6）ではこれらと同時期の集落跡が確認されている。宮沢遺跡（16）や東田遺跡（37）・芦原田遺跡（39）等においても古墳時代の遺物が表面採集されている。しかし市内では古墳の存在は知られておらず、また当該時期の集落の分布についてもそれほど明らかになっているとはいえない。

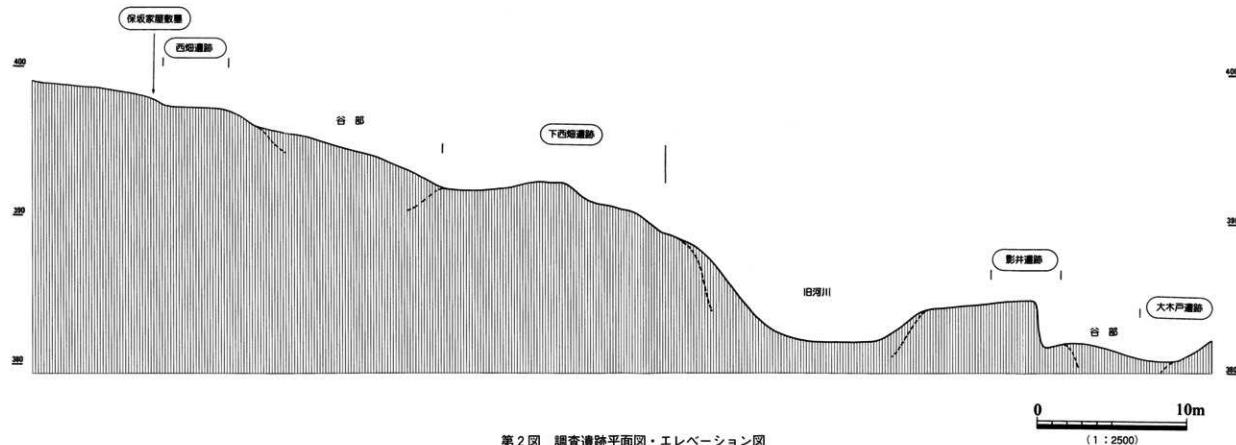
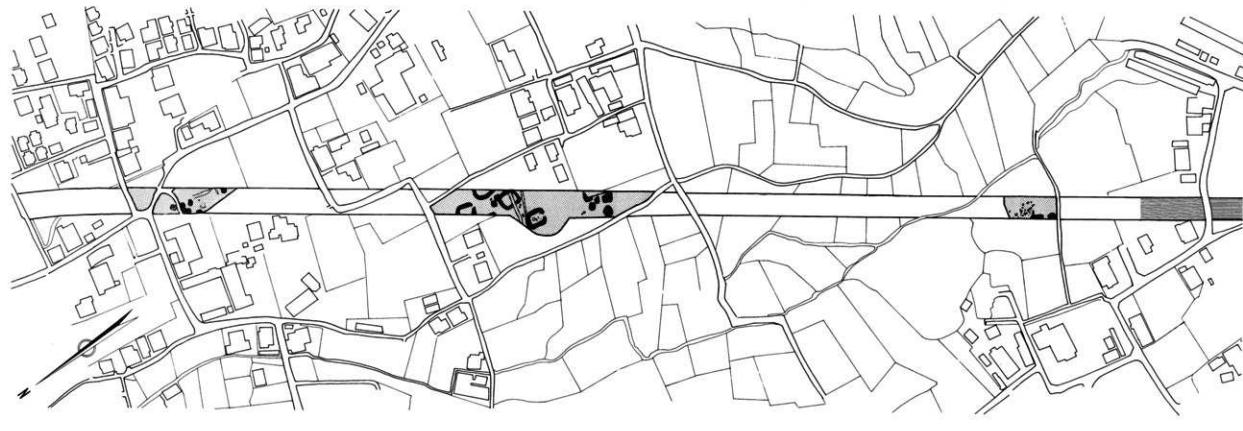
平安時代の集落は山間地に点在するほか、重川右岸の扇状地上でも広く展開されている。今回調査の行われた西畠遺跡（2）・下西畠遺跡（3）・影井遺跡（4）では8世紀から11世紀にかけての集落跡が検出された。また1998・1999年度に調査された大木戸遺跡（5）、さらに五反田遺跡（6）でも当該時期の集落跡が確認されており、重川右岸沿い約800mにわたって、平安時代の集落が展開されることになる。遺跡はそれぞれさらに東へ広がるものと思われる。また周囲には坂之上・后畠遺跡（29）・熊野前田遺跡（36）など、平安時代の遺物が多数表面採集できる遺跡も所在する。さらに1996年に調査された一ノ坪遺跡（33）では、11世紀の集落跡が確認されるなど、重川の川沿いから東側へ集落は連続して展開する。集落はさらに東側の山梨市、南側の勝沼町などにも連続するように分布する。

中世は県指定史跡である於曾屋敷の他、甲斐武田氏と強い結びつきを持つ寺社が多数存在している。また近世は、中世に黒川金山の採掘に関わった家々が存続しており、文書や屋敷墓・土塁を造らせた屋敷等その痕跡を現在に伝えている。池田屋敷（60）や田辺屋敷（61）・依田宮内左衛門屋敷（62）など、金山衆の屋敷は主に国道411号旧道沿いに所在したとされるが、今回調査を行った保坂家のように、少し離れた場所に点在する屋敷もある。さらに近年、国指定史跡の黒川金山遺跡をはじめとする鉱山関係遺跡が調査され、当時の金山採掘の様相の一端が明らかにされた。これらの調査は、山梨県の甲州金山を考える上で重要であるばかりではなく、近世鉱山史を研究する上でも欠かすことのできない重要な資料の一つとなっている。



第1図 遺跡の位置 (1/25,000)

1. 保坂屋敷墓
2. 西畠遺跡
3. 下西畠遺跡
4. 影井遺跡
5. 大木戸遺跡
6. 五反田遺跡(古・平)
7. 熊野八反田遺跡(平)
8. 下整田遺跡(縄)
9. 獅子之前遺跡(縄・平)
10. 御獄前田遺跡(縄)
11. 洗在家遺跡(縄・平)
12. 小山平南遺跡(縄・平)
13. 札之辻東B遺跡(縄)
14. 札之辻東A遺跡(平)
15. 伊保水遺跡(縄中・近)
16. 宮沢遺跡(縄・古・平)
17. 横堀遺跡(中)
18. 池田遺跡(中)
19. 石骨B遺跡
20. 石骨A遺跡(縄・平)
21. 神之木遺跡(縄・古・平)
22. 天神原遺跡(縄・平)
23. 久保田遺跡(平)
24. 林際遺跡(縄・平・中)
25. 愛地遺跡(平)
26. 正泉B遺跡
27. 檜遺跡(縄)
28. 正泉B遺跡(古・平)
29. 板之神・后畠遺跡(平)
30. ケカチ遺跡(古・平)
31. 下於八反田遺跡(平)
32. 梶烟A遺跡(古・奈・平)
33. 一之坪遺跡(縄・平)
34. 熊野神社遺跡(弥・古)
35. 中道遺跡(平)
36. 熊野前田遺跡(平)
37. 東田遺跡(平)
38. 西田遺跡(古・平)
39. 声原田遺跡(縄・古)
40. 西堀遺跡(平)
41. 住蓮木平遺跡(縄)
42. 村北遺跡(奈・平)
43. 向原遺跡(奈・平)
44. 扇田B遺跡(奈・平)
45. 扇田C遺跡(縄・奈・平)
46. 十王前遺跡(平)
47. 薬師平遺跡
48. 司田遺跡(縄)
49. 清水田遺跡(奈・平)
50. 知光田遺跡
51. 清水尻遺跡(縄・古・平)
52. 塩山前遺跡(縄)
53. 高林遺跡(縄・中)
54. 千手院前遺跡
55. 宮之前遺跡
56. 稲荷林遺跡
57. 上塙後塙遺跡
58. 於曾屋敷
59. 宇賀屋敷
60. 池田屋敷
61. 田辺屋敷
62. 依宮宮内左衛門屋敷
63. 風間氏屋敷
64. 中村氏屋敷



第2図 調査遺跡平面図・エレベーション図

## 第3章 下西畠遺跡の調査（97年度）

### 第1節 環 境

本遺跡の調査は97年度と98年度の2カ年にわたり実施した。遺跡は北西から南東へ緩やかに傾斜する地形であり、標高は393.500m～390.200mを測る。今回の調査では一つの台地を縦断するように調査区が設定された。遺跡周辺の試掘調査の結果から、遺跡北西側（元根津家）は、さらに北西に向かって谷状に落ちていく地形であることがわかった。この箇所が遺跡の中で最も標高の高い部分であり、本遺跡の北西限であることを確認することができた。一方、遺跡の南東、37グリッドから41グリッドについては、幾分傾斜がきつくなり41グリッドより南東側は急激に落ち込んで台地が終わる。また調査区は台地のほぼ南東際に位置するため、これより南東側にはほとんど遺構は存在しないものと思われる。

このようなことから遺跡は調査区を含めた北東側に広く展開するものと推測される。

また本遺跡では縄文時代中期・古墳時代前期・奈良・平安時代の遺構が確認された。このうち縄文時代の遺構は、けつ状耳飾りを含む前期終末の土坑2基、中期初頭の五領ヶ台式期の土坑4基、及び前葉の洛沢式期の住居跡1軒と、遺構としては数少なかった。古墳時代の遺構は前期後葉に位置づけられる方形周溝墓4基、住居跡等が検出された。遺跡の東南では平安時代の集落が確認された。西畠遺跡、影井遺跡、大木戸遺跡等と合わせて当時の平安時代の集落の変遷を知ることができる。

### 第2節 住居跡

第1号住居跡（第3・19図）本住居跡は遺跡北側A・B-20グリッドに位置し、標高392.50m前後を測る。隅丸方形を呈し、長軸約3.40m、短軸約2.95m、深さ約0.20mを測る。住居跡南東隅は第3号方形周溝墓により壊されており、覆土から本住居跡が周溝墓より前に出するものと思われる。住居跡中央よりやや北側隅寄りに地床炉を持ち、地床炉内には台付壺の台部を除いた胴部半部がはめ込まれていた。また、南東隅には貯蔵穴が所在する。長軸約1.08m、短軸約0.70mである。南側は壁面の立ち上がりを利用して、北側はなだらかに立ち上がっており、覆土に炭化物を含む。床面は、しまりは確認できなかった。遺物は埋壺炉に用いられていた台付壺の他目立ったものは見られなかった。壺は在地色の強いもので内外面をハケで調整している。遺構の重複の状況から第3号方形周溝墓より本住居が若干先行するものと思われるが、遺物からは、それほど時間差は見られない。

第2号住居跡（第4・19図）本住居跡は東側C・D-19・20グリッドに位置し、標高392.80m前後を測る。住居跡の大部分は調査区外に位置しており、今回はわずかに南北隅付近を検出したが、住居跡はさらに調査区を横断する後世の溝によって一部床面を壊されているため、ほとんどその様相を知ることはできなかった。壁の立ち上がりはゆるく、炉、貯蔵穴等は検出できなかった。遺物は壺（小型壺を含む）高杯脚部が出土した。いずれもハケにより調整され、一部ケズリも見られる。1号住居跡と同時期のものと思われる。

第3号住居跡（第5・19～20図）本住居跡は調査区のやや北側で当該期の遺構としてはわずかに1軒のみが検出された。B・C-19・20グリッドに位置し、標高は392.50m前後を測る。調査区を東西に横切る近世の溝に分断されていた。住居跡の掘り込みの中に多数の遺物が廃棄されたような状態で出土した。住居跡の形状は不整形で壁の立ち上がりはなだらかである。床面は平坦であり、炉付近では若干凹凸が見られた。炉は埋壺炉で埋壺には第19図7の土器が用いられていた。埋壺炉の土器の年代から本住居跡の帰属年代はおおよそ縄文時代中期前葉頃である。

### 第3節 土 坑

第1号土坑（第6・21図）調査区のやや北側、B-19グリッドに位置し、標高392.60m前後を測る。円形を呈し、南北約1.05m、東西約1.15m、深さ約0.38mを測る。壁は緩やかに立ち上がっており、底面は平坦である。覆土上層部で遺物がまとまって出土した。遺物は器壁に集合沈線を施す五領ヶ台式期の土器の中でも古手のも

の（31）、地文に縄文を施し押圧隆帯を貼付するもの（32～37）が見られる。とくに後者は前期末に位置づけられると思われる、前者とは一定の時間差が存在するようと思われる。

第2号土坑（第6・21図）B-21グリッドに位置し、標高392.40m前後を測る。不整円形を呈し、長径約0.85m、短径約0.60m、深さ約0.15mを測る。重複するような形で2個体の深鉢が出土した。38・39の深鉢は四角状の工具で押し引きにより施文されており、時期的にも矛盾のないものと思われる。いずれも中期前葉、貉沢式期に位置づけられるものである。

第3号土坑（第6・21図）D-24・25グリッドに位置し、標高391.80m前後を測る。不整円形で床面は巨礫によって占められている。第4号方形周溝墓周溝部によって壠されている。壁面立ち上がりは急である。土坑上層より五領ヶ台式期の深鉢口縁部（41）打製石斧の欠損品が出土した。41は格子目状の集合沈線が施され、1号土坑出土の31より、若干古相を呈する。

第4号土坑（第7・21図）E-25グリッドに位置し、標高392.25m前後を測る。不整円形を呈し、長径2.23m、短径2.02m、深さ0.30mを測る。本土坑構築以前より所在する巨礫を利用しながら、人頭大の礫を土坑中心部に充填した集石土坑と見られ、それらの礫に混じって土器片が少量出土した。出土遺物は小片で摩耗が著しいため、図化することは困難である。

第5号土坑（第7・21図）C-23グリッドに位置し、標高392.35m前後を測る。円形で長径0.99m、短径0.91m、最大深0.30mを測る。人頭大から拳大の礫を利用した集石土坑である。覆土には炭化粒子が混入しているため、火を使った可能性もある。

第6号土坑（第7・21図）C-23グリッドに位置し、標高392.30m前後を測る。北東から南西に長い不整円形で、長径1.45m、短径0.78m、最大深0.33mを測る。土坑上層部より遺物がまとまって出土した。

第7号土坑（第7・21図）B-20グリッドに位置し、標高392.50m前後を測る。第3号方形周溝墓の西側コーナーと重複しており、周溝墓築造時に土坑の上半部を削り取られている。南北に長い不整形で、長径0.98m、短径0.64m、最大深0.72mを測る。縄文を施文する深鉢の胴部、玦状耳飾りの欠損品が土坑の中層部付近よりまとまって出土した。

#### 第4節 方形周溝墓

第1号方形周溝墓（第8・9・22～24図）調査区の最も北西側で確認した。これより北西側では同様の遺構は検出されなかつたため、本周溝墓がこれら周溝墓群の中では最も北限（西限？）のものであると思われる。所在するグリッドはC・D-15・16・17であり、標高393.70m前後を測る。北側は調査区外へ伸びているため、全体の様相を把握することはできなかつた。墳丘の規模は溝を含め、長径約13.90m、北側の溝幅約2.20m、深さ約0.60m、南側の溝幅約2.40m、深さ0.50m、西側溝幅約2.80m、深さ0.85mを測る。周溝墓群は北西から南東に緩く傾斜する微高地上に位置しているため、北西側の周溝の方が南東側より若干深い。周溝覆土は黒色でコーナー付近では焼土・炭化物が遺物とともに見られる箇所もあった。底面は全体的に平らで、壁は割合強い傾斜で立ち上がっている。陸橋部は南側コーナーに付設されていた。マウンドは後世の開墾などで削除されており、主体部を検出することはできなかつた。遺物は陸橋部西脇の周溝端部と、北西隅で目立つて出土した。とくに陸橋部西側では底面に近いレベルから複数の壺を中心とする遺物がまとまって出土している。そのなかでも44の二重口縁壺は赤色塗彩を施し、肩部に文様を持つものであるが、3号方形周溝墓より出土したものと接合関係にある。本遺構の帰属年代は出土遺物から古墳時代前期後半であると思われる。

第2号方形周溝墓（第10・11・24図）調査区西側で東溝と北溝半分を検出した。それ以外の周溝は調査区外へ続いているため、全体を把握することはできない。所在するグリッドはA・B-17～20であり、標高393.00m前後を測る。全体規模は不明であるが、東側周溝部は約13.2m、深さ約0.60mを測る。周溝部南側でA-19グリッド南側付近を後世の溝が壊している。溝は他の周溝墓と比較して浅く、壁の立ち上がりも緩やかであった。覆土は若干しまっている箇所もあったが、炭化物・焼土粒子を含む箇所も見られた。遺物は陸橋部に最も多い

ためか、非常に少なく、底面付近で細かな破片が目立った。87の小型丸底鉢は3号方形周溝墓より出土したものと接合関係にある。本遺構の帰属年代は遺物などからおおよそ古墳時代前期後半であると思われる。

第3号方形周溝墓（第12～14・24・25図）調査区のはば中央部にあり、2号方形周溝墓より東へ5mのところに所在する。A～C-20～23グリッドに位置し、標高は392.60m前後を測る。北西コーナーを1号住居と重複しており、本遺構が1号住居跡より後に作られていることが土層より確認できた。また東西に継続する近世の溝と重複している。その他、本遺構築造時に縄文時代中期の土坑をいくつか壊しており、周溝部よりまとまつた当該期の深鉢などが出土した。

本周溝墓の墳丘規模は溝を含めて長軸（南北）約13.20m、短軸（東西）約12.00mで、溝幅は南側2.00m前後、深さ約0.60m、北側1.70m前後、深さ約0.40m、東側1.70m前後、深さ約0.60m、西側1.80m前後、深さ約0.60mを測る。南西コーナーがわずかに未調査区にかかっているため、完掘することはできなかったが全体の様相は把握することができた。東側中央部やや南寄りに陸橋部が付設されている。第4号墓とともに、伊勢湾系の墳墓の影響を受けたものと思われる。壁の立ち上がりはやや緩やかであり、底面は墳丘側に傾斜する傾向がある。地山には大きな礫があちこちに混入しており、墳丘築造時にはこのような礫を無理に取りのぞかずに築造したものと思われ、礫の上に遺物がのるような形で出土した遺物も見られた。

遺物は陸橋部両側の周溝内、および周溝部各コーナーに集中する傾向があるように思われた。とくに陸橋部付近の周溝部では、底部穿孔された壺（78・79・80）やS字状口縁台付壺（S字壺84）等のまとまつた出土が見られ、とくに78は逆位で検出された。また77と78は意識的に同型に作られていると思われるほど酷似している。またこの部分では焼土・炭化物も多量に検出されているため、これらの土器を使ってなんらかの祭祀行為が執り行われた可能性がある。陸橋部付近の遺物のほとんどは底面から0.10～0.20m程度上部で検出された。なお81はほぼ底面直上から出土した壺である。これらの遺物から本遺構の年代は古墳時代前期後半の範疇であると理解できる。

なお墳丘から出土した壺小片44は第1号方形周溝墓から出土した壺と接合関係にある。また、西溝より出土した87の小型丸底鉢は第2号方形周溝墓から出土したものと接合関係にある。

第4号方形周溝墓（第15～17・25・26図）調査区のはば中央で3号方形周溝墓の東側約10mで確認された。本周溝墓より南では方形周溝墓は見られなかったが、台地が若干南東へ伸びていくため、南東側の標高の低い部分に周溝墓群の南限が所在する可能性もある。C～F-24～27グリッドに所在し、標高392.20m前後を測る。北側周溝部を近世の溝に壊されているがほぼ全容を把握することができた。周溝部を含めた墳丘規模は長軸（南北）13.20m前後、短軸（東西）11.50m前後、周溝部は北側は不明であるが、溝幅は南側で約2.50m、深さ約0.50m、東側で約2.50m、深さ約0.95m、西側で約2.50m、深さ約0.50mを測る。地形が東へ向かって傾斜しているせいか、東側周溝部のほうが深く掘り下げられている。陸橋部は南側周溝のはば中央で確認した。南側の周溝は左右共にあり、開き気味で外側に陸橋部を意識した作りになっているようと思われる。また墳丘上では規格性のある7基の浅いピットを確認したが、掘り込みが浅く、遺物も皆無であるため、本遺構との関連は不明である。

遺物は地表より0.20～0.30m掘り下げた黒褐色土層中に含まれ、周溝底部からは0.20m程度高い部分からの出土した。本周溝墓の遺物は左右陸橋部脇の周溝内に集中し、その他多量の炭化物、焼土が見られた。3号方形周溝墓の出土遺物とは内容が若干異なり、S字壺や単純口縁壺などが多く、鉢、小型の高杯、小型丸底鉢なども見られる。3号方形周溝墓で多数出土した二重口縁壺はほとんど見られない。S字壺は肩のはらないずんどうな形状で肩部の横ハケは見られない。器壁の調整はケズリの後ハケを用いており、新相を呈する。本周溝墓の帰属年代はS字壺の年代から古墳時代前期後半に位置づけられるものと思われる。

## 第5節 溝

第1号溝（第18図）本溝は調査区を南西から北東へ横切る。第3号方形周溝墓を壊していること、溝底面付近から江戸時代の陶磁器が出土していることなどから、近世に造られたものと推測される。全長6m、溝幅約0.6mを測る。溝はV字状を呈し、底面付近には砂礫の堆積が見られた。

第2号溝（第18図）本溝は、第1号溝にほぼ併行するように所存する。第4号方形周溝墓北側溝と重複している。全長6.2m、幅0.4mを測る。1号溝同様に、所々砂礫の見られる箇所もあった。遺物は底面付近で陶磁片がわずかに見られた。近世に位置づけられよう。

第3号溝（第18図）本溝は、第1・2号溝に併行するように調査区を横断する。第2号住居跡、第3号住居跡、第2号方形周溝墓と重複する。溝内からは、近・現の遺物が見られた。

## 第6節 遺構外の遺構と遺物

遺構外の出土遺物として縄文時代早期・前期の遺物が遺跡全体から散在するような形で出土した（第27・28図）。これらは主に諸磯a・b・c式期、十三善提式期に位置づけられるものである。また前期終末に位置づけられるものとして、扇平式期の遺物も見られた（158）。さらに当該期に位置づけられる、関西系の大歳山式期の深鉢片も出土した（159・160～170）。口縁部にはM字状工具を用いた施文がみられ、胎土から搬入品である可能性が高い。しかし今回の発掘調査では当該期の遺構はほとんど検出されておらず、その時代の様相を明らかにすることはできなかった。

また中期初頭五領ヶ台式期の遺物も遺跡全体で見受けられた。五領ヶ台式期の中でも、古相に位置づけられるものが多く、171は前期末から中期初頭の過渡期に当たるものと思われる。また179は口縁部が厚手で、古相を呈する。

第4号方形周溝墓の周溝部西コーナー付近で平安時代の遺物がみられた。203はロクロ成形で、胴下半部をヘラケズリにより調整している。98年度に調査を行った、平安時代の遺構のものとほぼ同時期のものであると考えられる。

その他、近世から近代にかけて営まれたと思われる3条の溝を確認した。いずれも調査区を横切るように北西から南東にかけて延びている。出土遺物は古いものでは18世紀に位置づけられる湯飲み茶碗や飯碗などが、新しいものでは近現代の遺物なども見られる。溝はいずれも底面がv字状で、底面には礫が多数混在していた。

古墳時代土器観察表

桝固 No	底土地灰	遺物	種別	器種	寸法(cm)			調	色調	胎土	残存率	その他
					口径	脚高	底径					
19	1号住	1	土器器	台付壺	—	(12.0)	—	外圓ハケ調整のちナダ 内面ハケ調整のち胎灰	淡青茶褐色	石英 金雲母	40%	
19	2号住	2	土器器	壺	(11.2)	(11.4)	(5.2)	外圓ハケ調整 内面脚部ハケ調整ナダのち胎灰	苔褐色	石英 金雲母	100%	
19	2号住	3	土器器	壺	—	(14.0)	(8.0)	外圓ハケ調整 内面ハケ調整のちケズリ	黄茶褐色	石英 金雲母	40%	
19	2号住	4	土器器	壺	—	(6.5)	(7.5)	外圓ナダ 内面ハケ調整	橙茶褐色	石英 金雲母	20%	
19	2号住	5	土器器	高杯	—	(6.5)	(17.5)	内面凹ハケ調整	淡黄褐色	石英 金雲母	50%	
22	1号周溝基	44	土器器	壺	—	—	—	外圓脚部凹接式文・脚部ミギキ接合赤地脚内面ハベラグ・階級底	黄茶褐色	スコリア 砂塵 金雲母	40%	2周遺物と同様
22	1号周溝基	45	土器器	壺	(20.0)	(6.7)	—	外圓ミギキ 内面ハケ調整のち場所によってミギキ	食青褐色	白色砂粒子 金雲母	20%	二重口縁
22	1号周溝基	46	土器器	壺	—	(5.2)	—	外圓ミギキ 内面脚部ナダ	苔褐色	白色砂粒子 金雲母	10%	
22	1号周溝基	47	土器器	壺	(17.0)	(4.5)	—	外圓ハケ調整 口部斜接状伏文を模す沈線 内面ハケ調整	橙茶褐色	白色砂粒子 金雲母	10%	
22	1号周溝基	48	土器器	壺	(14.3)	(25.0)	—	外圓ハケ調整のちミガキ 内面ハケ調整	黄褐色	白色砂粒子 金雲母	50%	
22	1号周溝基	49	土器器	壺	—	(16.0)	(6.5)	外圓ミギキ 内面ハケ調整	橙茶褐色	金雲母	25%	
22	1号周溝基	50	土器器	壺	(5.8)	(4.2)	—	外圓ミギキ	黄褐色	砂粒子	10%	ヒサゴ目
22	1号周溝基	51	土器器	壺	—	(4.0)	6.0	外圓ナダ 内面ハケ調整	橙茶褐色	白色砂粒子 金雲母	10%	
22	1号周溝基	52	土器器	壺	—	(4.0)	8.4	内外面ハケ	淡茶褐色	白色砂粒子 金雲母	10%	
23	1号周溝基	53	土器器	壺	(17.0)	(4.7)	—	内外面ハケ調整	黄茶褐色	白色砂粒子 金雲母	20%	
23	1号周溝基	54	土器器	台付壺	(15.5)	(5.0)	—	内外面ハケ調整	黄茶褐色	白色砂粒子 金雲母	20%	
23	1号周溝基	55	土器器	台付壺	18.0	(28.3)	—	内外面ハケ調整のちミギキ 内面ハケ調整 口部斜接状あり	赤茶褐色	白色砂粒子	60%	
23	1号周溝基	56	土器器	台付壺	(17.3)	(6.0)	—	内外面ハケ調整のち脚底 口部剥離あり	黄茶褐色	白色砂粒子 金雲母	10%	
23	1号周溝基	57	土器器	台付壺	(15.5)	(7.1)	—	外圓ヨコハケのちタテハケ 内面ハケのちナダ	黄茶褐色	白色砂粒子 金雲母	30%	
23	1号周溝基	58	土器器	壺	(17.5)	(4.0)	—	内外面ヨコナダ	橙茶褐色	3ミリ程度の難	10%	
23	1号周溝基	59	土器器	台付壺	(18.0)	(5.0)	—	外圓ハケ調整 内面ハケ調整のち脚底底	橙茶褐色	白色砂粒子 砂塵 金雲母	20%	
23	1号周溝基	60	土器器	台付壺	(18.0)	(3.0)	—	外圓ハケ調整 口部剥離あり 内面ナダのち脚底底	淡黄茶褐色	白色砂粒子 金雲母	10%	
23	1号周溝基	61	土器器	台付壺	—	(8.0)	(20.0)	外圓ハケ調整 内面ナダ調整 植被痕あり	黄茶褐色	砂粒子	20%	
23	1号周溝基	62	土器器	S字壺	(21.0)	(15.0)	—	外圓ケズリ後ハケ 内面ナダのち脚底底	黄褐色	金雲母	25%	
23	1号周溝基	63	土器器	台付壺	—	(5.0)	6.0	内外面ハケ調整	黄茶褐色	白色砂塵	40%	
23	1号周溝基	64	土器器	台付壺	—	(7.0)	(11.2)	内外面ハケ調整 内面脚部痕	橙茶褐色	石英 金雲母 砂塵	10%	
24	1号周溝基	65	土器器	台付壺	(9.4)	(3.0)	—	外圓ハケ調整のちナダ 内面ナダのち脚底底 植被痕あり	黄茶褐色	白色砂粒子	10%	
24	1号周溝基	66	土器器	台付壺	—	(8.4)	10.5	外圓ハケ調整のちミガキ 内面ハケ調整	黄淡茶褐色	白色砂粒子 金雲母	50%	長年に亘るか? 前5年
24	1号周溝基	67	土器器	高杯	11.0	(4.5)	—	内外面ミギキ 口部斜マニアゲ	橙茶褐色	金雲母	60%	
24	1号周溝基	68	土器器	高杯	10.4	(5.4)	—	外圓ハケ調整のちナダ 内面ナダ	橙茶褐色	白色砂粒子 金雲母	50%	
24	1号周溝基	69	土器器	高杯	—	—	(4.5)	外圓ミギキ 内面ナダ	黄茶褐色	白色砂粒子 金雲母	30%	内丸5個所織
24	1号周溝基	70	土器器	高杯	—	(3.2)	(5.2)	外圓ミギキ 内面ハケ調整のちナダ	橙茶褐色	金雲母	20%	内丸2枚2箇所織
24	1号周溝基	71	土器器	壺	3.7	(3.3)	—	内外面ハケ調整	黄茶褐色	白色砂粒子	20%	
24	1号周溝基	72	土器器	壺	—	—	—	外圓ナダ 内面ハケ調整	黄茶褐色	金雲母	破片	
24	2号周溝基	73	土器器	壺	—	—	—	内外面ミギキのら赤褐色	橙茶褐色	白色砂粒子 金雲母	破片	
24	2号周溝基	74	土器器	壺	—	—	—	外圓ハケ調整 内面ハケゲゼリ	橙茶褐色	白色砂粒子 金雲母	破片	
24	2号周溝基	75	土器器	高杯	—	—	—	内外面ナダ	黄茶褐色	白色砂粒子 金雲母	破片	
24	2号周溝基	76	土器器	壺	—	—	—	外圓ハケ工具による捻文 内面ナダ	黄茶褐色	白色砂粒子 金雲母	破片	
24	3号周溝基	77	土器器	壺	13.5	15.1	5.0	外圓ミギキ赤色 形内面脚部・腹部ミギキ脚底ナダ	赤褐色	金雲母	90%	表面擦痕

井戸 No	出土地点	遺物	種別	器種	法身 (cm)			調査	色調	施土	残存率	その他
					口径	底高	底径					
24	3号周溝基	78	土師器	壺	(14.2)	17.2	(4.5)	外腹ミガキの赤色地に 内腹全表面3点貼りつけあり 内面口縁部・腹部ミガキ剥離のナデ	赤 茶 青	金雲母	80%	底部穿孔
24	3号周溝基	79	土師器	壺	—	(15.0)	—	内腹ミガキの赤色地に 内面口縁部・腹部ハケ調のちミガキ剥離のナデ	赤 茶 青	金雲母	80%	底部穿孔
24	3号周溝基	80	土師器	壺	(15.0)	(20.7)	6.2	内腹ミガキの赤色地に 内面ハケ調のちミガキ剥離のナデ	白 茶 青	白色砂糖 金雲母	80%	脚下半部穿孔
24	3号周溝基	81	土師器	壺	—	(25.0)	5.9	外腹のちミガキズリ 内腹ハケズリ粘膜痕あり	白 茶 青	白色砂糖	80%	
25	3号周溝基	82	土師器	壺	13.5	12.0	5.0	外腹ハケズリ 内腹ハケ調整	白 茶 青	白色砂粒子	95%	
25	3号周溝基	83	土師器	壺	9.2	(6.2)	2.0	内外面ミガキ	白 茶 青	金雲母	100%	
25	3号周溝基	84	土師器	S字 壺	—	(11.8)	(24.0)	外腹ハケ調整 内腹ナデ調整 粘膜痕あり	白 茶 青	白色砂粒子 金雲母	40%	
25	3号周溝基	85	土師器	S字 壺	—	(23.5)	—	外腹ハケ調整 内腹ナデ調整 粘膜痕あり	黄 茶 青	金雲母	40%	
25	3号周溝基	86	土師器	高杯	—	2.4	—	外腹ミガキ 赤色地に 内腹ハケ調整	白 茶 青	白色砂粒子	残片	
25	3号周溝基	87	土師器	小面丸底鉢	(17.0)	8.0	2.0	内外面ミガキ	白 茶 青	白色砂粒子	40%	2周造物と整合
25	4号周溝基	88	土師器	壺	(12.7)	12.8	3.4	外腹ミガキ内面口縁部・腹部ミガキ脱部ナデのちミガキ剥離	赤 茶 青	白色・黒色砂糖	95%	脚下半部穿孔
25	4号周溝基	89	土師器	壺	15.8	8.3	—	外腹ハケのちナデ 内腹ミガキ・ナデ調整	白 茶 青	金雲母	40%	
25	4号周溝基	90	土師器	壺	—	(4.5)	—	外腹ハケ調整のちナデ 口縁部斜文 内腹ナデ	白 茶 青	金雲母	20%	
25	4号周溝基	91	土師器	壺	(16.0)	(5.0)	—	内外面ナデ	白 茶 青	金雲母	10%	
25	4号周溝基	92	土師器	壺	(13.8)	(11.0)	—	外腹ナデのちミガキ 内腹ナデ	白 茶 青	金雲母	40%	
25	4号周溝基	93	土師器	壺	10.3	5.8	3.0	口縁部ミガキのちミガキ 外腹ハケズリのちミガキ 内面ミガキ	白 茶 青	白色砂粒子 金雲母	95%	
25	4号周溝基	94	土師器	壺	(8.0)	(5.2)	2.5	外腹ハケズリ 内腹ナデのち指痕痕	白 茶 青	白色砂粒子 金雲母	70%	
25	4号周溝基	95	土師器	壺	11.7	11.2	3.0	外腹ハケズリ 内腹ハケ調整のちユビナデ	白 茶 青	白色・赤色砂粒子	90%	
25	4号周溝基	96	土師器	壺	13.8	8.7	—	外腹ハケ調整	白 茶 青	白色砂粒子 金雲母	40%	
25	4号周溝基	97	土師器	S字 壺	(14.0)	(3.0)	—	外腹ハケ調整	白 茶 青	白色砂粒子 金雲母	10%	
25	4号周溝基	98	土師器	S字 壺	15.0	25.4	9.5	外腹ハケ調整 内腹ナデのち指痕痕	白 茶 青	金雲母	80%	
25	4号周溝基	99	土師器	S字 壺	(15.0)	(15.0)	—	外腹ケズリのちハケ 内腹ハラナデのち指痕痕	白 茶 青	金雲母	50%	
25	4号周溝基	100	土師器	台付 壺	—	6.7	9.0	外腹ケズリのちハケ 内腹ナデのち指痕痕	白 茶 青	白色砂粒子 金雲母	30%	
25	4号周溝基	101	土師器	高杯	11.4	3.8	—	内外面ミガキ調整	白 茶 青	砂糖	50%	
25	4号周溝基	102	土師器	高杯	—	(2.6)	(10.7)	外腹ミガキ調整 内腹ナデ	白 茶 青	白色砂糖	10%	
25	4号周溝基	103	土師器	小型 壺	10.5	7.0	4.5	外腹ハケ調整 内腹ケズリ	白 茶 青	金雲母	80%	
25	4号周溝基	104	土師器	小型 壺	9.5	6.7	4.4	外腹ハケ調整 内腹ナデ	白 茶 青	白色砂糖 金雲母	95%	
25	4号周溝基	105	土師器	小型 壺	10.8	6.0	—	外腹ハケのちミガキ 内腹ミガキのち指痕痕	白 茶 青	白色砂粒子 金雲母	70%	
25	4号周溝基	106	土師器	小型 壺	(12.0)	(4.7)	—	外腹ミガキ 内腹ナデ	白 茶 青	金雲母 砂糖	20%	
25	4号周溝基	107	土師器	小型丸底鉢	15.5	7.0	4.0	外腹ハケズリ 内腹ハケ調整	白 茶 青	白色砂粒子 金雲母	100%	
25	4号周溝基	108	土師器	小型丸底鉢	9.3	4.7	3.0	外腹ケズリのち指痕痕 内面口縁部ハケ 刷拭	白 茶 青	砂糖 金雲母	95%	
25	4号周溝基	109	土師器	高杯	(10.0)	(2.5)	—	外腹ハケのちナデ 内腹底瓦により不明	白 茶 青	白色砂粒子 金雲母	10%	
25	4号周溝基	110	土師器	壺	11.8	4.8	—	外腹ナデ 指痕痕 内腹ハケのち指痕痕	白 茶 青	白色砂粒子 金雲母	100%	
25	4号周溝基	111	土師器	有孔 鉢	18.7	8.8	4.0	外腹ハナデのちミガキ (擦耗) 内腹ハケのちミガキ	白 茶 青	白色砂粒子 金雲母	80%	
25	4号周溝基	112	土師器	壺	—	—	—	外腹調拂文 内腹ナデ	白 茶 青	金雲母	残片	

## 石器・石製品観察表

番号	出土地点	グリッド	番号	器種	法量				石材	残存率	その他
					長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
30	1号土坑	B-20	221	石	黒	1.2	1.1	0.4	0.35	黒曜石	100%
30	1号土坑	B-20	222	石	黒	1.2	1.0	0.4	0.31	黒曜石	100%
30	1号土坑	C-20	223	石	黒	2.4	1.6	0.4	0.67	黒曜石	100%
30	—	C-20	224	石	黒	2.1	(1.7)	0.4	0.76	黒曜石	90% 1脚欠損
30	—	F-26	225	石	黒	1.5	(1.2)	0.3	0.36	黒曜石	100%
30	3トレンチ	—	226	石	黒	(1.5)	(1.9)	0.6	1.37	黒曜石	80% 先端部・一部欠損
30	1号周溝墓	C-15	227	石	黒	(1.9)	(1.4)	0.3	0.47	黒曜石	80% 1脚欠損
30	1号周溝墓	C-15	228	石	黒	1.7	1.3	0.4	0.50	黒曜石	100%
30	1号周溝墓	C-15	229	石	黒	1.8	1.6	0.4	0.78	黒曜石	100%
30	3号周溝墓	C-17	230	石	黒	(2.0)	(1.5)	0.5	0.70	黒曜石	90% 一部欠損
30	4号周溝墓	D-25	231	石	黒	2.4	1.4	0.4	0.69	黒曜石	100%
30	4号周溝墓	D-26	232	石	黒	1.4	1.3	0.4	0.48	黒曜石	100%
30	3号周溝墓	C-21	233	石	黒	1.3	1.8	0.3	0.66	黒曜石	95% 先端部・一部一部欠損
30	3号周溝墓	A-23	234	石	黒	(1.4)	2.0	0.4	0.76	黒曜石	50% 先端部欠損
30	4号周溝墓	E-26	235	石	黒	3.2	2.4	0.8	4.12	黒曜石	100%
30	1号土坑	—	236	石	黒	4.3	0.8	0.8	1.69	黒曜石	95% 一部欠損
30	—	D-18	237	石	黒	3.1	1.9	1.5	3.37	黒曜石	100%
30	—	C-21	238	石	黒	1.8	1.3	0.6	0.84	黒曜石	100%
30	3号周溝墓	C-22	239	スクレーパー	黒	3.5	1.6	0.8	3.22	黒曜石	95% 一部欠損
30	—	D-24	240	スクレーパー	黒	2.2	1.9	0.5	2.11	黒曜石	100%
30	3号周溝墓	B-20	241	スクレーパー	黒	1.4	2.9	0.4	1.21	黒曜石	95% 一部欠損
30	2号周溝墓	B-18	242	スクレーパー	黒	2.6	1.7	0.6	1.64	黒曜石	100%
30	3号周溝墓	A-23	243	スクレーパー	黒	(2.6)	2.4	0.7	3.00	黒曜石	80% ? 一部欠損
30	—	E-26	244	スクレーパー	黒	4.1	2.1	0.8	5.84	黒曜石	90% 一部欠損
30	3号住	—	245	ピエス・エスキュー	黒	1.8	1.2	0.7	1.47	黒曜石	100%
30	3号周溝墓	A-23	246	ピエス・エスキュー	黒	2.2	1.6	0.6	1.70	黒曜石	100%
30	1号土坑	B-19	247	ピエス・エスキュー	黒	2.0	1.2	0.6	1.08	黒曜石	100%
30	—	C-20	248	加工痕	黒	1.8	1.1	0.9	1.31	黒曜石	—
30	1号住	—	249	加工痕	黒	2.5	3.1	1.0	4.56	黒曜石	—
30	3号住	B-20	250	加工痕	黒	2.5	1.3	0.5	1.25	黒曜石	—
31	3号周溝墓	C-22	251	加工痕	黒	2.0	1.1	0.7	1.59	黒曜石	—
31	1号周溝墓	D-15	252	加工痕	黒	3.0	3.5	1.4	12.31	黒曜石	—
31	4号周溝墓	E-24	253	加工痕	黒	1.9	1.2	0.4	0.82	黒曜石	—
31	1号周溝墓	C-16	254	加工痕	黒	2.4	1.5	0.5	1.25	黒曜石	—
31	1号住	—	255	加工痕	黒	3.1	3.8	1.8	20.04	黒曜石	—
31	表採	—	256	U	黒	2.9	1.8	0.9	3.60	黒曜石	—
31	12トレンチ	—	257	U	黒	2.2	1.2	0.7	1.16	黒曜石	—
31	—	B-24	258	U	黒	2.3	1.6	0.7	1.57	黒曜石	—
31	4号周溝墓	E-26	259	U	黒	2.3	1.5	0.6	1.34	黒曜石	—
31	—	C-21	260	U	黒	4.1	1.9	0.6	2.62	黒曜石	—
31	4号周溝墓	F-25	261	U	黒	2.5	1.4	0.8	1.25	黒曜石	—
31	4号周溝墓	E-26	262	U	黒	2.6	1.6	0.8	1.85	黒曜石	—
31	3号周溝墓	B-23	263	U	黒	2.6	1.7	0.5	0.81	黒曜石	—
31	—	B-22	264	U	黒	2.2	1.7	0.6	1.29	黒曜石	—
31	—	A-25	265	U	黒	2.3	2.0	0.9	1.77	黒曜石	—
31	—	F-27	266	U	黒	1.5	2.2	0.5	1.35	黒曜石	—
31	3号周溝墓	A-23	267	U	黒	3.4	2.0	0.8	2.15	黒曜石	—

擲図 No	出土地点	グリッド	番号	器種	法量				石材	残存率	その他
					長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
31	1号土坑	—	268	U	F	3.0	1.6	0.9	3.53	黒曜石	—
31	4号周溝墓	E-26	269	石	板	2.6	2.4	1.7	8.18	黒曜石	—
31	2号周溝墓	A-19	270	石	板	2.7	2.7	1.4	1.40	黒曜石	—
32	—	C-14	271	石	板	3.9	3.9	2.5	33.71	黒曜石	—
32	—	E-25	272	石	板	2.6	3.5	1.4	9.61	黒曜石	—
32	3トレンチ	—	273	石	板	1.4	2.8	1.4	4.66	黒曜石	—
32	2号周溝墓	—	274	石	板	2.2	3.2	1.1	5.08	黒曜石	—
32	—	B-25	275	石	板	2.3	3.9	1.6	10.50	黒曜石	—
32	表採集	—	276	原	石	2.5	5.6	2.8	41.31	黒曜石	—
33	3号住	B-20	277	スクリーパー	—	6.7	7.0	1.7	83.30	砂岩	—
33	3号住	B-20	278	スクリーパー	—	4.7	6.2	1.0	19.30	砂岩	—
33	3号住	—	279	打斧	斧	10.4	6.0	1.9	124.00	ホルンフェルス	
33	3号住	B-20	280	打斧	斧	5.0	3.0	0.8	15.20	ホルンフェルス	
33	3号土坑	D-24	281	打斧	斧	10.4	5.8	2.2	153.50	ホルンフェルス	
33	3号周溝墓	A-23	282	打斧	斧	12.2	4.9	1.5	86.40	ホルンフェルス	
33	3号周溝墓	B-22	283	打斧	斧	11.2	6.4	1.1	95.90	ホルンフェルス	
33	1号周溝墓	C-15	284	打斧	斧	11.9	4.9	1.8	110.70	ホルンフェルス	
33	—	E-23	285	打斧	斧	7.9	4.8	1.1	41.20	ホルンフェルス	
33	—	E-25	286	打斧	斧	12.9	7.5	2.5	256.20	ホルンフェルス	
33	—	E-26	287	打斧	斧	9.3	4.9	1.8	91.00	ホルンフェルス	
33	—	F-25	288	打斧	斧	5.7	4.3	0.9	20.00	ホルンフェルス	
33	3号周溝墓	—	289	打斧	斧	10.4	4.7	1.0	58.90	ホルンフェルス	
33	11トレンチ	—	290	打斧	斧	15.0	6.2	2.3	306.40	ホルンフェルス	
33	表採集	—	291	打斧	斧	12.0	5.8	1.8	136.60	ホルンフェルス	
34	3号住	—	292	四面磨石	石	11.5	7.0	4.4	500.30	安山岩	100%
34	—	C-16	293	石	■	6.5	4.6	3.5	146.40	ホルンフェルス	10% 欠損
34	—	A-17	294	石	■	21.5	21.7	7.5	3300.00	安山岩	40% 欠損
34	—	B-14	295	基石(?)	石	2.3	2.3	0.7	2.57	ホルンフェルス	
34	—	C-23	296	砥	石	5.0	2.8	0.7	11.96	ホルンフェルス	50% 一部欠損

土製品観察表

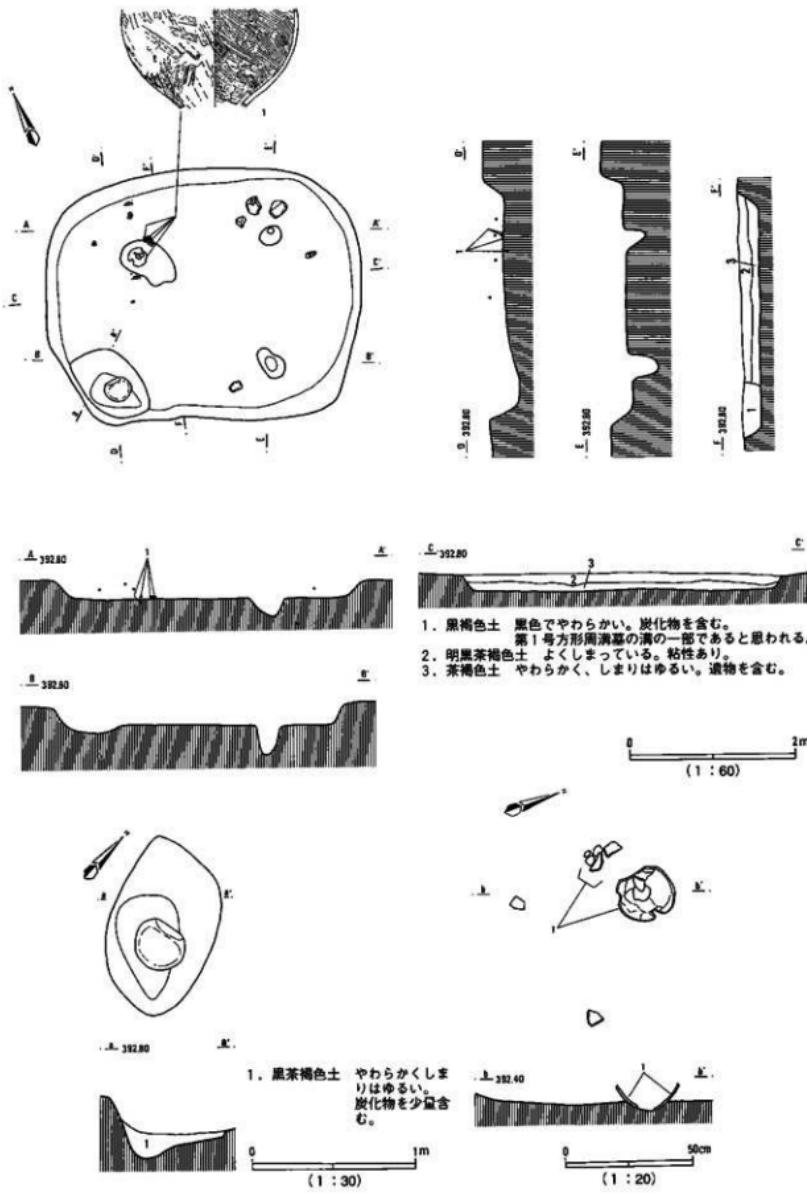
擲図 No	出土地点	グリッド	番号	器種	法量				その他
					長さ	幅	厚さ	重量	
34	3号住	C-20	297	土偶(脚部)	(43.0)	(28.0)	(30.0)	21.12	
34	3号周溝墓	A-21	298	土偶(脚部)	(19.0)	(50.0)	(51.0)	44.48	
34	3号周溝墓	B-20	299	块状耳飾り	(43.0)	14.0	14.0	10.04	
34	3号周溝墓	B-21	300	块状耳飾り	(31.5)	9.0	11.0	3.89	

金属製品観察表

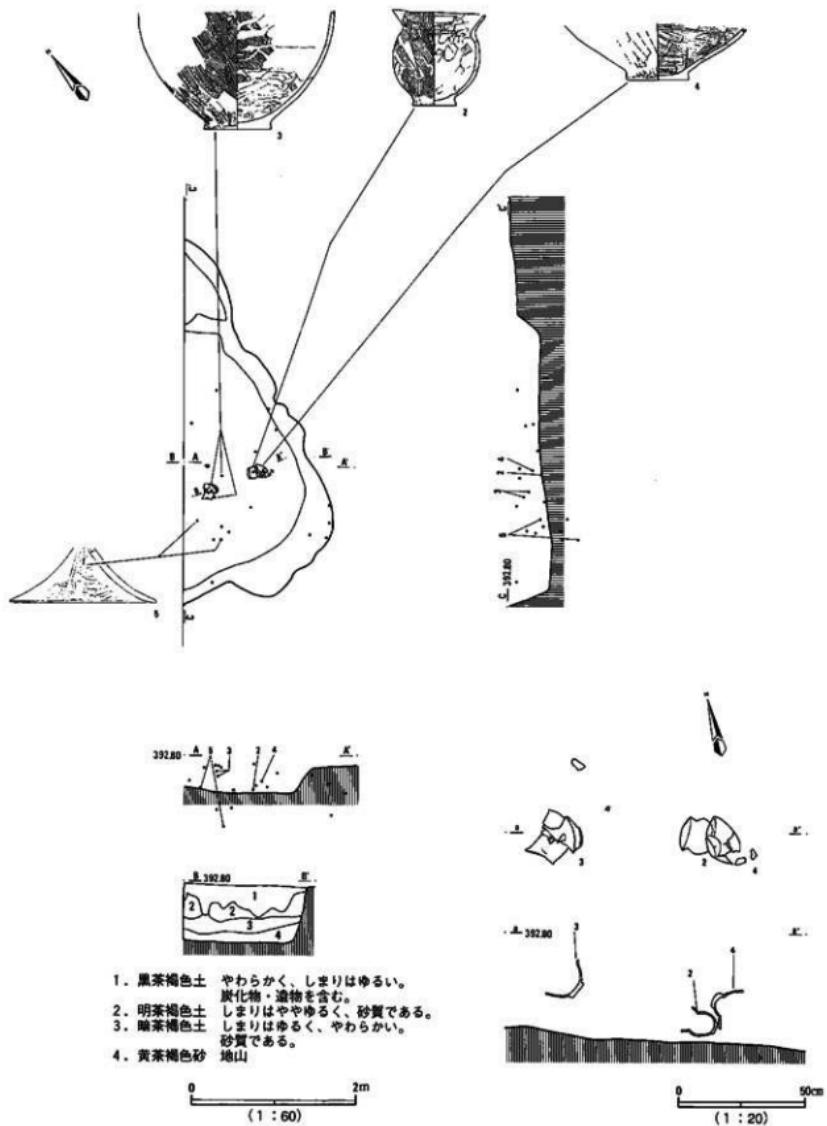
擲図 No	出土地点	グリッド	番号	種別	法量				その他
					長さ	幅	厚さ	重さ	
34	1号周溝墓	C-15	301	環(?)	8.6	0.8	(0.5)	14.49	

銭貨観察表

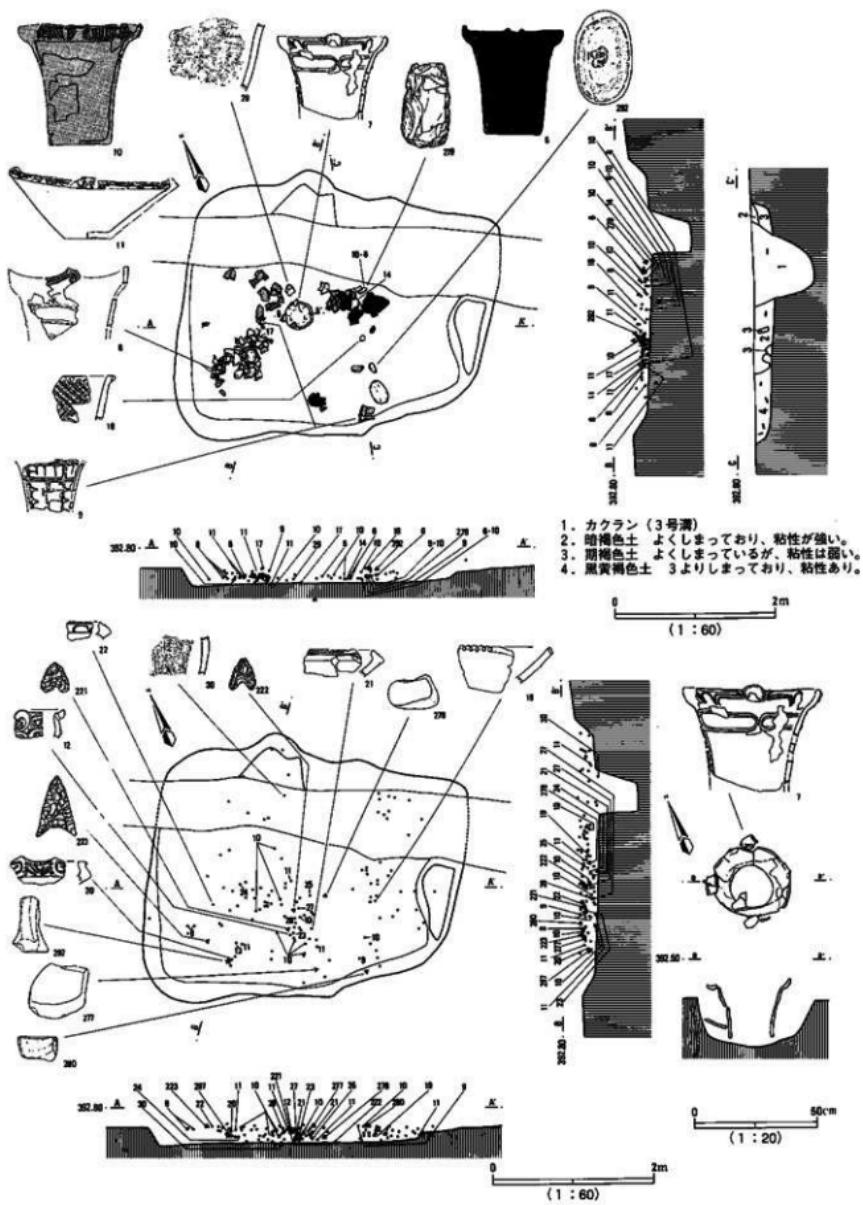
擲図 No	出土地点	グリッド	番号	銭名	初鋳年	法量				その他
						直径	孔径	最大厚	重量	
34	4号周溝墓	—	302	治平元寶	1064	2.44	0.67	0.67	0.12	3.29



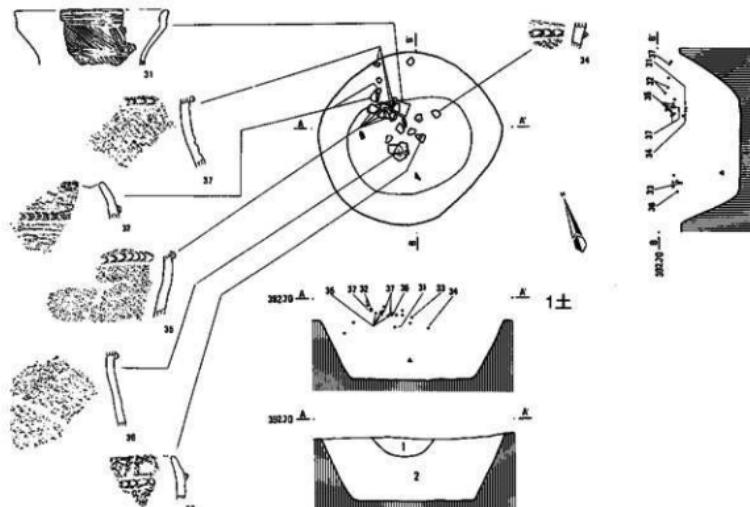
第3図 第1号住居跡



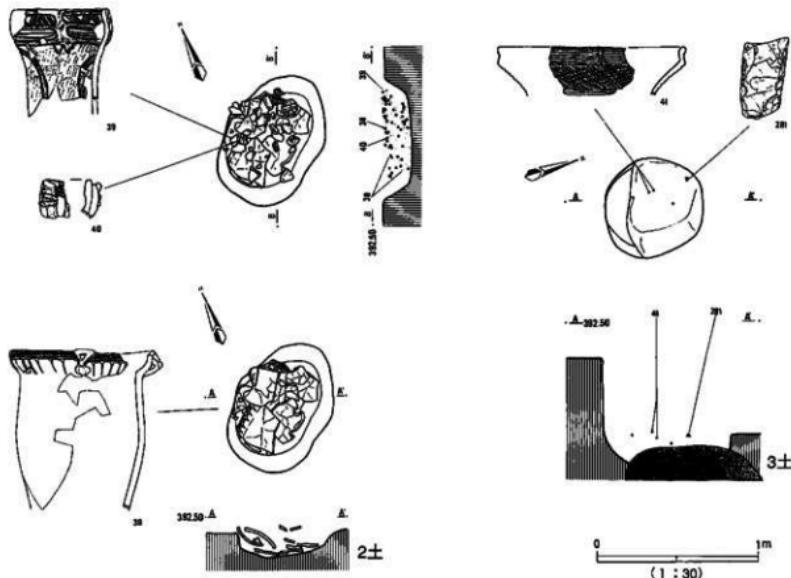
第4図 第2号住居跡



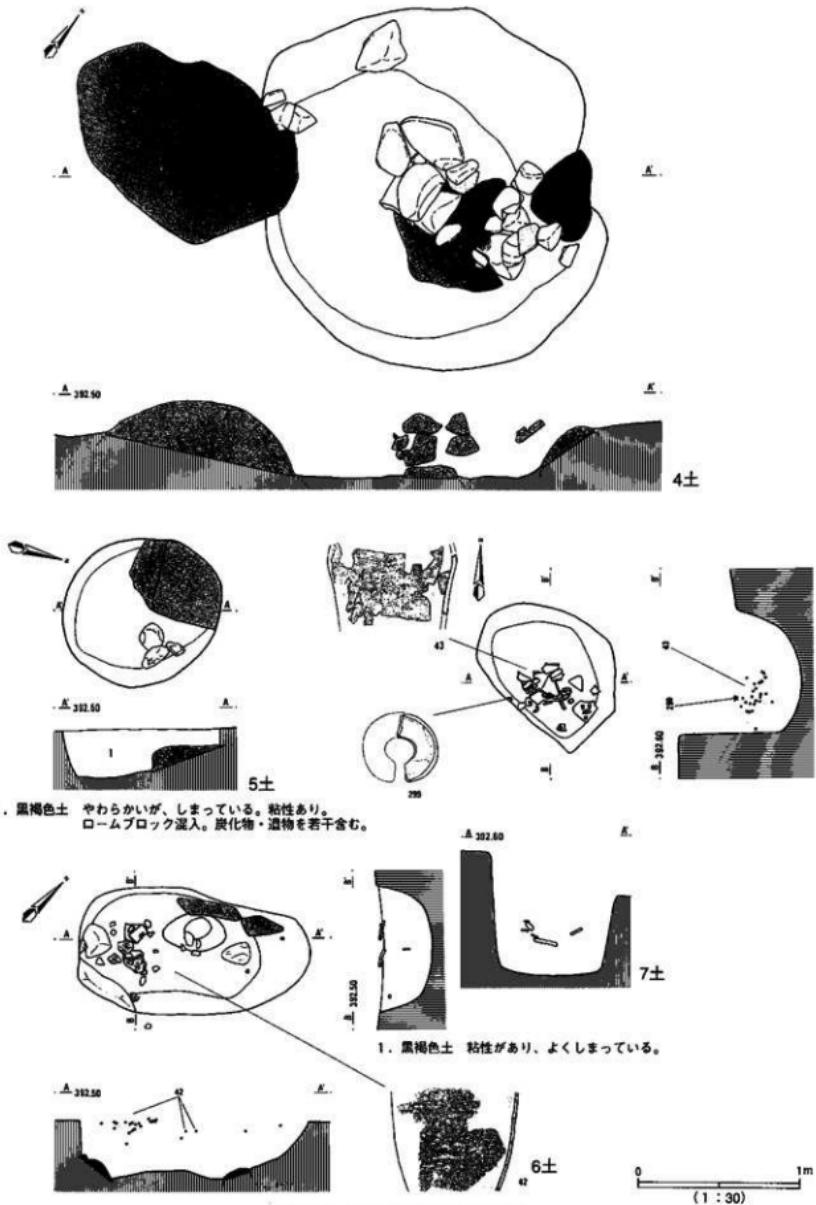
第5図 第3号住居跡



1. 地黒褐色土 ややしまっており、粘性あり。  
2. 地黄褐色土 ややしまっており、粘性は弱い。



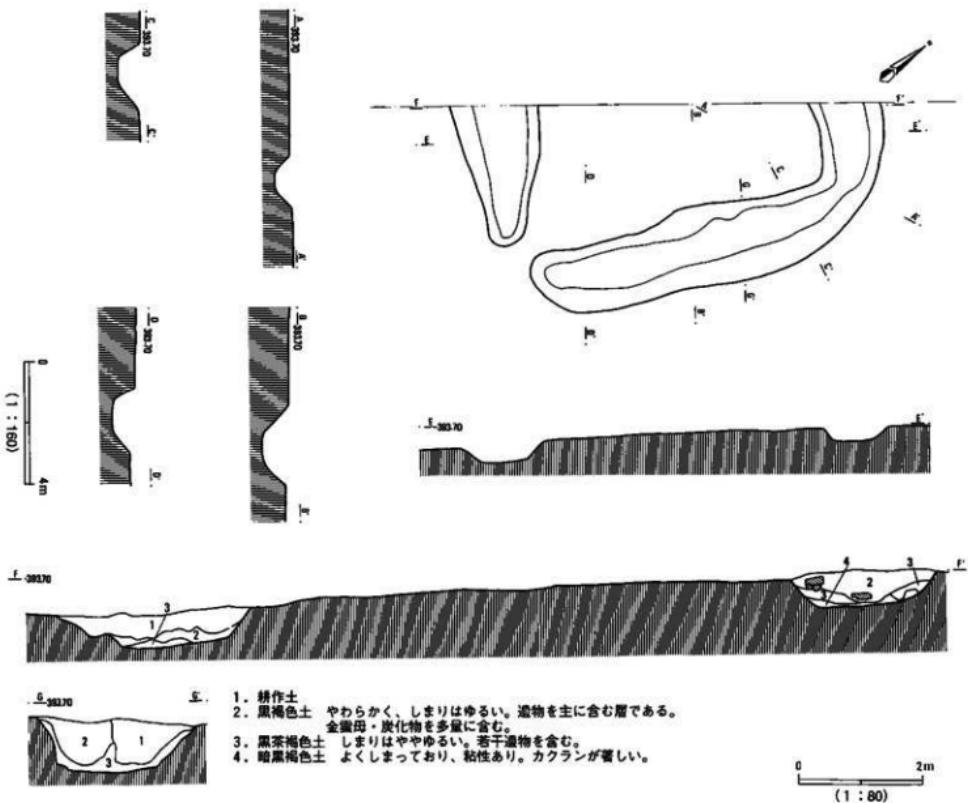
第6図 土坑① (1～3号土坑)

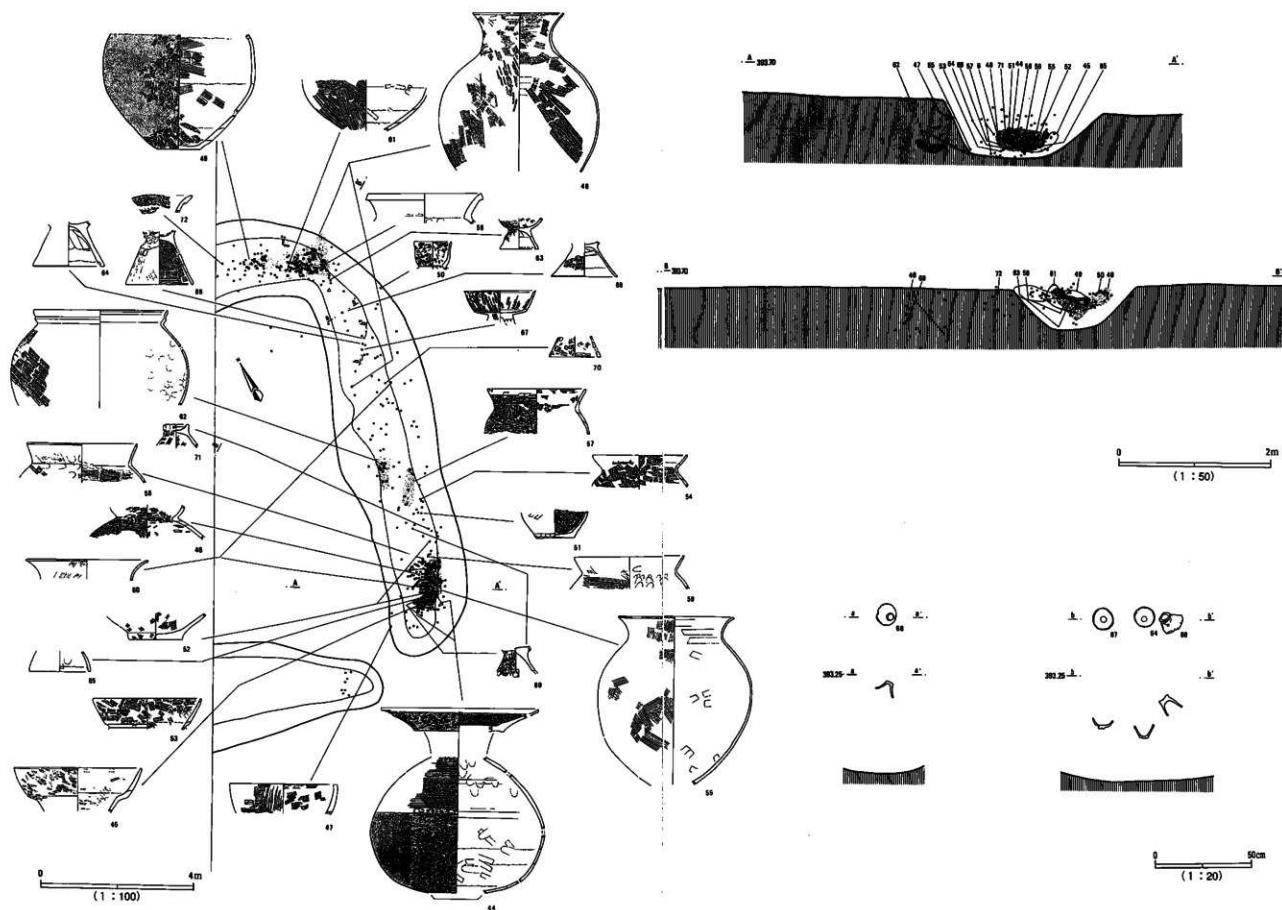


第7図 土坑② (4～7号土坑)

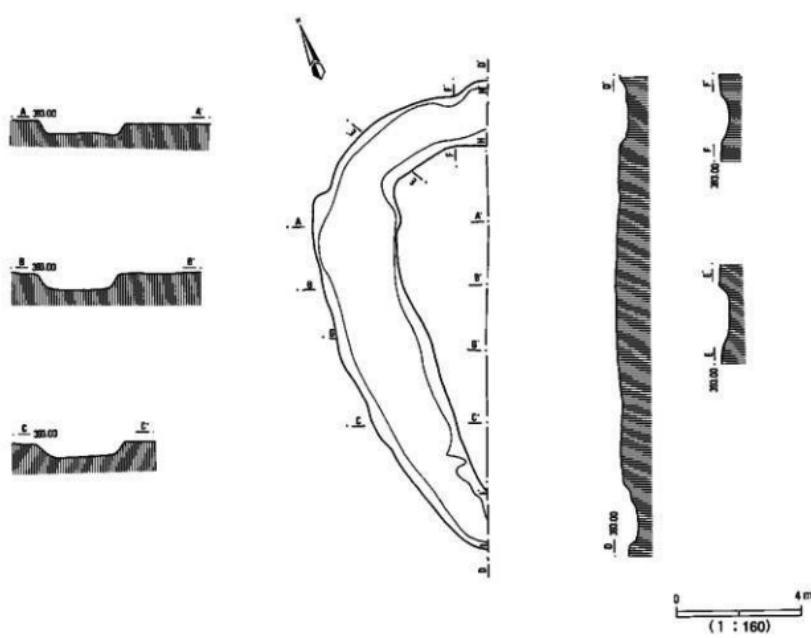
第8図 第1号方形周溝墓

— 20 —





第9図 第1号方形周溝墓遺物分布図

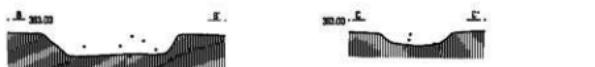
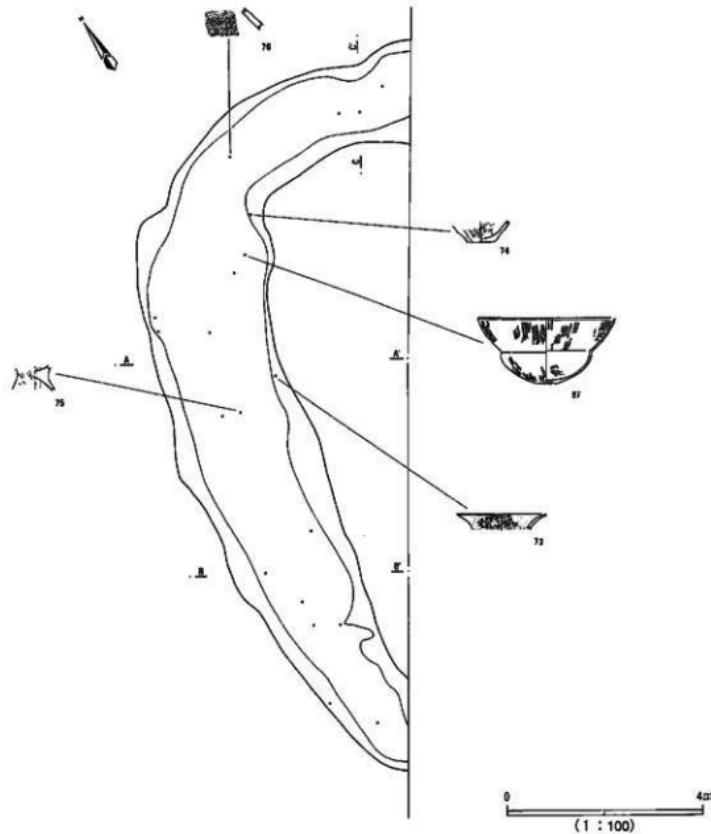


1. 黒褐色土 やわらかく、しまりはゆるい。炭化物・遺物を含む。
2. 暗黒茶褐色土 しまりはゆるい。遺物を主に含む層である。  
礫を若干含む。
3. 黄茶褐色砂礫 地山

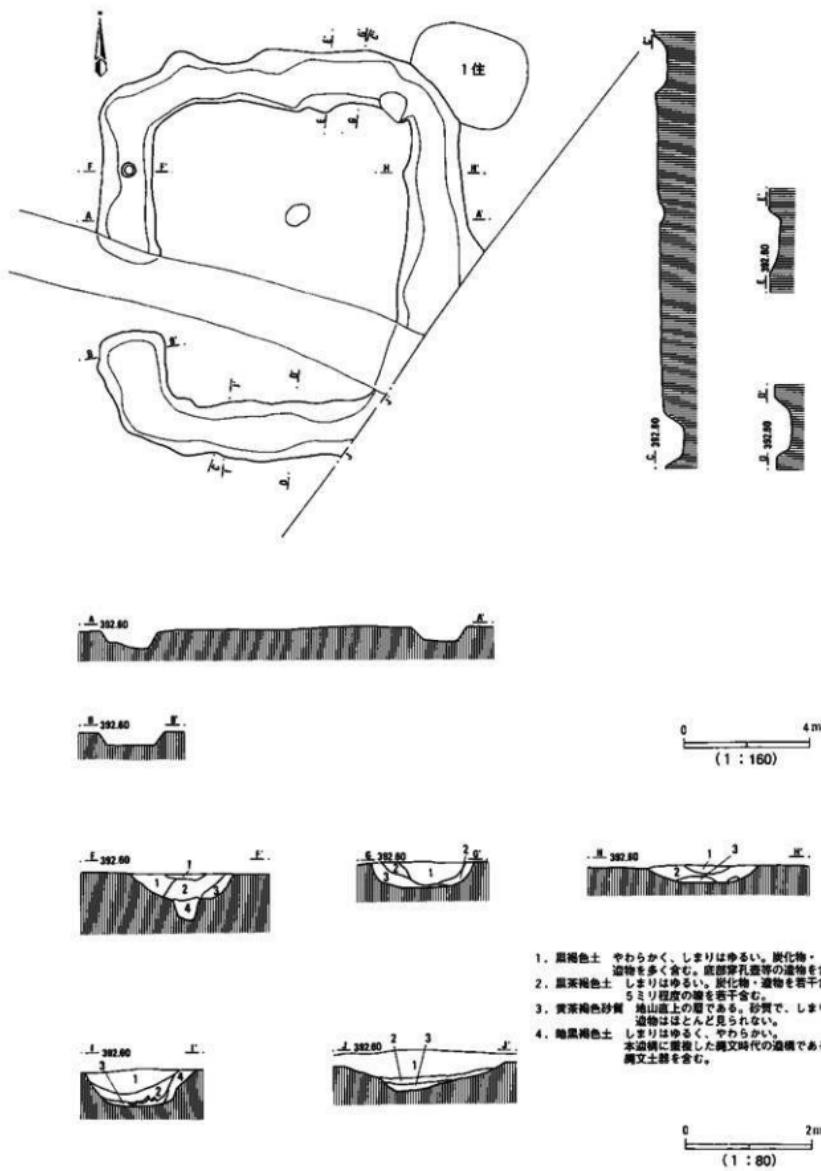


0 2m  
(1 : 80)

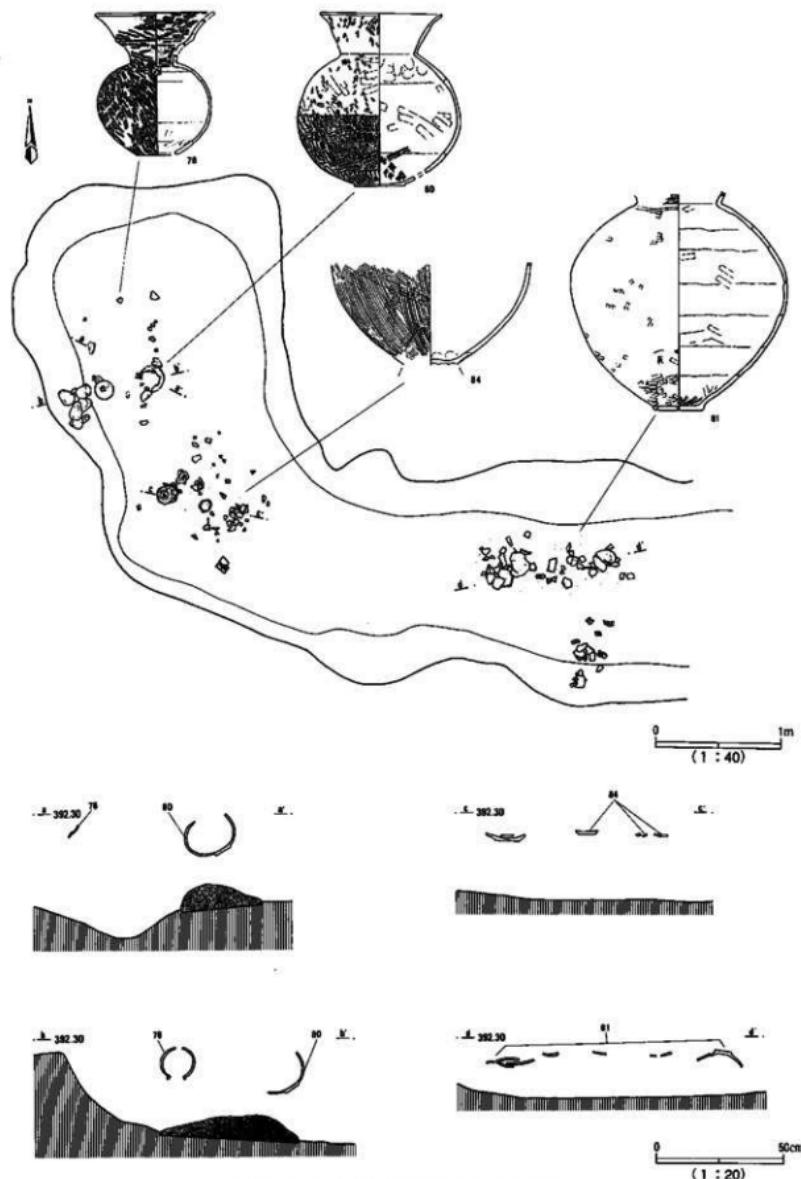
第10図 第2号方形周溝墓



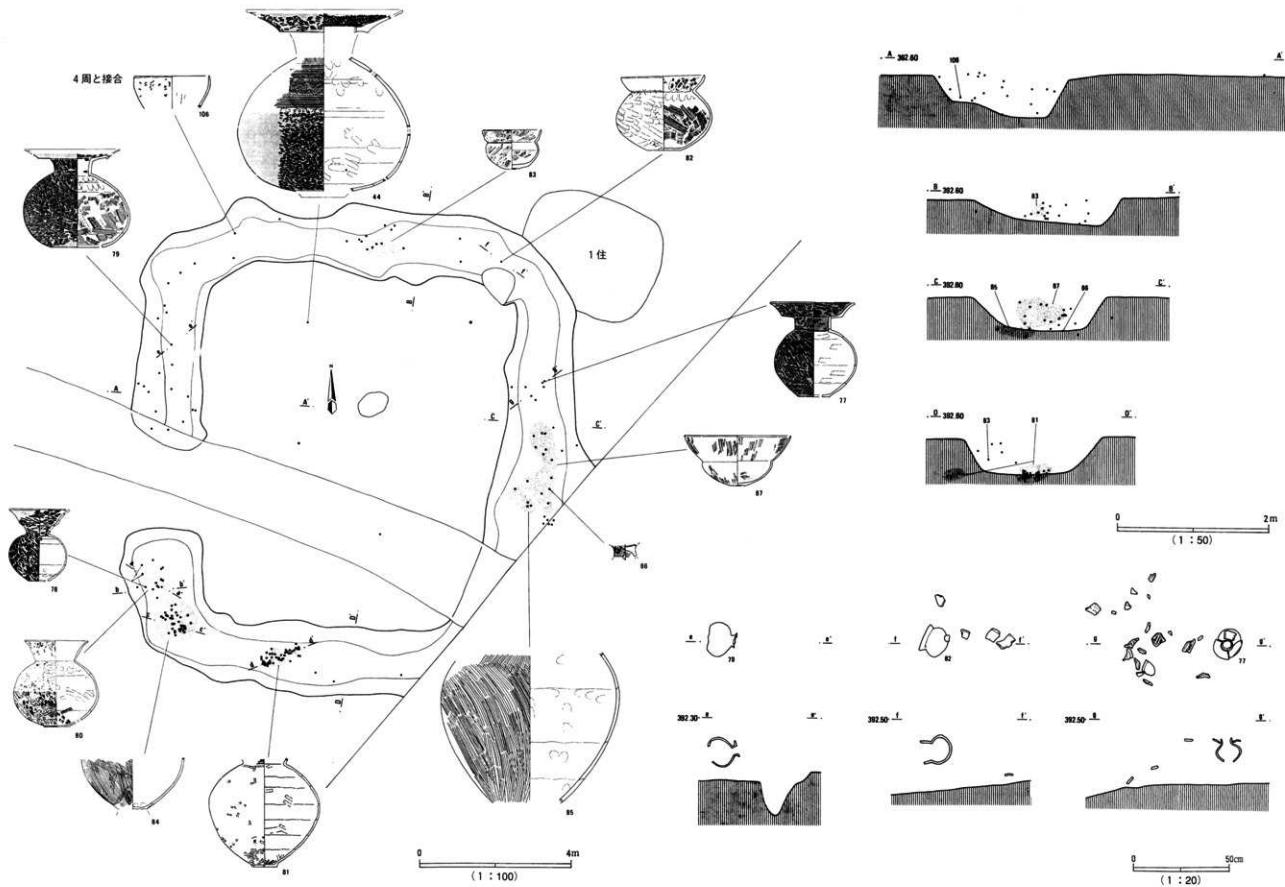
第11図 第2号方形周溝墓遺物分布図



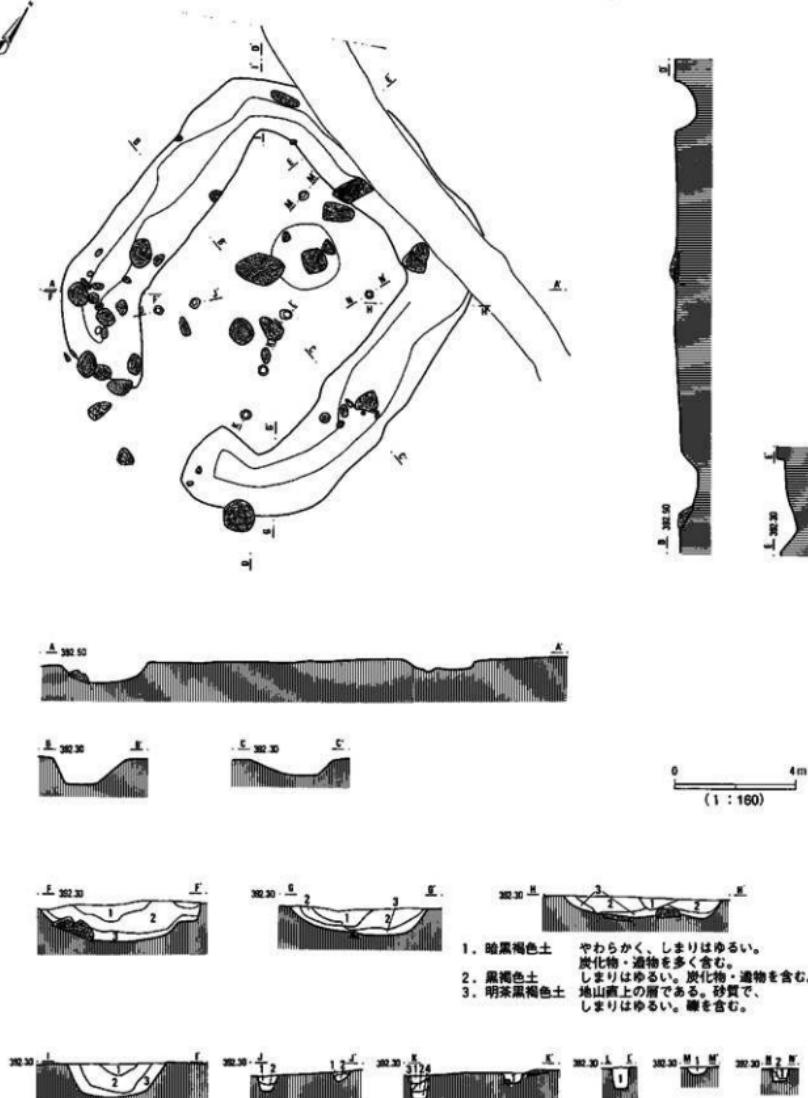
第12図 第3号方形周溝墓



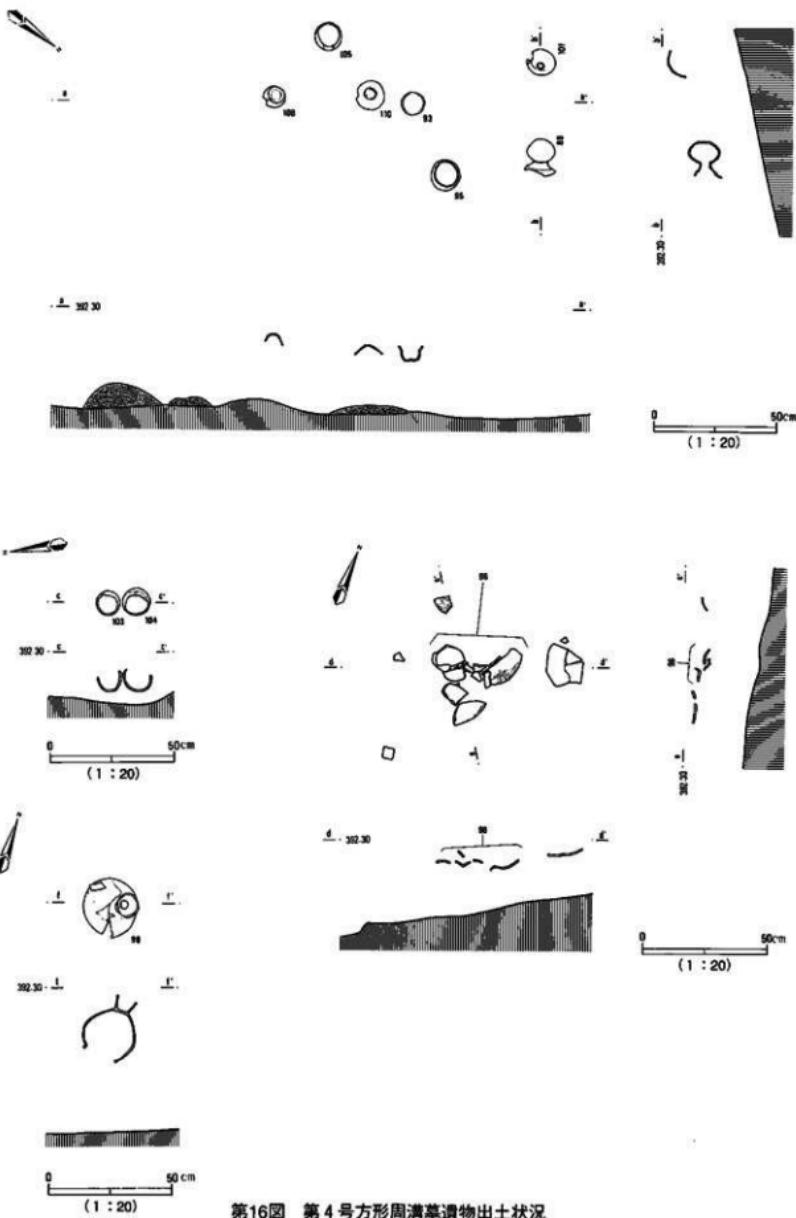
第13圖 第3號方形周溝墓遺物出土狀況



第14図 第3号方形周溝墓遺物分布図



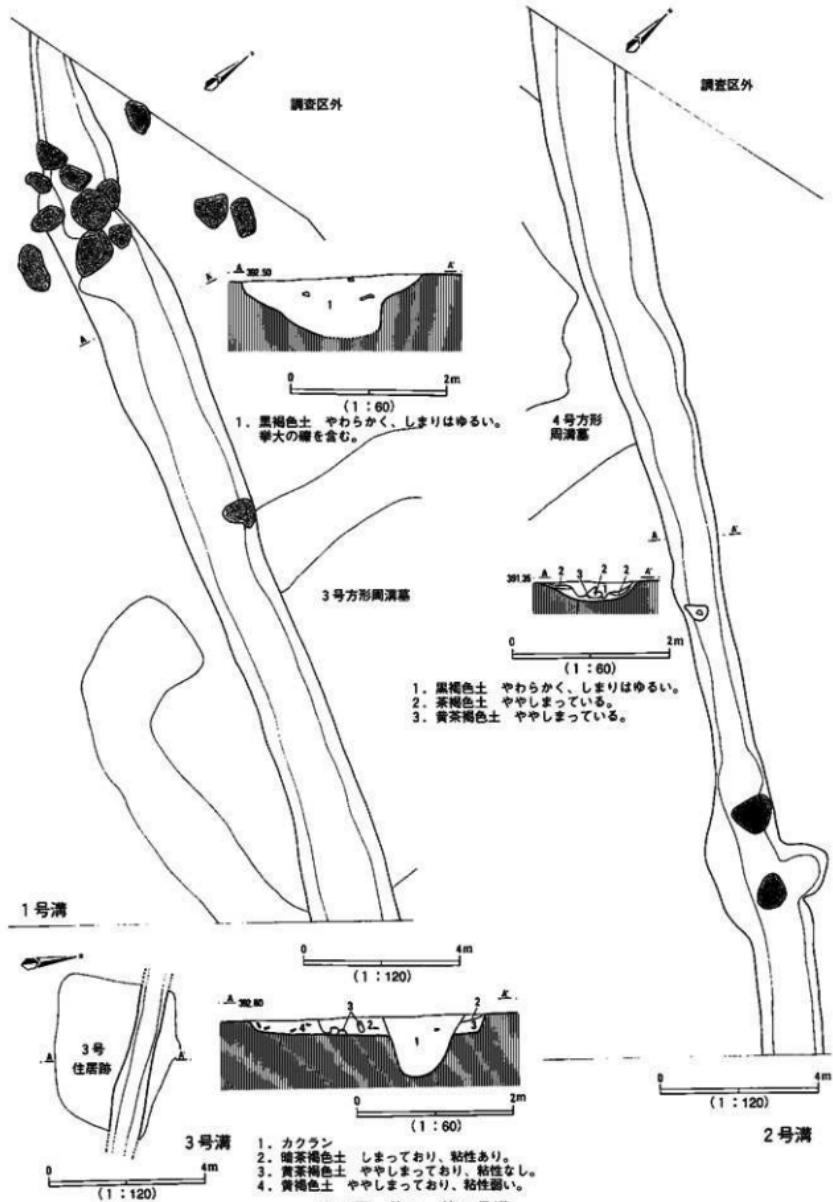
第15図 第4号方形周溝墓



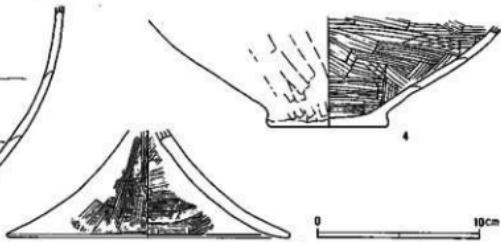
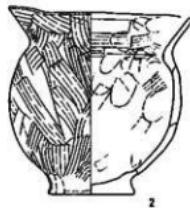
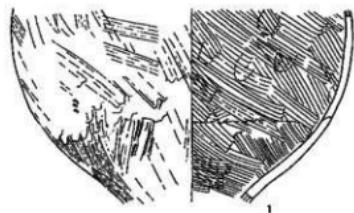
### 第16図 第4号方形周溝墓遺物出土状況



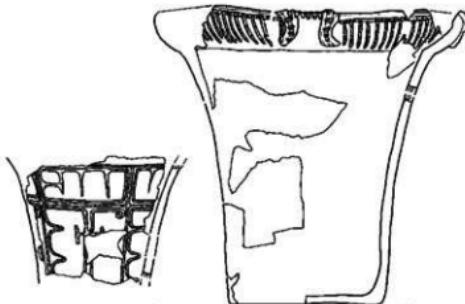
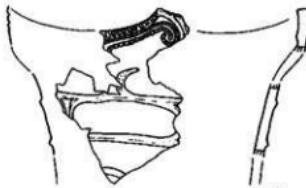
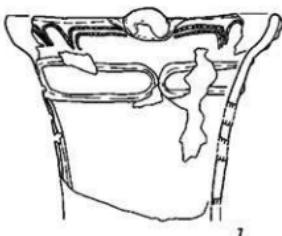
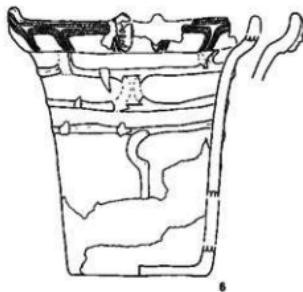
第17図 第4号方形周溝墓遺物分布図



第18図 第1～第3号溝



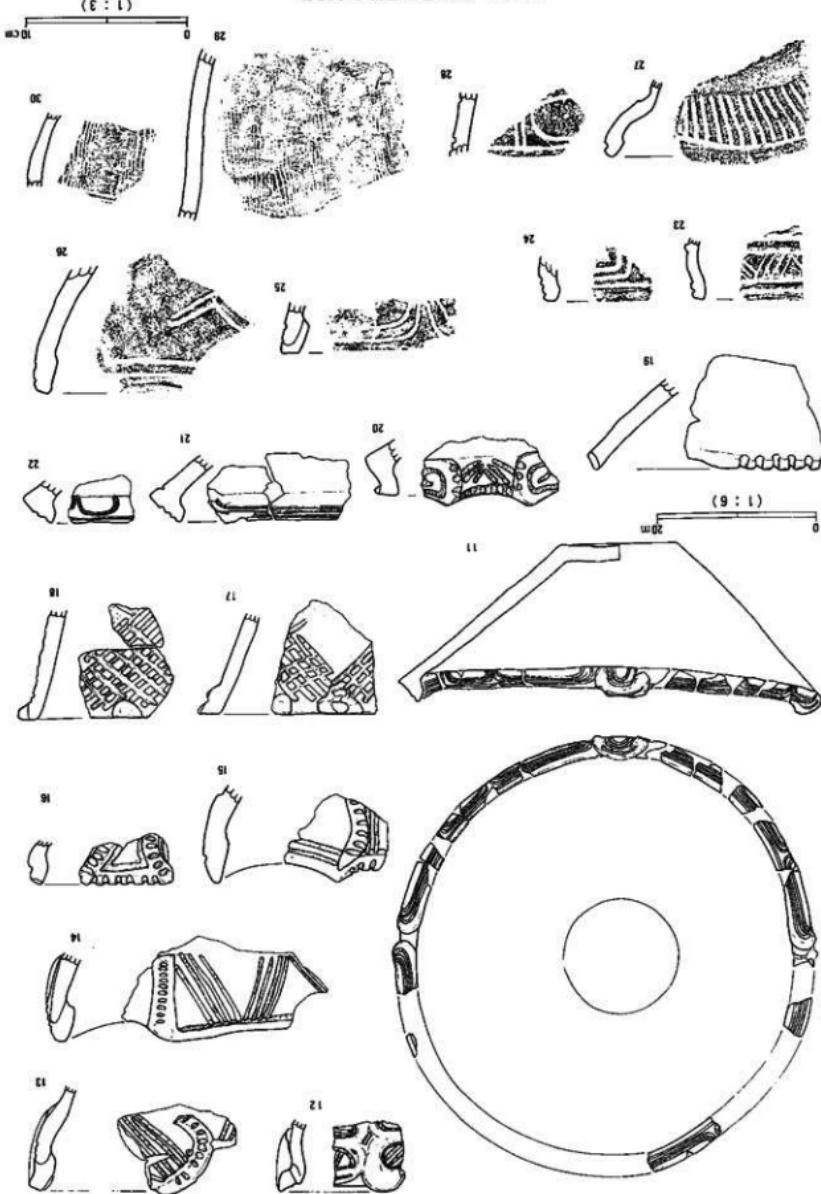
0 10cm  
(1 : 3)



0 20cm  
(1 : 6)

第19図 1号(1)・2号(2~5)・3号(6~10) 住居跡出土遺物

第20圖 第3号住居跡出土遺物



第21図 1・2・3・6・7号土坑出土物

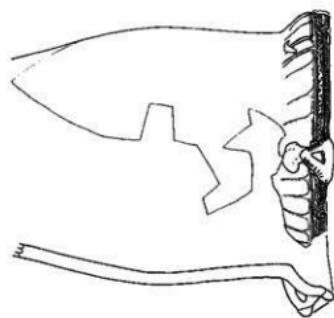
—36—



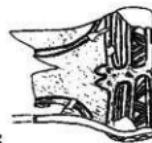
20cm



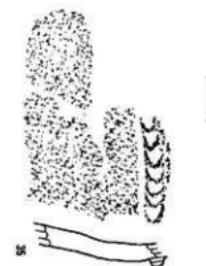
0  
(1 : 6)  
20cm



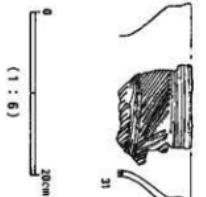
20cm



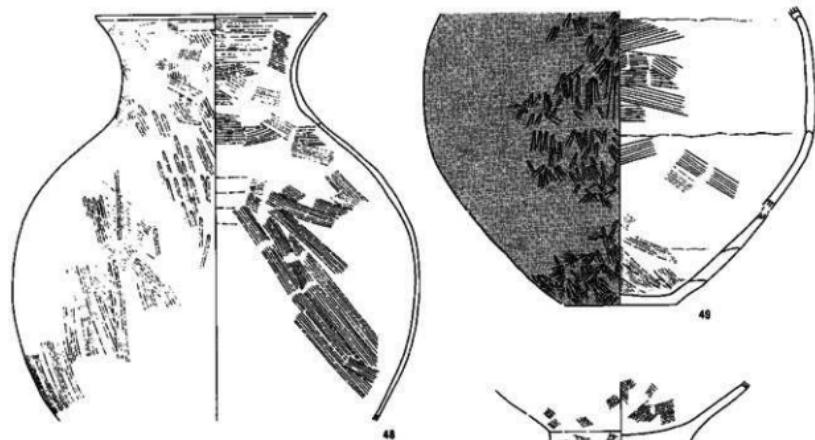
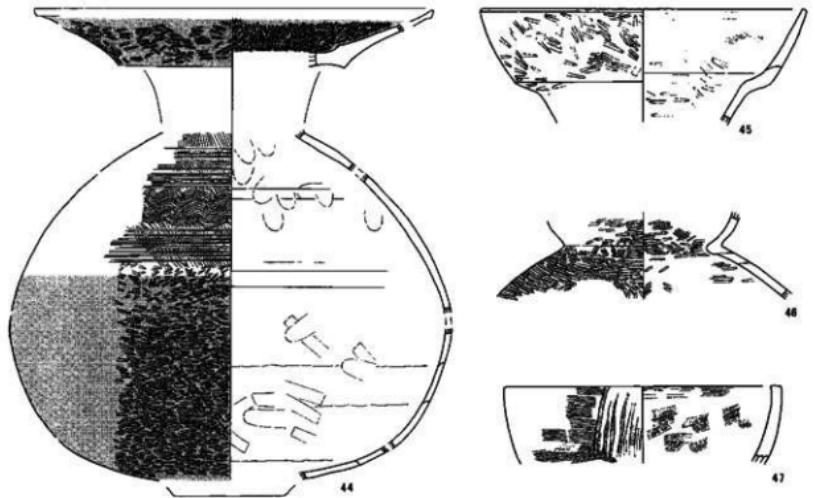
0  
(1 : 3)  
10cm



20cm

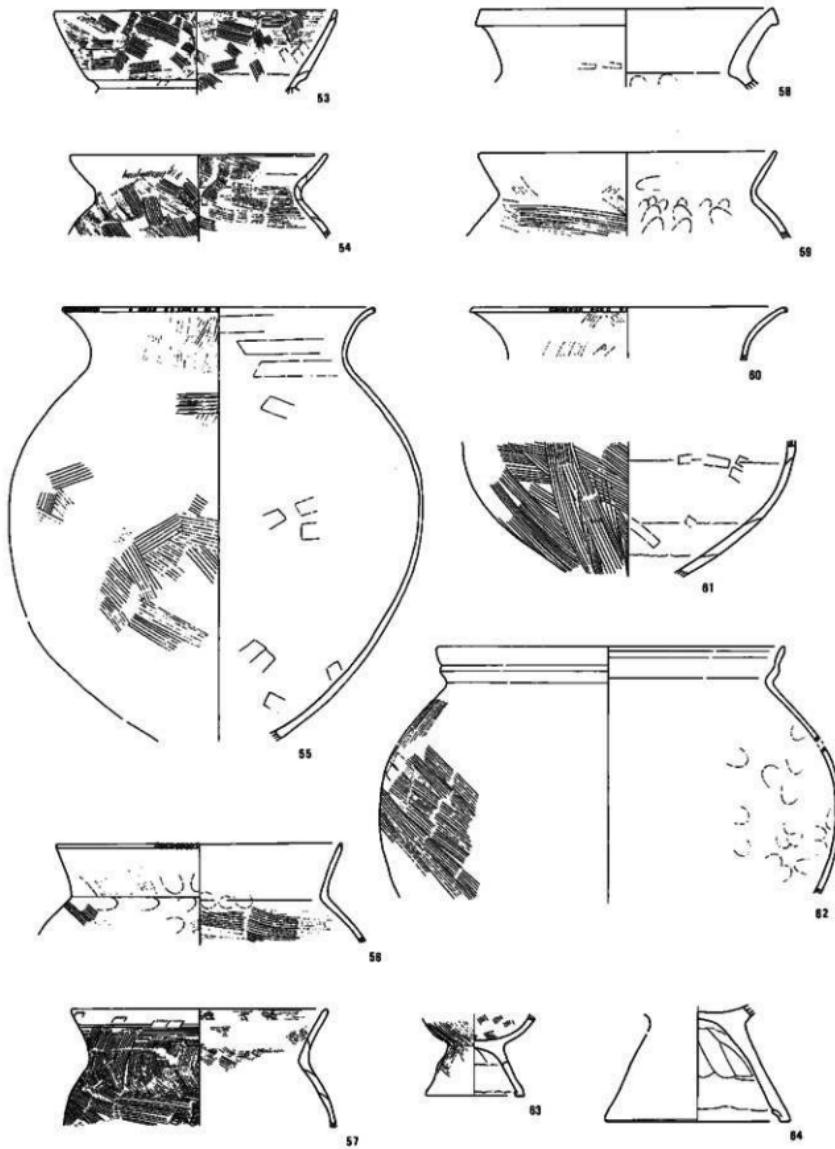


0  
(1 : 6)  
20cm



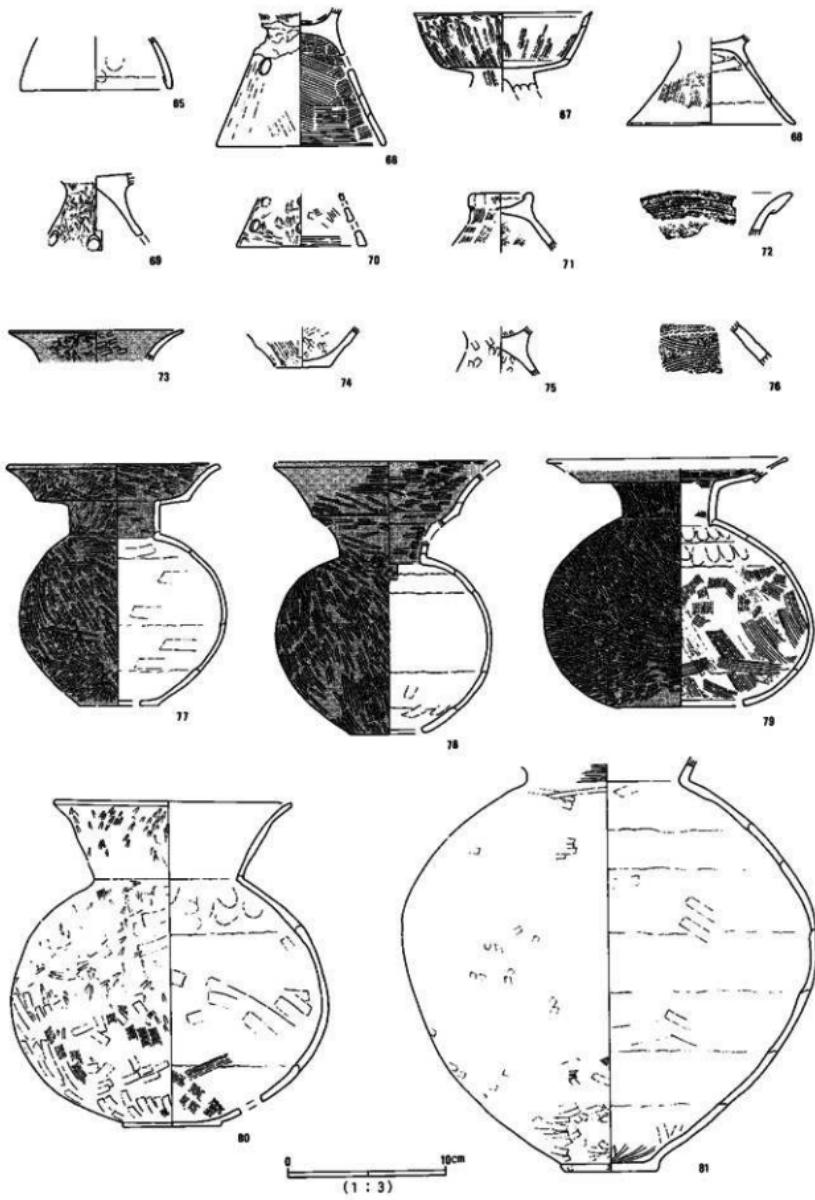
0 10cm  
(1 : 3)

第22図 第1号方形周溝墓出土遺物①

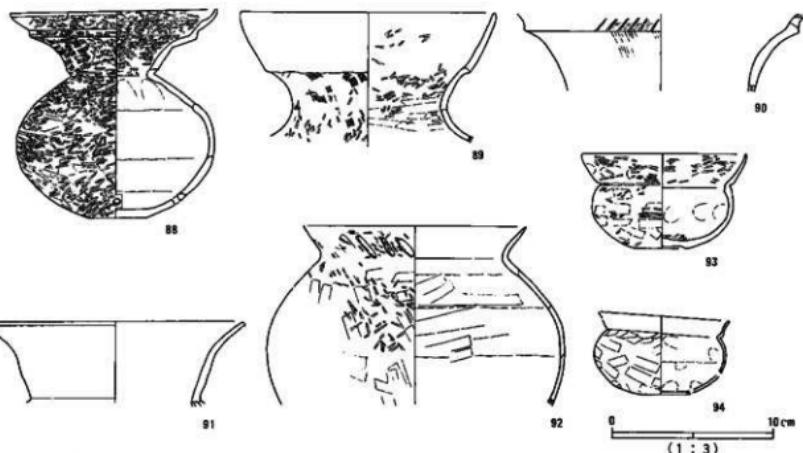
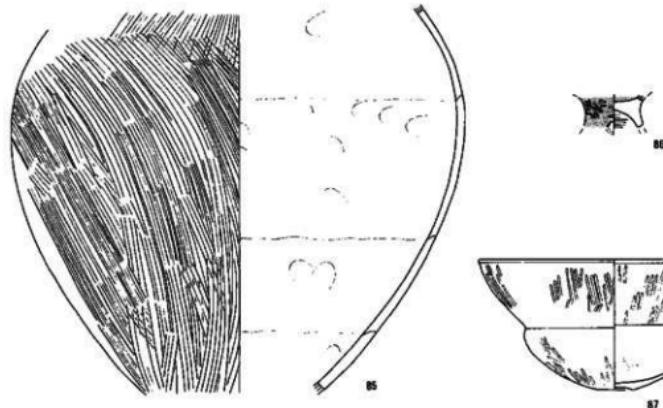
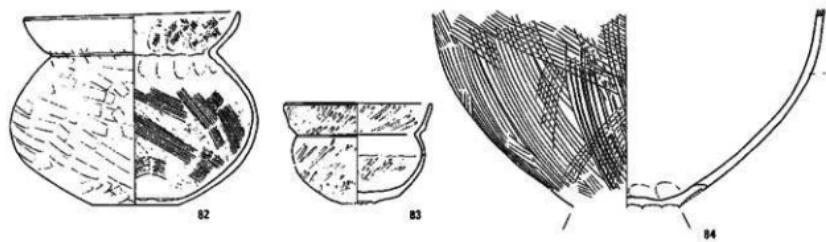


第23図 第1号方形周溝墓出土遺物②

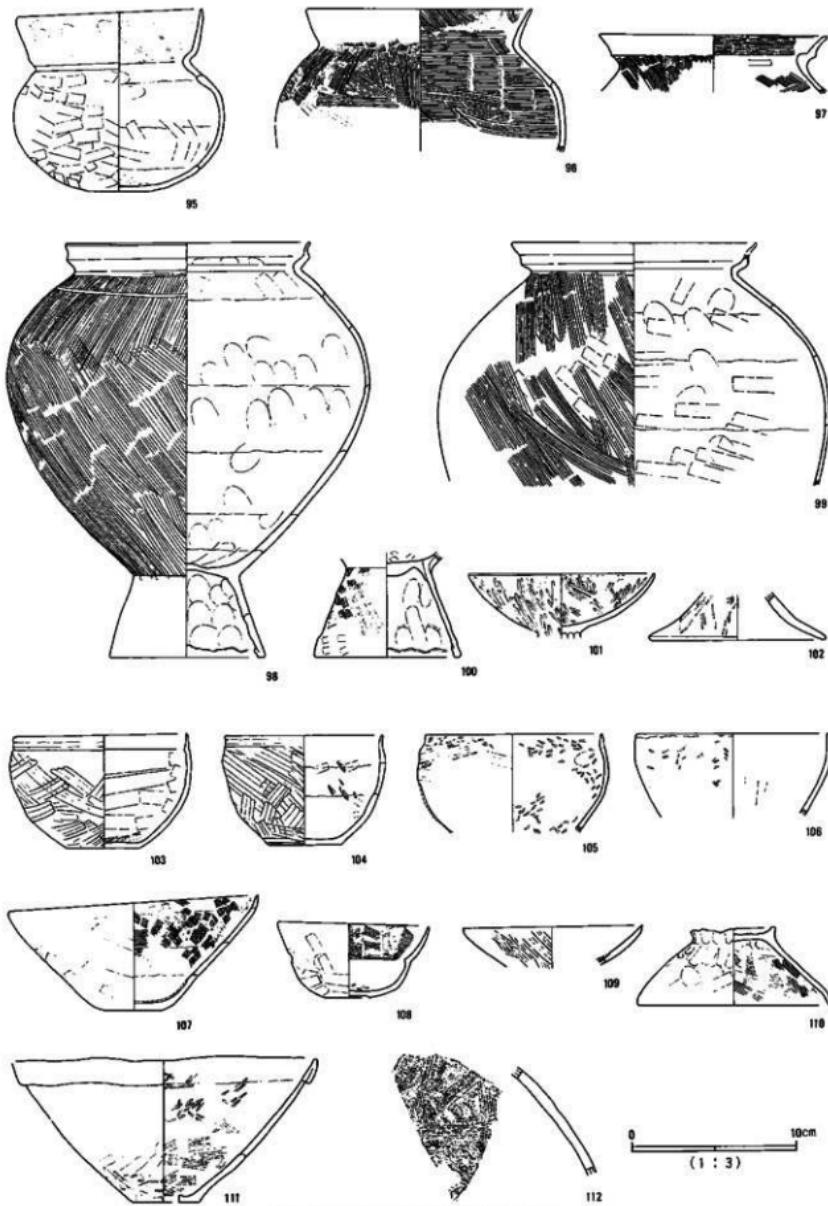
0  
10cm  
(1 : 3)



第24図 第1号方形周溝墓（65～68）・第3号方形周溝墓（73～76）・第4号方形周溝墓（77～81）出土造物

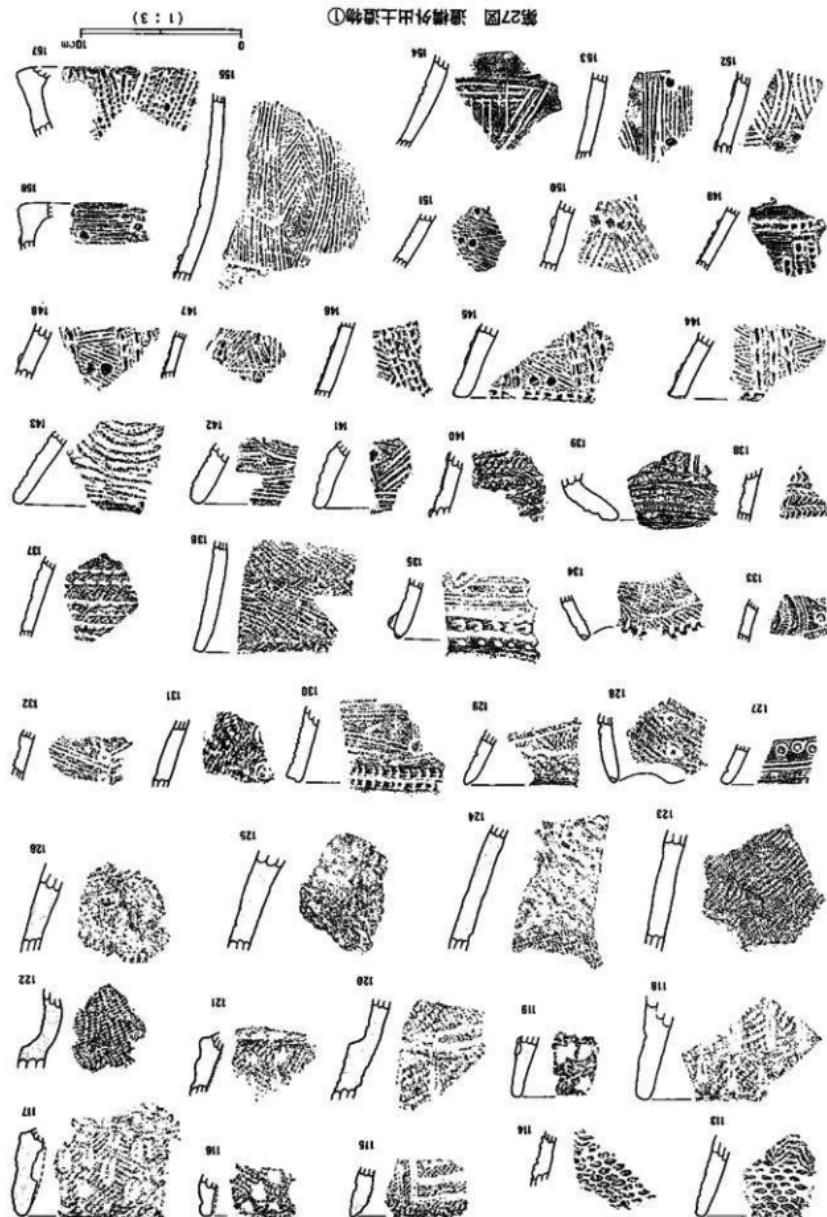


第25図 第3号方形周溝墓（82～87）・第4号方形周溝墓（88～94）出土遺物

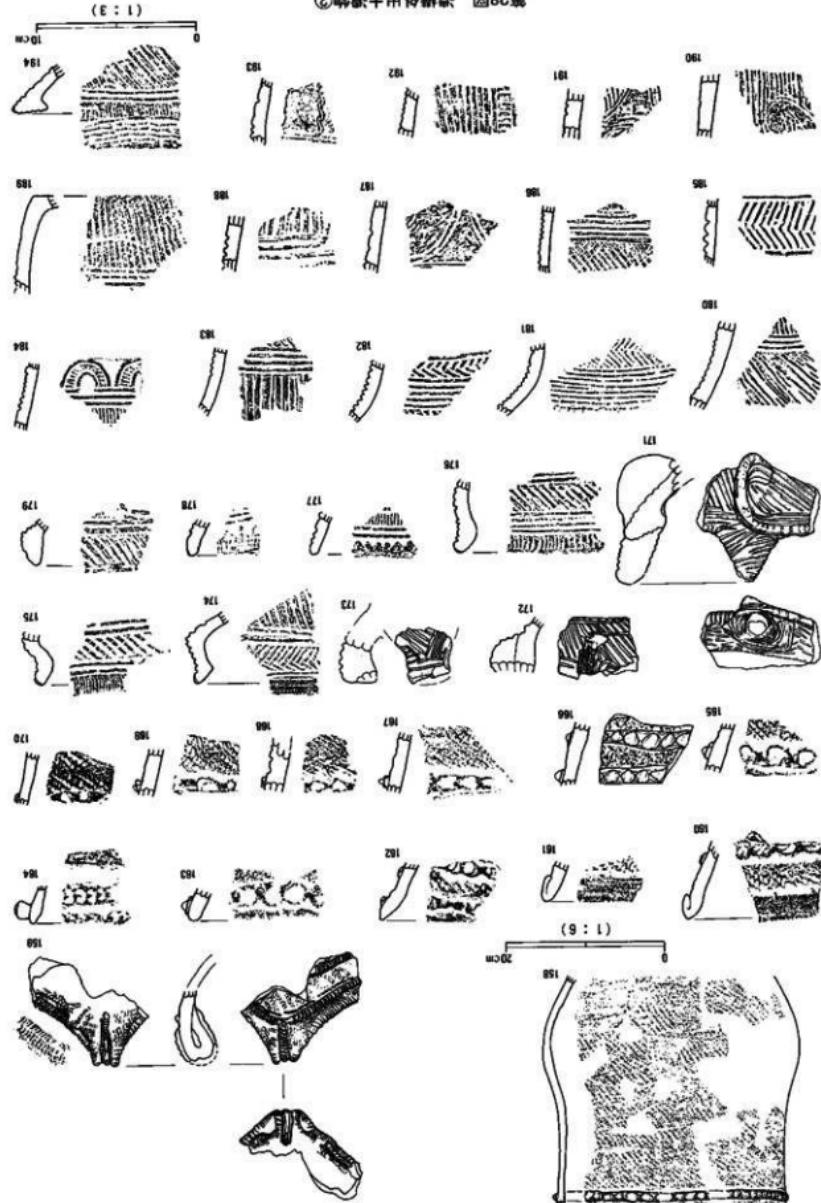


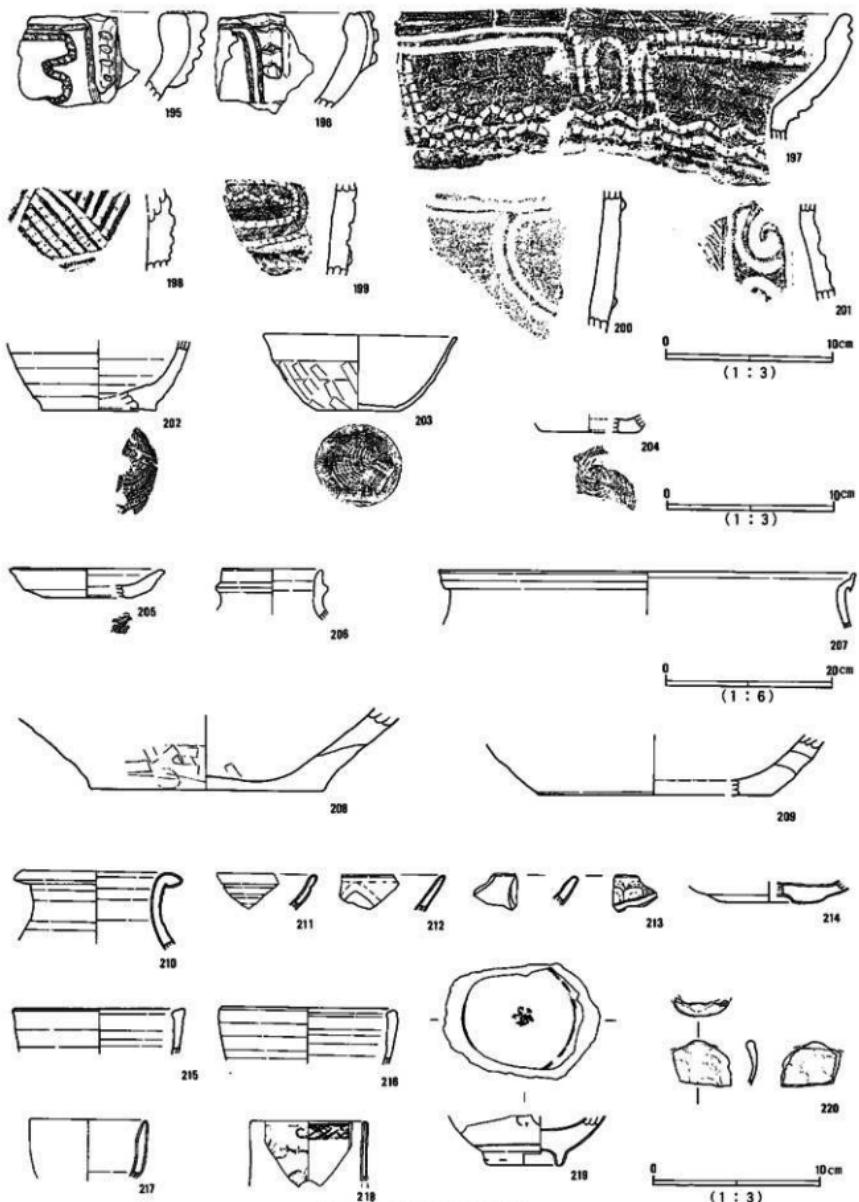
第26図 第4号方形周溝墓出土遺物

第27圖 遺物外出土遺物①

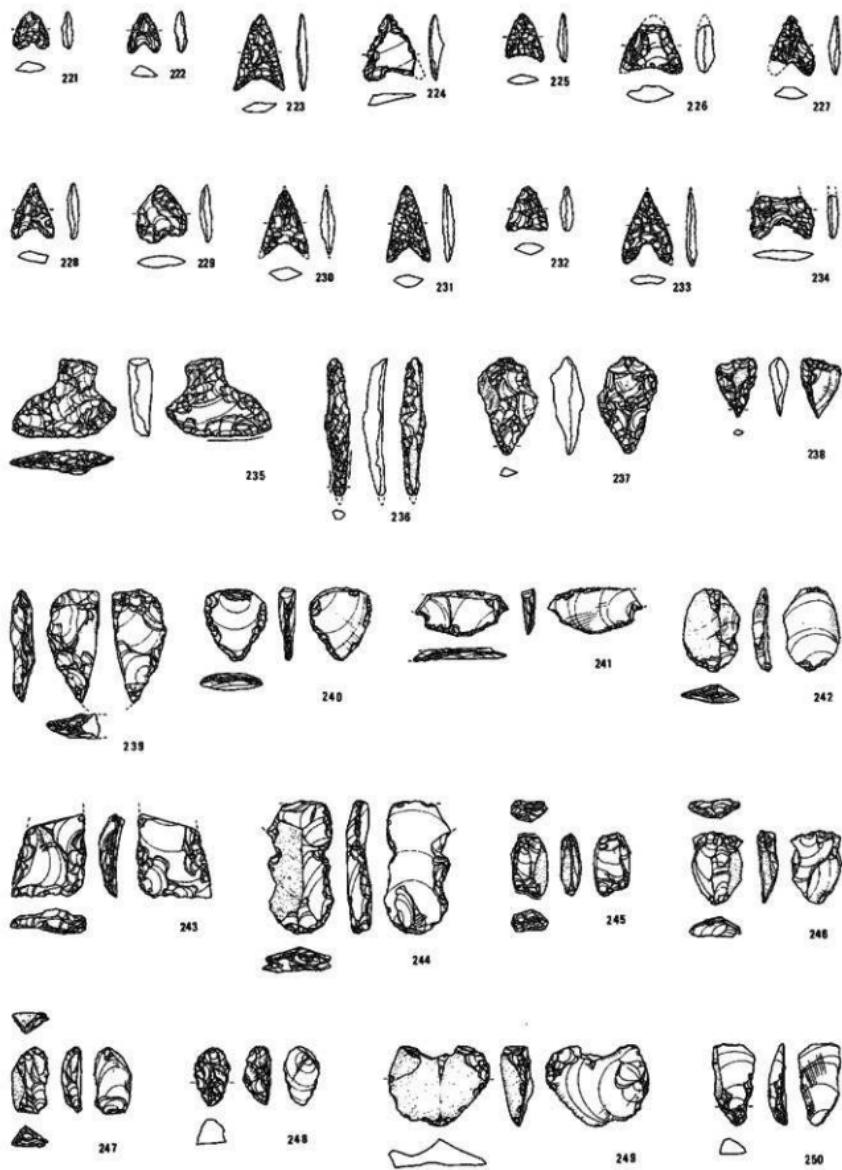


第28圖 遺物外出土遺物②





第29図 遺構外出土遺物③

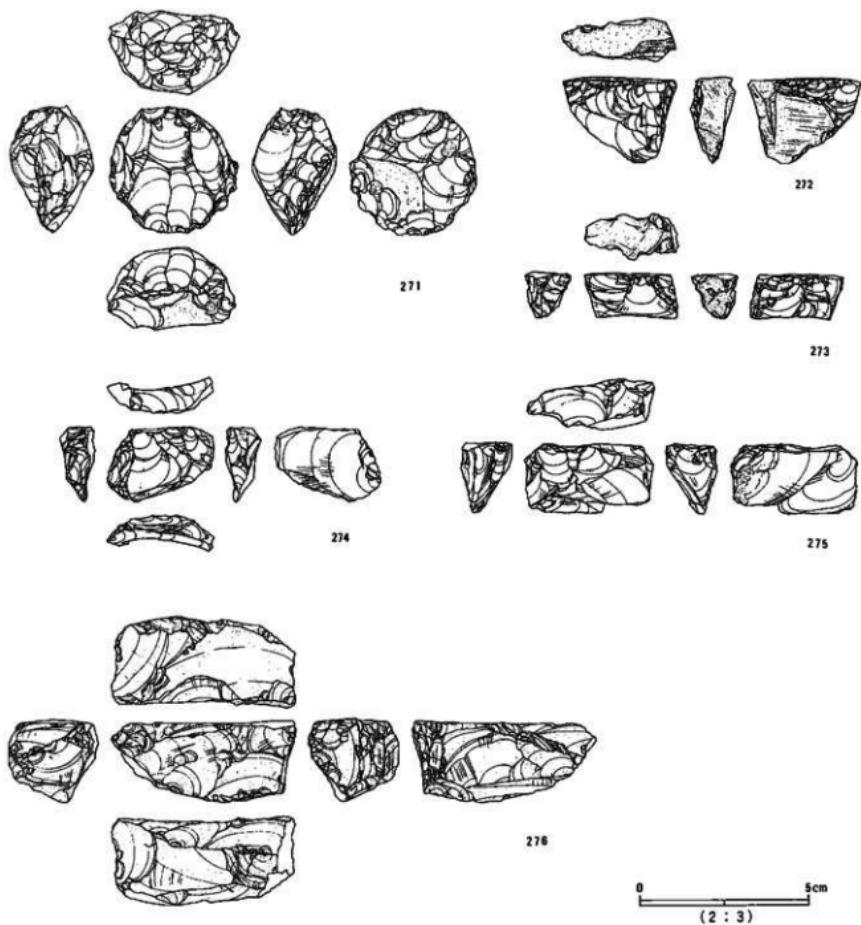


第30図 石器①

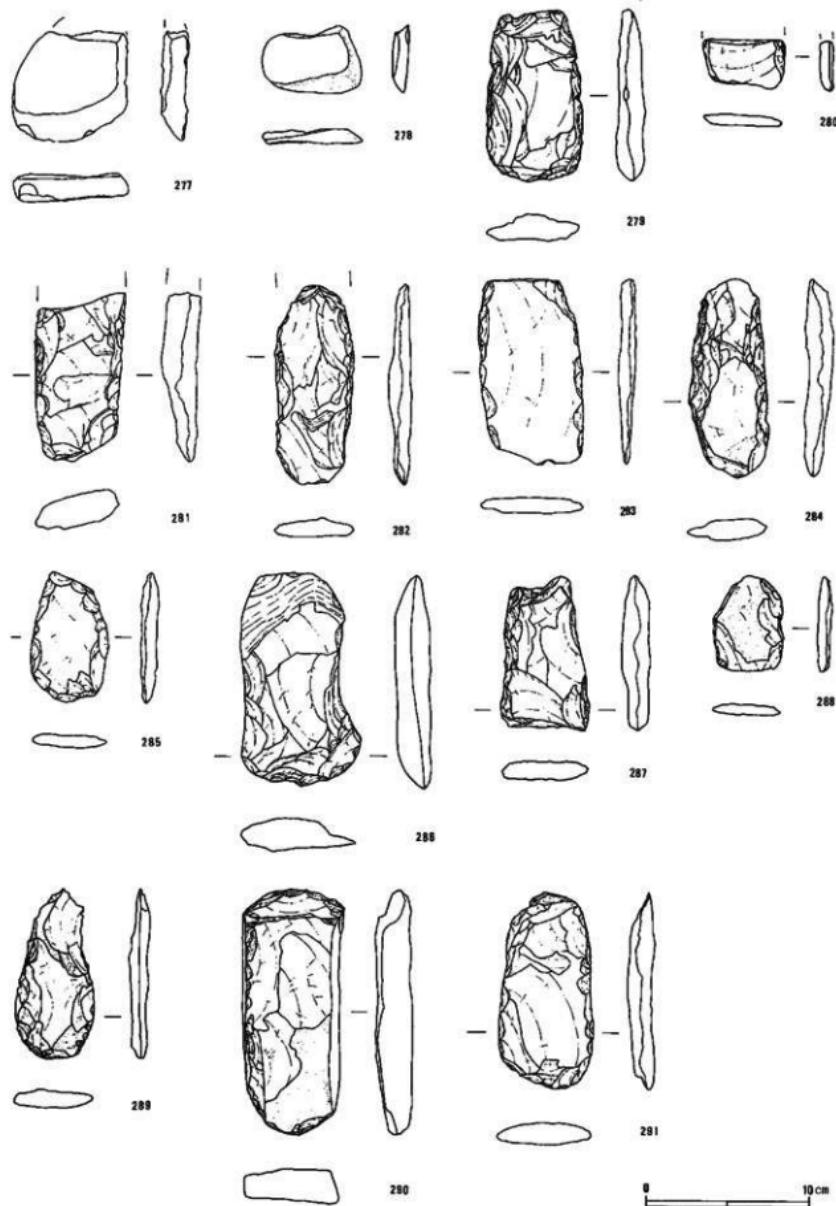
0 5cm  
(2 : 3)



第31図 石器 ②



第32図 石器 ③



第33圖 石器（打斧）

0 10 CM  
(1 : 3)



第34図 石器・土偶・土製品・鐵製品

## 第4章 下西畠遺跡の調査（98年度）

### 第1節 環 境

本年度は97年度調査区のさらに南側を調査した。遺跡の環境については前章で触れたとおりである。

### 第2節 住居跡

第4号住居跡（第35・42・43図）本住居跡はD・C-35・36グリッドに位置する。やや不整形な隅丸方形を呈し、標高は390.60m前後、規模は長径6.45m、短径5.50m、深さ0.20m前後を測る。住居跡中央、やや東よりに地床炉と思われる焼土跡を確認したが、散在する程度であった。さらにこの焼土跡を含む床面は中央部から壁面向かって硬化面が施されている。硬化面は中央部ほど厚く、硬く、壁面側へいくほど薄く軟弱になりやがて消滅する。硬化面からも遺物の出土が見られた。柱穴は7基を確認した。いずれも直径0.30m前後の円形で、深さ0.20m前後を測る。東西に3本ずつ、2列に主柱穴が所在していたことが推測できる。また住居跡南東隅付近で貯蔵穴を確認した。長径1.10m、短径0.98m、深さ0.38mで、覆土に少量の土器片を含んでいた。遺物から古墳時代前末期の住居跡と考えられ、北東側に接する方形周溝墓群と同時期の遺構と思われる。

また、本住居跡覆土中から2片の青磁片とかわらけ片が出土した。いずれも13世紀中のものと思われる。本住居跡と中世の遺構が重複しているものと思い、精査を繰り返し試みたが中世の遺構は確認できなかった。

第5号住居跡（第36・43図）本住居跡はC-33グリッドに位置する。形状は方形を呈する。標高391.00m付近で、規模は長径4.60m、短径4.25m、深さ0.20m前後を測る。住居跡周囲はカクランが著しく、とくに北側の壁は残存状況はあまり良好な状態とはいえず、削開が進んでおり、壁から床面までは深いところでも0.20m程度しか残っていないため、確認が難しかった。カマドは南北壁面中央部に付設されている。カマド内面は一段低く掘り込まれており、焼土塊が見られた。煙出しがやや東を向いている。西側壁面は焼土が集中していた。またカマド東側には貯蔵穴が所在する。覆土からは土器片が出土した。床面は住居跡中央部を中心に硬化面が施され、壁側へ行くに従って薄く軟弱になる。住居跡中央北よりでは不整形を呈する土坑が確認された。覆土中からは土器片の他に表面が平坦な礫が複数点見られ、それとともに器内面に格子状暗文や、底面に渦巻き状の暗文が施された杯片が土坑の壁面付近から数点出土した。さらに南東壁脇に所在するピット内からも盤状杯が出土しており、この遺物と土坑内出土遺物の年代は矛盾しないものと思われる。格子状の暗文をもつ杯は底部外面にヘラケズリが見られ、器高、底径等甲斐型杯と類似している。また、胎土も在地のものであると思われ、あるいは初現期の甲斐型杯の一型態なのかもしれない。おおよそ8世紀中頃に帰属する住居跡であると思われる。

第6号住居跡（第37・43～44図）本住居跡はB・C-35グリッドに位置する。方形を呈し、第1号竪穴状造構に重複して所在する。標高390.60m付近で、長径約4.00m、短径3.20m、深さ0.35m前後を測る。北東壁間にカマドを付設し、検出時には袖石等に用いたと思われる礫などが周囲に散在し、コーナー部分に焼土及び炭化物が厚く堆積していた。床面はしまっており、良好な状態であった。西側から東側にかけてのカマド脇の床面部分は緩やかに一段高くなっている。とくに硬化していた。遺物はカマド付近に集中していた。壺及び鉢、灰釉陶器の碗・段皿が見られる。壺は、基本的にはハケにより調整されるが、とくに内面はタテハケ・ヨコハケのものが見られ調整方法は一定ではない。器壁は厚く、口縁部の屈曲は定型化している。これらの出土遺物から、11世紀代の遺構であると推測できる。

第7号住居跡（第38図）本住居はA・B-32・33グリッドに所在する。方形を呈すると思われるが、住居跡の約半分が調査区外に延びている。また調査前に電柱が付設されていた箇所でもあるため、東側コーナー付近はカクランが著しかった。標高は390.85m付近で、長径5.82m、短径4.41m、深さ0.20m前後を測る。カマドは未調査区に所在するものと思われ、今回は調査することはできなかった。床面は軟弱でとくに中央より東側はカクランのためか乱れている。柱穴は2本が確認された。いずれも直径0.20m、深さ0.25m前後を測る。また北側

壁面沿いに溝が一条所在する。溝は西から東へ緩く傾斜しており、西側は壁面にぶつかって完結し、東側は土坑状の小さなピットにぶつかっている。遺物は図化できるようなものは出土しなかった。そのため、帰属年代は不明である。

第8号住居跡（第39・44図）本住居跡はB-34・35グリッドに所在する。形状は方形を呈する。標高390.60m付近に所在し、長径3.45m、短径2.92m、深さ0.35m前後を測る。カマドは南コーナーに位置しており、燃焼面から煙出し部にかけて焼土粒子及び炭化物が多量に出土した。煙出し部では住居跡プランの外側で3箇所で柱穴を確認した。またカマド付近にはカマドの部材と思われる人頭大の礫が複数散在しており、また袖石と思われる石も所在した。さらにカマド脇で貯蔵穴を確認した。長径0.9m、短径0.52m、深さ0.30mを測り、覆土には甕等の遺物を含む。床面はよくしまっており、非常に硬い。遺物は中央部を中心出土した。内外面をハケ調整する鉢やロクロ調整の杯、暗文のない内面黒色土器などが見られる。これらの帰属年代から本住居跡は10世紀後半であると思われる。

### 第3節 壁穴状遺構

第1号壁穴状遺構（第40・44図）本遺構はA・B-35・36グリッドに所在する。不整形の隅丸方形を呈するが、北側で第6号住居跡と重複しており、北壁を一部壊されている。標高は390.20m付近を測り、長径5.68m、深さ0.50m前後を測る。遺構の中央よりやや北コーナーよりに甕の胴部上半部分と焼土が確認された。甕は火を受けている。焼土の堆積は浅く、地床炉であるにしてもそれほど使用していないものと思われる。床面は非常に軟弱である。壁の立ち上がりは緩やかで、一般の壁穴住居跡の壁面とは明らかに異なる印象を受けた。柱穴や土坑などの付設施設も全く見られなかった。遺物は少なく、住居中央部で出土した甕の他は僅かであった。甕は台付甕で口縁部に刻み目をもつ。これらの出土遺物から本遺構の年代は古墳時代前期末で、北側の方形周溝墓群とほぼ同時期であると推測できる。

### 第4節 土坑

第8号土坑（第41・45図）本土坑はD-32グリッドに位置し、標高390.90m付近に所在する。形状は不整形で、長径1.80m、短径1.52m、深さ0.30mを測る。土坑掘削時以前より、巨礫が所在していたようでそれを取り込みながら営んでいる。壁面の立ち上がりはやや緩やかで、床面は平坦である。拳大から人頭大の礫を多数含んでおり、それに混在するように古墳時代前期末の土器片が出土した。いずれも覆土の上層から出土している。遺物は甕胴部、S字甕口縁部、高杯杯部がある。S字甕の口縁部は屈曲が定形化し、シャープさを欠くものである。これらの遺物から、本土坑の帰属年代は、周溝墓群と同時期のものであると推測できる。

第9号土坑（第41図）D-31・32グリッドに位置し、標高390.90m付近に所在する。不整形の楕円を呈し、長径1.30m、短径0.95m、最深で0.25mを測る。拳大から人頭大の礫が多数混入しており、それに混じって遺物も出土した。遺物は少なく、土器片は小さくて摩耗しているものがほとんどである。そのため図化することは困難であった。古墳時代前期末に位置づけられる。

### 第5節 溝

第4号溝（第41・45図）本遺構は調査区の最も南端に約18mにわたっており、標高は392.00m付近から389.40m付近に位置する。遺跡をのせる台地の南端で、傾斜が変換する地点に溝が所在する。立地状況から見て、本溝は降雨時などに北から南へ流れる水を排水するためのものと思われる。本溝はC-38グリッド付近から始まるが、その始まりはきわめて自然発生的で幅も広く非常に浅い。やがてV字状を呈しながら緩やかに下り、B-40グリッドの傾斜変換地点で急激に落ちる。本溝の覆土は始点では黒色土だが、下降するに従って砂礫の堆積が徐々に厚くなり、急激に下降する地点より低い地点では確認しただけでも砂礫の堆積が1m以上にもなる。こうした砂礫の中から、多数の摩耗した遺物が出土した。いずれも古墳時代前期末のもので、方形周溝墓、及

び4号住居跡で見られたものと同時期である。従って本遺構の帰属年代は古墳時代前期末に位置づけることができる。

## 第6節 遺構外出土遺物

本調査区では主に古墳時代及び平安時代の遺構が見られたが、遺構外からは多数の縄文時代前期末・中期初頭・後期の遺物が見られた。97年度の調査区でも、縄文時代前期末から中期初頭・前葉の遺構が確認されていることや、本遺跡の南西に所在する大木戸遺跡などでも縄文時代前期末の住居跡が確認されていることから、本遺跡付近にも当該時期の遺構が所在する可能性は極めて高い。

このうち、第45図63～83は諸磯a・b式期のものである。いずれも小片で僅かな情報しか含まないが、円形竹管文を施すもの(79)、結節縄文を施すもの(81・82)等が見られる。また84～88は諸磯c式期に位置づけられるものと思われる。85・86はボタン状貼付文が施されるものである。89は十三菩提式期併行期のものであろう。

また、115から128は小型化した皿である。また、130は青磁の破片である。いずれも中世に位置づけられるものである。

石器及び石製品は数少ない。このうち139から178は黒曜石を石材とした石器である。いずれも縄文時代に位置づけられるものであろう。また183は水晶製の碁石状の石製品である。大木戸遺跡の平安時代の遺構では本例と同様に水晶製のもののほか、黒色の礫によるものも見られた。碁石の起源を考える上で、非常に興味深い事例である。

古墳時代土器観察表

探査 No	出土地点	遺物 No	種類	器種	法式(cm)			内 面	色 調	胎 土	保存率	その他の 性質
					口径	高さ	底径					
42	4 号 住	1	土器器	壺	(7.2)	(8.2)	(5.4)	外面ハケ調整 車輪落し 内面ナガのち指痕 有	明赤褐色	石英金雲母赤粒子	45%	
42	4 号 住	2	土器器	壺	(16.0)	(4.0)	—	外面ハケ調整のちミガキ—擦摩痕 内面ミガキ	暗茶褐色	石英 金雲母 角閃石	10%	
42	4 号 住	3	土器器	壺	—	—	(5.1)	外面ナガ 内面ハケ調整のちミガキ	褐色	石英 金雲母 角閃石	25%	
42	4 号 住	4	土器器	壺	—	(3.3)	(7.5)	外面ミガキ 内面ハケ調整	灰黄褐色	石英 金雲母	30%	
42	4 号 住	5	土器器	台付 壺	(17.0)	(14.5)	—	外面口縁ヨコハケ削痕タテハケのちヘラナゲ 内面ハケ調整のち指痕	茶褐色	石英 金雲母	20%	
42	4 号 住	6	土器器	台付 壺	(19.6)	(6.5)	—	内外面ハケ調整 四面指痕あり	淡茶褐色	金雲母	20%	
42	4 号 住	7	土器器	台付 壺	(15.2)	(1.8)	—	外面ヨコナガのヘラナゲ 内面ナガ	外周褐色 内面褐色	石英 金雲母 角閃石	45%	
42	4 号 住	8	土器器	台付 壺	(14.2)	(3.1)	—	外面タテハケ口削痕剥みあり 内面ヨコハケ	黄褐色	角閃石 金雲母	15%	
42	4 号 住	9	土器器	台付 壺	(20.0)	(3.4)	—	外面タテハケ口削痕剥みあり 内面ヨコハケ	淡黄褐色	角閃石 金雲母	破片	
42	4 号 住	10	土器器	S字 壺	(16.2)	(2.0)	—	内外面ヨコナガ	暗赤褐色	石英 金雲母 角閃石	破片	
42	4 号 住	11	土器器	S字 壺	(15.2)	(2.3)	—	内外面ヨコナガ	暗茶褐色	石英 金雲母	破片	
42	4 号 住	12	土器器	台付 壺	—	—	(3.0)	外面タテハケ 内面ヨコナガ	褐色	石英 金雲母	40%	
42	4 号 住	13	土器器	台付 壺	—	—	(3.5)	内外面ナガ	茶褐色	石英 金雲母 角閃石	10%	
42	4 号 住	14	土器器	台付 壺	—	(6.1)	(9.2)	外面ハケ調整 内面ナガのち指痕	茶褐色	石英 金雲母 角閃石	15%	
42	4 号 住	15	土器器	台付 壺	—	(2.1)	(4.0)	外面ヘラナゲ 内面ナガのち指痕	赤褐褐色	石英 金雲母 角閃石	15%	
42	4 号 住	16	土器器	台付 壺	—	(6.3)	(9.2)	外面ハケ調整 内面ナガのち指痕	に赤い 茶褐色	石英 金雲母 角閃石	20%	
42	4 号 住	17	土器器	台付 壺	—	(2.3)	—	外面ハケ調整 内面ナガのち指痕	暗褐色	石英 金雲母	10%	
42	4 号 住	18	土器器	台付 壺	—	(3.7)	—	外面タテハケ 内面ヘラナゲ	に赤い 茶褐色	石英 金雲母 角閃石	破片	
42	4 号 住	19	土器器	高杯	—	(2.8)	—	外面ミガキ 内面ナガ	褐色	石英 金雲母 角閃石	40%	
42	4 号 住	20	土器器	台付 壺	—	(3.2)	—	内外面ナガ	褐色	石英 金雲母 角閃石	破片	
42	4 号 住	21	土器器	小型 瓶	(9.0)	5.7	—	外面ヨコナガ 内面ナガ	暗赤褐色	石英 金雲母 角閃石	15%	
42	4 号 住	22	土器器	瓶	(8.4)	(1.7)	—	内外面ミガキのち赤色剥離	赤褐色	石英 金雲母	破片	
42	4 号 住	23	土器器	小型丸底瓶	9.4	4.1	4.2	外面ヨコナガ 内面ナガ	淡黄褐色	金雲母 角閃石	100%	内面に輕微痕 あり
42	4 号 住	24	土器器	瓶	(12.5)	(4.5)	—	内外面ミガキ	暗茶褐色	石英 金雲母	60%	
43	4 号 住	25	土器器	瓶	(20.8)	(5.6)	—	外面口縁基ナガ削痕ミガキ 内面ハケ調整	暗褐色	石英 金雲母	30%	
43	4 号 住	26	土器器	小型丸底瓶	—	(2.4)	—	外面ナガ(擦痕) 内面ミガキ	褐色	金雲母 砂糖	40%	
43	4 号 住	27	土器器	瓶	—	(2.2)	—	内外面ナガ	褐色	石英 金雲母 角閃石	破片	
43	4 号 住	28	土器器	瓶	(18.0)	(5.0)	—	外面ナガ(擦純) 内面ミガキ	黄茶褐色	石英 金雲母 沙糖	30%	
43	4 号 住	29	土器器	高杯	—	(3.3)	—	外面ミガキ 内面ナガ	黄褐色	石英 金雲母	25%	
43	4 号 住	30	土器器	高杯	—	(5.1)	(11.0)	外面ミガキ 内面ナガのち指痕	褐色	石英 金雲母 角閃石	20%	
43	4 号 住	31	土器器	高杯	—	—	—	外面ミガキ 内面ナガのち指痕	赤褐色	石英 金雲母	破片	
43	4 号 住	32	土器器	S字 壺	—	—	—	外面ハケ 内面ナガのち指痕	茶褐色	石英 金雲母	破片	
43	4 号 住	33	土器器	S字 壺	—	—	—	外面ハケ 内面ナガのち指痕	茶褐色	石英 金雲母	破片	
43	4 号 住	34	土器器	S字 壺	—	—	—	外面ハケ 内面ナガのち指痕	黄茶褐色	石英 金雲母	破片	
43	4 号 住	35	土器器	S字 壺	—	—	—	外面ハケ 内面ナガのち指痕	茶褐色	石英 金雲母	破片	
44	1号型六	54	土器器	瓶	—	—	—	内面ミガキのち赤色剥離	赤褐色	石英 金雲母	破片	
44	1号型五	55	土器器	壺	—	(7.2)	—	外面ケズリ 内面ハケのちヘラナゲ	明赤褐色	石英 金雲母	破片	
44	1号型五	56	土器器	台付 壺	(11.2)	(2.3)	—	外面ハケ調整 内面ナガ 口部剥みあり	褐色	角閃石 金雲母	50%	
44	1号型五	57	土器器	壺	(13.0)	(4.1)	—	内外面ハケ調整	赤褐色	金雲母 砂糖	40%	
44	1号型	58	土器器	壺	(17.6)	(2.0)	—	外面ハケのちミガキ ボタン状點附れあり	に赤い 茶褐色	石英 金雲母	破片	

古墳時代土器観察表

件番 No	出土地点 No	遺物 No	種別	器種	法量 (cm)			調 査	色 質	施 土	残存率	その他の 事
					口径	器高	底径					
45 2 号 墓 59	土器群	豆	—	(6.1)	—	外縁ヘナナゲ 内面ナゲ	黄茶褐色	石英 金雲母 角閃石	破片			
45 2 号 墓 60	土器群	S 字 壺	(22.0)	(13.5)	—	外縁ヨコナゲ	黄褐色	石英 金雲母 珍種	50%			
45 2 号 墓 61	土器群	高 釜	(14.5)	(2.3)	—	内縁ミガキ	赤褐色	石英 金雲母	10%			
45 2 号 墓 62	土器群	豆	(7.45)	(8.5) (5.47)	—	外縁ハケ調整 内面ヨコナゲ	黄褐色	石英 角閃石 金雲母	20%			
46 道 墓 外 101	土器群	豆	(18.5)	(3.3)	—	内縁ミガキのち赤色施影	赤褐色	金雲母 角閃石	破片			
46 道 墓 外 102	土器群	豆	(8.8)	(2.2)	—	外縁ハケ 内面ナゲのち作製痕	黄茶褐色	石英 金雲母	10%			
46 道 墓 外 103	土器群	S 字 壺	(16.6)	(1.7)	—	外縁ヨコナゲ 内面ハケ調整のちナゲ	黄褐色	石英 金雲母	10%			
46 道 墓 外 104	土器群	S 字 壺	(18.0)	(2.0)	—	内縁ヨコナゲ	黄褐色	金雲母 角閃石	10%			
46 道 墓 外 105	土器群	S 字 壺	(13.0)	(1.6)	—	内縁ヨコナゲ	黄褐色	金雲母	10%			
46 道 墓 外 106	土器群	S 字 壺	(15.0)	(1.9)	—	内縁ヨコナゲ	褐色	石英 金雲母	10%			
46 道 墓 外 107	土器群	豆	(11.5)	(2.7)	—	外縁ハケ 内面ナゲのち作製痕	黄褐色	石英 金雲母 角閃石	破片			
46 道 墓 外 108	土器群	豆	—	(7.7)	—	外縁ハケ 内面ミガキ	黄褐色	石英 金雲母	10%			
46 道 墓 外 109	土器群	豆	—	(3.0)	(1.0)	内縁ハケ調整 内面指痕あり	褐色	石英 金雲母 角閃石	30%			
46 道 墓 外 110	土器群	豆	(9.2)	(3.8)	—	内縁ミガキ	明黄褐色	石英 金雲母 角閃石	20%			
46 道 墓 外 111	土器群	高 釜	—	—	(1.9)	外縁ヘナナゲのちミガキ 内面ヨコナゲ	褐赤褐色	金雲母	10%			

奈良・平安時代土器観察表

件番 No	出土地点 No	遺物 No	種別	器種	法量 (cm)			調 査	色 質	施 土	残存率	その他の 事
					口径	器高	底径					
43 5 号 住 36	土器群	豆	—	—	—	—	—	内縁ナゲ	赤褐色	金雲母	破片	
43 5 号 住 37	土器群	坏	11.2	4.4	8.6	ロクロ整形 外縁ヘナナゲ密 成部ヘラケメジリ	赤褐色	角閃石	100%			
43 5 号 住 38	土器群	坏	(13.0)	(3.2)	—	ロクロ整形 外縁ヘナナゲ密 内面格子状透文	褐色	角閃石	破片			
43 5 号 住 39	土器群	坏	(9.2)	(9.2)	(9.2)	外縁ヘナナゲ密 内面格子状透文	褐色	角閃石	破片			
43 5 号 住 40	土器群	坏	—	(1.7)	(7.6)	外縁計畫なヘナナゲ密 内面渋巻き状透文	外純褐色	石英 金雲母	25%			
43 5 号 住 41	土器群	坏	—	(0.8)	(10.2)	ロクロ整形 外縁渋巻なヘナナゲ密 内面渋巻き状透文	褐色	石英 金雲母	25%			
43 6 号 住 42	土器群	壺	(23.6)	(15.9)	—	外縁ナゲハケ 内面ヨコハケの一部ヘナナゲ ユニゼナ	褐色	石英 金雲母 角閃石	30%			
43 6 号 住 43	土器群	鉢	(29.5)	(4.5)	—	外縁ナゲ密部ヘナナゲ 密部ヘナナゲ調整のらへナナゲ 内面ヨコハケ	外茶褐色	石英 金雲母 角閃石	10%			
43 6 号 住 44	土器群	壺	(26.0)	(9.7)	—	外縁ナゲハケ一部締結一部ヘナナゲ 内面ヨコハケ	茶褐色	石英 金雲母	20%			
44 6 号 住 45	土器群	壺	(29.0)	(8.5)	—	内面ヨコハケ	紫茶褐色	石英 金雲母	20%			
44 6 号 住 46	土器群	壺	—	(3.0)	(5.4)	外縁ナゲハケ 成部付近一部ケズリ 内面ヨコハケ 施跡有無	明褐色	石英 金雲母 角閃石	10%			
44 6 号 住 47	灰陶器	瓶	(12.2)	(7.2)	(5.6)	ロクロ成形 つけ高台 灰陶抜け掛け	白色	白色砂粒子(塵)	35%			
44 6 号 住 48	灰陶器	段 盆	(11.2)	(2.3)	(6.4)	ロクロ成形 つけ高台 灰陶抜け掛け	白色	石英 白色砂粒子	20%			
44 8 号 住 49	土器群	鉢	(32.0)	(3.0)	—	外縁ヨコハケナナゲ 内面ヨコハケ	外純褐色 内面茶褐色	石英 金雲母	10%			
44 8 号 住 50	土器群	壺	(11.4)	(1.6)	—	ロクロ成形	明褐色	石英 金雲母	10%			
44 8 号 住 51	土器群	内 里 坯	(11.4)	(4.4)	(3.3)	ロクロ成形 底部余切り真 内面黑色処理	外に黒い褐色 内面茶褐色	石英 金雲母	70%			
44 8 号 住 52	土器群	坏	—	(5.4)	(2.8)	ロクロ成形 底部余切り真	外純褐色 内褐色	石英 金雲母	20%			
44 8 号 住 53	灰陶器	瓶	(18.4)	(5.1)	—	ロクロ成形 灰陶抜け掛け	白色	白色 黑色砂粒子	15%			
46 道 墓 外 112	灰陶器	瓶	—	(3.4)	—	ロクロ成形 灰陶抜け掛け	白色	石英 砂粒子	15%			
46 道 墓 外 113	土器群	华	—	(0.8)	(5.5)	底部余切り度	淡黄色	石英	10%			
46 道 墓 外 114	土器群	坏	—	—	—	ロクロ成形	褐色		破片	割合「大」あ り		

## 石器・石製品観察表

擇因 No	出土地点	グリッド	番号	器種	法量				石材	残存率	その他	
					長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)				
47	4号住	C-35	139	石 鋸	(1.5)	1.3	0.4	0.60	黒曜石	80%	2脚欠損	
47	4号住	C-35	140	石 鋸	(2.2)	(1.3)	0.4	0.54	黒曜石	75%	2脚欠損	
47	4号住	C-35	141	石 鋸	2.4	1.3	0.5	0.64	黒曜石	98%		
47	遺構外	B-35	142	石 鋸	(1.7)	(1.3)	0.5	0.61	黒曜石	90%	1脚欠損	
47	6号住	B-36	143	石 鋸	(1.9)	(1.2)	0.6	1.05	黒曜石	90%	2脚欠損	
47	表 探	—	144	石 鋸	(1.1)	(1.0)	0.3	0.23	黒曜石	50%	下半部欠損	
47	遺構外	B-36	145	石 鋸	1.6	(1.1)	0.5	0.52	黒曜石	80%	1脚欠損	
47	遺構外	B-36	146	石 鋸	(1.5)	(1.4)	0.4	0.50	黒曜石	80%	1脚・先端部欠損	
47	遺構外	A-35	147	石 鋸	1.6	1.6	0.5	0.79	黒曜石	100%		
47	遺構外	D-35	148	石 鋸	2.1	1.6	0.8	1.56	黒曜石	100%		
47	遺構外	B-35	149	石 鋸	(1.8)	(1.3)	0.5	0.86	黒曜石	80%	2脚欠損	
47	表 探	—	150	石 鋸	1.9	(1.2)	0.5	0.78	黒曜石	75%	1脚欠損	
47	表 探	—	151	石 鋸	(2.1)	(1.3)	0.4	0.84	黒曜石	50%	1脚欠損	
47	表 探	—	152	石 鋸	(2.2)	(1.5)	0.5	1.03	黒曜石	80%	下半部欠損	
47	表 探	—	153	石 鋸	(2.5)	(2.3)	0.8	2.35	黒曜石	75%	1脚欠損	
47	表 探	—	154	石 鋸	2.3	(2.0)	1.1	3.74	黒曜石	80%	刃部一部欠損	
47	遺構外	B-37	155	石 鋸	(1.3)	(2.0)	0.8	1.16	黒曜石	80%	つまみ部・刃部欠損	
47	表 探	—	156	未 製 品	1.7	1.6	0.4	0.47	黒曜石	—		
47	表 探	—	157	未 製 品	1.5	1.8	0.4	0.82	黒曜石	—		
48	表 探	—	158	スクレーパー	1.7	1.5	0.5	1.05	黒曜石	—		
48	遺構外	A-36	159	スクレーパー	2.3	1.2	0.7	1.15	黒曜石	—		
48	表 探	—	160	スクレーパー	2.9	1.7	0.6	1.12	黒曜石	—		
48	表 探	—	161	スクレーパー	2.6	1.9	0.8	3.35	黒曜石	—		
48	4号住	D-35	162	ビエス・エスキュー	2.2	1.4	1.0	2.45	黒曜石	—		
48	表 探	—	163	ビエス・エスキュー	2.3	0.9	0.7	1.31	黒曜石	—		
48	5号住	C-33	164	加工痕	2.5	2.6	0.6	2.50	黒曜石	—		
48	6号住	B-35	165	加工痕	2.0	1.8	0.5	1.26	黒曜石	—		
48	7号住	B-32	166	加工痕	2.1	1.8	0.7	2.68	黒曜石	—		
48	2号溝	B-36	167	加工痕	1.8	1.9	0.6	1.67	黒曜石	—		
48	遺構外	B-38	168	加工痕	2.0	1.6	0.5	1.31	黒曜石	—		
48	遺構外	B-35	169	加工痕	1.6	1.3	0.5	0.60	黒曜石	—		
48	遺構外	B-35	170	加工痕	1.8	2.0	1.0	2.35	黒曜石	—		
48	4号住	C-35	171	U	F	2.1	1.7	0.4	0.87	黒曜石	—	
48	4号住	C-35	172	U	F	2.8	1.6	0.6	2.33	黒曜石	—	
48	4号住	C-35	173	U	F	2.6	1.6	0.5	1.52	黒曜石	—	
48	表 探	—	174	U	F	2.0	2.3	0.5	1.76	黒曜石	—	
48	表 探	—	175	U	F	2.6	1.8	0.9	1.81	黒曜石	—	
48	表 探	—	176	U	F	2.9	1.6	0.6	1.61	黒曜石	—	
48	遺構外	D-36	177	U	F	(2.3)	1.2	0.5	0.88	黒曜石	—	
48	表 探	—	178	U	F	2.6	1.1	0.7	0.90	黒曜石	—	

石器・石製品観察表

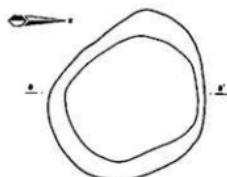
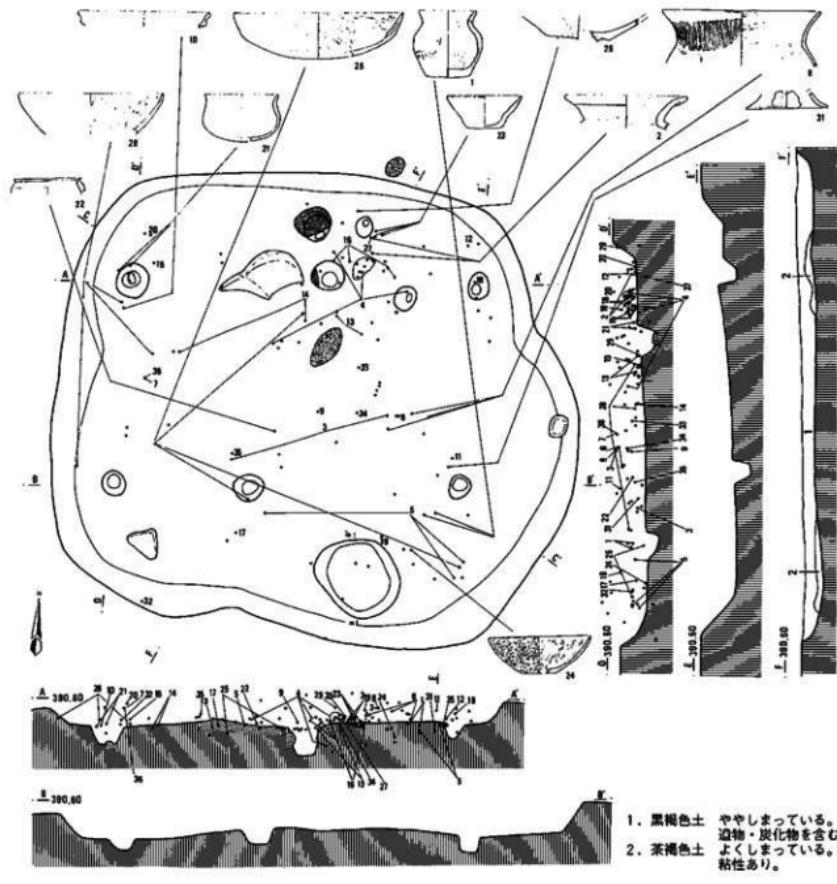
擇図 No	出土地点	グリッド	番号	器種	法量				石材	残存率	その他
					長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
48	5号住	—	180	打斧	10.9	4.4	1.6	84.39	粘板岩	100%	
48	4号住	D-35	181	磨石	16.8	6.6	4.5	621.00	花崗岩	95%	一部欠損
49	5号住	C-33	182	磨石	(12.6)	(8.1)	6.0	738.00	砂岩	50%	刃部欠損
49	5号住	—	183	磨石(?)	1.7	1.3	0.6	1.95	石英	100%	
49	—	—	184	砥石	(5.2)	(3.3)	0.7	22.36	ホルンフェルス	50%	一部欠損
49	2号土	C-35	185	砥石	(4.7)	(2.8)	1.3	20.19	ホルンフェルス	50%	一部欠損

鉄製品観察表

擇図 No	出土地点	グリッド	番号	器種	法量				その他
					長さ	幅	厚さ	重量	
49	4号住	C-35	186	キセル	(5.1)	(0.6)	0.1	14.49	
49	4号住	C-36	187	キセル	(3.3)	(1.1)	0.1	2.71	
49	8号住	B-34	188	刀子	(5.8)	(1.1)	0.4	6.77	

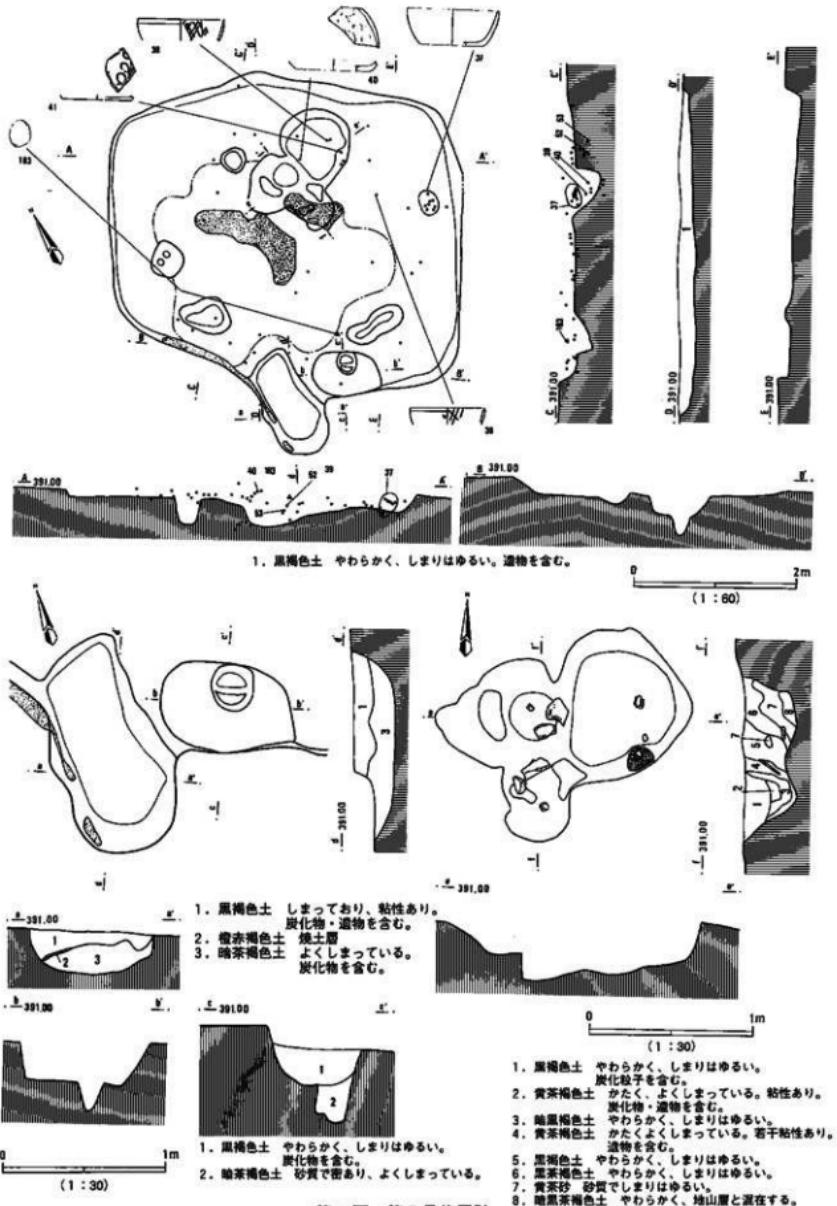
銭貨観察表

擇図 No	出土地点	グリッド	番号	銭名	初鑄年	法量				その他
						直径	孔径	最大厚	重量	
49	8号住	B-34	189	大觀通寶	1107	2.44	0.6×0.6	0.17	3.25	

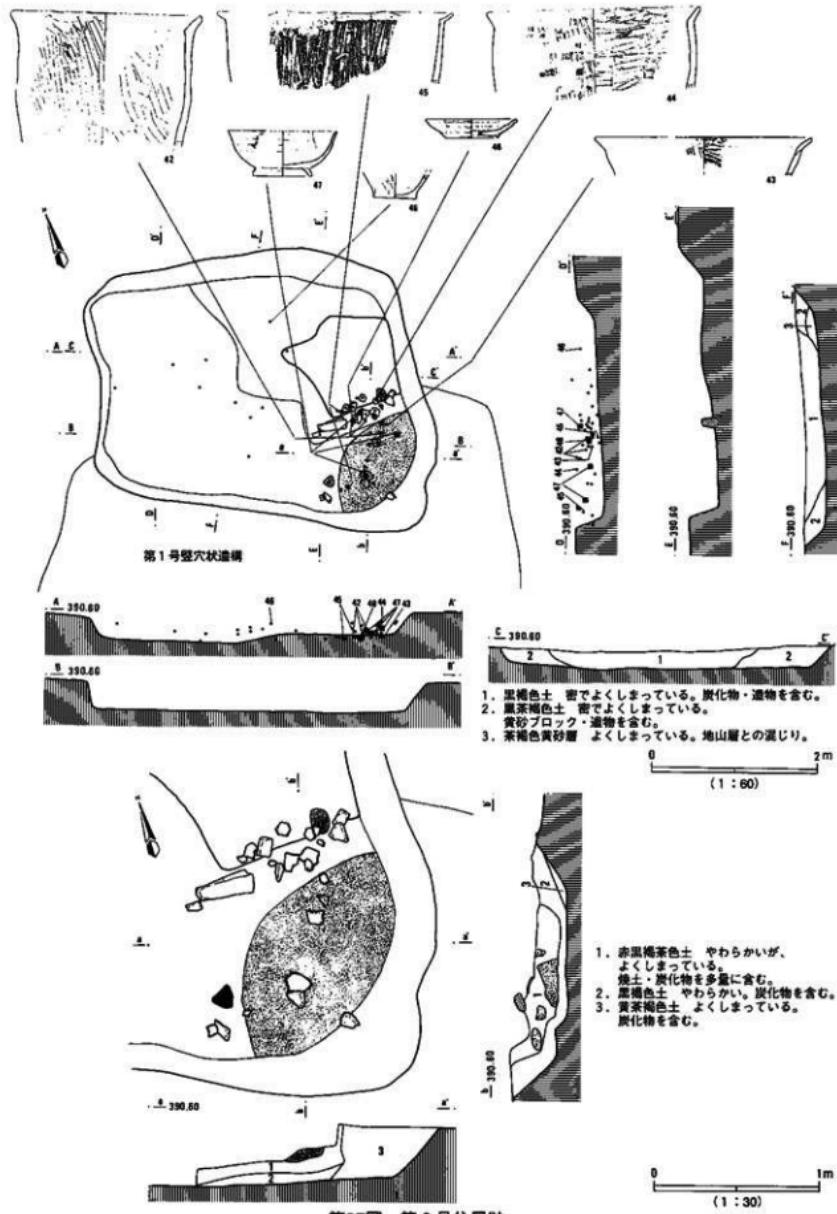


第35図 第4号住居跡

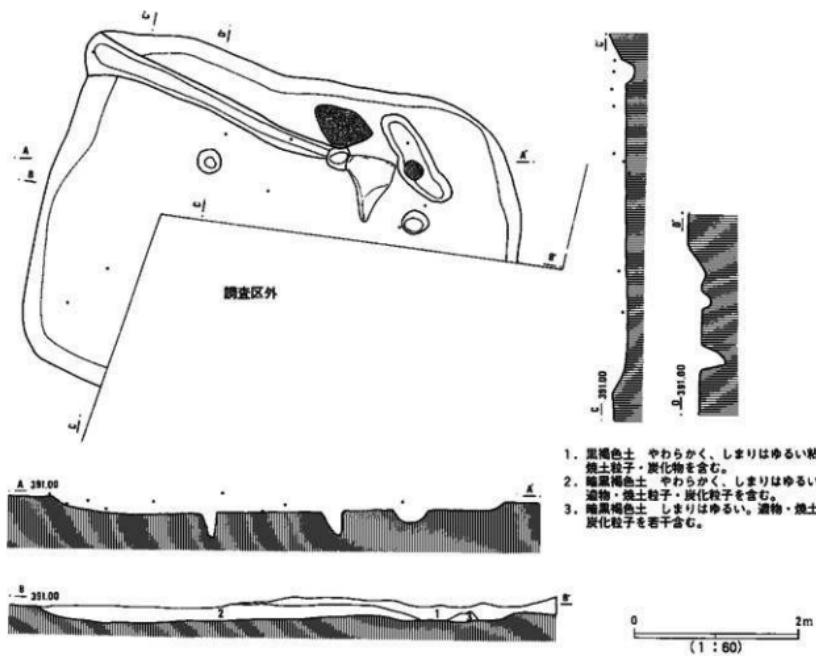
1. 黒褐色土 やわらかくしまりはゆるい。  
炭化物を含む。  
2. 茶褐色土 やわらかい。黄砂ブロック混入。  
3. 暗茶褐色土 よくしまっており、粘性が強い。  
炭化物を微量含む。



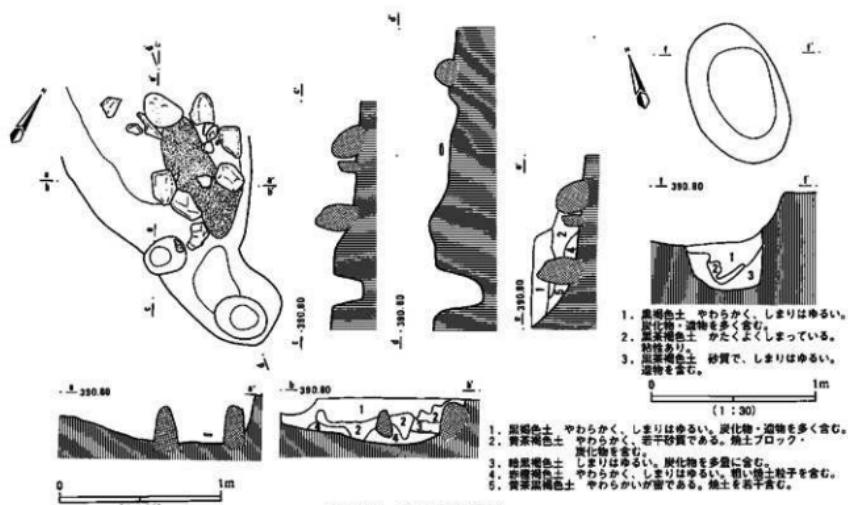
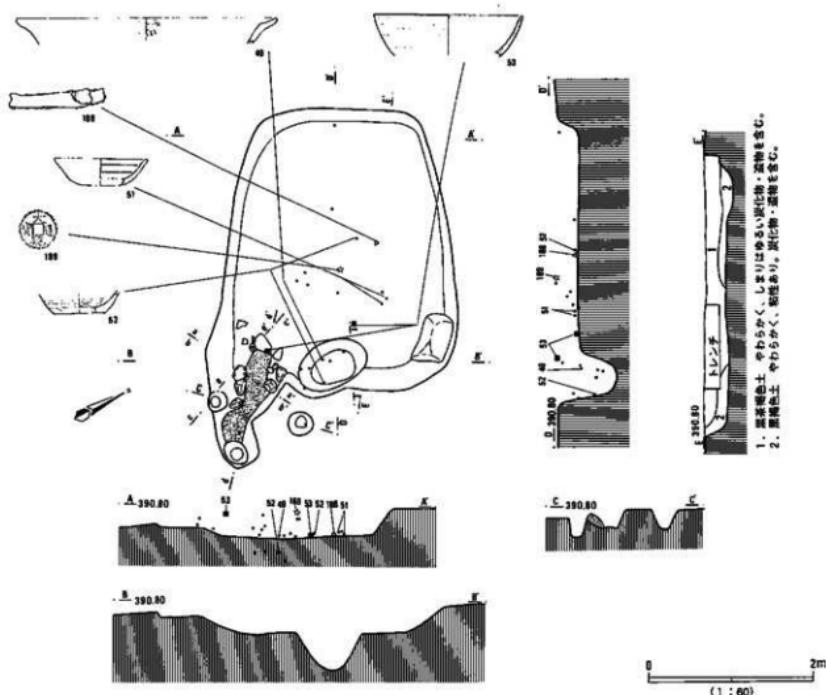
第36図 第5号住居跡



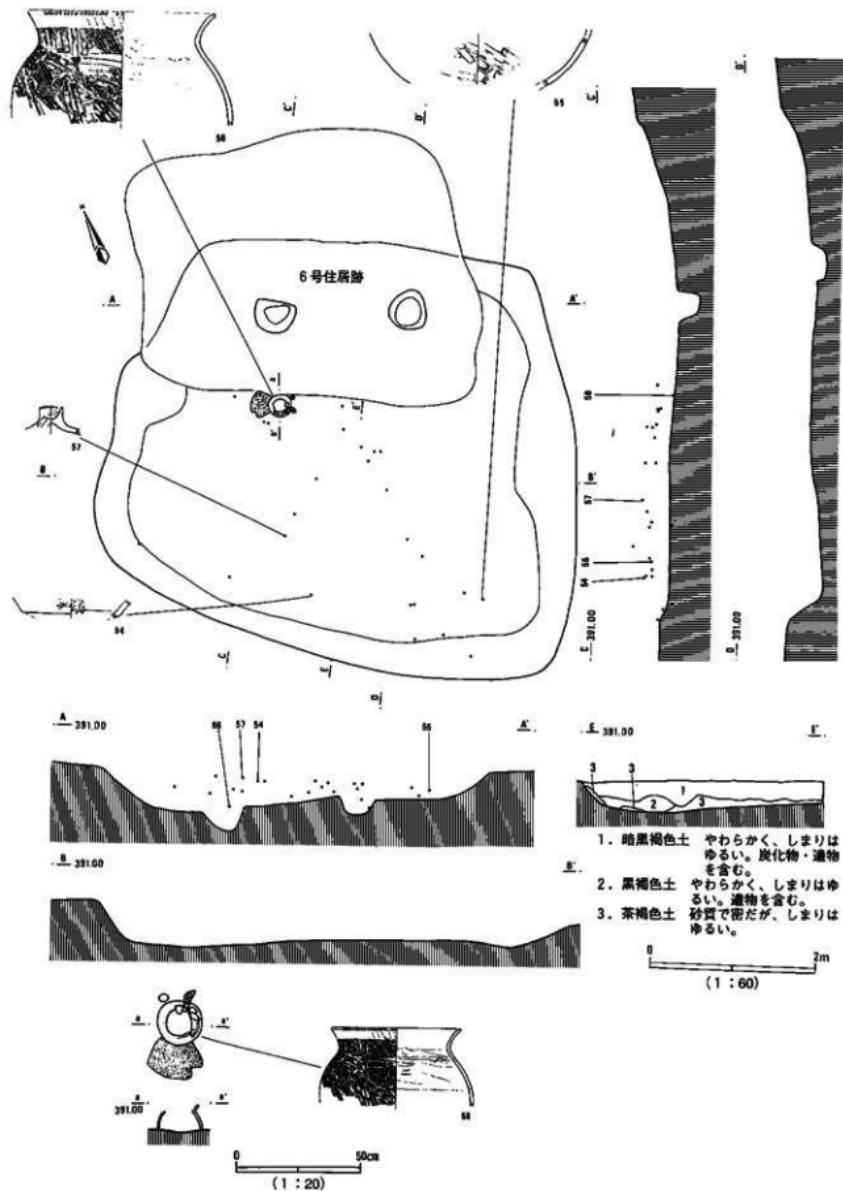
第37図 第6号住居跡



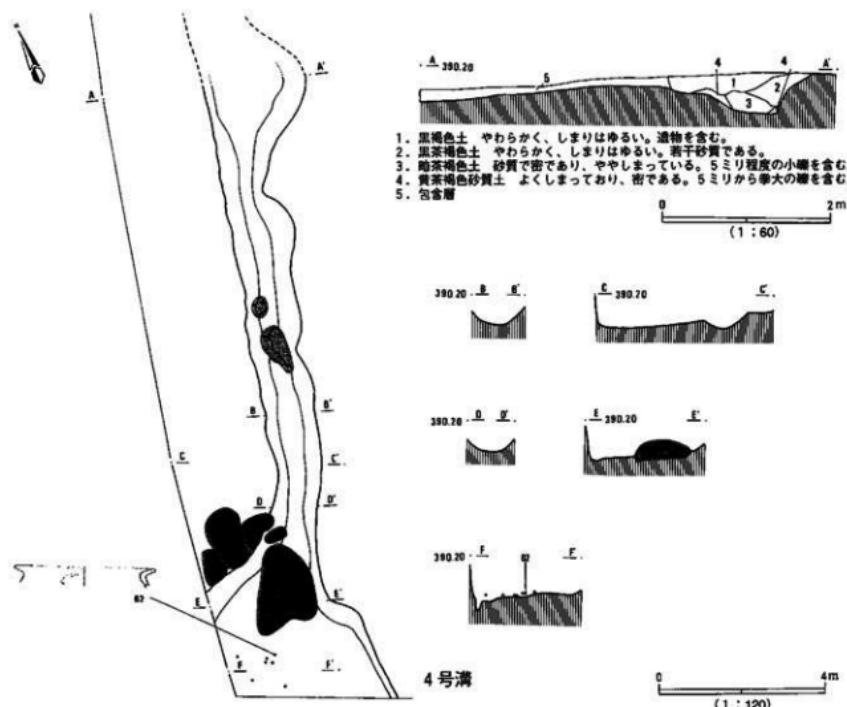
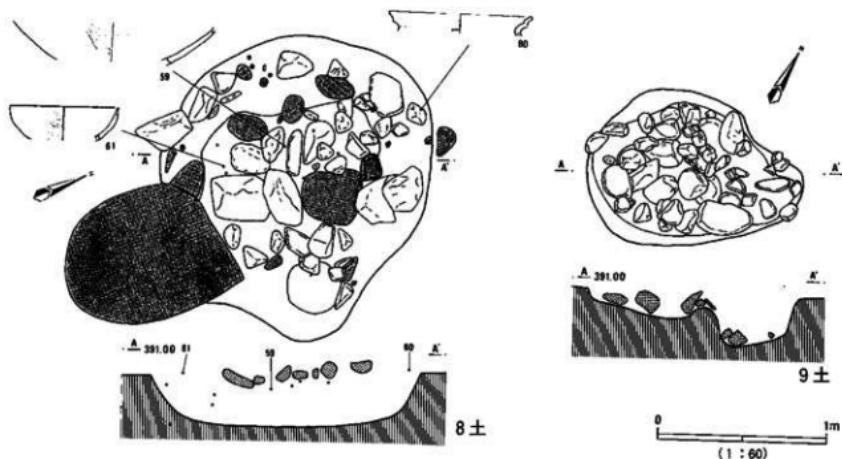
第38図 第7号住居跡



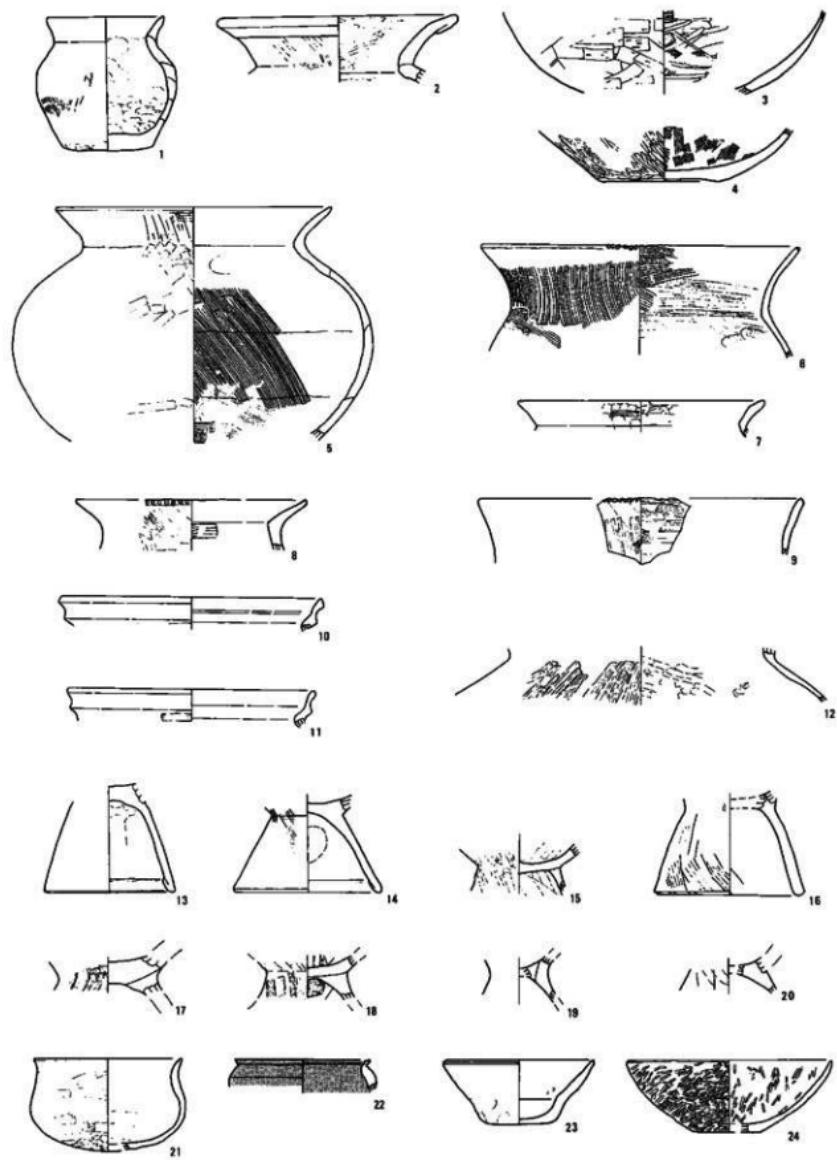
第39図 第8号住居跡



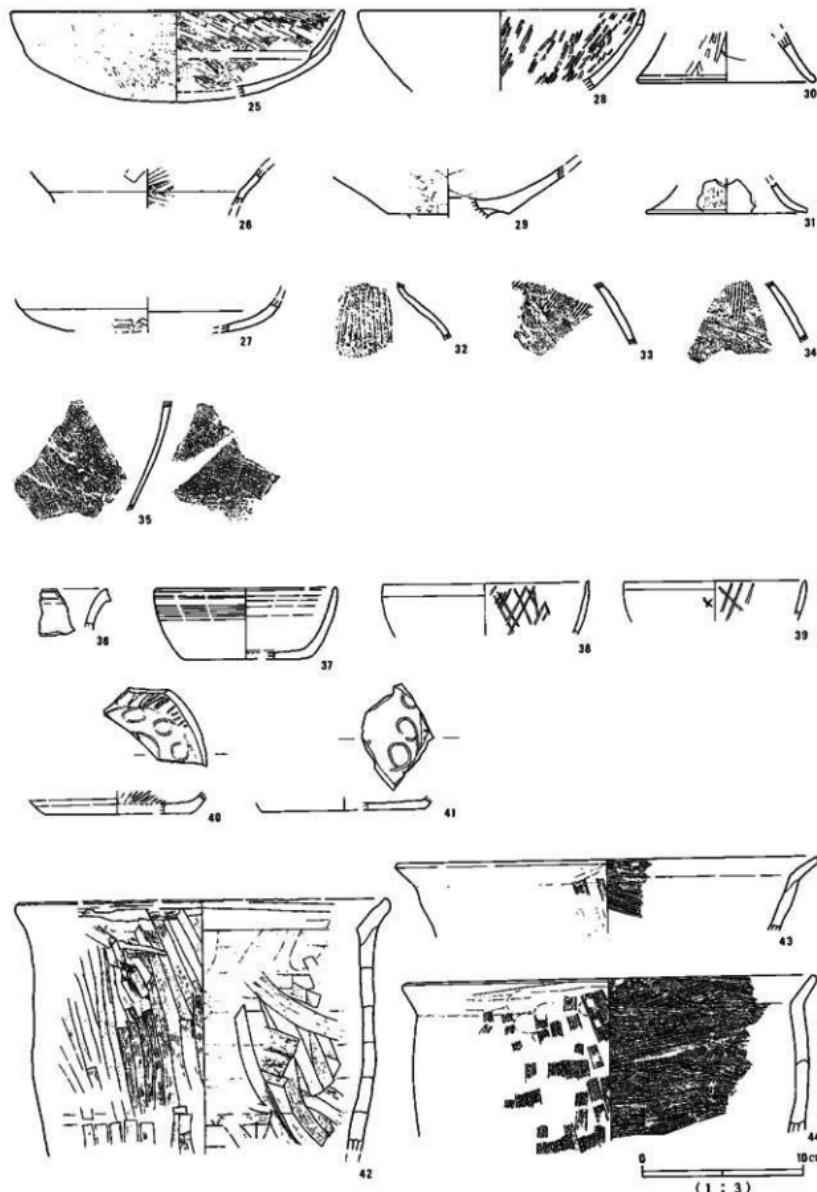
第40図 第1号竪穴状遺構



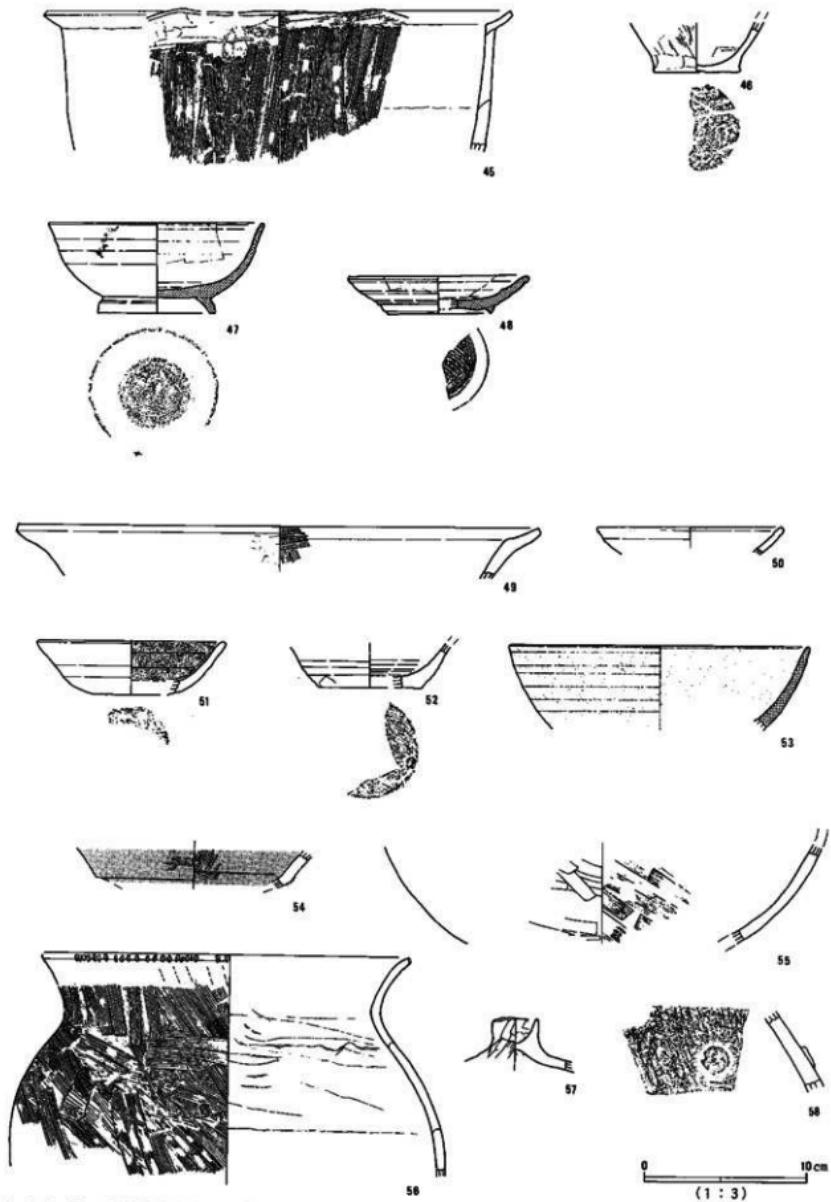
第41図 第8・9土坑・4号溝



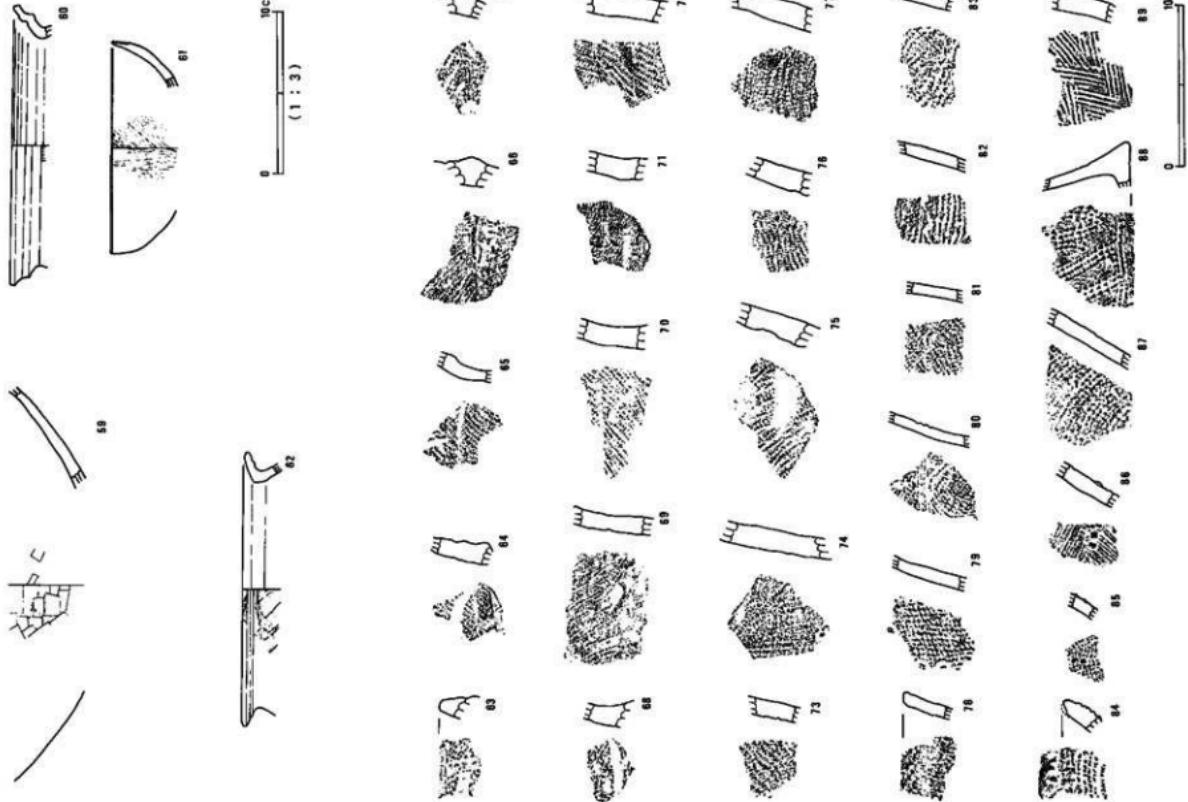
第42図 第4号住居跡出土遺物



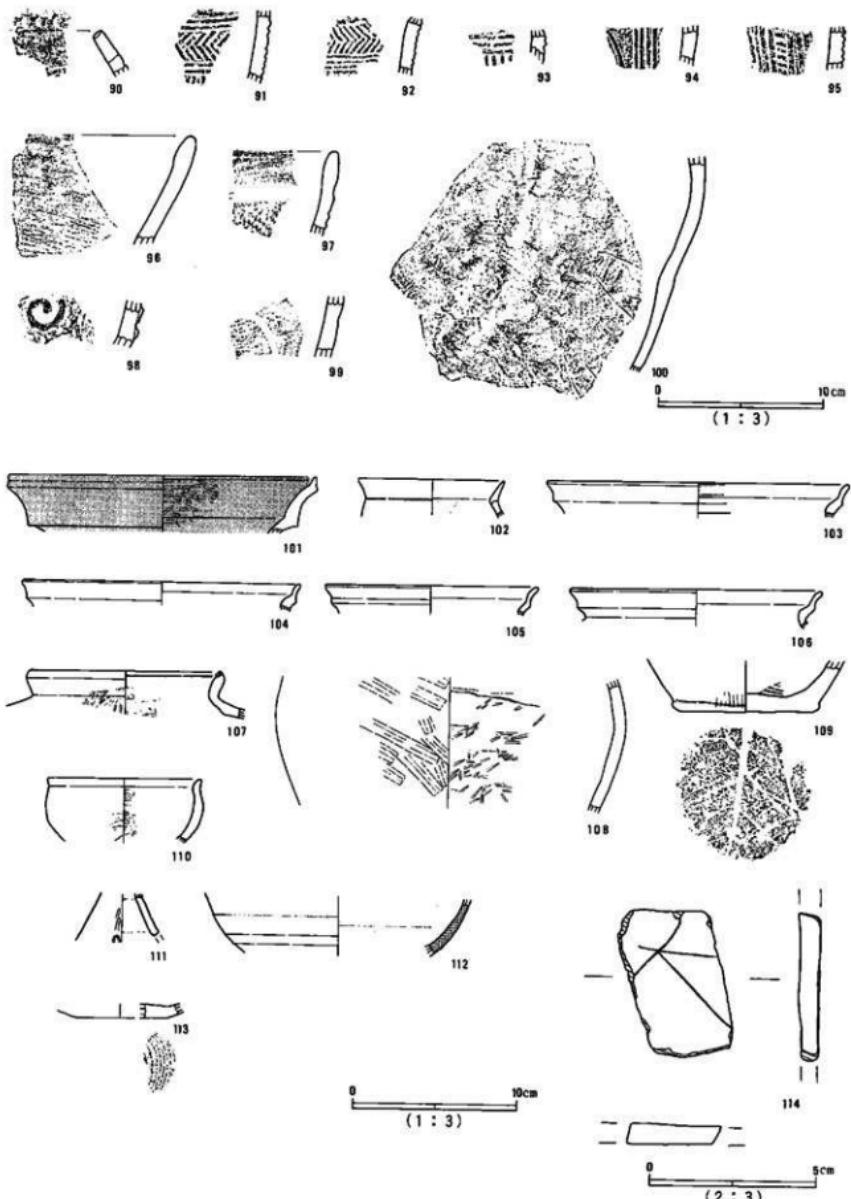
第43図 第4号住居跡(25~35)・第5号住居跡(36~41)・第6号住居跡(42~44)出土遺物



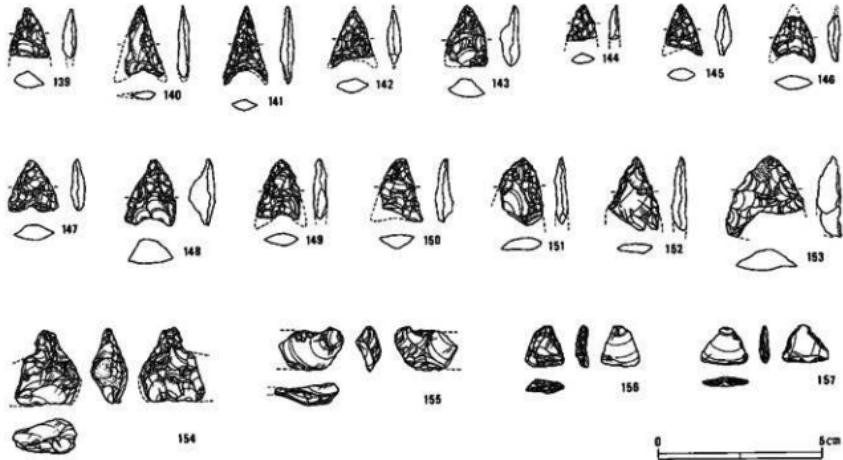
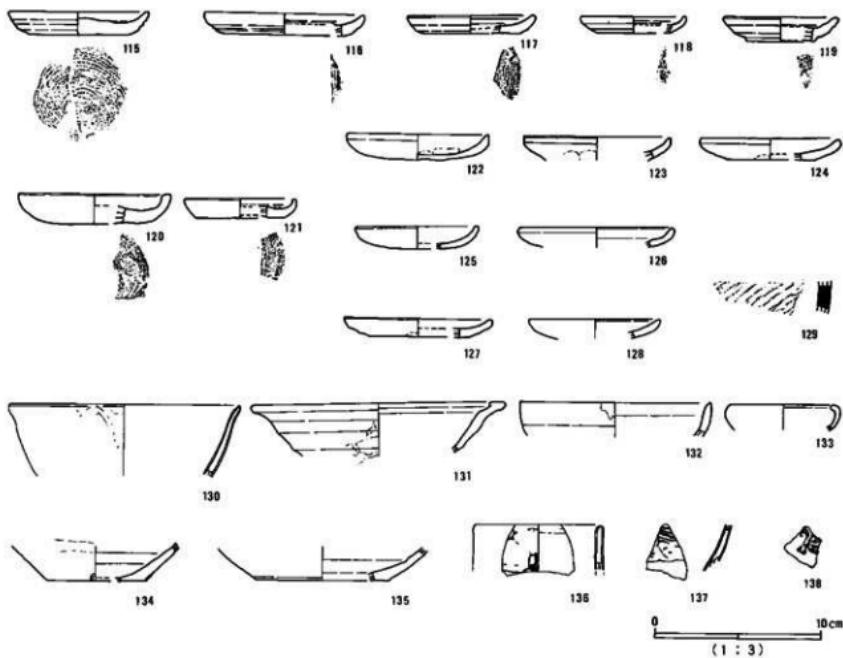
第44図 第6号住居跡（45～48）・第8号住居跡住居跡（49～53）・第1号竪穴状造構（54～58）出土遺物



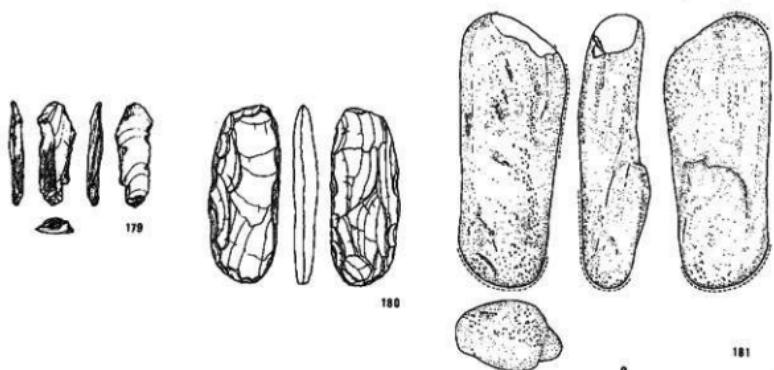
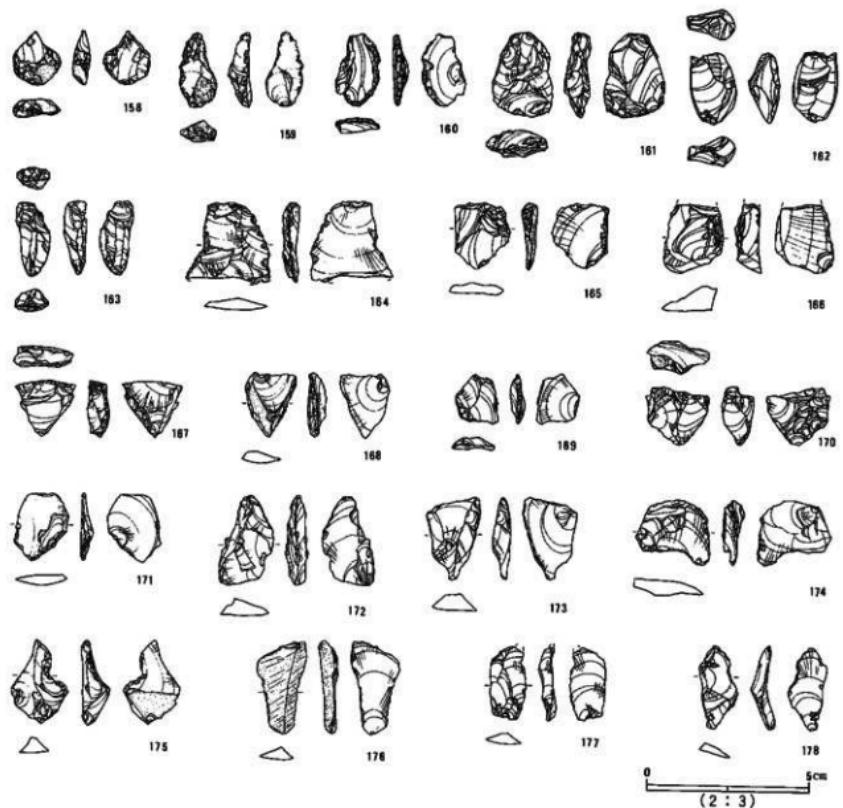
第45図 第8号土坑(59~61)・第4号窯(62)・遺構出土遺物



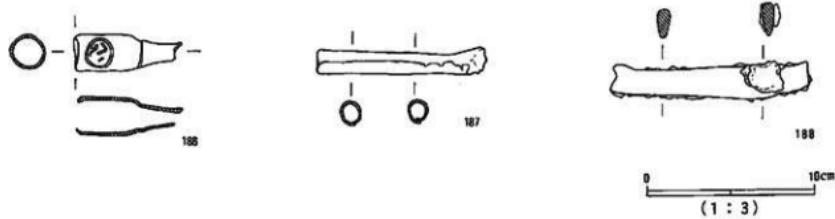
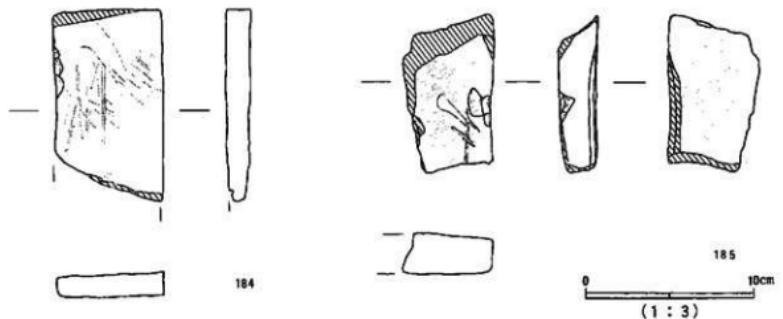
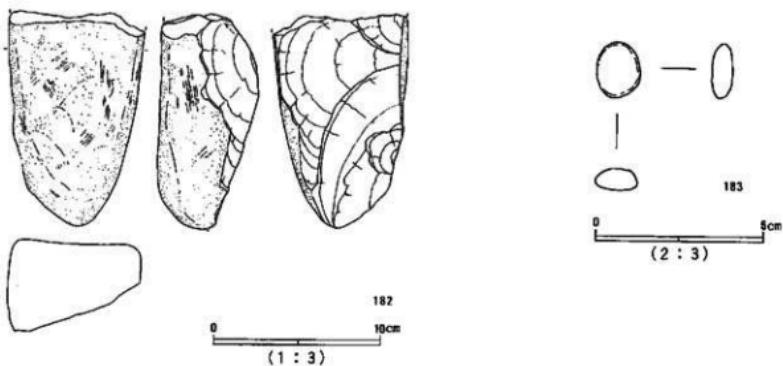
第46図 遺構外出土遺物①



第47図 遺構外出土遺物②・石器①



第46図 石器 ②



第49図 遺構外出土遺物

## 第5章 西畠遺跡の調査

### 第1節 環 境

本遺跡は保坂家屋敷墓の東側にほぼ接するように所在する。北西から南東にかけて緩やかに傾斜しており、標高は397.50mから396.00mを測る。また東側から西側へも緩く傾斜しており、調査区の西側で台地が終わっているためいく分急傾斜になっている。そのため調査区西側では重川の度重なる氾濫により、砂礫が何層にも厚く堆積している。地元の人々の話によると明治33年の台風の際に重川が氾濫し、遺跡の西に住む人々が遺跡周辺の台地まで避難したということである。

このような氾濫が過去に何度もあったためであろうか、調査区内でも東寄りに遺構が集中している。

本遺跡のさらに南東には下西畠遺跡が所在する。下西畠遺跡でも平安時代の遺構を確認しており、この2つの遺跡は非常に近接しているが、遺跡間には谷状の落ち込みが確認されているため、それぞれ別個の集落であると考えられる。

### 第2節 住居跡

第1号住居跡（第51・61図）本住居跡はD-6グリッドに所在し、標高396.70m付近に位置する。形状は方形だが、東側壁面が一部外側に張り出している。また南西コーナーに床面より一段低い掘り込み状の突出部を持つが、焼土などは見られずカマドであると断定できない。また北側で第4号住居跡と重複する。規模は長軸5.05m、短軸3.15m、深さ0.10mを測る。床面は非常に軟弱であり、硬化面等は全く見られなかった。柱穴は南西コーナーの掘り込み付近に2基、東側壁面脇で1基の合計3基が確認された。これら3基には規格性が見られず、すべてが柱穴として利用されたかは不明である。確認面から床面までがきわめて浅いため、壁面の状況については不明である。遺物は床面直上からわずか数点の土器片が出土した。このうち第61図1は甲斐型杯で、内面及び見込み部に放射状暗文の施される比較的古相を呈するものである。2は暗文の消滅した甲斐型杯、3は羽釜の羽部分である。いずれも新相を呈する。

第2号住居跡（第52・61・62図）本住居跡はB・C-5グリッドに所在し、標高396.80m付近に位置する。方形だが既存の生活道が所在するため、北西壁面を検出することはできなかった。規模は長軸4.05m、短軸3.95m、深さ0.40mを測る。カマドは北西壁面中央部に位置するが、既存の生活道が所在するため、完掘することはできなかった。カマドは床面より一段低く掘り込まれており、両袖には人頭大で扁平な礫を配していた。これらの礫は耐火性に富む性質のものである。またカマド内の覆土は焼土魂、炭化粒子が多く混在していた。床面は全体的に硬化していた。柱穴は西側コーナーに1基、中央よりやや南西壁側に1基をそれぞれ確認したが、いずれも浅く小さい。また東壁面中央部に貯蔵穴を確認した。楕円形で長径0.98m、短径0.60m、深さ0.25mを測る。遺物は壺・小型壺・鉢・羽釜・杯・高台付杯・須恵器壺破片がある。カマド付近・中央やや東側付近及び貯蔵穴内に集中していた。カマド付近では内外面をナデにより調整する小型壺や、球胴壺、外面をケズり、内面をハケにより調整する鉢等、煮炊き用の土器が集中する傾向がある。また中央部では外面をヨコミガキ、内面は見込み部まで暗文を施す杯が出土しており、平安時代においては、本遺跡群の中でも古相の住居跡であると思われる。帰属年代は8世紀末に位置づけられる。

第3号住居跡（第53・62～64図）本住居跡はD-7・8グリッド、標高396.85m付近に位置する。方形であると思われるが、遺構の大半は調査区外に位置しており、その全容を知ることはできない上、かろうじて検出できた遺構もカクランを受けている。規模は長軸5.25m、深さ0.45mを測る。カマドは南コーナーに燃出しを南西に向けて所在する。残存状況は比較的良好であった。カマドの左右には袖石に利用されたと思われる人頭大の扁平の礫が奥から手前に2点ずつ並んで所在し、その上部に拳大の礫が隙間を埋めるような形で位置する。とくに西側の袖石下半部は粘土質の土によって補強され、直立していた。袖石の内面は火を受け、真っ赤に焼けていた。覆土は多量に焼土、炭化粒子を含んでおり、遺物も出土した。床面は軟弱でとくに北西側はカクラン

を受けており、検出は難しかった。また中央部は焼土粒子がまとまってみられた。柱穴、貯蔵穴等の付属施設は見られなかった。遺物は壺・杯・皿・内面黒色杯・置きカマド・須恵器碗がある。遺物は住居跡全体から出土したが、とくにカマド付近に集中していた。壺は内外面にハケ調整を持つが、口縁部が肥大化している。杯・皿は内面の暗文はすでに消滅する段階のものであり、外面底部付近の手持ちヘラケズりがかろうじて残存する。皿は体部の屈曲が一部残存しているものもある。これらの様相から本住居跡の帰属年代は10世紀前半から中頃と思われる。

第4号住居跡（第54・64・65図）本住居跡はC・D-5・6グリッド、標高396.70m付近に位置する。方形であるが、北西壁面は調査区外に延びているため、全体像を明らかにすることは不可能であった。また東側を1号住居跡と重複している。新旧関係は1号住居跡の方が古く、本住居跡の方が新しい。規模は長軸3.45m、深さ0.15mを測り、確認面から床面までは浅く壁の残りがよいとはいえない。カマドは検出できなかつた。調査区外に所在するものと思われる。床面は中央部やや西寄りに所々硬化面が見られたが、ほとんどは軟弱であった。柱穴は南コーナー付近、東コーナー付近及び東壁面中央部やや中央よりにそれぞれ1基ずつ、合計3基を検出した。いずれも直径0.20m、深さ0.35m前後を測る。遺物は壺・羽釜・杯・皿がある。壺は外面にタテハケ、内面にヨコハケを持つが口部の肥厚化が著しい。羽釜は羽根部分のみの出土であった。杯・皿は内面の暗文は既に消滅し、外面は胴下半部にケズりを持つ。第65図60の杯は胴部に墨書が認められるが、意味不明である。62の皿は外面の底部付近に「王」の刻書が認められる。遺物から本住居跡の帰属年代はおおよそ10世紀前半から中頃のものであると推測できるが、全体の様相から本住居跡より3号住居跡の方が若干前出であるように思われる。

第5号住居跡（第55・65図）本住居跡はB・C-6・7グリッドに位置し、標高396.70m付近に所在する。本住居跡はカクランのため一部東側床面が僅かに残存していた他は、その全容を知ることはできなかつた。遺物は壺の口縁部などが認められたが、本住居跡に伴うものなのは不明である。また帰属年代についても明らかにすることはできない。

第6号住居跡（第56・65図）本住居跡はB-11グリッドに所在し、標高396.00m付近に所在する。形状は方形であるが、中央部より西側半分が調査区外に延びているため、全容を知ることはできなかつた。規模は長軸3.05m、深さ0.20mを測る。本遺跡の地形は北東から南西にかけて若干の微高地状であるが、後世の開墾によって削られてしまつたために確認面から床面までが他の住居跡より浅い。カマドは南側壁面コーナー付近に位置する。袖石等は残存していなかつたが、床面より0.10m程掘り込みが見られ、覆土に若干の焼土粒子が見られた。柱穴は東側壁面沿い中央部と北コーナー付近にそれぞれ2基を確認した。いずれも直径0.25m、深さ0.30m前後を測る。遺物はカマド西側よりまとめて出土した。壺・杯・皿が見られる。第65図68の杯、及び69の皿の底部には「×」の刻書が見られる。また70の皿外面底部には墨書が認められるが、意味は不明である。皿は内面に放射状の暗文が見られ、また体部に屈曲が施される。これらの遺物から本住居跡の帰属年代はおおよそ9世紀前半から中頃にかけてであると推測できる。

第7号住居跡（第57・66～68図）本住居跡はD-3・4グリッド、標高397.30m付近に所在する。形状は方形を呈するが、畑の開墾や後世の生活道の工事、もしくは電柱の設置などによりカクランが著しい。規模は長軸4.10m、短軸3.18m、深さ0.35m前後を測る。カマドは南西壁面中央部に位置する。カマドの掘り込み部分に拳大から人頭大弱の大きさの礫が散在していた。掘り込み部分及びカマド前面の床面付近に焼土粒子が見られたが、少量であった。床面は軟弱でカクランのためか凹凸が著しい。また南西側の壁面はカクランを受けている箇所が大きく、所々しか確認することができなかつた。遺物はカマド周辺に集中していた。壺・小型壺・羽釜・杯・置きカマド・突帯付四耳壺・灰釉陶器の碗などが出土した。壺は若干古相を呈するもの見られるが、全体的に壺の口縁部は肥大化しており、また杯は内面の暗文が消滅する段階のものである。10世紀前半から中頃に位置づけられよう。

### 第3節 溝

第1号溝（第58・68～70図）B・C-10グリッド、標高396.30m付近に所在する。規模は長さ4.60m、幅1.00m、深さ0.55mを測る。C-10グリッド付近で自然発生的に始まり、西側の調査区外へ延びる。僅かに平安時代に位置づけられる土器片が数点出土したが、小片であるため詳細については不明である。また溝内には内側に水流によりえぐり込まれたような箇所もあり、一時期排水等に利用されていたものと推測できるが、その年代については不明である。

第2号溝（第58・68・70図）B-6～10グリッド、標高396.20m付近に位置する。規模は長さ16m前後、最大幅2.80m、最も深い箇所は0.80mを測る。B-6グリッド周辺で自然発生的に始まり、B-9グリッド付近で急勾配を呈し、遺跡西側で台地の縁辺部へ吸収されるものと思われる。溝は現在の畠地及び生活道などの区画と合致しており、当該時期の区画が現在にも踏襲されている様子が窺われる。遺物は少なくいすれも摩耗が著しかった。すべて平安時代のものである。調査区際で耳皿が出土した。また廃棄された砥石なども見られる。

### 第4節 道路跡（第59・69・70図）

本遺構は既存の生活道を挟んで北側の調査区に位置する。本遺跡を南北に分断する生活道はもとは保坂家の西側から通じる一本の道であった。この道は塩山市の赤尾の集落を南北に縱断して勝沼町へ抜ける重要な道路であったようである。しかし近年の道路整備によって調査区の北側及び西側に道幅の広い道路が新設されたことにより、旧道と交わる箇所を改修して生活道を分断し、本来の合流点よりも西側で新設道路と合流するような形に変更された。そのため合流点より北側の旧道が廃止されて埋められ、畠地として利用してきた。今回の調査ではその廃止された部分（文章中、旧生活道と記述する。）を検出し、調査するに至った。

発掘調査された旧生活道は、長さ16m、幅0.80m前後で北から南へ向かって真っ直ぐ延び、合流地点付近で西側へ緩くカーブしている。道の西側は3段ほどの石垣が積まれていたようであるが、発掘調査時には基底部1段が残るのみで2・3段目の石垣は崩れて道路側へ崩落していた。いずれも扁平な面を道側に向けていた。西側へカーブする地点の石垣は自然石のひときわ大きい礫が用いられ、幾分頑丈に構築されていた。石垣の裏側からは裏込めに用いられていたと思われる拳大の礫が出土した。本遺跡をのせる台地は東側から西側へ台地状に高くなっている。既存の生活道も西側を石垣により土留めしている箇所が頻繁に見られる。こうしたことから本調査区の道路跡も西側を高さ0.80m前後の石垣により土留めしていたものと思われる。一方東側は拳大の礫が不規則に並べられていた。若干の砂礫が堆積している箇所もあり、既存の生活道の東側が用水路であることからこの部分はかつては用水路であった可能性が高い。これら砂礫の中から、近世・近代の陶磁器片が出土した（第69図106～111）。湯飲み茶碗などの生活雑器が多く見られ、106のように器の底部に焼き継ぎの跡が見られるものもある。また砥石（第70図117）、地蔵と思われる石造物の一部（第70図116）も出土した。

### 第5節 ピット群（第60図）

C・D-8グリッドには合計7基のピットが所在する。掘立柱建物跡とも考えられるが、ピットに今ひとつ規格性が認められず、ピットの深さや規模も異なることからピット群としての報告にとどめたい。いずれもピットも標高396.50m付近に位置し、ピット1は直径0.53m、深さ0.60mの楕円形で西側へ若干傾く。ピット2は直径0.30m、深さ0.60mを測り、袋状を呈する。ピット3は直径0.35m、深さ0.88mを測り、円形を呈する。底部が東側へ若干オーバーハングしている。ピット4は直径0.70mの楕円形で、深さ0.45mを測る。底部が球状で側面も袋状を呈する。ピット5は直径0.50m、深さ0.40mを測る。南側壁面に礫が所在するが、ピット掘削時には既に礫が所在していたと思われ、それを避けるように掘っている。ピット6は直径0.35m、深さ0.45mの円形でピット群の中ではもっとも小型で浅い。ピット7は直径0.30m、深さ0.20m、ピットを掘削する以前より所在する礫により不整形である。浅く、あるいはピットでない可能性もある。いずれのピットからも出土遺物は無く、帰属年代も不明である。

土器觀察表

番号 No.	出土地点	遺物 No.	種別	器種	性状 (cm)			調　査	色　調	胎　土	残存率	その他
					口径	器高	底径					
61	1 号 住	1	土器部	杯	—	(3.9)	(7.7)	外面ヨコナガ 内面放射状暗文見込み網文 底部ハラケズリ	赤茶褐色	石英	破片	
61	1 号 住	2	土器部	杯	—	(1.7)	(4.5)	ロクロ成形	黄褐色	石英 エスコリア 角閃石	破片	
61	1 号 住	3	土器部	羽 盖	—	(2.2)	—	内外面ハケ調整	茶褐色	白色砂粒子 金雲母	珠片	
61	2 号 住	4	土器部	甕	(26.9)	(12.0)	—	外側ナタのち指痕底 内面ヨコハケ	茶褐色	石英 角閃石 金雲母	30%	
61	2 号 住	5	土器部	甕	(17.6)	18.4	(7.5)	外側ナタ・ヘナナデ 内面	にぶい褐色	石英 金雲母 砂粒	95%	
61	2 号 住	6	土器部	甕	—	(5.0)	—	外側ハケ調整 内面指痕底 (深純)	にぶい褐色	石英 角閃石 砂粒	30%	
61	2 号 住	7	土器部	甕	(19.0)	(15.2)	—	外側腹方向のヘナナデのち指痕底 内面指痕底	灰白色	石英 金雲母	30%	
61	2 号 住	8	土器部	杯	—	(5.2)	(7.5)	ロクロ成形 外面ヨコミガキ 内面放射状暗文 —(基盤なし) 底部ハラケズリ	外褐色 内色	角閃石 金雲母	80%	
61	2 号 住	9	土器部	高 台 杯	(13.0)	(3.6)	(7.2)	ロクロ成形 外面ヨコミガキ 内面放射状暗文 —(基盤なし) 底部ハラケズリ	黄褐色	角閃石 金雲母	80%	
61	2 号 住	10	土器部	杯	(12.8)	(5.1)	(8.0)	ロクロ成形 内面放射状暗文	淡黄色	金雲母 彩色帶	80%	
61	2 号 住	11	土器部	杯	(12.9)	(4.6)	(8.3)	ロクロ成形 外側下平部ハラケズリ 内面 底部放射状暗文 底部ハラケズリ	淡茶褐色	石英 金雲母	40%	
62	2 号 住	12	土器部	杯	(14.4)	(3.0)	—	ロクロ成形 外面ヨコハラミガキ 内面放射状 暗文	淡黄色	金雲母	15%	
62	2 号 住	13	土器部	杯	(11.6)	(2.2)	—	ロクロ成形 外面ヨコハラミガキ 内面底方向 暗文	淡黄色	角閃石 金雲母	10%	
62	2 号 住	14	土器部	杯	(11.0)	(2.4)	—	内外面底	淡白色	角閃石 金雲母	10%	
62	2 号 住	15	土器部	杯	(14.0)	(4.0)	—	ロクロ成形 内外面底	灰白色	角閃石 金雲母	20%	
62	2 号 住	16	土器部	杯	(16.4)	(3.2)	—	ロクロ成形 内外面底	浅黄色	角閃石 金雲母	15%	
62	2 号 住	17	土器部	杯	—	(3.6)	—	外側腹方向 ヨラミガキ 内面底方向のヘラミガ キ	茶褐色	石英	10%	
62	2 号 住	18	土器部	杯	—	(2.6)	(6.5)	外側腹方向 ヨラミガキ 内面放射状暗文 (深純) 底部ハラケズリ	赤褐色	鐵金雲母	10%	
62	2 号 住	19	土器部	杯	—	(2.8)	(7.6)	内面放射状暗文 底部ハラケズリ	赤褐色	石英 鐵金雲母	10%	
62	2 号 住	20	須恵器	瓶	—	—	—	内外面テクノ調整	灰白色	石英	破片	
62	3 号 住	21	土器部	杯	(12.0)	(4.5)	(4.0)	ロクロ成形 外側下平部ハラケズリ 底部赤 切り目	外褐色	角閃石 金雲母	40%	
62	3 号 住	22	土器部	杯	(12.5)	(4.2)	(4.8)	ロクロ成形 外側下平部ハラケズリ 底部赤 切り目	黄褐色	石英 角閃石 金雲母	75%	
62	3 号 住	23	土器部	杯	12.5	5.7	5.0	ロクロ成形 外側下平部ハラケズリ 底部赤 切り目	黄褐色	石英 角閃石 金雲母	100%	
62	3 号 住	24	土器部	杯	(15.0)	(5.5)	—	ロクロ成形 外側下平部ハラケズリ	赤茶褐色	角閃石 金雲母 エスコ	10%	
62	3 号 住	25	土器部	杯	(14.0)	(3.8)	—	ロクロ成形 外側下平部ハラケズリ	赤茶褐色	角閃石 金雲母 エスコ	10%	
62	3 号 住	26	土器部	杯	(12.5)	(2.5)	—	ロクロ成形 外側下平部ハラケズリ	赤茶褐色	角閃石 金雲母 エスコ	10%	
62	3 号 住	27	土器部	杯	—	(1.5)	(5.5)	ロクロ成形 外側下平部ハラケズリ 底部へ ラクナリ	後浅棕色	角閃石 金雲母 エスコ	35%	
62	3 号 住	28	土器部	杯	—	(1.8)	(5.0)	ロクロ成形 外側下平部ハラケズリ 底部赤 切り目	浅黄色	角閃石 金雲母 砂粒	25%	
62	3 号 住	29	土器部	杯	—	(1.1)	(5.0)	ロクロ成形 外側下平部ハラケズリ 底部赤 切り目	褐色	石英 スコリア	20%	
62	3 号 住	30	土器部	高 台 杯	—	(1.8)	(6.7)	ロクロ成形 つけ高台	褐色	角閃石 金雲母	20%	
63	3 号 住	31	土器部	甕	(30.4)	(12.0)	—	外側ヨコナハ 内面ヨコハケのち指痕底	赤茶褐色	石英 角閃石 金雲母	30%	
63	3 号 住	32	土器部	甕	(28.0)	(11.5)	—	ロクロ成形 内外面ヨコハケ 外側ヨコナハ ナマハケのち指痕底	茶褐色	石英 角閃石 金雲母	10%	
63	3 号 住	33	土器部	甕	(32.5)	(9.5)	—	ロクロ成形 内外面ヨコハケ 外側ヨコナハ ナマハケのち指痕底	赤茶褐色	石英 角閃石 金雲母	20%	
63	3 号 住	34	土器部	甕	(35.4)	(4.5)	—	外側ヨコナハ 内面ヨコハケ	赤茶褐色	石英 角閃石 金雲母	10%	
63	3 号 住	35	土器部	甕	(51.0)	(4.2)	—	外側ヨコナハケ方向ケリ 内面ヨコハケ	赤茶褐色	石英 角閃石 金雲母	10%	
63	3 号 住	36	土器部	甕	(13.0)	(4.5)	2.4	ロクロ成形 外側底部付近ハラケズリ	浅黄色	角閃石 金雲母 エスコ リア	50%	灯明屋
63	3 号 住	37	土器部	甕	(12.4)	(3.0)	(8.4)	ロクロ成形 外側底部付近ハラケズリ	浅黄色	石英 スコリア	80%	灯明屋
63	3 号 住	38	土器部	甕	(11.8)	(2.5)	(3.4)	ロクロ成形 外側底部付近ハラケズリ	褐色	石英 金雲母	20%	
63	3 号 住	39	土器部	甕	(12.8)	(2.3)	(7.8)	ロクロ成形 底部附近ハラケズリ	褐色	角閃石 金雲母 エスコ リア	100%	
63	3 号 住	40	土器部	甕	(10.8)	(1.4)	—	ロクロ成形	浅黄色	スコリア 砂粒子	15%	

## 土器観察表

種類 No.	出土地点	遺物 No.	種別	種類	法長(cm)			調 査	色 調	施 土	残存率	その他
					口径	高 度	底径					
63	3号住	41	土器器	皿	(13.6)	(2.1)	—	ロクロ底形 部底余切り底	赤茶褐色 リヤ	角閃石 金雲母 スコ	20%	器表あり
63	3号住	42	土器器	皿	—	(7.0)	(1.1)	ロクロ底形 部底余切り底	にぶい褐色 ア	角閃石 金雲母 スコ	20%	
63	3号住	43	土器器	内 黒 鉢	(11.0)	(3.8)	—	ロクロ底形のち外腹側方向ケズリ 内腹黑色施 底付状態文	黄褐色 ア	角閃石 金雲母 スコ	20%	
63	3号住	44	須恵器	杯	—	(1.9)	(0.0)	ロクロ底形	灰褐色 ア	石英	15%	
64	3号住	45	土器器	盤さかマド	—	—	(13.5)	外腹タハケ 沿口1箇所削試 内面ナメ	赤茶褐色 リヤ	角閃石 金雲母 等々	10%	
64	4号住	46	土器器	盤	—	(8.3)	(8.4)	外腹タハケ底部付近削痕 内面ミコハケ 底部水痕	外壁褐色 内赤褐色	石英 金雲母	60%	
64	4号住	47	土器器	盤	—	(7.5)	(9.4)	外腹タハケ 内面ヨコハケのちユビナデ 施 底部無痕	暗赤褐色 ア	石英 角閃石 金雲母	30%	
64	4号住	48	土器器	盤	(14.0)	(2.6)	—	外腹タハケ 内面口縁部ヨコハケ	暗赤褐色 ア	石英 金雲母	10%	
64	4号住	49	土器器	盤	(31.0)	(5.0)	—	外腹タハケ 内面ヨコハケ	暗赤褐色 ア	石英 角閃石 金雲母	10%	
64	4号住	50	土器器	盤	(29.6)	(2.5)	—	外腹タハケ 内面ヨコハケ	暗茶褐色 ア	石英 角閃石 金雲母	10%	
64	4号住	51	土器器	器	(28.0)	(2.6)	—	羽根部分ヨコナメ	赤茶褐色 ア	石英 角閃石 金雲母	10%	
64	4号住	52	土器器	杯	(12.7)	3.9	(4.6)	ロクロ底形のち外腹下半部ヘラケズリ 底部余 切り底	内四石 金雲母 スコ	明褐色 リヤ	70%	
64	4号住	53	土器器	杯	(14.7)	(2.8)	—	ロクロ底形	暗茶褐色 ア	角閃石 金雲母 スコ	10%	
64	4号住	54	土器器	杯	(12.3)	(2.8)	—	ロクロ底形のち外腹下半部ヘラケズリ	明茶褐色 ア	明褐色 リヤ	10%	
64	4号住	55	土器器	杯	(15.0)	(2.5)	—	ロクロ底形	明茶褐色 ア	石英 金雲母 スコ	10%	
64	4号住	56	土器器	杯	(10.5)	(2.5)	—	ロクロ底形	明茶褐色 ア	石英 金雲母 スコ	10%	
65	4号住	57	土器器	杯	—	(1.5)	(7.0)	ロクロ底形のち外腹下半部ヘラケズリ 底部余 切り底	灰茶褐色 ア	石英 金雲母 スコ	10%	
65	4号住	58	土器器	杯	—	(6.4)	2.2	ロクロ底形のち外腹下半部ヘラケズリ 底部余 切り底	灰茶褐色 ア	石英 角閃石 金雲母 スコ	50%	
65	4号住	59	土器器	杯	—	(1.0)	(4.0)	外腹下半部ヘラケズリ	暗茶褐色 ア	石英 金雲母 スコ	10%	
65	4号住	60	土器器	杯	—	(1.3)	(0.0)	ロクロ底形のち外腹下半部ヘラケズリ	明茶褐色 ア	石英 角閃石 金雲母 スコ	10%	
65	4号住	61	土器器	皿	12.0	3.2	2.4	ロクロ底形のち外腹ヘラケズリ	明褐色 ア	石英 角閃石 金雲母 スコ	70%	外腹に墨青 あり
65	4号住	62	土器器	皿	12.5	2.5	3.7	ロクロ底形のち外腹ヘラケズリ 底部ヘラケズ リ	浅黄色 ア	石英 金雲母 スコ	100%	底部に削痕 「X」
65	4号住	63	土器器	皿	(13.6)	(2.5)	—	ロクロ底形のち外腹ヘラケズリ 底部ヘラケズ リ	暗茶褐色 ア	石英 角閃石 金雲母 スコ	40%	
65	4号住	64	灰陶器	高 台 杯	—	(2.7)	(6.4)	ロクロ底形 付け高台	灰褐色 ア	石英 角閃石 金雲母 スコ	10%	
65	5号住	65	土器器	甌	(23.7)	(2.9)	—	外腹口縁部指痕痕	褐色 ア	石英 金雲母	10%	
65	5号住	66	土器器	甌	—	(9.0)	—	外腹タハケ 内面ヨコハケのち指痕ナメ	外壁褐色 内暗茶褐色	角閃石 金雲母	10%	
65	5号住	67	土器器	杯	(11.3)	(4.5)	—	ロクロ底形 外腹削下半部ヘラケズリ 内面暗 茶(底部)	明茶褐色 ア	角閃石 金雲母	20%	
65	6号住	68	土器器	杯	5.0	(2.8)	—	ロクロ底形 外腹削下半部ヘラケズリ 内面暗 茶(底部) 切合跡	明茶褐色 ア	内四石 スコリア	60%	底部に削痕 「X」
65	6号住	69	土器器	皿	(14.7)	2.4	5.6	ロクロ底形 剥離観念 内面反射状態文	明茶褐色 ア	内四石 金雲母 スコ	80%	底部に削痕 「X」
65	6号住	70	土器器	皿	16.4	2.7	4.5	ロクロ底形 剥離観念 内面反射状態文	明茶褐色 ア	金雲母	80%	底部に削痕 「X」
66	7号住	71	土器器	甌	(16.8)	13.3	(8.0)	外腹タハケ 内面口縁部・剥離下ヨコハケ 剥離ナメ ブラックベニ	暗茶褐色 ア	石英 角閃石 金雲母	70%	
66	7号住	72	土器器	甌	(27.8)	(11.0)	—	外腹タハケのち指痕痕 内面ナメハケのち ヨコハケのち指痕痕	明褐色 ア	石英 金雲母	10%	
66	7号住	73	土器器	甌	(27.3)	(6.0)	—	外腹タハケ 内面ヨコハケ	明褐色 ア	石英 角閃石 金雲母	20%	
66	7号住	74	土器器	甌	(25.5)	(28.5)	—	外腹タハケ 内面ヨコハケのち指痕痕	明茶褐色 ア	内四石 金雲母 スコ	30%	
66	7号住	75	土器器	甌	—	(8.5)	—	外腹タハケ 内面ヨコ・ナメハケ	褐色 ア	石英 金雲母	10%	
66	7号住	76	土器器	甌	—	(26.0)	—	外腹タハケ 内面ヨコハケ	赤茶褐色 ア	石英 金雲母 等々	10%	
66	7号住	77	土器器	甌 壺	(21.5)	(8.0)	—	外腹タハケのち肩部貼り付け 内面ヨコハケ	赤茶褐色 ア	石英 金雲母	30%	
67	7号住	78	土器器	杯	(13.0)	(4.4)	(5.0)	ロクロ底形 外腹削下半部ヘラケズリ 底部ナメ 切り痕	暗褐色 ア	石英 角閃石	70%	
67	7号住	79	土器器	杯	12.4	3.8	5.0	ロクロ底形 底部余切り痕	灰褐色 ア	角閃石 金雲母	80%	
67	7号住	80	土器器	杯	(13.5)	(4.5)	(3.9)	ロクロ底形 外腹削下半部ヘラケズリ 底部ナメ 切り痕	明褐色 ア	石英 角閃石	30%	

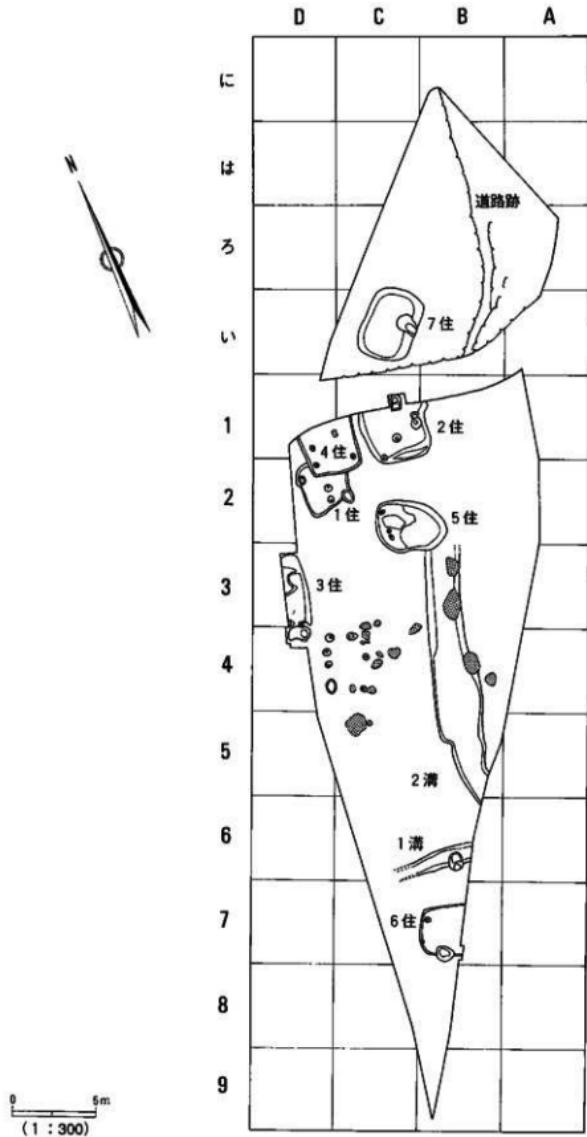
博団 No	出土地点	遺物 No	種別	器種	法量 (cm)			調 査	色 調	粘 土	残存率	その他の
					口徑	器高	底径					
67	7号住	81	土師器	杯	(12.0)	(4.2)	(4.8)	ロクロ成形 外面削下半部へラケズリ 内面致 射状暗紋 花崗岩手取	棕 色	角閃石 金雲母 スコ リア	40%	
67	7号住	82	土師器	杯	(11.8)	(4.0)	—	ロクロ成形 外面削下半部へラケズリ 内面致 射状暗紋	明 色	角閃石 金雲母	20%	
67	7号住	83	瓦陶器	甕	(16.8)	(3.0)	—	ロクロ成形 軸面滑け剥け	灰 白 色	角閃石	10%	
67	7号住	84	土師器	高台杯	—	(2.0)	6.6	ロクロ成形 つけ高台 内面黒色	黑 褐 色	スコリア (少重)	20%	
67	7号住	85	土師器	鉢	(20.1)	(8.7)	(7.6)	外側タテハケ 内面ナナメ・ヨコハケ 底部本 筋張	暗 茶 褐色	石英 金雲母	70%	
67	7号住	86	土師器	鉢	(31.9)	(9.0)	—	外側タテハケ 内面ヨコハケ	暗 茶 褐色	石英 金雲母	20%	
67	7号住	87	土師器	鉢	(35.4)	(9.3)	—	口縁部ヨコハケ 外側タテハケのち微擦痕 内 周ヨコハケ	周 色	石英 金雲母	20%	
67	7号住	88	土師器	置きカマド	—	(6.1)	—	外腹左いハケ 内腹ナザ 錐部ヨコナゾ	棕 色	石英 金雲母	10%	
68	7号住	89	須恵器	四(二)耳壺	—	—	—	外腹ナザ凸音部突りつけ 内面タキ	灰 白 色	石英	20%	
68	2号溝	90	土師器	杯	—	(1.5)	(6.0)	ロクロ成形 底部赤切り底	淡 茶 褐色	石英 角閃石	20%	
68	2号溝	91	土師器	杯	—	(1.2)	(3.5)	ロクロ成形 剥下部穿孔あり 底部赤切り底	淡 茶 褐色	石英 金雲母	10%	
68	2号溝	92	土師器	耳皿	9.1 変調	(3.0)	(1.6)	ロクロ成形のち耳折成形 岩絆へラケズリ	明 茶 褐色	石英 金雲母 スコリ ア	50%	
68	遺 物 外	93	土師器	甕	(14.0)	(3.0)	—	外内面ヘラケズリ	茶 褐色	石英 金雲母	10%	
68	遺 物 外	94	土師器	杯	(12.0)	(5.0)	—	ロクロ成形 外面削下半部へラケズリ 内面致 射状暗紋	明 茶 褐色	角閃石 金雲母	10%	
68	遺 物 外	95	土師器	杯	(10.5)	(2.5)	—	ロクロ成形 外面削下半部へラケズリ 内面致 射状暗紋	淡 茶 褐色	石英 角閃石 スコリ ア	10%	
68	遺 物 外	96	土師器	杯	(17.2)	(2.9)	—	ロクロ成形	棕 色	石英 角閃石 金雲母	10%	
68	遺 物 外	97	土師器	杯	(14.6)	(5.0)	—	ロクロ成形 外面削下半部へラケズリ	淡 茶 褐色	石英 角閃石 金雲母	10%	
68	遺 物 外	98	土師器	杯	(11.7)	(4.0)	(4.0)	ロクロ成形 外面削下半部へラケズリ	淡 茶 褐色	角閃石 金雲母 (風化)	30%	
68	遺 物 外	99	土師器	皿	(11.2)	(2.4)	—	ロクロ成形 外面削下半部へラケズリ	淡 黄 褐色	石英 金雲母 スコリ ア	10%	
68	遺 物 外	100	土師器	皿	(9.2)	(1.7)	(4.6)	ロクロ成形	灰 色		30%	
68	遺 跡 外	101	土師器	高台杯	(12.0)	(5.6)	(7.6)	ロクロ成形 高台取りつけ	棕 色	石英	50%	
68	遺 跡 外	102	瓦陶器	甕	(16.0)	(2.0)	—	ロクロ成形	外 内 底 灰 白		10% 近来	
68	遺 跡 外	103	瓦陶器	甕	(14.8)	(1.5)	—	ロクロ成形 口縁突出部隠りつけ	灰 白	石英	10% 近来	

石器・石製品観察表

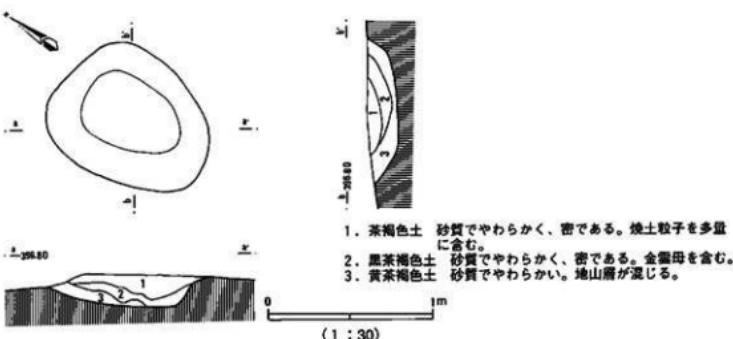
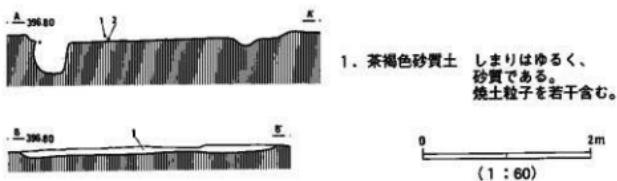
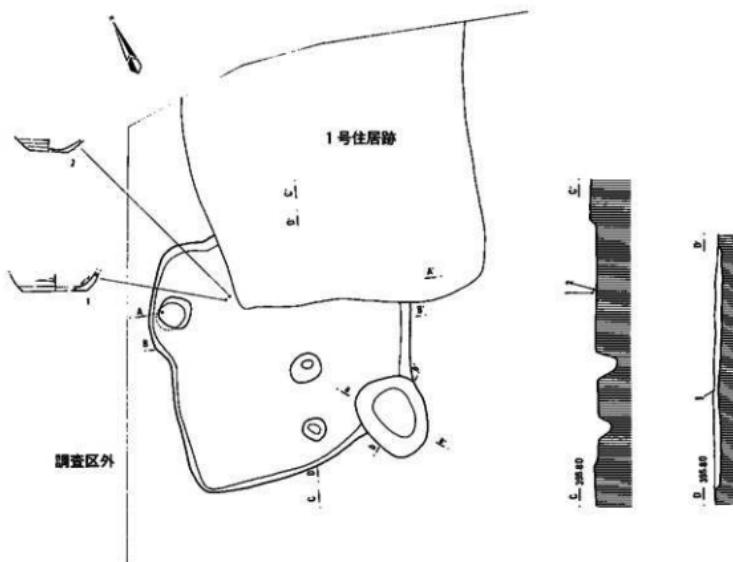
博団 No	出土地点	グリッド	番号	器種	法量				石 材	残存率	その他の
					長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
69	2号住	C-1	112	磨石	15.2	11.1	7.8	1744.30	花崗岩	100%	
69	2号住	C-1	113	カマド支脚	23.0	11.9	9.2	3500.00	花崗岩	100%	半分に割れている。
69	7号住	C-1	114	磨石	25.0	12.3	7.2	2800.00	花崗岩	—	
70	表 採	—	115	打斧	5.8	3.5	0.9	21.01	ホルンフェルス	50%	基底部欠損
70	遺 跡 勝	B-3	116	石造物	14.3	9.7	5.1	559.70	花崗岩	—	石造物 (地蔵か?) の一部
70	表 採	—	117	砥石	4.2	2.9	0.9	21.81	ホルンフェルス	—	欠損

鉄製品観察表

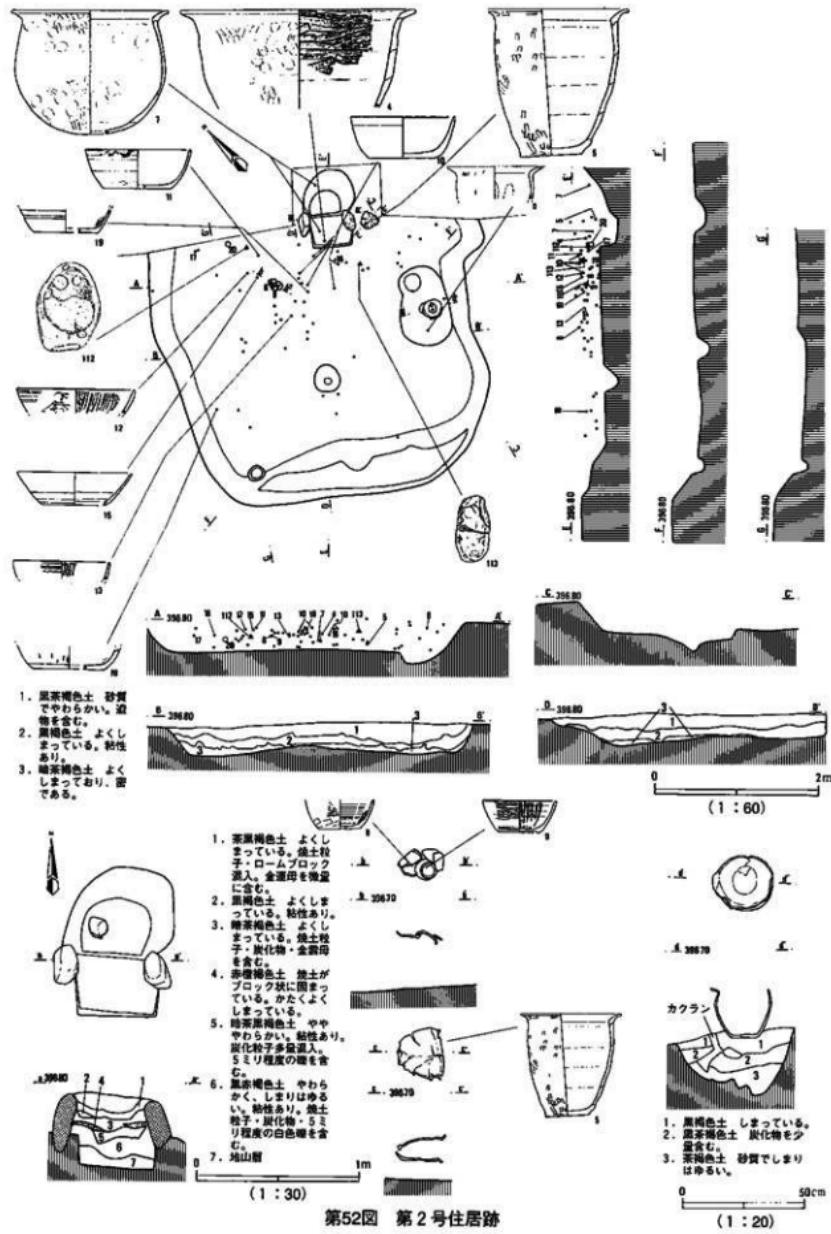
博団 No	出土地点	グリッド	番号	器種	法量				その他の
					長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	
70	7号住	C-1	118	鍼鍤車?	(2.4)	(2.3)	—	12.55	一部欠損
70	2号溝	B-5	119	不明	(7.5)	(2.9)	0.3	22.80	一部欠損
70	トレント	B-3	120	不明	(4.4)	(1.2)	0.6	5.87	一部欠損



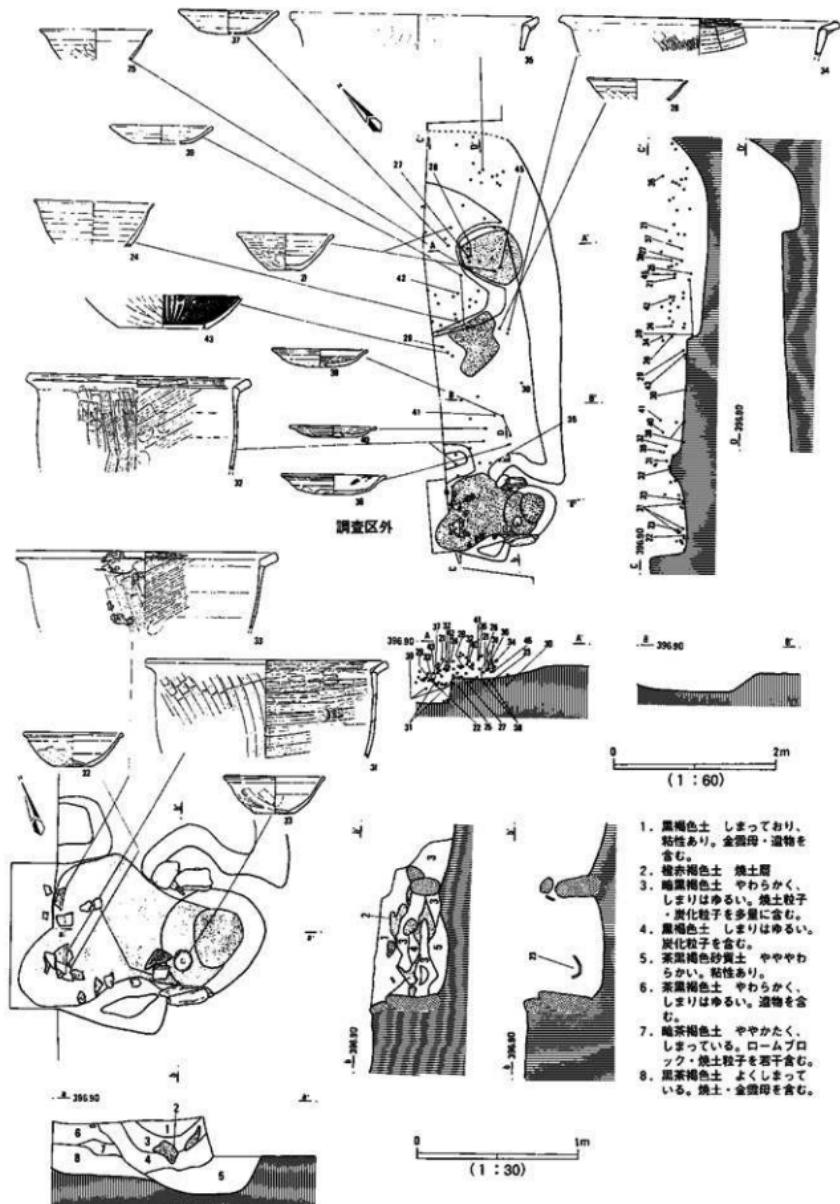
第50図 西畠遺跡全体図 (1 : 300)



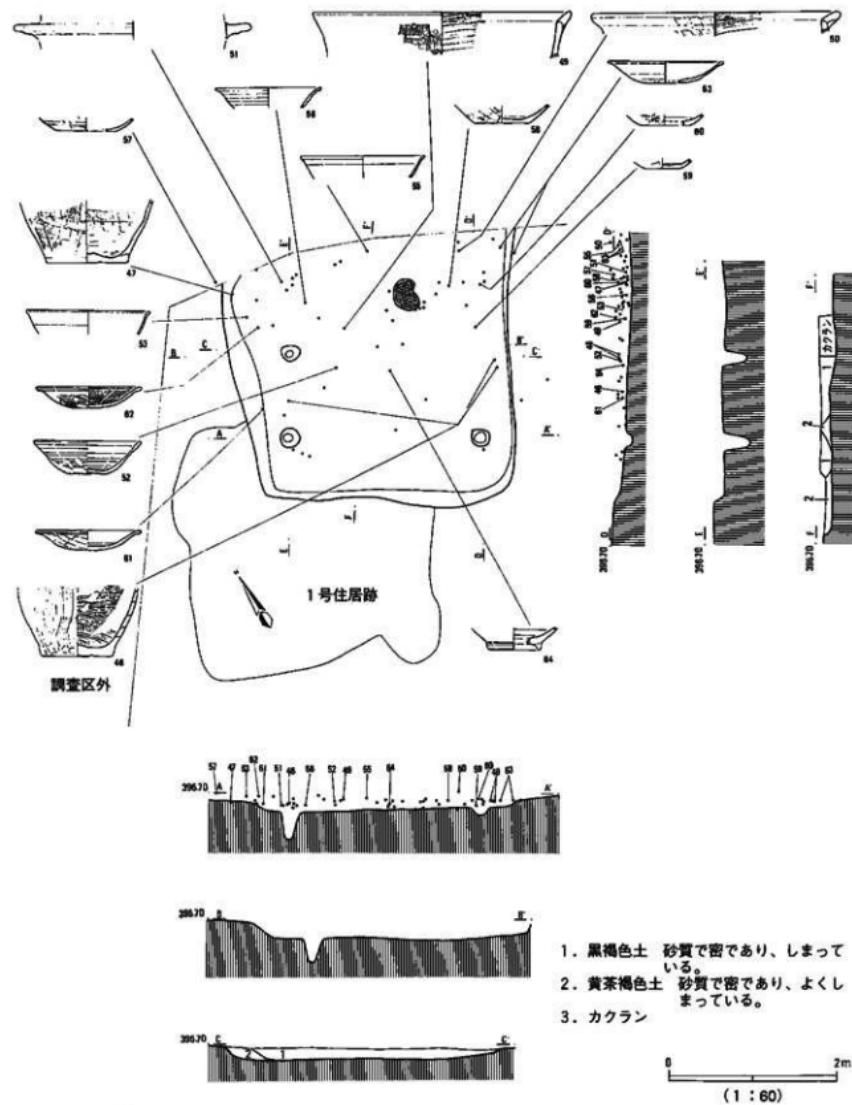
第51図 第1号住居跡



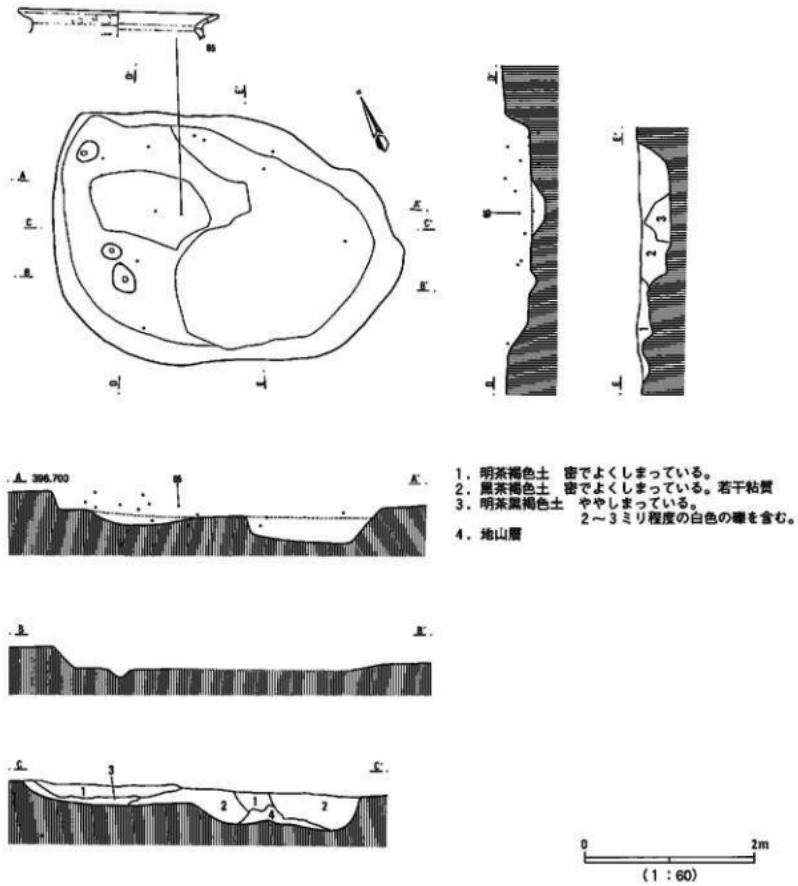
第52図 第2号住居跡



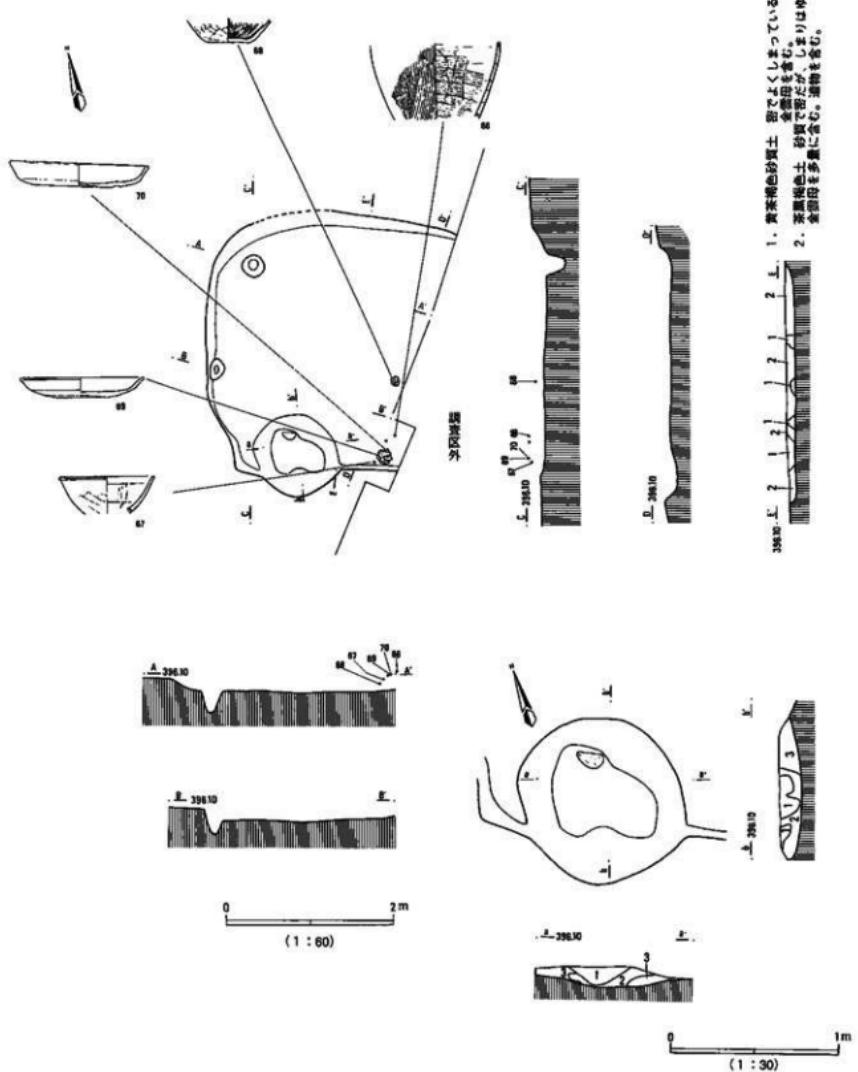
第53図 第3号住居跡



第54図 第4号住居跡

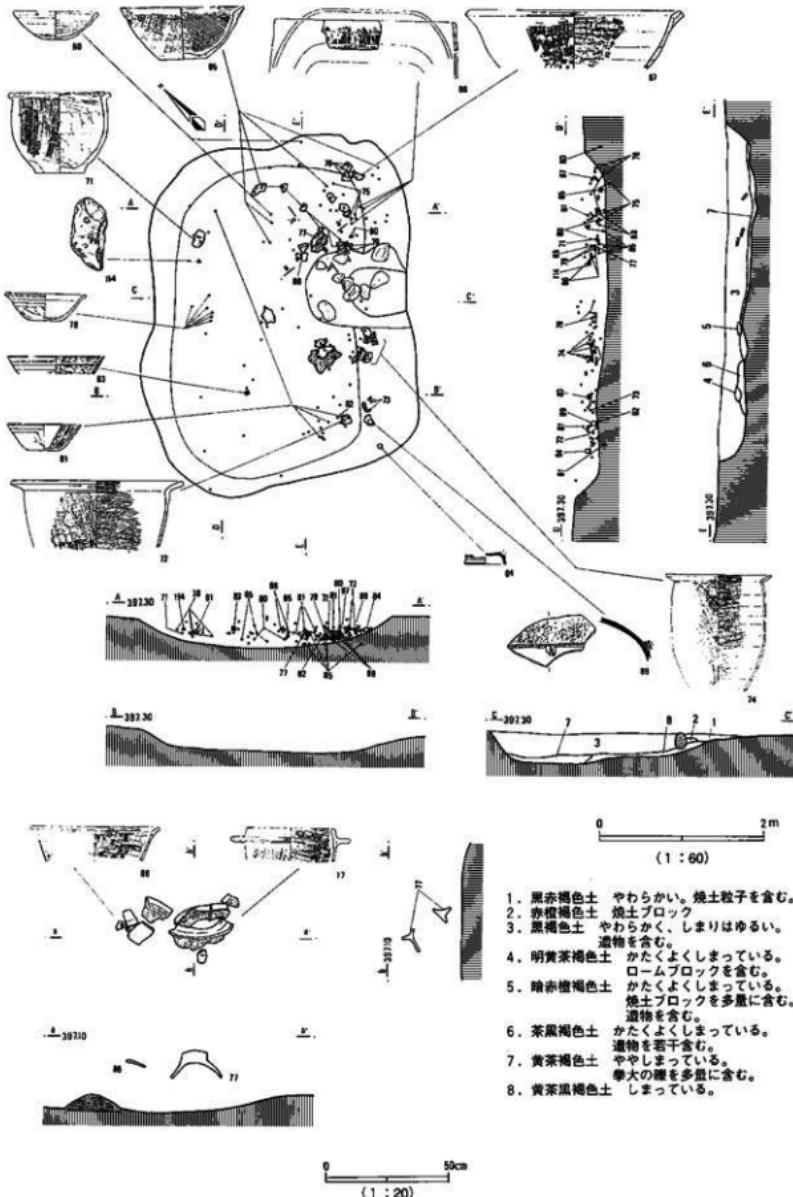


第55図 第5号住居跡

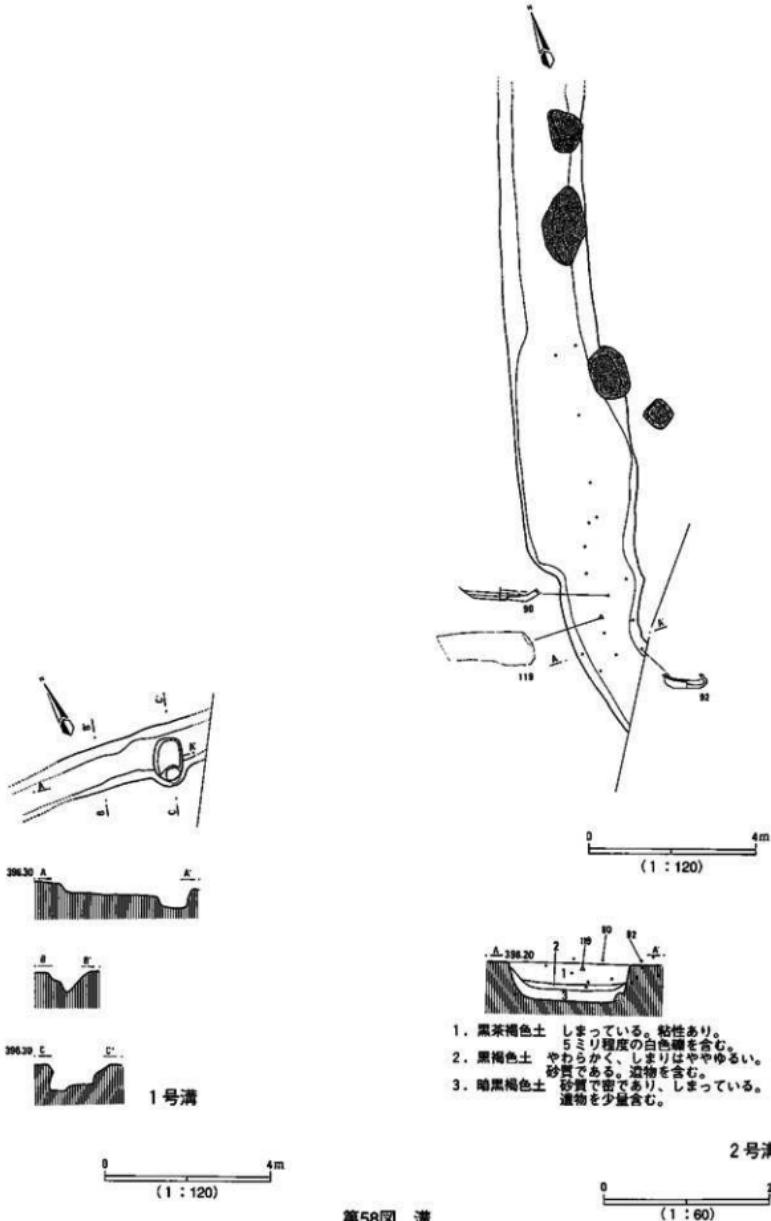


1. 黒褐色土 砂質でしまりはゆるい。粒土粒子・金銀母を多量に含む。
2. 茶褐色土 やわらかく、しまりはゆるい。金銀母を含む。
3. 白灰褐色砂質土 しまりはゆるく、粒子は粗い。金銀母を多量に含む。

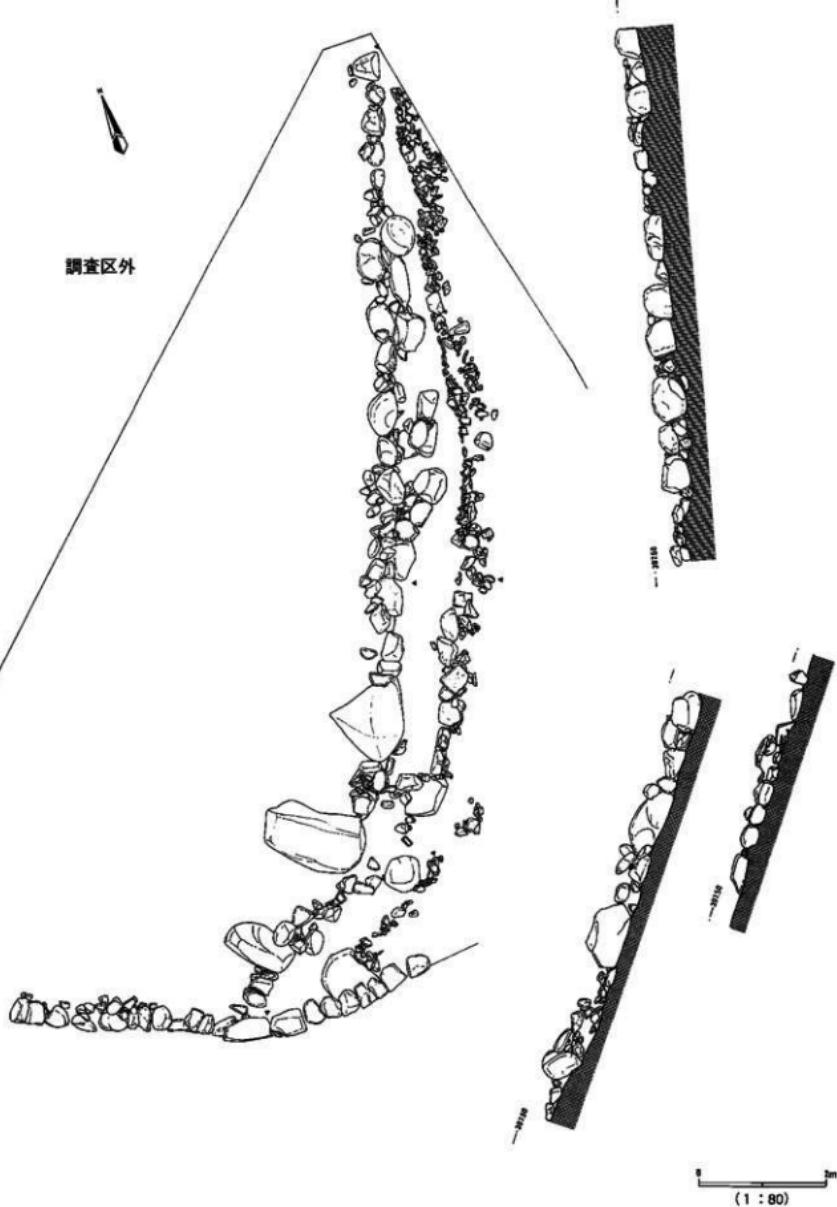
第56図 第6号住居跡



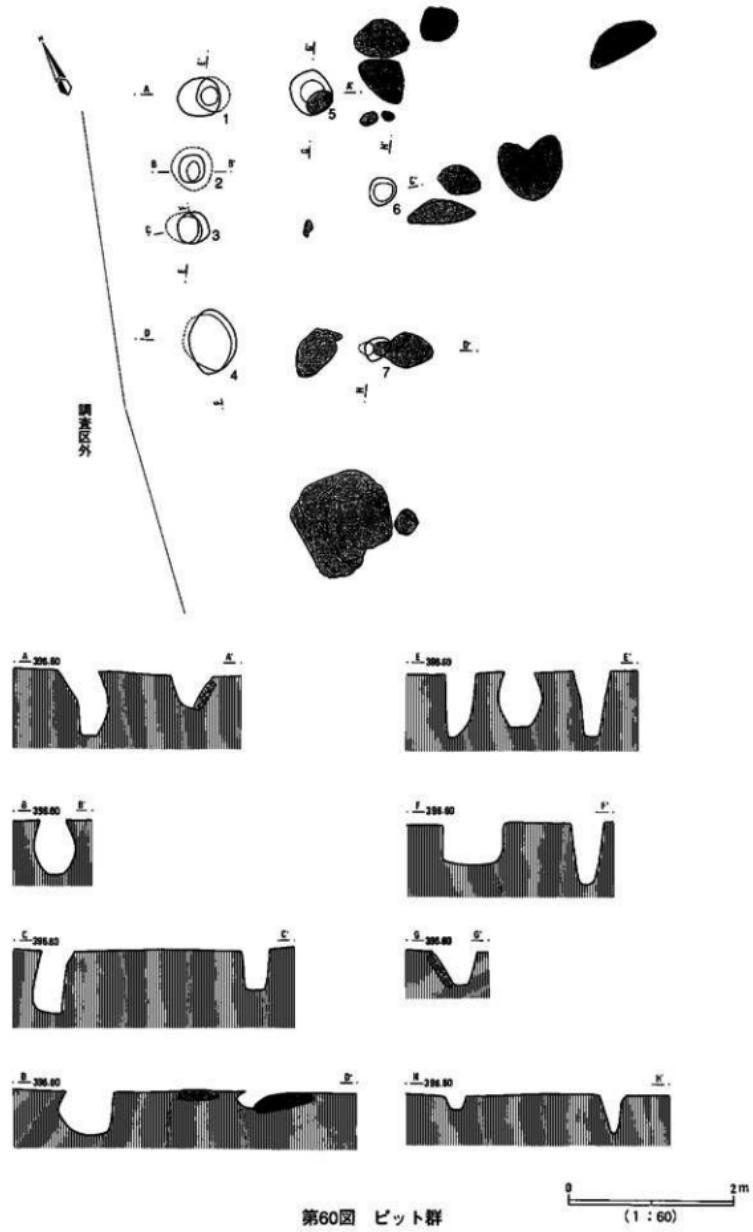
第57図 第7号住居跡



第58図 溝



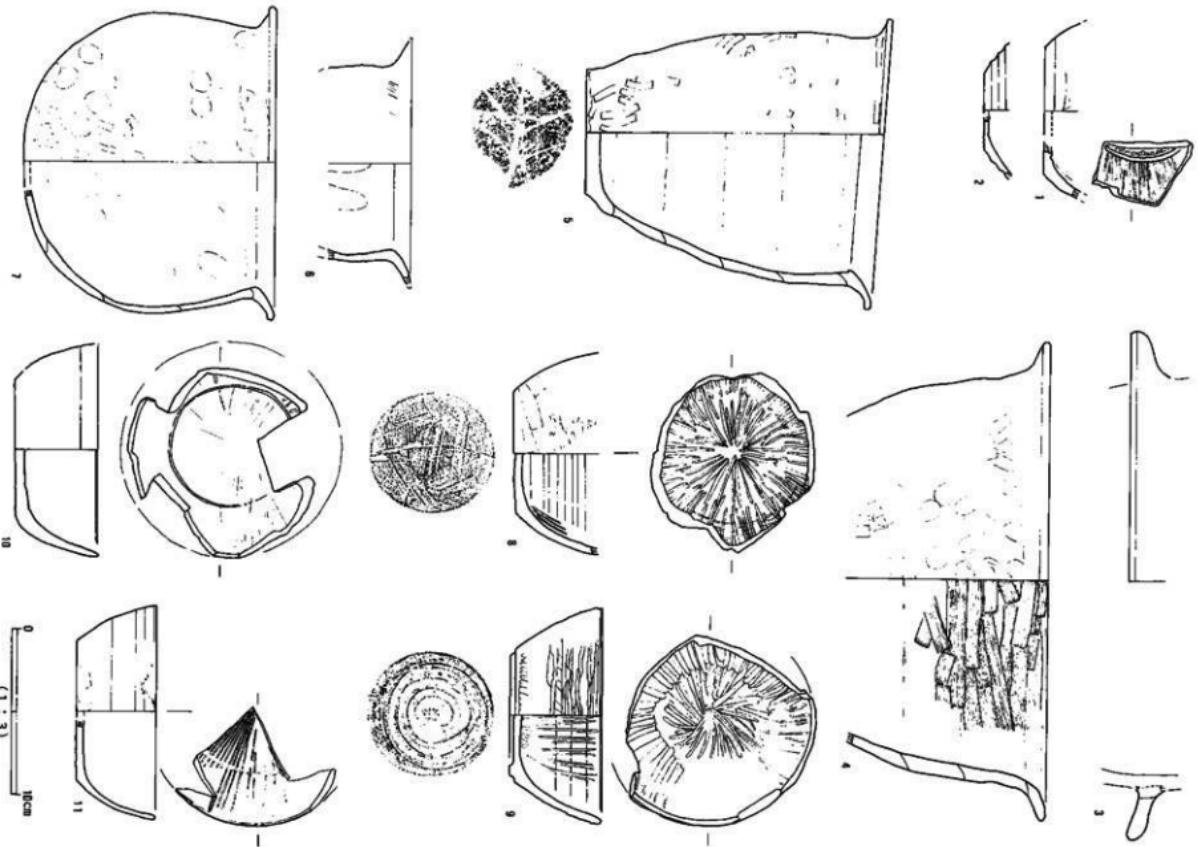
第59図 道路跡

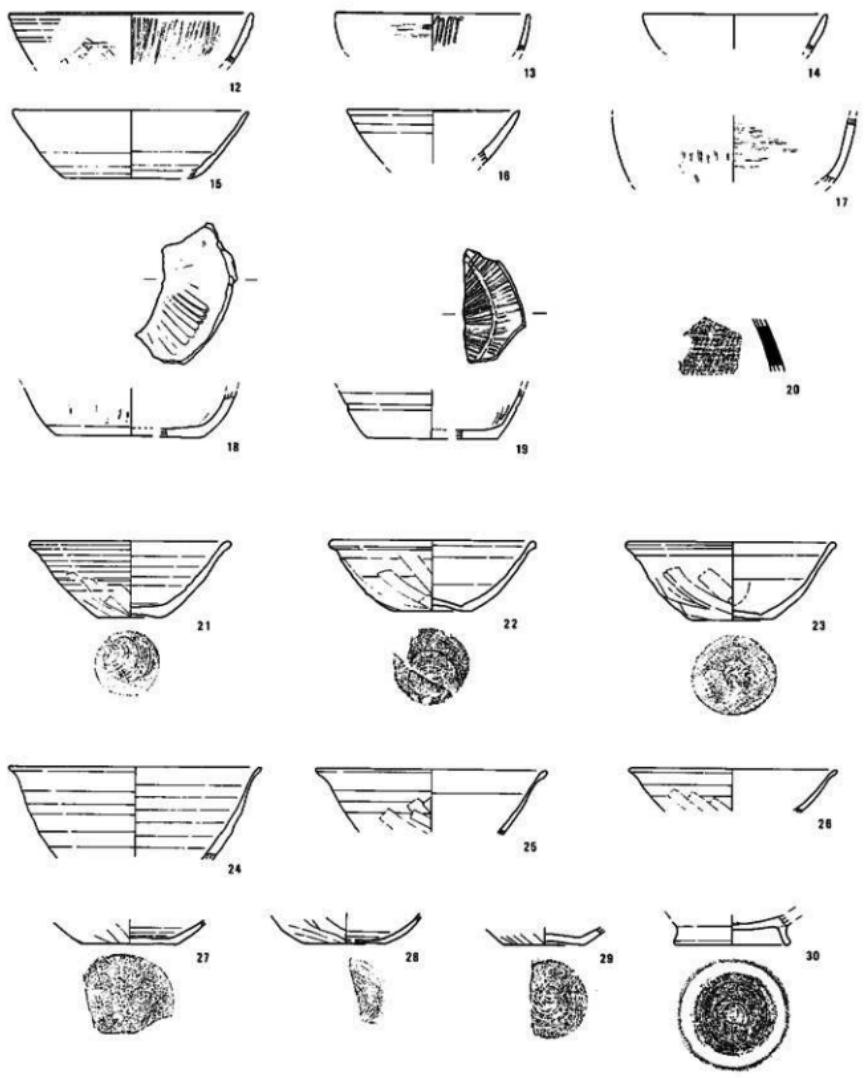


第60図 ピット群

第61図 第1号住居跡（1～3）・第2号住居跡（4～11）出土遺物

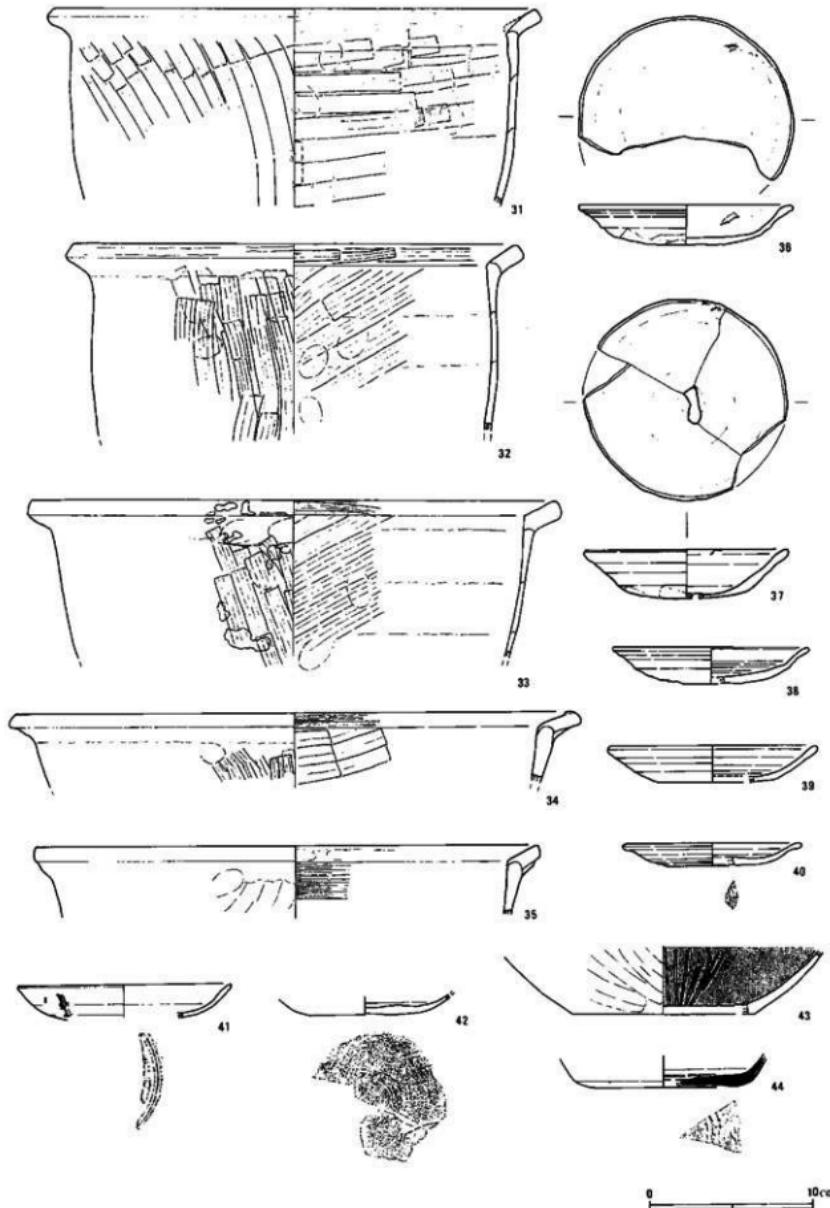
— 89 —





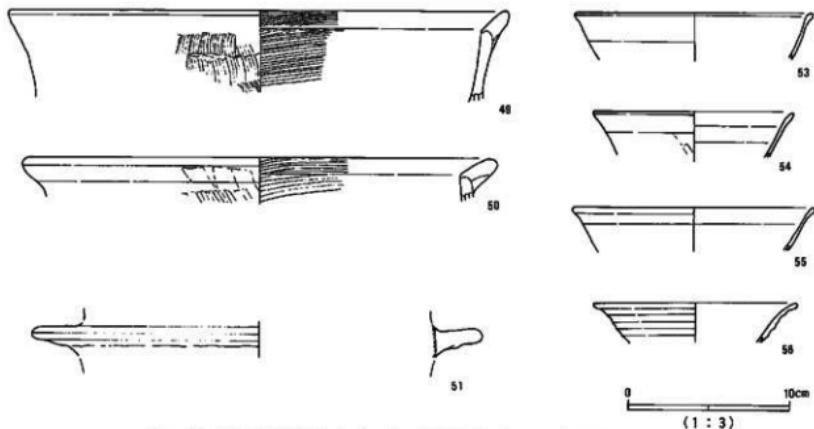
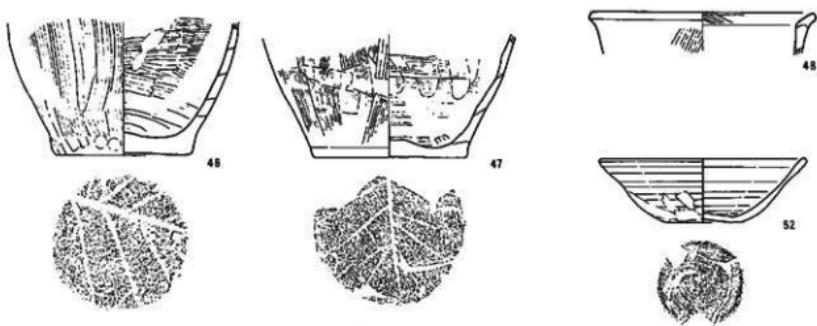
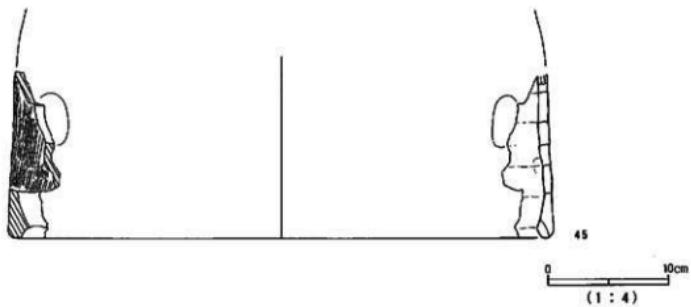
0 10CM  
(1 : 3)

第62図 第2号住居跡（12～20）・第3号住居跡（21～30）出土遺物

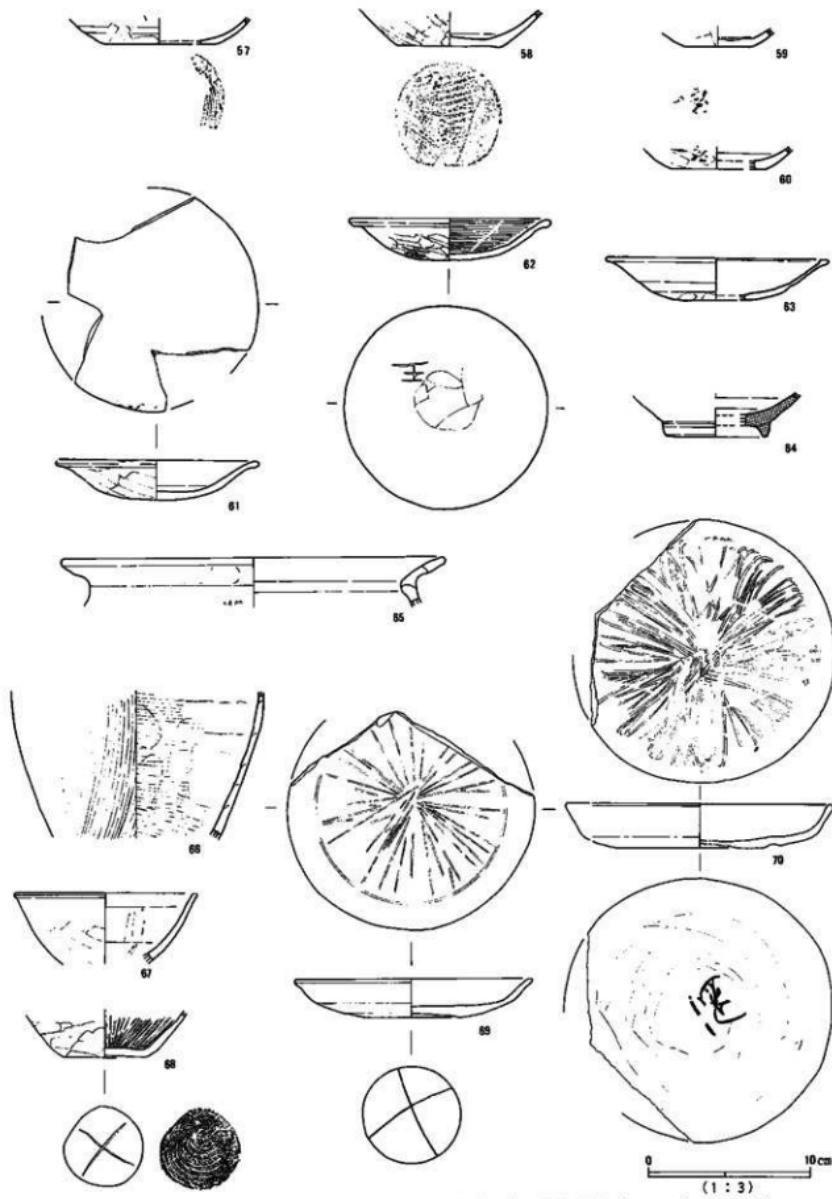


第63図 第3号住居跡出土遺物

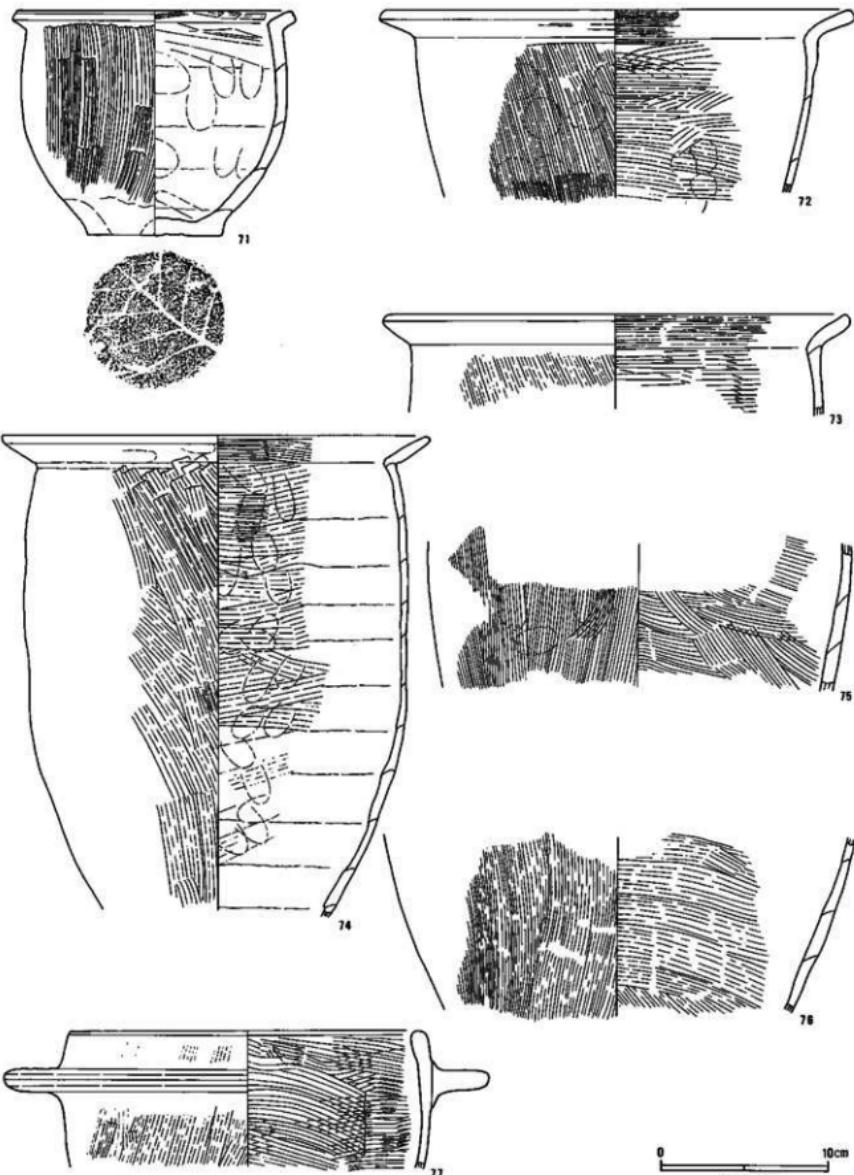
(1 : 3)



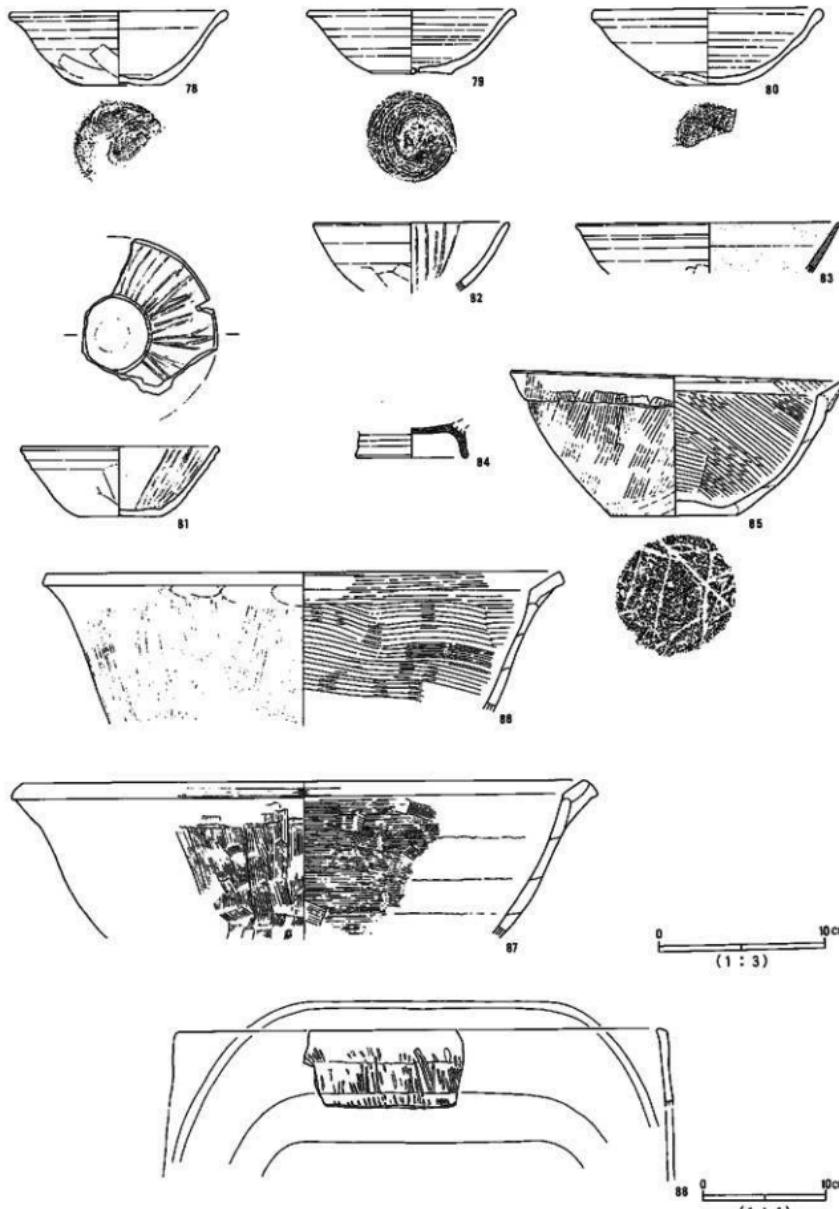
第64図 第3号住居跡(45)・第4号住居跡(46~56)出土遺物



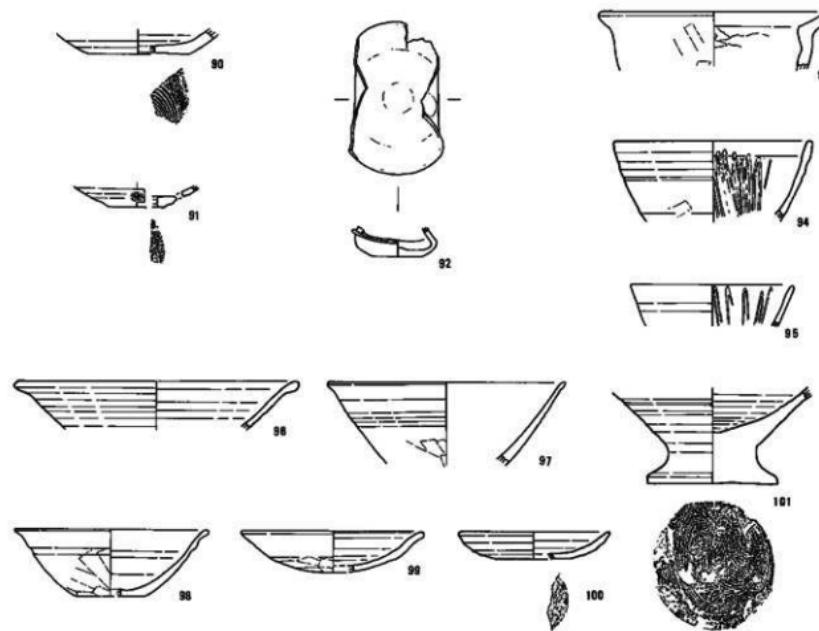
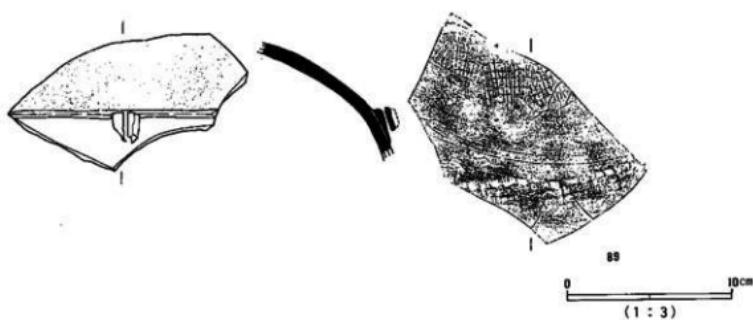
第65図 第4号住居跡(57~64)・第5号住居跡(65)・第6号住居跡(66~70)出土遺物



第66図 第7号住居跡出土遺物①

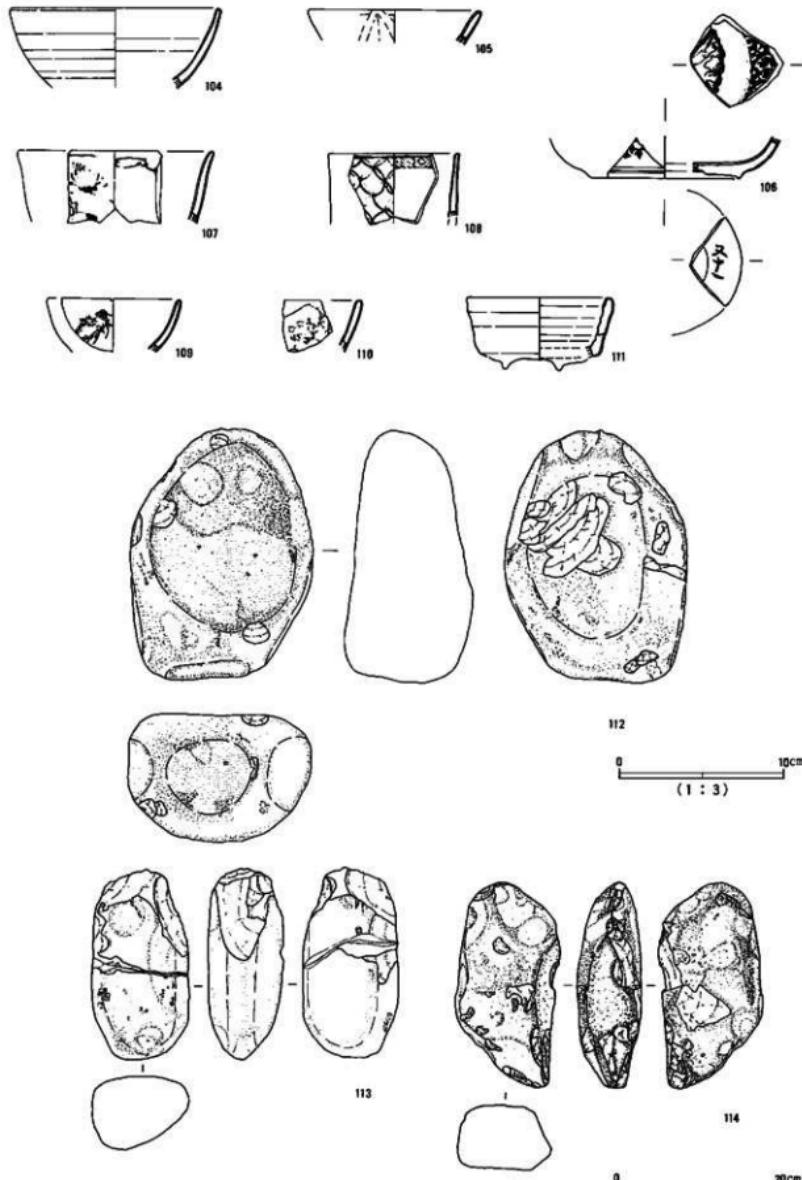


第67図 第7号住居跡出土遺物②

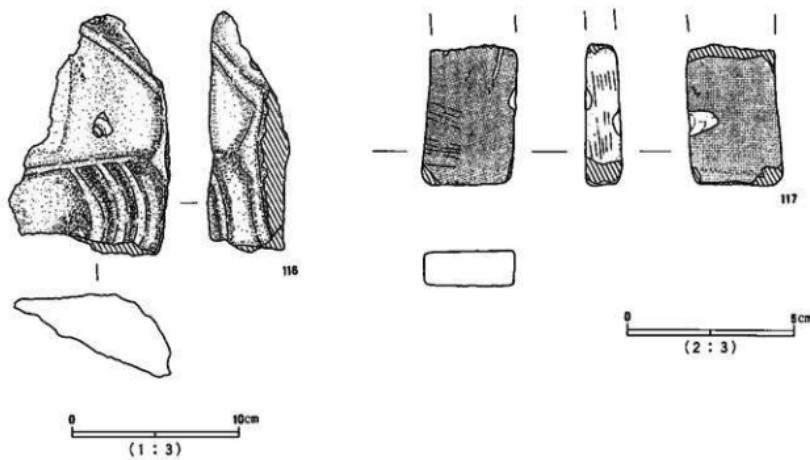
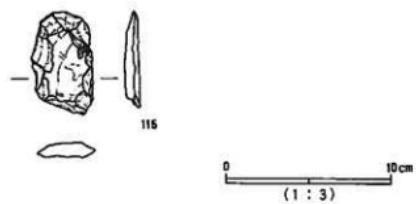


第68図 第7号住居跡（89）・第2号溝（90～92）・遺構外出遺物

0 10cm (1 : 3)



第69図 遺構外出土遺物・石器



第70図 石器・石製品・鉄製品

## 第6章 影井遺跡

### 第1節 環 境

本遺跡は標高384.600mから383.500mを測り、比較的高低差が見られる。というのも調査区は起伏に富んでおり、調査区北西側は台地状に高い。一方調査区中央部には、傾斜変換点が見られ、この地点から南側は北側より約0.80m程低い。台地上の調査区南側には掘立柱建物跡が何度も立て替えられているらしく、多数のピットが確認されたが相関性については知ることはできなかった。一方北側では谷状地形であるにもかかわらず、平安時代も終末の時期に帰属する住居跡3軒を検出した。掘立柱建物跡の年代ときわめて近接する時期であると思われ、掘立柱建物跡との関連を窺うことができる。

遺跡の周辺もまた、非常に起伏に富んでいる。調査区北西側には北から南へ流れていたと思われるかつての流路跡（現在も一部流路として活用されている。）が所在する。また調査区中央部から南東側にかけては北西側より一段下がっており、平坦面には住居跡が所在した。今回調査した3軒はいずれも東側調査区外へ延びているため、東側の未調査区にはまだ住居跡が所在する可能性が高い。本遺跡の南東、直線距離にして25.0mの箇所には大木戸遺跡が所在しているが、大木戸遺跡の北西側もまた谷状に傾斜しているため、本遺跡の最も南に所在する2号住居跡の南側から大木戸遺跡の間には、小さな谷が所在するものと思われる。

本遺跡は北西側は河川、南東側は谷に挟まれた台地上に立地する集落跡である。

### 第2節 住居跡

第1号住居跡（第72・76図）本住居跡はC・D-5・6グリッド、標高393.70mを測る。方形を呈すると思われるが、住居跡の北西側半分は調査区外へ延びているため、一軒分を調査することはできなかった。また確認面から床面までが非常に浅く、南東側で重複する3号住居跡との境が不明瞭であった。規模は現状で長軸4.98m、深さ0.15mを測る。カマドは南東壁中央に位置する。住居跡の立地する場所柄であろうか、カマドは長い煙出しを持ち、階段状の構造を呈する。炊き出し部には拳大から人頭大の礫が集中しており、左右の袖石から煙出し部まで礫で構築されていたと思われる。特異な形態のカマドであるが、破壊されており詳しい構造を知ることはできなかった。床面は平坦であったが、とくに硬化面などは検出できなかった。壁面は北側壁面は北東から南西へ急激に傾斜する斜面を利用しており、そのため北東側の壁面は非常に高い位置まで壁が存在する。一方南西側は0.10m程度しか壁面を確認できなかった。遺物は把手のつく壺・鉢・杯・高台付杯・須恵器壺が出土した。いずれもカマド周辺に集中していた。鉢は底部が扁平である。これらの遺物から本住居跡の帰属年代は11世紀末に求められよう。

第2号住居跡（第73・76～78図）C・D-7・8グリッド、標高383.70m付近に所在する。方形を呈すると思われるが、住居跡南東壁及び北東壁が調査区外に延びているため、全体を調査することはできなかった。規模は不明である。カマドは北東壁面中央部で、比較的良好な状態で検出された。左右には人頭大の礫がそれぞれ3点ずつ直立しており、向かって右側の袖石には拳大の裏込め石でカマドを頑丈に構築する工夫が成されていた。また奥の礫の上面には天井石として横に長い扁平の礫を2点並列にのせていた。さらにそれらの後方には煙出しのピットが所在している。カマド前面は床面より一段掘り込まれており、焼土塊、炭化物などが多量に見られた。床面は住居跡中央部で貼り床とみられる硬化面が広がっていた。しかし壁面側へ行くに従って、軟弱な床面へと変化していく。柱穴は3基確認した。いずれも直径0.30m前後、深さ0.30m前後を測る。またカマド東脇で貯蔵穴が出土した。長径0.80m、短径0.40m、深さ0.20mを測る。内部からは複数の壺破片などの遺物が出土した。遺物は壺、杯、皿がカマド周辺に集中していた。遺物の中には須恵器の壺の胴部破片を利用した転用硯等も含まれる。壺はいずれも広く開口口縁部を持ち、内外面がナデにより調整される。杯・皿はロクロのみで整形されるもので、小型の皿も複数見られる。また碗であると思われる、綠釉陶器片も出土した。これらの遺物から本住居跡の帰属年代はおよそ11世紀前半に求められる。

第3号住居跡（第74・78～80図）C・D-6・7グリッド、標高383.80m付近に所在する。方形を呈すると思

われるが、住居跡北西側半分が調査区外に位置するため、全体を把握することはできなかった。また北東壁面で1号住居跡と重複しており、本住居跡の方が1号住居跡より新しいものと思われる。規模は北東壁から南西壁間で3.93m、深さ0.15mを測る。住居跡中央部がちょうど調査区外との境目になっているため、明確ではないのだが、住居跡中央部と思われる箇所には碟を四角に組んだ施設が見られ、その内外には多数の遺物が集中していた。碟は南西側の一辺は碟が一段配してあるだけなのであるが、北西側と南東側の向かい合う2辺は南東側へ行くに従って碟が高く積み上げられたような状態を呈し、北東側の一辺については碟が3段ほど積まれた状況である。また施設内部からは鉢や羽釜、甕などが出土し、第79図30は中央部で正位で出土した。さらに施設の周囲の床面は壁面の床面より一段低く掘りくぼめられていた。さらに南西側には灰釉陶器の碗や土師質の小皿、逆位の鉢などが並ぶように出土し、鉄製の鈴が埋められるようにして検出された。床面は硬化しているが、壁面は立ち上がりはややゆるやかであるが高さがない。遺物等から11世紀後半代から12世紀代に位置づけられるのではないかと考える。

### 第3節 ピット群

調査区北西側に集中して立地し、標高は384.600m前後を測る。ビットの規模はおよそ次の3パターンに分類できる。

- ①直径1.200m、深さ0.50m前後を測り、底面から地表まで壁面はほぼ直線的に立ち上がるるもの。
  - ②直径0.35m前後、深さ0.50m弱を測り、底面から地表まで壁面の立ち上がりがロト状を呈するもの。
  - ③形状は四角形を呈し、長径0.60m、短径0.40m、深さ0.30m前後を測り、壁面は地表から底面までやや傾斜を持つもの。

その他、若干これらの規格には合わない円形のピットや短い溝状の造構などが各所に見られる。

これらのピット群はそれぞれの相関関係については不明確であるものの、一定の規格性を持つことから掘立柱建物跡の柱穴と考えられる。同じ箇所に集中しており、重複しているものもあることから、この場所に何回か立て直されたものと推測できる。四角形のピットの向きやピットの並びなどから南から北に長い建物であったことが推測できる。

また、ピット群中では焼土跡等も複数箇所見られた。とくにグリッド周辺には遺構は認められないものの、焼土の広がりが確認できた。

出土遺物はきわめて少ないが、平安時代の土器片などが僅かに出土した。また塩山市の行った遺跡分布調査の結果では、影井遺跡は中世に位置づけられていることなどから、これらピット群は平安時代から中世の掘立柱建物跡群であったと推測できる。

#### 第4節 遺構外出土遺物（第80図）

B・C-6・7・8グリッド付近は調査区の中では最も低い箇所である。そのためトレーナーを設定し掘り下げたところ、自然流路として溝状に機能した時期があったことを確認した。土層から水流は北西から南東へ認められ、何層にも砂礫の堆積が見られた。それらの上層からは拳大から人頭大の礫に混じって摩耗の著しい平安時代の土器片や錢等が出土した。

またこの自然流路状の溝に重複して平安時代の住居跡1軒が僅かながら確認できた。その形状は水流に削り取られ定かではないのだが、僅かに壁面や、カマドを構築していたと思われる礫等が残存し、その周辺からこれらの住居跡に伴う可能性の極めて高い遺物の出土が見られた。というのもこれらの遺物は他の出土遺物と異なり、全く摩耗が見られない上、その帰属年代も他の3軒の住居跡から出土したものとほぼ同時期のものである。しかし層位も分層が難しいほど僅かな残存であるため、これらの遺物をこの住居跡に確実に伴っていたものとの断定しがたいため、遺構外の遺物ということで報告する。

土器観察表

序号 No.	出土地点 遺物 No.	種別	部様	測量 (cm)			調　査	色　調	胎　土	残存率	その他
				口径	厚さ	底径					
76	1 号 住	1 土器群	甕	(10.6)	—	—	外腹ヘラナデ 内面ヨコナゲ	暗 色	石英 金雲母 角閃石	80%	
76	1 号 住	2 土器群	杯	13.4	4.6	6.1	クロ成形 底部凹底赤切り痕	暗 色	石英 金雲母	90%	
76	1 号 住	3 土器群	杯	—	(2.1)	4.5	クロ成形 底部凹底赤切り痕	暗 色	石英 金雲母	30%	
76	1 号 住	4 土器群	柱状高台杯	—	(5.9)	10.0	クロ成形 底部凹底赤切り痕	暗 色	石英 金雲母 角閃石	50%	
76	1 号 住	5 土器群	甕	26.0	16.5	(15.0)	内外面ヘラナデ	暗 色	金雲母 角閃石	70%	
76	1 号 住	6 磁器群	甕	(35.5)	(4.6)	—	クロ成形	灰 白 色	石英	10%	
76	2 号 住	7 土器群	杯	(14.1)	5.3	2.8	クロナナデ 底部凹底赤切り痕	浅 黄 色	石英 金雲母	60%	
76	2 号 住	8 土器群	杯	(12.8)	6.4	3.8	クロナナデ 底部凹底赤切り痕	暗 色	金雲母	70%	
76	2 号 住	9 土器群	杯	10.2	3.3	4.0	クロナナデ 底部凹底赤切り痕	灰	石英 金雲母	98%	
76	2 号 住	10 土器群	杯	—	(1.4)	6.0	クロナナデ 底部凹底赤切り痕	暗	石英 金雲母 スコリア	60%	
76	2 号 住	11 土器群	杯	(14.8)	(3.0)	—	クロナナデ	明 贊 極	石英 金雲母	30%	
76	2 号 住	12 磁器群	碗	—	(1.1)	—	内外面縦縫あり	暗 褐 色	石英	破片	
76	2 号 住	13 土器群	甕	(32.7)	(12.0)	—	内外面ヘラナデ	茶 黄 色	石英 金雲母 砂隕石	10%	
76	2 号 住	14 土器群	甕	(34.0)	(6.5)	—	内外面ヘラナデ	明 斑 黄 色	石英 金雲母	10%	
77	2 号 住	15 土器群	甕	(36.0)	(15.0)	—	内外面ヘラナデ	茶 黄 色	石英 金雲母	10%	
77	2 号 住	16 土器群	甕	(29.5)	(8.0)	—	内外面ヘラナデ	暗 茶 黄 色	石英 金雲母 角閃石	30%	
77	2 号 住	17 土器群	甕	(37.5)	(20.0)	(12.2)	外側ハケ調整 内面ヘラナデ 底部木葉痕	暗 褐 色	金雲母 角閃石	40%	
77	2 号 住	18 土器群	甕	(34.6)	(16.0)	—	内外面ヘラナデ 一底ヒビオサエ	茶 褐 色	石英 金雲母 角閃石	20%	
78	2 号 住	19 土器群	甕	(29.8)	(16.0)	—	内外面ヘラナデ	茶 褐 色	石英 金雲母 角閃石	10%	
78	2 号 住	20 磁器群	甕	—	—	—	外側タキ	灰白～暗灰青	破片		
78	2 号 住	21 磁器群	甕	—	—	—	外側タキ 内面ナ一部ヘラナデ	暗 灰 白	破片 鋼錆斑		
78	3 号 住	22 土器群	甕	9.8	2.5	4.2	クロ成形 基部凹底赤切り痕	に ぶ い 橙	石英 金雲母	100%	
78	3 号 住	23 土器群	甕	9.0	2.4	4.0	クロ成形 基部凹底赤切り痕	赤 極	石英 金雲母	90%	
78	3 号 住	24 土器群	甕	(9.6)	(2.0)	(4.6)	クロ成形 基部凹底赤切り痕	黄 暗	石英 金雲母 スコリア	60%	
78	3 号 住	25 土器群	甕	(9.0)	(2.1)	(3.6)	クロ成形 基部凹底赤切り痕	に ぶ い 橙	石英 金雲母	40%	
78	3 号 住	26 土器群	甕	(11.2)	(2.4)	(4.0)	クロ成形 基部凹底赤切り痕	暗 極	石英 金雲母	30%	
78	3 号 住	27 土器群	甕	—	(1.3)	(2.4)	クロ成形 基部凹底赤切り痕	暗	石英 金雲母 角閃石	40%	
78	3 号 住	28 磁器群	碗	16.2	6.2	7.2	クロ成形 沈黙抜けけ	灰 白	石英	100%	
78	3 号 住	29 土器群	甕	(36.8)	(23.0)	(16.0)	内外面ヘラナデ	暗	石英 金雲母	40%	
79	3 号 住	30 土器群	甕	—	(17.5)	(15.0)	内外面ヘラナデ 底部木葉痕	茶 黄 色	石英 金雲母 角閃石	20%	
79	3 号 住	31 土器群	甕	10.4	16.8	6.2	内外面ヘラナデ 一底指痕 基部木葉痕	暗 茶 黄 色	石英 金雲母 角閃石	100%	
79	3 号 住	32 土器群	甕	(22.3)	(15.5)	(15.0)	内外面ヘラナデ 胸壁後指痕痕 つまみ駆けりつけ	暗 極	金雲母 角閃石	80%	
79	3 号 住	33 土器群	甕	—	22.0	12.0	外側ハケ調整後ナゲ 内面ナデ 底部木葉痕	茶 黄 色	石英 金雲母 角閃石	90%	石英の被着か?
80	3 号 住	34 土器群	円筒土器	—	—	—	内外面ヨコナダ(クロ成形か?)	赤 茶 黄 色	石英 金雲母 角閃石	破片	
80	造 情 外	35 土器群	甕	(28.0)	(8.5)	—	内外面駆けいハケ調整	赤 茶 黄 色	石英 金雲母 角閃石	10%	
80	造 情 外	36 土器群	甕	(29.7)	(4.8)	—	内外面駆けいハケ調整	暗 褐 色	石英 金雲母	10%	
80	造 情 外	37 土器群	甕	(32.6)	(14.5)	—	内外面駆けいハケ調整	茶 黄 色	石英 金雲母 角閃石	20%	
80	造 情 外	38 土器群	杯	11.8	2.8	4.0	クロ成形 底部凹底赤切り痕	明 贊 色	石英	50%	
80	造 情 外	39 土器群	杯	(11.0)	(2.1)	—	クロ成形 底部凹底赤切り痕	浅 贊 極	石英 金雲母 スコリア	30%	
80	造 情 外	40 土器群	高 台 杯	(15.1)	(4.5)	(6.0)	クロ成形 高台貼りつけ	茶 黄 色	石英 金雲母	70%	
80	造 情 外	41 土器群	(高台) 杯	(12.0)	(3.8)	—	クロ成形 高台貼りつけ	茶 黄 色	金雲母	20%	
80	造 情 外	42 磁器群	甕	—	(1.6)	—	クロ成形 縞縫あり	暗	色	破片	

石器・石製品観察表

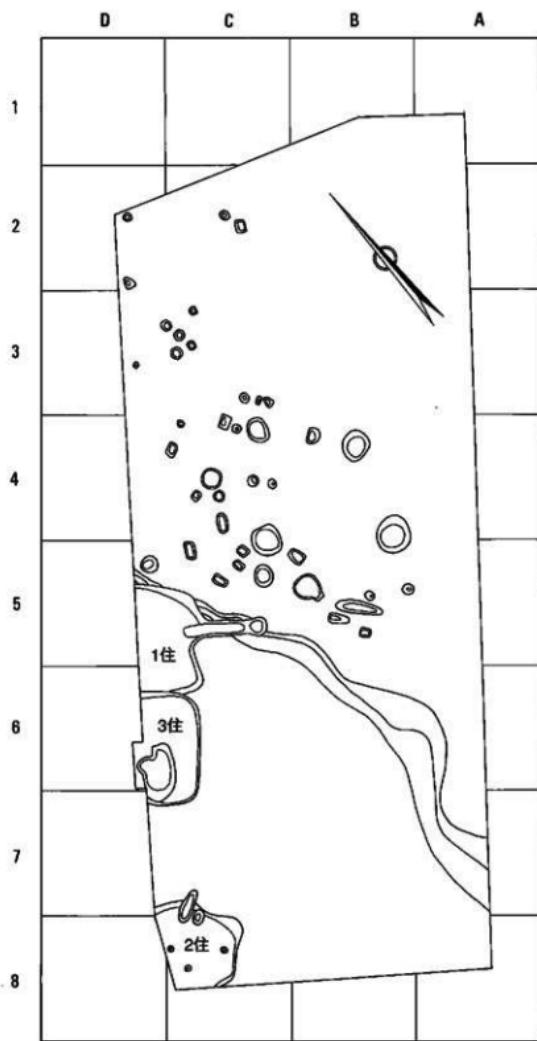
擇図 No	出土地点	グリッド	番号	器種	法量				石材	残存率	その他
					長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
81	2号住	C-7	43	石鑿	1.4	1.8	0.4	0.40	黒曜石	95%	先端部欠損
81	表採	—	44	ピエスエスキーユ	1.4	1.6	0.5	1.01	黒曜石	—	
81	2号住	—	45	UF	1.6	1.9	0.7	1.18	黒曜石	—	
81	2号住	C-8	46	石鑿	16.4	9.3	4.8	1053.20	砂岩	20%	一部残存
81	—	C-5	47	石鑿	25.0	16.2	8.5	4500.00	砂岩	70%	一部欠損
81	3号住	—	48	石鑿	24.6	21.3	7.7	5200.00	花崗岩	80%	一部欠損

鉄製品観察表

擇図 No	出土地点	グリッド	番号	種別	法量				その他
					長さ	幅	厚さ	重量	
81	3号住	D-6	49	鎌	(4.3)	4.3	0.1	52.83	
81	7号土坑	—	50	刀子	(10.2)	(1.4)	0.4	8.00	
81	トレンチ	B-7	51	刀子	(4.9)	(1.7)	0.5	4.00	
81	2号住	D-8	52	器種不明	(6.0)	(0.5)	0.4	3.30	
81	遺構外	C-7	53	器種不明	(4.6)	(0.7)	0.3	7.44	
81	遺構外	C-7	54	器種不明	(3.6)	(1.1)	0.2	3.64	

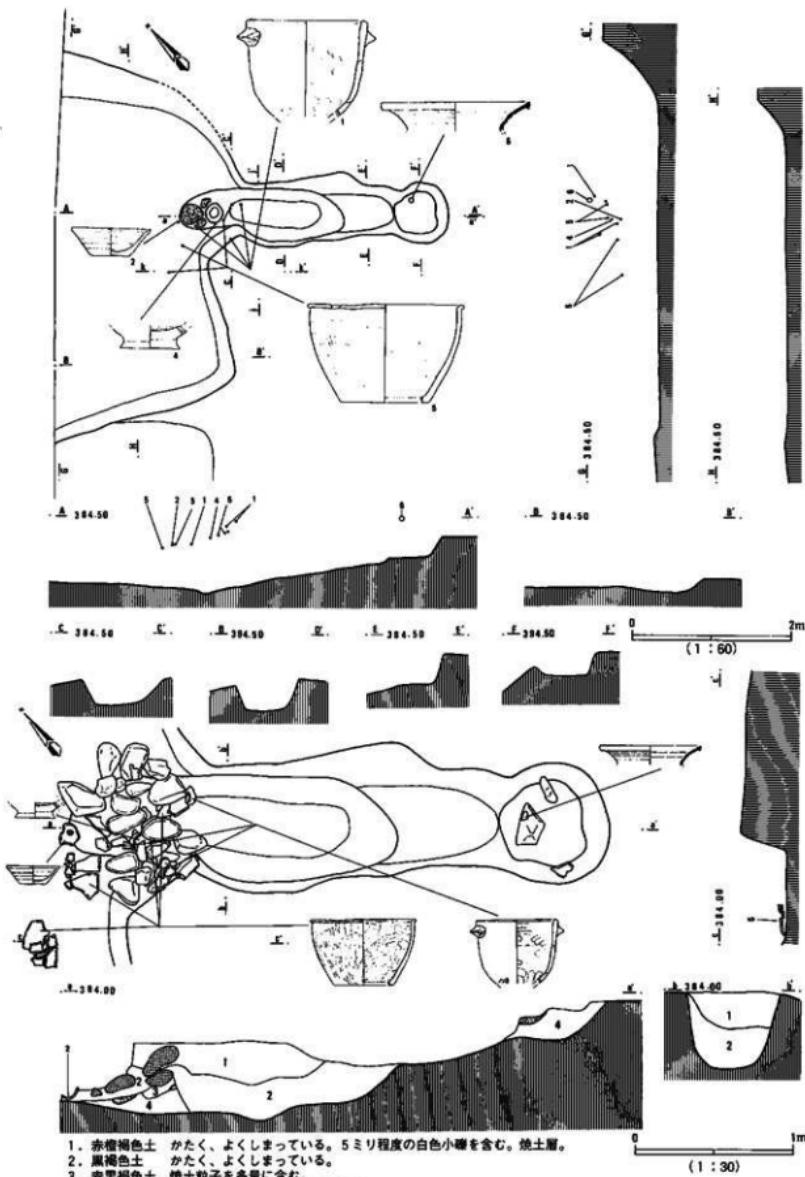
銭貨観察表

擇図 No	出土地点	グリッド	番号	銭名	初鋸年	法量				その他
						直径	孔径	最大厚	重量	
81	—	C-6	55	富壽神寶	818	2.32	0.62 × 0.62	0.17	2.25	
81	—	B-6	56	開元通寶	960	(1.64)	0.7 × 0.65	0.12	1.01	
81	—	B-4	57	紹聖元寶	1094	2.39	0.62 × 0.62	0.13	3.39	
81	—	B-4	58	紹聖元寶	1101	2.48	0.62 × 0.62	0.12	3.74	

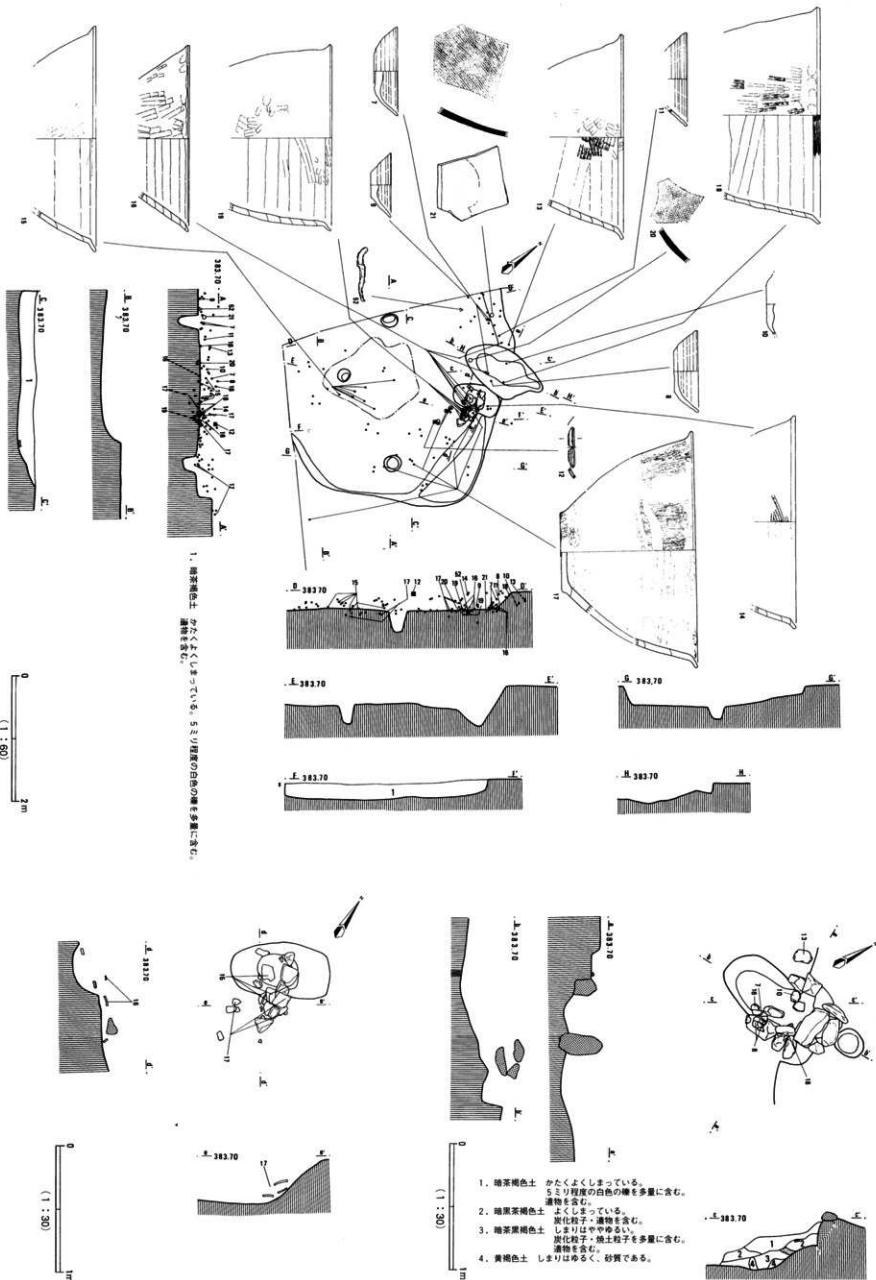


0  
5m  
(1 : 100)

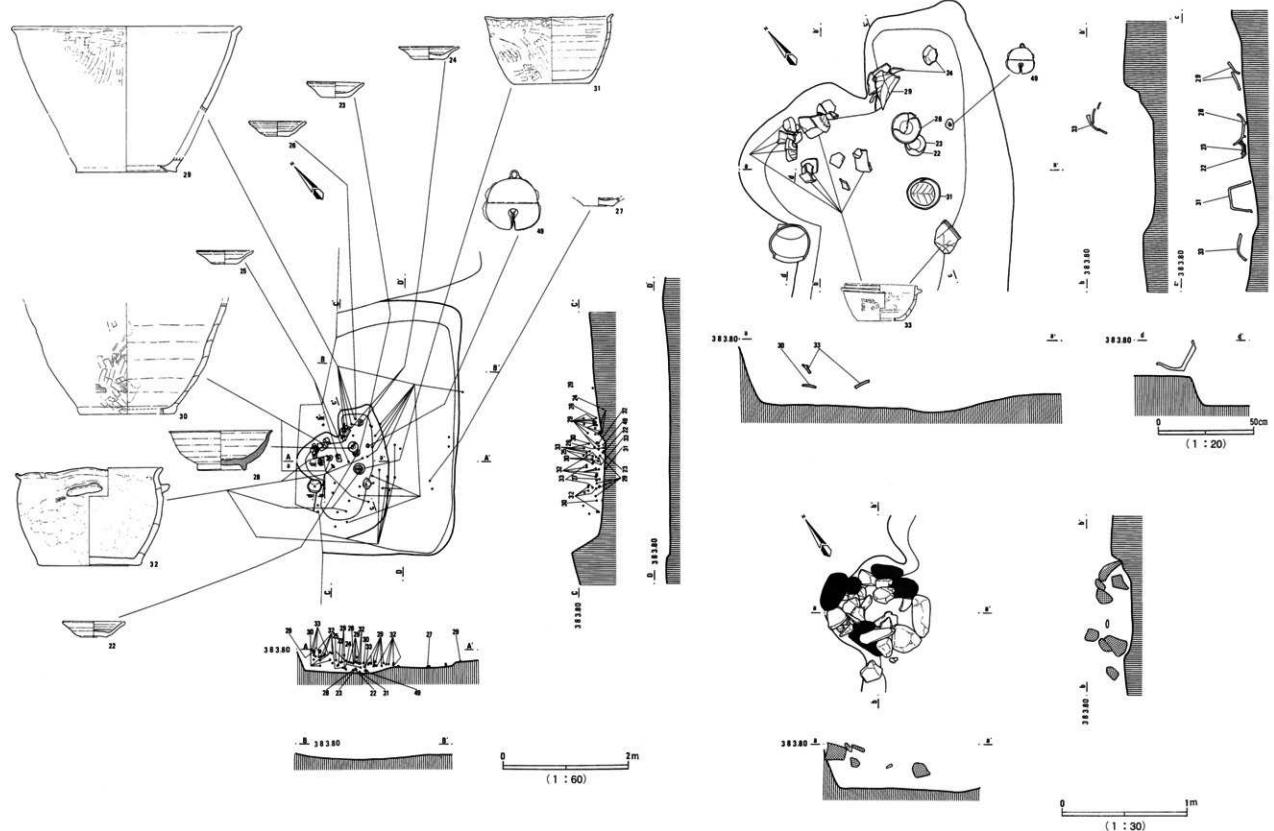
第71図 影井遺跡全体図 (1 : 100)



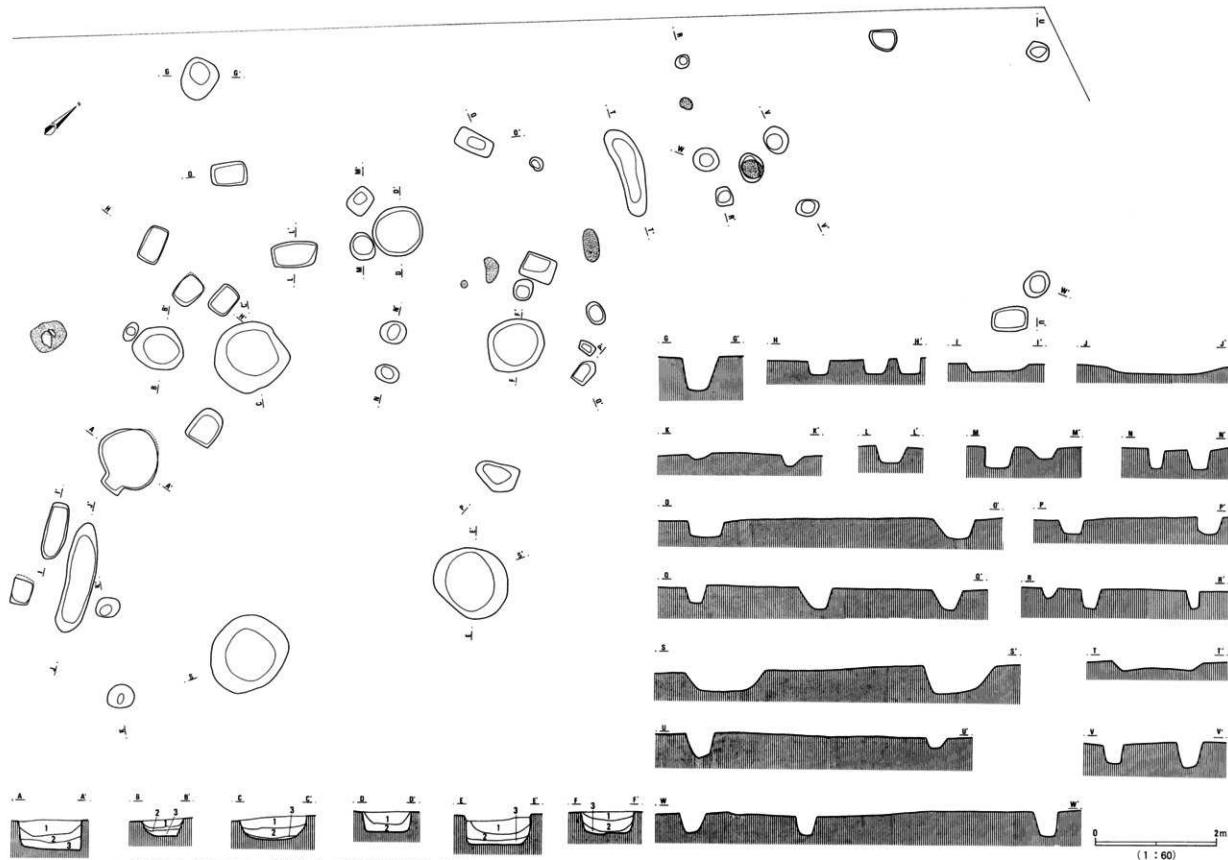
第72図 第1号住居跡



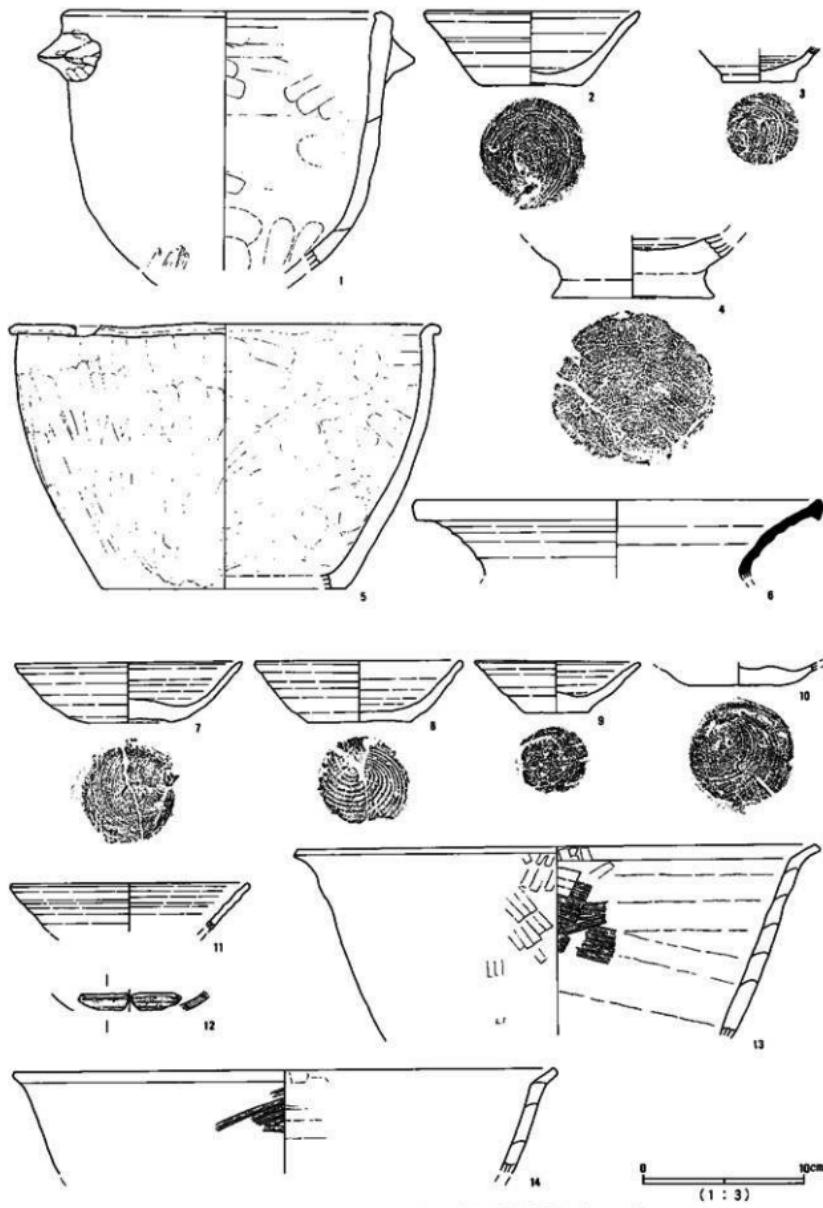
第73図 第2号住居跡



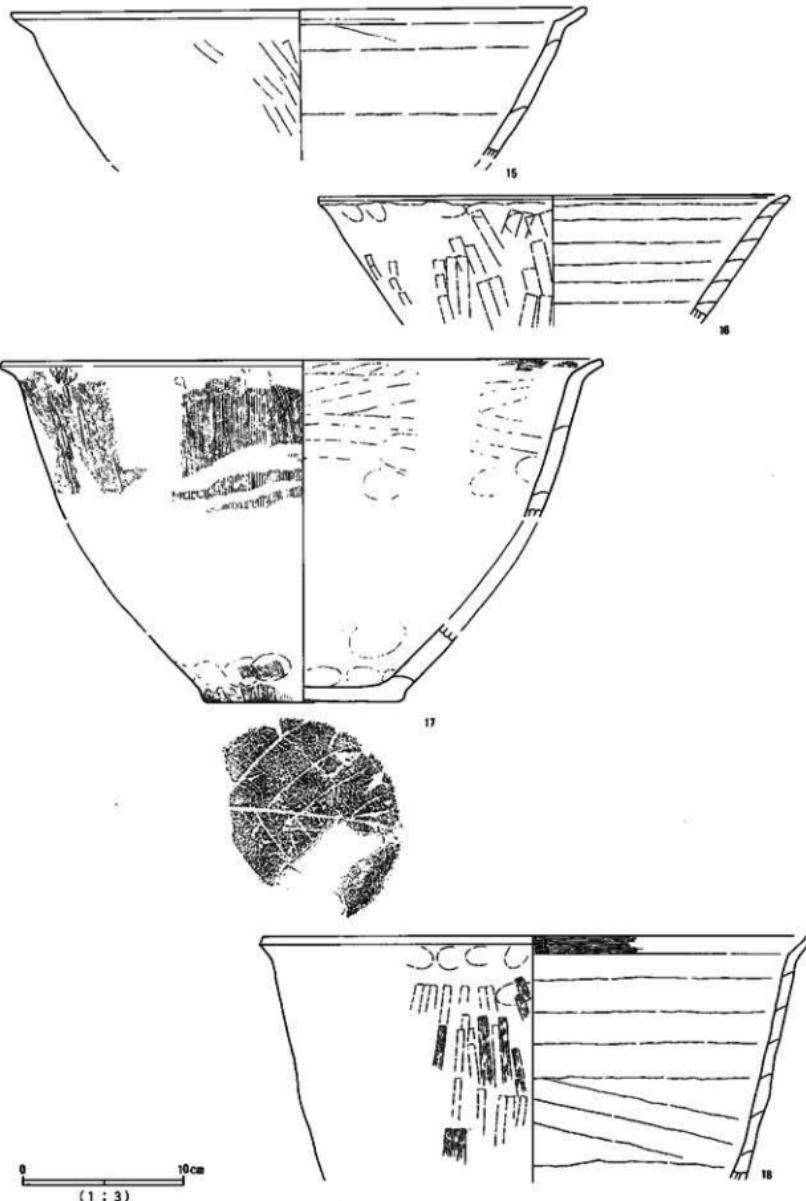
第74図 第3号住居跡



第75図 ピット群

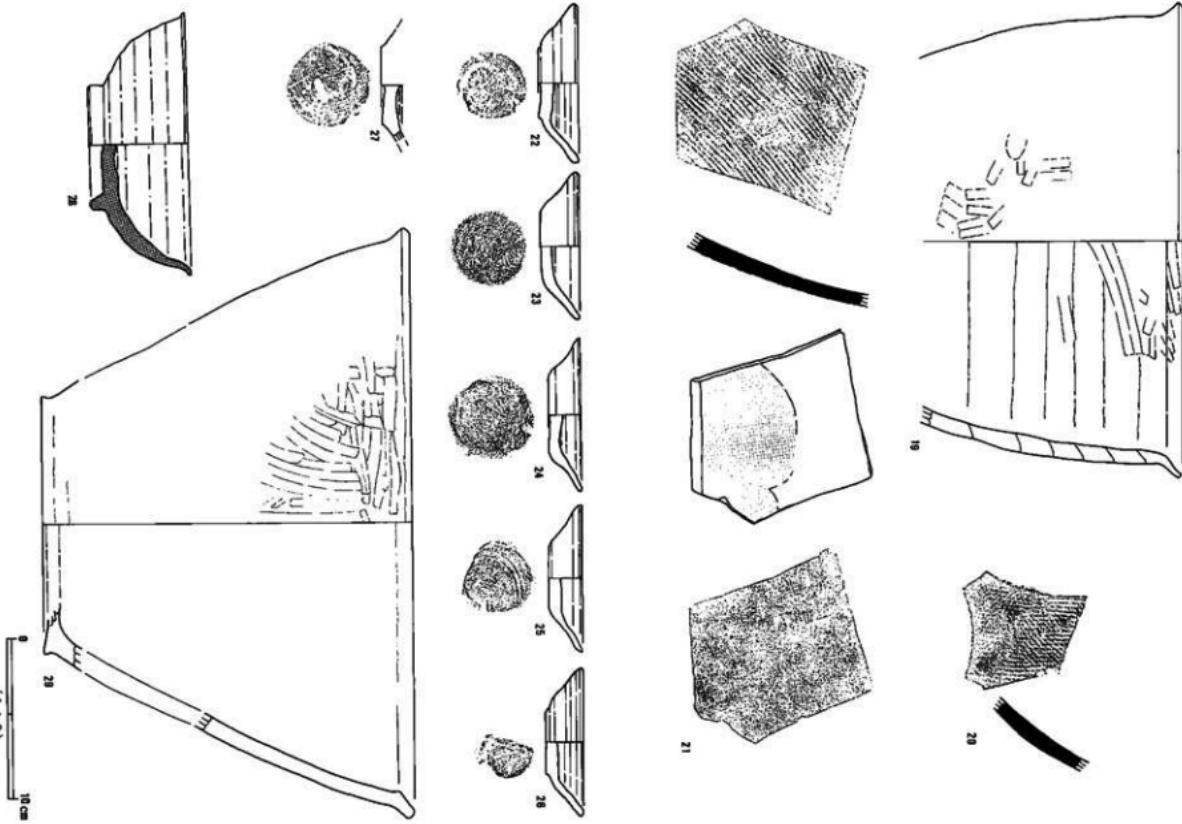


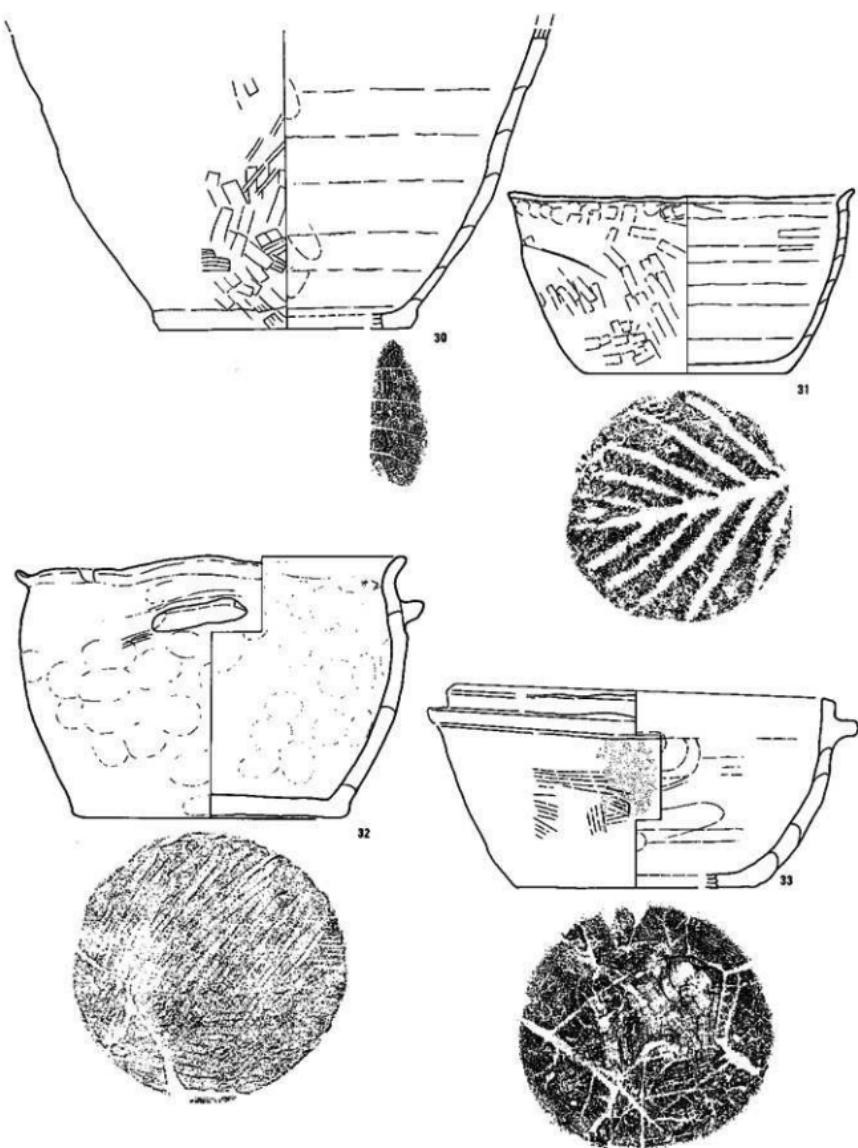
第76図 第1号住居跡（1～6）・第2号住居跡（7～14）



第77図 第2号住居跡（15～18）出土遺物

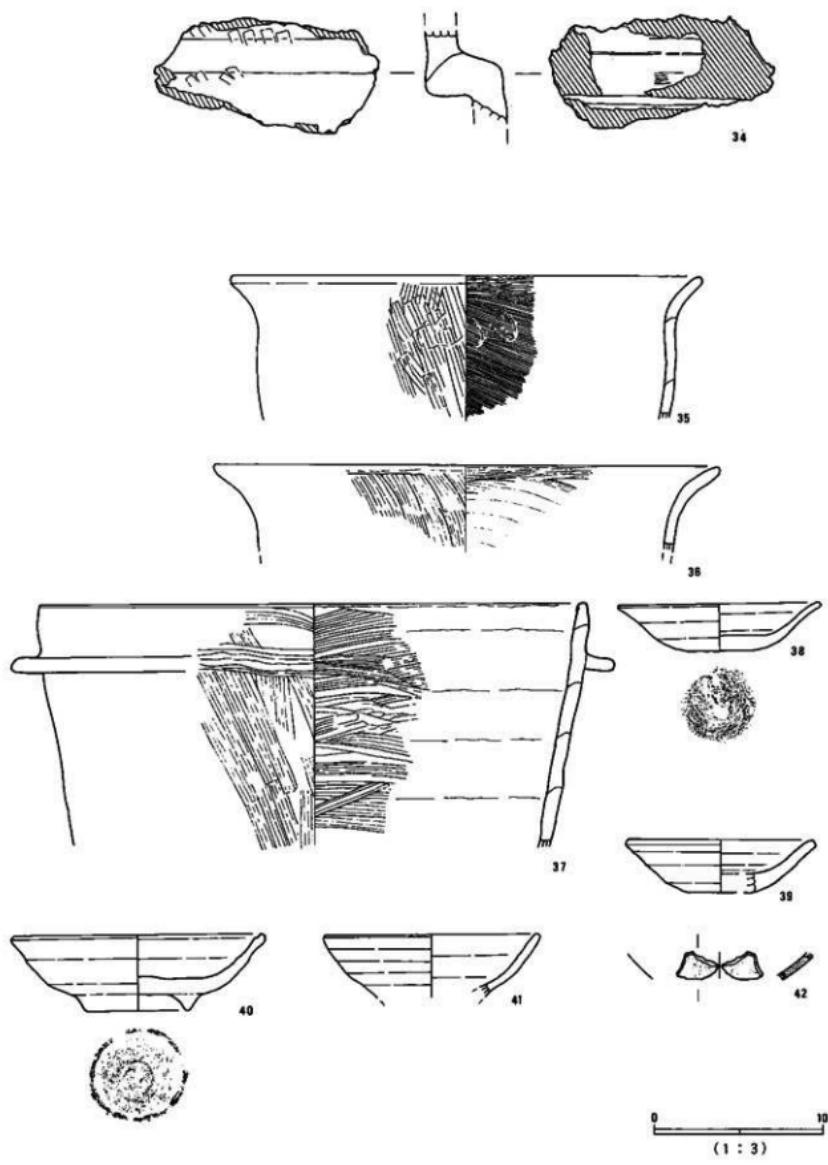
第78図 第2号住居跡 (19~21)・第3号住居跡 (22~29) 出土遺物



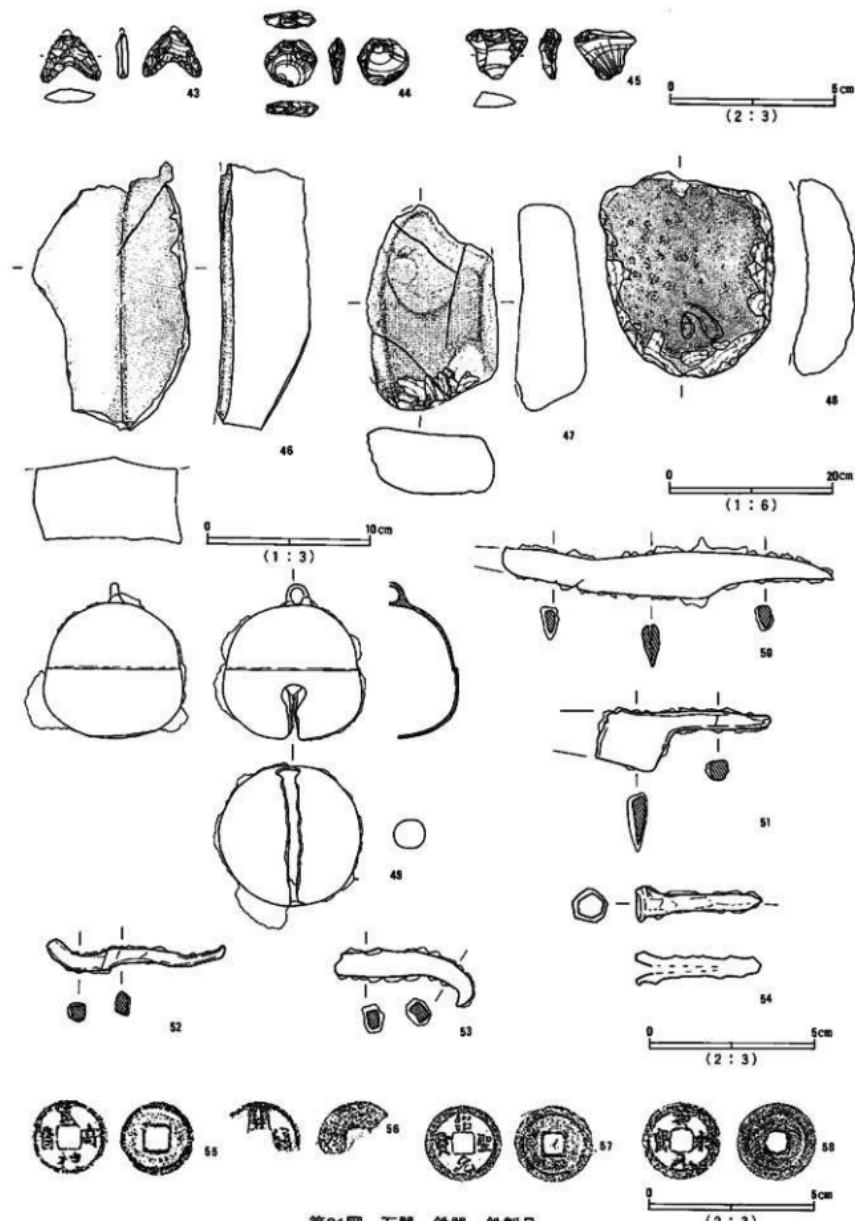


第79図 第3号住居跡出土遺物

0  
(1 : 3)



第80図 第3号住居跡（34）・遺構外出土遺物



第81図 石器・鉄器・鉄製品

## 第7章 保坂家屋敷墓

### 第1節 環 境

本遺跡は今回調査した遺跡群の中では最も北東に位置し、標高は398m前後を測る。保坂家屋敷墓は現在も保坂家が所有する。保坂家は先祖代々この土地を守り続けてきた家柄で、現在は保坂幸義氏が屋敷を守っている。保坂家はもとは黒川金山衆の一員であり、金山衆の中では中規模クラスに位置していたことが知られている。『甲斐国志』には赤尾村在住の「保坂次郎右衛門」の名が見られ、天正二年の棟別等免許の印判状を所蔵していることが記録されており、また田辺源吾氏所蔵の天正十一年の徳川家印判状にも多くの金山衆とともにその名を確認することができる。その他、保坂家にも400点を越える古文書が残されている。

屋敷墓はかつては保坂家の屋敷の一角に位置したが、戦後の農地改革や道路整備により、調査時には屋敷から分断されて所在していた(第82図)。保坂家の南西に位置し、西畠遺跡と近接する。遺跡の規模は最大で南北約8m、東西約14mの不整台形を呈するが、墓域の一角に樹木が位置し、調査不可能な箇所もあった。

### 第2節 墓 石

石塔は墓石のほかに庚申塔や地蔵菩薩像なども含まれている。石塔群は調査区北側にL字状に配置され、墓域の前面に丸堀りの地蔵(第84図20)、その背後左右に灯籠(18・19)が配置される。東側の道路沿いは墓域への入り口になっており、南側に正面を向けた2基の石塔が位置する。一方墓域の東側には、西側に正面を向けた4基の石塔が位置する。さらに7から17は北面に1列に配され、南側に正面を向ける。銘文の年号から15が最も古く、東側へ順番に配置され7が最も新しいものである。16、17はこれらとは差別化されて、立造されたものらしい。

これらの石塔は次の5タイプに分類することが可能である。

A類・笠付で角柱型を呈するもの。

B類・方柱型で、頭部が四角錐型を呈するもの。

C類・舟型光背型で、正面に半肉彫りの仏像を表現したもの。

D類・丸彫りの仏像を台座に据えるもの。

E類・自然石を用いたもの。

次にそれぞれの墓石について、上記した形態に分類しながら詳細に触れていく。

1はB類に分類できる墓石であり、男性1人のものである。右側面に「天保九戌」(1838)と見られる。墓石の規模は高さ1.61m、最大幅は台石で0.56mを測る。

2は庚申塔である。A類に分類できる。左側面には一部朱塗り部分が残存しており、かつては広い範囲で朱が塗装されていたことを知ることができる。右側面には「寛永丁亥九月吉祥日」(1707)の銘が見られる。高さ1.82m、最大幅は笠部分で0.60mを測る。

3はA類の供養塔である。「南無觀世音菩薩」の銘が見られ、背面には「□□享保二十龍集」(1735)の紀年銘が見られる。高さ1.61m、最大幅0.53mを測る。

4はC類に分類することができる墓石である。正面右側には「良窓自賢信女」、左側には「夏屋禪童女」の銘が見られ、裏面右側には「文政九年六月十五日」(1826)、裏面左側には「文化丁丑五月十日」(1817)と記される。おそらく右側は成人女性、左側は幼くして亡くなった女児のものであると思われる。子供を葬る墓石は、寛文期以降急速に増加する傾向にあり、特に子供、さらには女性が亡くなった場合には、このタイプの墓石が選択されることが多い。高さ0.84m、台座で0.31mを測る。

5はD類の墓石である。高さ0.59m、最大幅は台座で0.26mを測る。台座正面には「幻了童子」、右側面には「享保七壬寅上」(1722)の銘が見られる。幼くして亡くなった男児のものであるらしい。

6はC類の墓石であり、全長0.75m、最大幅は台座で0.32mを測る。半肉彫りの仏像の右側には「玉露吟光禪

童女」、左側には「幻香童女」「幻桃童女」の銘があり、女児3名の墓標であることがわかる。また、裏面の銘から「玉露吟光禪童女」が「明和四丁亥十月十四日」(1767)に、「幻香童女」が「天明二壬寅六カ月朔日」(1782)に、「幻桃童女」が「寛政二庚戌三月□日」(1790)にそれぞれ没したことがわかる。とくに「玉露吟光禪童女」の銘はNo.9の墓石でも見られる。

以上、3から6の石塔は東側に配され、西側に正面を向けるグループである。この位置は幼くして亡くなった子供、もしくは女性の墓石を設置する個所と定められていた場所である可能性が高い。

7は墓石でA類に分類できる。高さ1.41m、最大幅は笠部分で0.53mを測る。向かって右側に男性、左側に女性の2名の銘が見られ、紀年名から男性は「明治12年」(1879)に、女性はそれから3年後の「明治15年」(1882)に没したことがわかる。本墓石は墓石の中では最も新しい紀年銘の見られるものであり、本墓石立像後、屋敷墓内には石塔を立てなくなつたものと思われる。

8はA類に分類可能の墓石で、高さ1.42m、最大幅は笠部分で0.53mを測る。男性1名、女性2名の戒名が見られ、このうち男性は3人の中では最も早い「文政癸未」(1823)に、左の女性が最後で「安政六年」(1859)に没している。紀年名のある墓石13基のうち、2番目に新しい紀年名を持つ。

9はA類に属する。高さ1.30m、最大幅は笠部分で0.48mを測る。男性1名、女性2名の計3名の戒名が見られ、右側面には3人の没した年が記されている。最も没したのが早いのは右側の女性で、「明和三丙戌」(1766)、最後は「文政三庚辰」(1820)である。さらに左側面には幼くして没した女児であろうか、「玉霜吟光禪童女」の銘が見られる。この人物名はNo.6の石塔でも見られる。おそらくはNo.9の「花室妙花大姉」と没した時期が近かったためか、同じ石塔にその名を刻まれ、成仏を願ったものと思われる。本墓石は13番目に立造されたものと思われる。

10はやはりA類に分類することの出来る墓石である。高さ14.4m、最大幅は笠部分で0.50mを測る。本墓石には男女2名の戒名が見られ、紀年名から女性は「延享二乙丑年」(1745)、男性は「宝暦九巳卯年」(1759)に没したことを知ることが出来る。紀年名のある墓石のうち、10番目に作られたものである。

11はA類に分類できる墓石であり、高さ11.4m、最大幅は笠部分で0.50mを測る。正面には男女2名の戒名が見られ、女性が「正徳二壬辰」(1712)、男性が「元文二丁巳」(1737)に没したことを知ることが出来る。また、右側側面には、幼くして亡くなった男児であろう、幻童子が「享保七壬寅」(1722)に没したことを示す銘文が見られる。この人物はNo.5のD類の石塔にも記される人物であり、上記2名の人物と没した時期が近いために、同じ石塔に属したか、もしくは供養のために記されたものと思われる。またその隣には「柏宝暦二壬申十二月廿九日」(1752)の銘が見られるが、この人物の戒名が見られないため、どの人物のものなのか不明である。本墓石は6番目に古いものである。

12はA類に分類することのできる墓石で、高さ1.49m、最大幅0.50mを測る。男性1名・女性2名の合計3名の戒名が見られ、最も古い紀年銘は「延宝八」(1680)、新しいものは「正徳元卯」(1711)である。戒名に「信士・信女」が用いられているのは、家の格式の表れというよりは、時代背景によるものであると思われる。本墓石は5番目に古いものである。

13はA類に分類できるもので、高さ1.43m、最大幅は笠部分で0.49mを測る。正面には男性2名の銘が見られ、側面には「月日」の紀年名のみで、年号は不明であるため築造された年代は定かではない。しかし戒名がいずれも「信士」を用いていること、本墓石を含む北側の墓石群が西から東へ古いものから新しいものへ順番に並んでいることを考慮すると、この墓石が3番目に古いものである可能性が高い。

14はA類に分類できるもので、高さ1.42m、最大幅は笠部分で0.52mを測る。男女2名の戒名がみられ、右側面には「寛文二壬寅」(1662)の銘が見られる。正面右側の男性の没年号であろうか。戒名に「禪定門」「禪定尼」とあり、石塔の立造が一般化するなかで、比較的古い段階のものであることがわかる。左右側面にそれぞれ「父」「母」と見えるので、おそらくは子供等による立造であると推測される。本石塔は2番目に古いものであると考えられる。

15はA類に分類できるもので、高さ1.41m、最大幅は笠部分で0.50mを測る。正面には男女2名と思われる戒名が見られ、右側面には「元和四戌午」(1615)、左側面には「明暦元乙未」(1655)の紀年名が見られる。とくに前者は本石塔群に記された紀年銘の中で、最も古いものである。戒名に「釋」を用いているのは、宗派が浄土真宗であったことの表れであり、石塔立造の初段階では、保坂家が浄土真宗に属していたことが推測できる。右側面にある「六親眷属」の意味は、不明である。墓石の立像が一般化してくるのが、寛文期以降であることや、紀年銘などから、1655年以降に立造されたものであると思われる。また、裏面には本石塔の施主として、「保坂主米口次カ中」の名が見られ、当時すでに「保坂」を名乗っていたことを知ることができる。

16はD類に分類できるもので、墓石である。丸彫りの仏像で、左手には払子を持つ。おそらく男性1名のものであると思われる。高さ1.12m、最大幅は台座で0.40mを測る。台座下は六角柱型を呈し、正面に戒名、右面にはおそらく没年号「寛政八」(1796)が見られる。紀年銘のある墓石の中では9番目に古いものである。

17はE類に属するもので、墓石であると思われる。高さ0.77m、幅0.45mを測り、正面に男女2名の戒名が見られる。自然石の正面に銘文が見られるだけで紀年銘その他は見られない。そのため立造の時期は不明である。

以上が墓域北側に位置し、南側に正面を向けるグループである。保坂家の歴代当主とその関係者の石塔で、西から東側へNo15から順番に並べていったものと思われる。No16・17については、何か理由があるのであろうか、これらと差別化されて、15の西側に位置する。

墓域の前面には丸彫りの仏像(19)とその左右に観音像(18・20)が立地する。観音像は2体とも頭部を欠損する。3体とも供養塔の役割を担うものであると思われる。

18はD類に分類可能な供養塔である。現状で高さ13.1m、最大幅は台座で0.53mを測る。とくに観音像は風化が著しい。

19はD類に属する供養塔で、自然石の上に配置されている。仏像のみの高さは0.79m、最大幅は0.70mを測る。

20はやはりD類に属する供養塔で、高さは現状で12.20m、最大幅は台座で0.50mを測る。台座は六角柱状で、正面には「秩父」、右面には「寛延二巳九月保坂氏」、左面には「西国」、裏面には「坂東」の銘がそれぞれ見られる。「寛延二」の銘から、保坂氏により1749年に作られた、廻国供養塔である。

### 第3節 墓坑

保坂家屋敷墓では15基の墓石が所在し、男性14名、女性20名の名が見られたことから、最大30名前後の墓坑が所在することを想定していた。そのためまず、調査区内の精査を行った。精査により17号墓石直前で改葬後に納められたと見られる歯が容器に入っている出土した。容器はプラスチック製で、茶色の蓋がついていた。プラスチック容器などの様子から大正期及び昭和期に埋められたものであろうことが推測される。

次に墓石列下層および墓域中央部に2本のトレンチを設定し、遺構の密度を確認する作業を行った。

調査区北側のトレンチを第1トレンチ、南側トレンチを第2トレンチとして、それぞれ約1m程度、手掘りで掘り下げた。上層は盛土であったが、それより下層は砂質の黄茶褐色土で構成される地山層であり、多数の巨礫が土層中に混在していた。これらは墓域設定時から所在したと思われるため、このような環境に継続的に埋葬を行うことは困難であったのだろうか、トレンチ内では墓坑は認められなかった。

トレンチ調査の後、墓域内の東に所在する桜の大木の根を重機により抜根した。その結果この桜の根の中心部分直下より焼き物に入った人の毛髪が出土した。毛髪は太さ1.5センチメートル程が一束になっており、元は黒色であったと思われるが茶色に変色していた。(第2号墓)

さらにこれより若干南側の箇所を1m程掘り下げたところ、頭蓋骨を含む人骨片が出土した。人骨片は頭蓋骨上部、四肢骨片等であり頭蓋骨を上層で、四肢骨をその下層で確認したがいずれもまとまっていた。比較的良好な状態であったが、いずれも破片であり一体分は認められなかった。また墓坑内では棺等の痕跡を確認することはできなかった。(第3号墓)

#### 第4節 遺物

遺物は大正期及び昭和期の陶磁器が若干出土した。このうち1は土瓶である。底径13.2cm、器高20.5cmを測る。器外面には全体に鉄釉が施される。胴部には焼き継ぎ痕が見られる。2・3は第2号墓の遺髪の入っていた容器である。2は蓋、3は壺でセット関係にあるが、3は取り上げ時に一部破損してしまった。明治末から見られる形態であるが、壺の形態から大正期の初頭に位置づけられる。2の蓋の裏面には墨書が見られるが不鮮明で内容は不明である。4は急須の蓋の破片である。直径3.5センチメートルを測る。5・6は湯飲み破片である。いずれも供養物であると思われる。

#### 第5節 まとめ

以上保坂家屋敷墓の墓石群、及び発掘調査の結果について報告した。これらの石塔の中で最も古い紀年銘は1615年、最も新しいものは1882年であることは、既に塩山市史等で良く知られている。しかし、本屋敷墓を見ていくうちに、これらの石塔群は江戸時代の墓石立像の慣習や時代背景などが如実に反映されていることを知った。ここでは、保坂家に見る江戸時代の墓塔築造状況について概観してみたい。

前章で見たように保坂家屋敷墓の石塔は、AからEの5種類に分類可能であった。これらをまとめたものが第1表である。この表から保坂家では屋敷墓造営開始時から終焉期まで、ほぼ一貫して笠付角柱型の石塔を用いていたことがわかる。

一般的に墓標としての石塔が出現するのは寛永期前後（1624～1643）といわれ、そのなかでもとくに笠付方柱型の墓塔が登場するのは、正保から万治（1664～1659）である。この17世紀中葉をもって墓塔出現期ととらえ、第1の画期とする。さらに第2の画期として17世紀後半の寛文期（1661～1672）には、それら墓塔の造立がほぼ一般的になり、元禄期頃までには確立される。それまで墓塔の造立を行ってきた武士層に加え、上層農民も開始するなど、広く墓塔が立てられるようになる。これに伴って庚申塔や廻国塔など、民間信仰に伴う石塔や神社などの石像物も作られるようになる。また一つの墓塔に複数の名が記されるようになるのも、このころのことである。これは経済的な事情の他にも、子孫が年忌に合わせて墓塔を造立するという背景があるようである。さらにこの時期には、子供の墓が出現する。子供の墓は半肉彫りの如意輪觀音像や地蔵菩薩像を用いた舟形の石塔に戒名を刻むのが一般的であるようである。女性の場合は觀音像に戒名を刻む例も見られる。

次に戒名について見ていく。戒名について見ても、やはり18世紀前半に画期を見いだすことが出来るようである。18世紀前半以前には信士・信女・禪定門・禪定尼・禪尼などが一般的であったのに対し、享保以降になると院号居士・院号大師・居士・大師・院号信士・院号信女・信士・信女等が用いられるようになる。つまり

種類	合計数	紀年銘あり	石塔No	紀年銘なし	石塔No
A 笠付角柱型	9	8	No 7・No 8・No 9・No 10・No 11・ No 12・No 14・No 15	1	No 13
B 方柱型	1	1	No 1	0	
C 舟形光背型	2	2	No 4・No 6	0	
D 丸彫り型	2	2	No 5・No 16	0	
E 自然石型	1	0		1	No 17
供養塔	5	3	No 2・No 3・No 19	2	No 18・No 20

第1表 石塔分類表

年代	年号	成人（笠付方柱型）	成人（丸彫型・方柱型）	子供（舟型・丸彫り）	供養塔
17世紀中頃	元和元（1615）	No 15 榛定門			
	明暦元（1655）	No 15 榛尼			
	寛文二（1662）	No 14 榛定門			
17世紀後半	延宝八（1680）	No 12 信士			
	貞享四（1687）	No 12 信女			
18世紀前半	寛永丁亥（1707）				No 2 庚申塔
	正徳元（1711）	No 12 信女			
	正徳二（1712）	No 11 大姉			
	享保七（1722）	No 11 童子		No 5 童子（丸彫型）	
	享保二十（1735）				No 3 善蔵像
	延享二（1745）	No 10 大姉			No 19 圓國塔
18世紀後半	寛延二（1752）	No 11 居士			
	宝曆九（1759）	No 10 上座			
	明和三（1766）	No 9 大姉		No 6 童女（舟型）	
	明和四（1767）	No 9 童女		No 6 童女（舟型）	
	天明二（1782）			No 6 童女（舟型）	
	寛政二（1790）			No 16 居口（丸彫り型）	
	寛政八（1796）				
19世紀前半	文化元（1804）	No 9 居士		No 4 童女（舟型）	
	文化丁丑（1817）				
	文政三（1820）	No 9 大姉			
	文政六（1823）	No 8 大姉		No 4 信女（舟型）	
	文政九（1826）				
19世紀後半	天保九（1838）		No 1 法居		
	嘉永四（1851）	No 8 居士			
20世紀前半	安政六（1859）	No 8 大姉			
	明治十二（1879）	No 7 院号居士			
	明治十五（1882）	No 7 院号大姉			

表2 戒名推移表

それまで一般的に用いられてきた榛定門・榛定尼などは、享保以降には見られなくなる。また子供の戒名として、童子・童女などが用いられるようになる。戒名は信士・信女→居士・大姉→院号居士・院号大姉というように階級が上位に位置づけられることが知られているが、これらが江戸時代を通じて普遍的なものであったわけではない。というのも17世紀代には、信士・信女が一般的な戒名であったのに対し、18世紀以降は次第に居士・大姉が多く用いられるようになる。江戸幕府は文化三年（1806）に「御掲目」を出し、百姓・町人が院号・居士号をつけることを禁止するなどの例からもその様子を知ることが出来る。

以上のような墓塔造立事情を勘案した上で、本屋敷墓について考えてみることにしたい。表2は本屋敷墓に見ることのできる戒名を、石塔の形態ごとに年代順に並べたものである。本屋敷墓の墓塔群のうち、No15は最も古い石塔である。男女2名の銘が見られ、元和元年（1615）及び明暦元年（1655）の紀年銘が見られる。「榛定門・榛尼」の戒名が見られることから、遅くとも17世紀後半には造立されたものと考えられ、墓塔の中でも最初に立てられた可能性は極めて高い。また、No15の右側の戒名頭には「榛尼」が見られる。榛尼は浄土真宗系の戒名であり、屋敷墓造営当初は浄土真宗であった可能性も否定できない。なおNo14でも「榛定門・榛定尼」の戒名が見られる。これ以降「榛定門・榛定尼」を付する戒名は見られなくなることから、No15・14は第1の画期である、墓塔出現期の範疇に含まれるものであることを理解できる。

次にNo12は戒名に「信士・信女」が用いられている。14と12の間に立つNo13は、紀年銘は記されていないものの、戒名に「信士」が用いられている。いずれも笠付方柱型の墓塔であり、西から東へ順番に造立されていることを考えると、No13は17世紀後半に造立された可能性が高い。13・12の戒名はいずれも「信士・信女」が用いられる。上述したように一般的にも17世紀後半には「信士・信女」が多く用いられる傾向がある。本墓塔もまた、これに違わなかったようである。

No11・10は18世紀代に、No9～8は19世紀に造立されたものと思われる。この時期になると「信士・信女」は用いられなくなり、「居士・大姉」が最も用いられるようになる。しかしここで長く「居士・大姉号」を用いることができたのは、保坂家に古くからの伝統と格式が備わっており、それを周囲が認めていたことの表れであるとも解釈できよう。また保坂家においても18世紀中に子供の墓や供養塔が見られるようになる。この時期に供養塔が相次いで造立できること、また造立された墓塔が最も多い時期が当該期であることから、18・19世紀中に、保坂家が安定していたことを推し量ることができる。

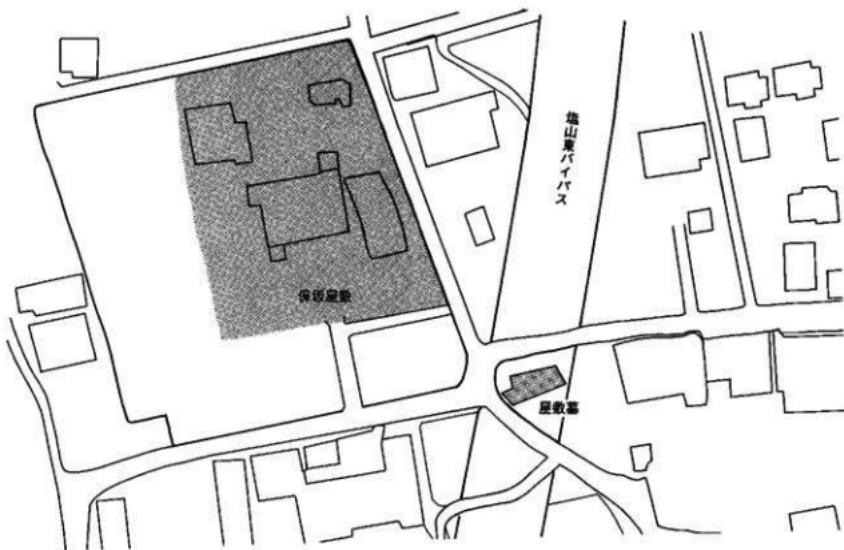
No7は唯一20世紀前半に造立された墓塔で、これが一番最後のものとなる。戒名は「院号居士・院号大姉」で、それまで用いていた「居士・大姉」より、さらに上位の戒名を持つ。

以上石塔群について概観した。墓塔出現期にはすでに本屋敷墓にも当該期の墓塔が存在し、それ以降約300年間屋敷墓が営まれたことは、その間保坂家が常に安定していたものと思われる。また早くから墓塔を造立できたのは、既にそれ以前に「金山衆」の一員であったという背景があったからにはかならない。

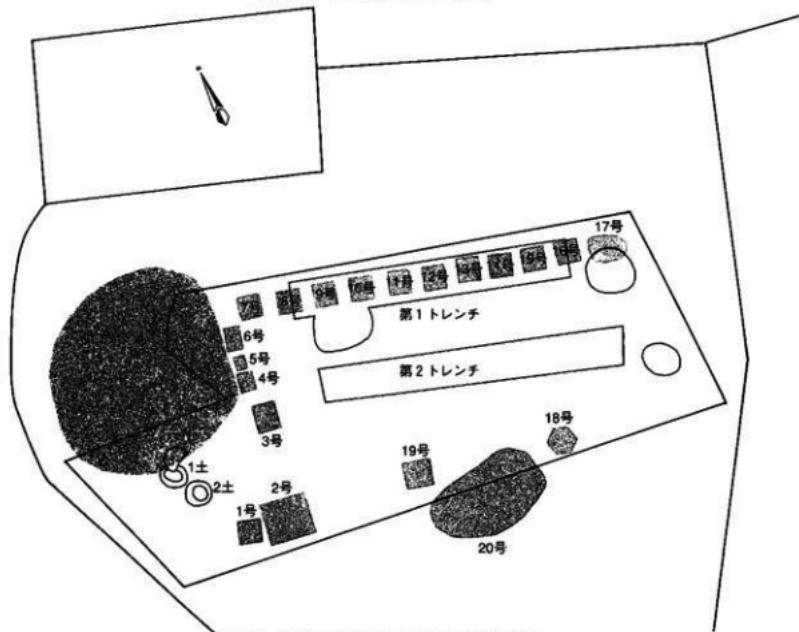
保坂家には約400点の近世文書が残っている。今後はこうした文字資料からの検討により、さらに葬送儀礼の様子やその他近世の時代背景などについても明らかにしていくことで、本調査から得られた資料がその研究の一助となれば幸いである。

#### 参考文献

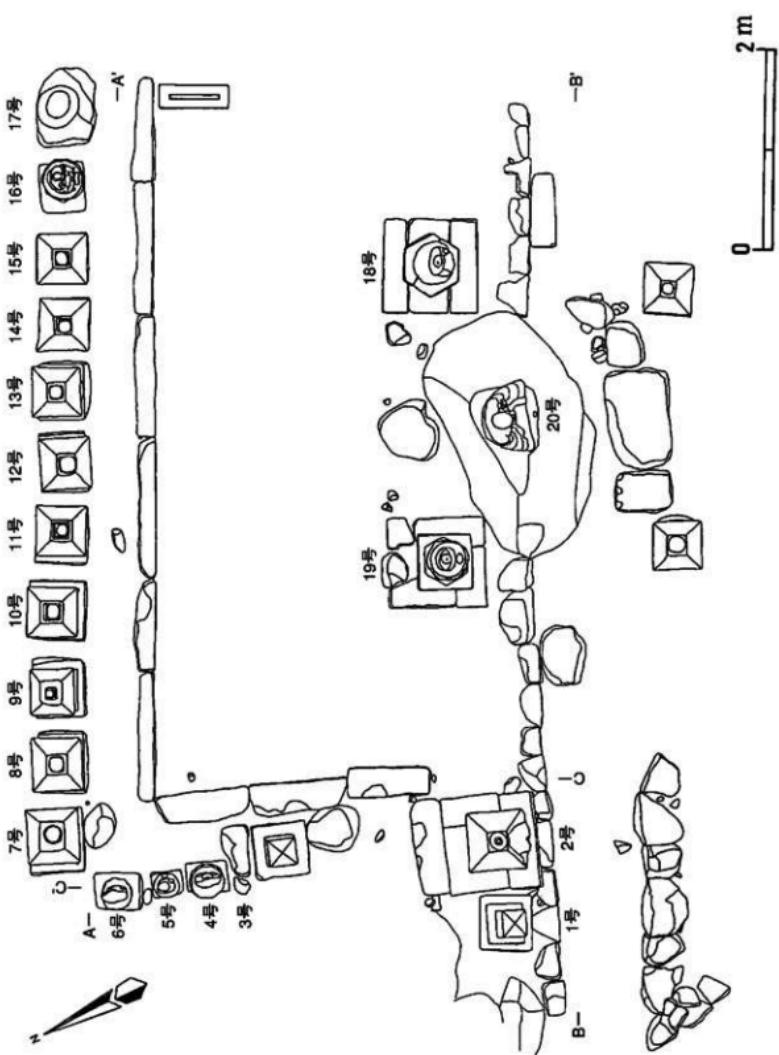
- ・『塙市史』資料編第一巻 原始・古代・中世 平成8年3月
- ・『石見銀山』石見銀山遺跡石像物調査報告書1 島根県教育委員会・大田市教育委員会 2001. 3
- ・小高泰男「石塔の在り方から社会の一側面を探る」『研究速報誌』第43号 財団法人千葉県文化財センター 平成7年4月
- ・西海賢二ほか「秦野市下大槻南平地区近世墓標調査報告」「盆地の村」秦野市史民俗調査報告書5 秦野市 昭和61年
- ・平澤和夫 「府中市の近世墓の調査の概略について」『府中史談』第12号 府中史談会1986
- ・谷川章雄 「近世墓標の変遷と家意識-千葉県市原市高浦・斐老地区の近世墓標の再検討一」『史觀』第121冊 平成元年9月



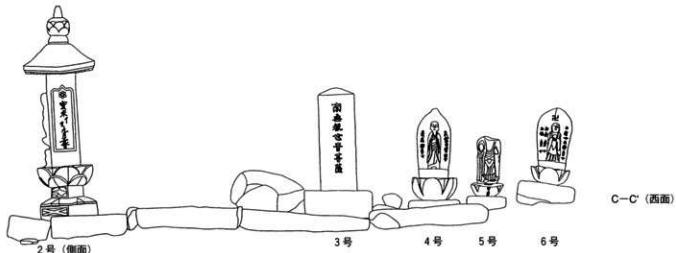
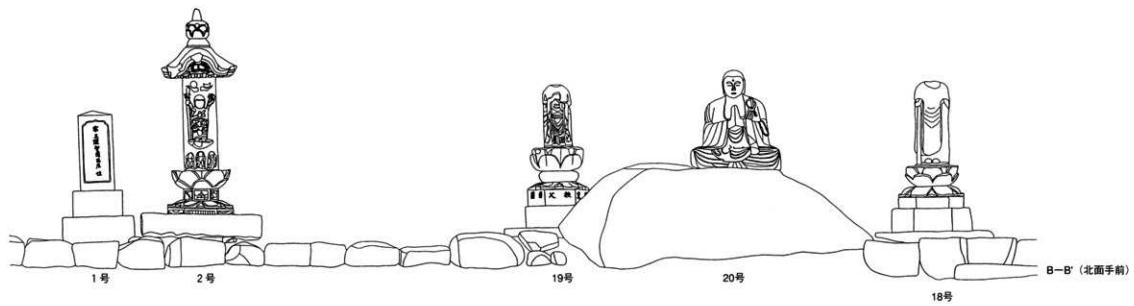
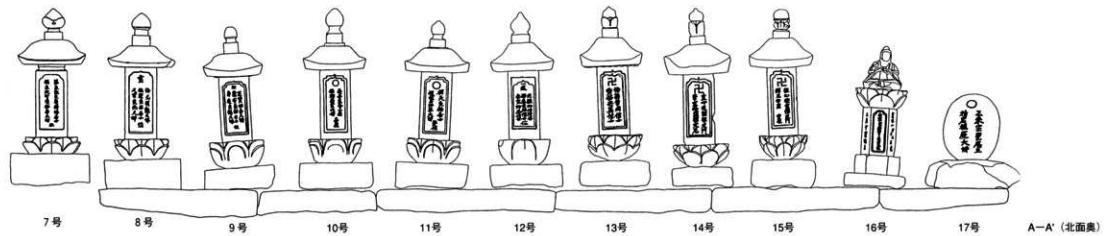
第82図 保坂家屋敷周辺図



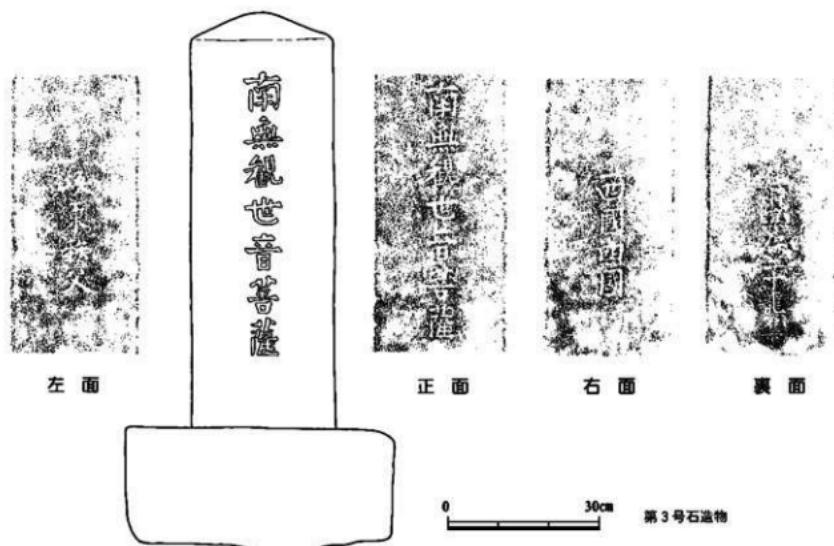
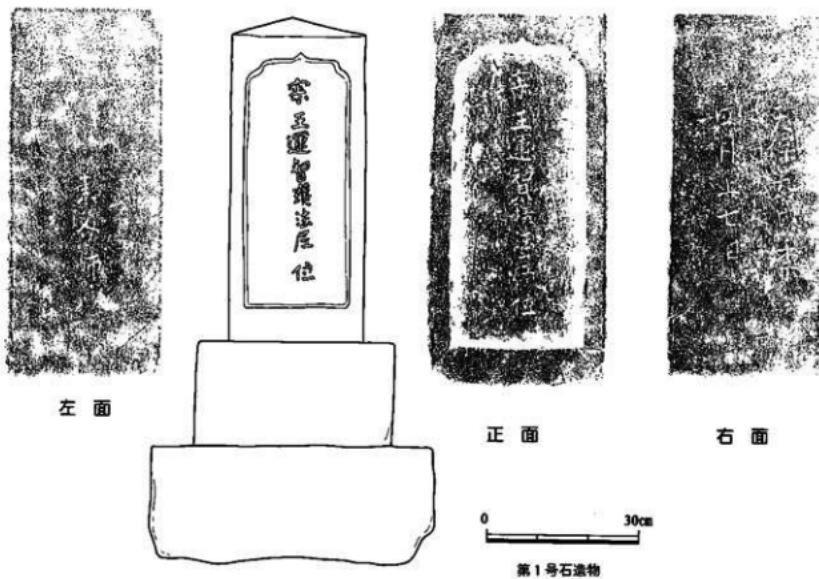
第83図 屋敷墓全体図 (82図と方位共通)



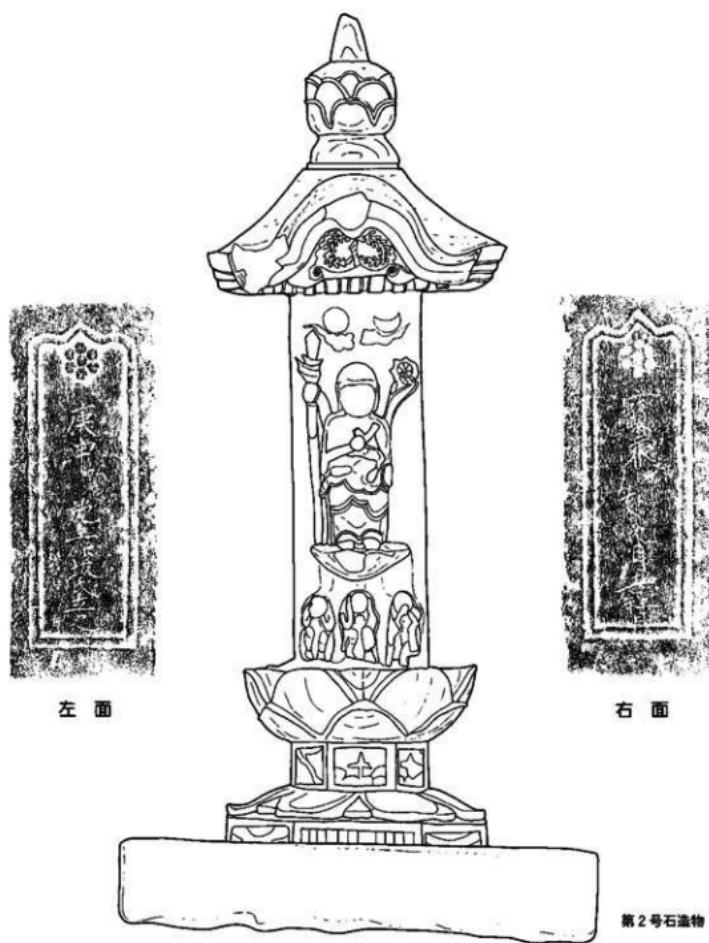
第84図 墓域平面図



第85図 石造物側面図



第86図 石造物① (1 : 5 実測図のみ)

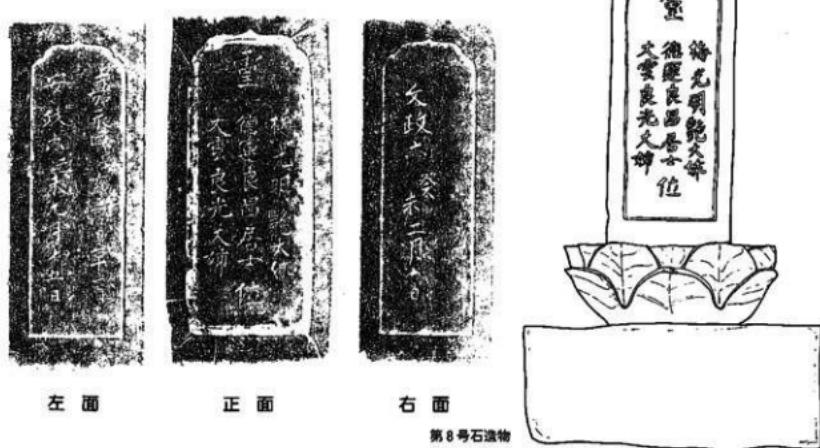
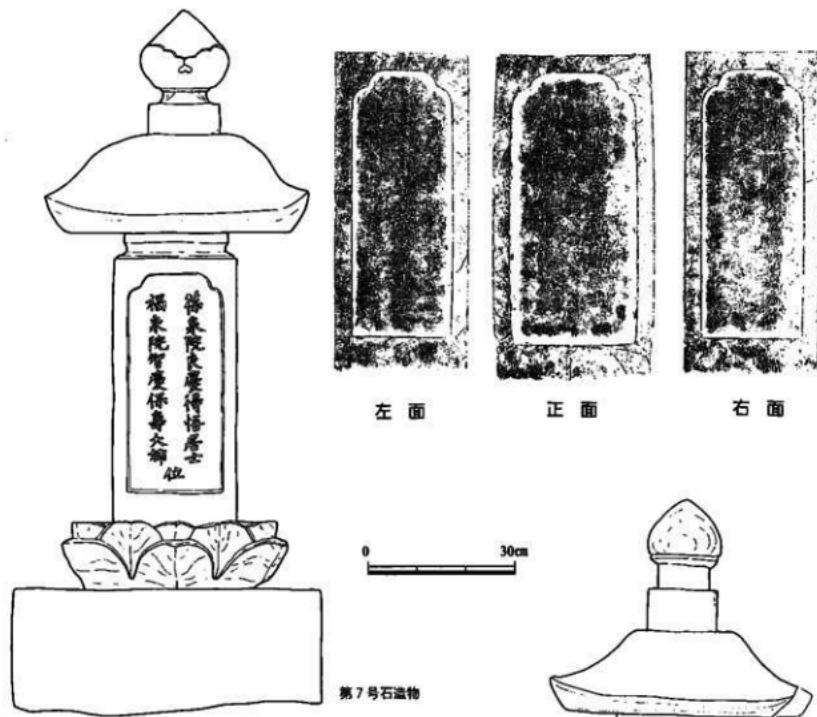


0 30cm  
(1 : 5)

第87図 石造物② (1 : 5 実測図のみ)

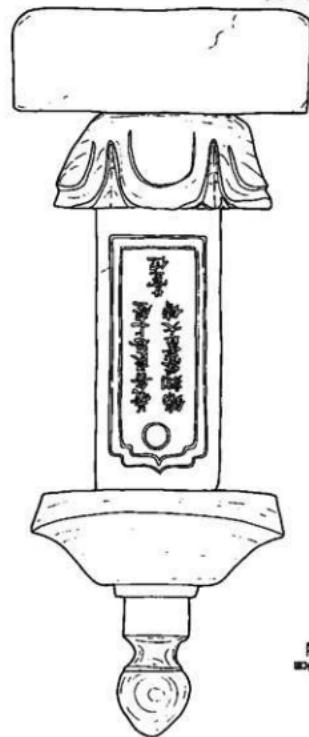


第88図 石造物③ (1 : 5 実測図のみ)



第89図 石造物④ (1:5 実測図のみ)

第90圖 石造物⑤ (1:5実測図より)



第10号石造物

右面

正面

左面



第9号石造物

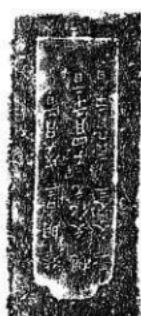
30cm

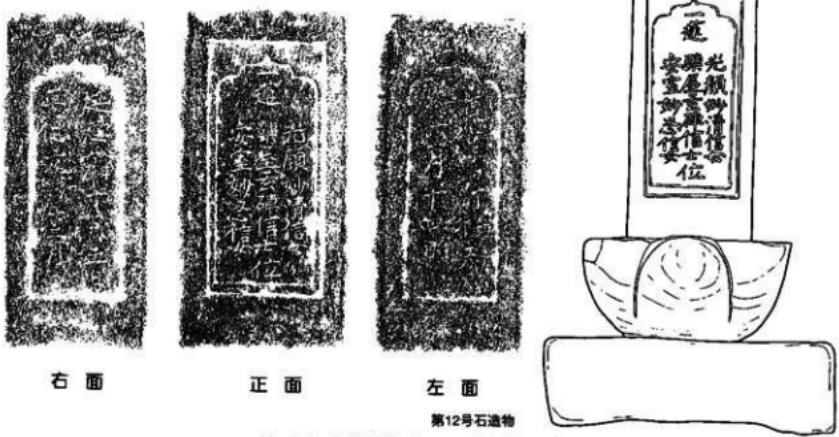
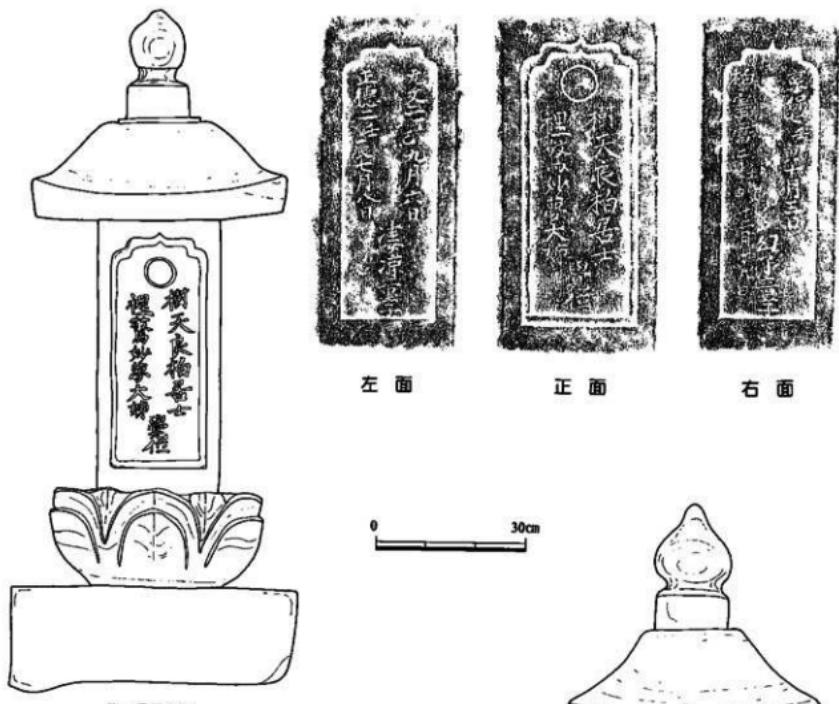


右面

正面

左面





第91図 石造物⑥ (1 : 5 実測図のみ)

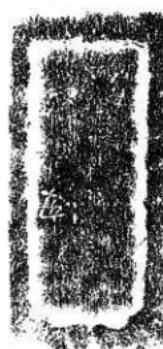
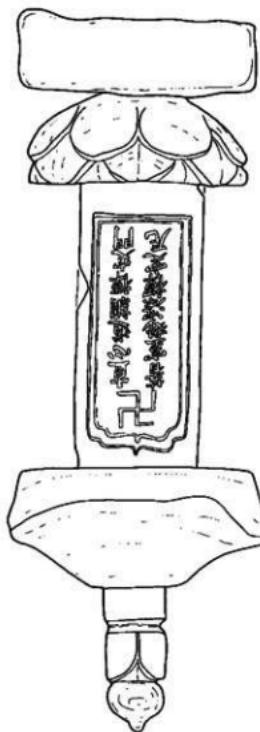
第92圖 石造物⑦ (1:5実測図のた)

第14号石造物

右面

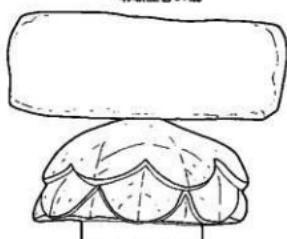
正面

左面



第13号石造物

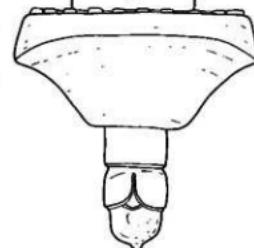
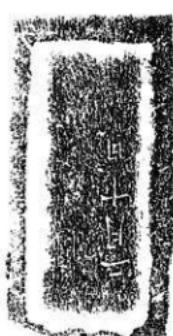
30cm 0

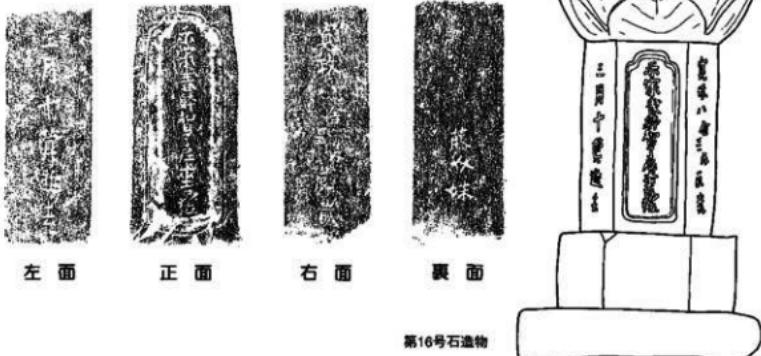
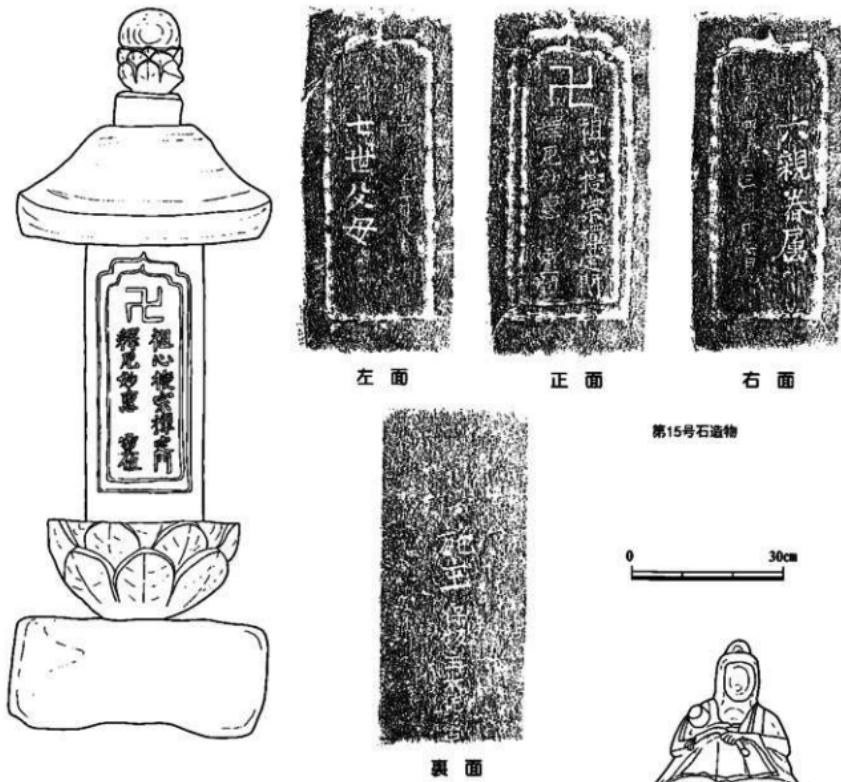


右面

正面

左面





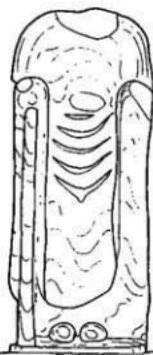
第93図 石造物⑧ (1 : 5 実測図のみ)



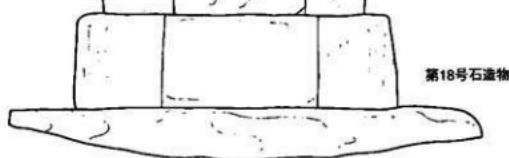
第17号石造物



正面



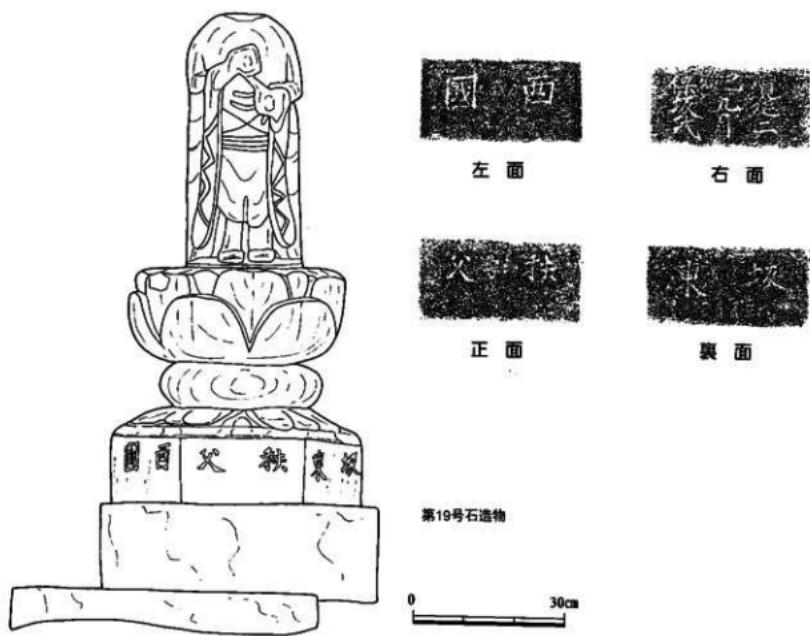
第20号石造物



第18号石造物

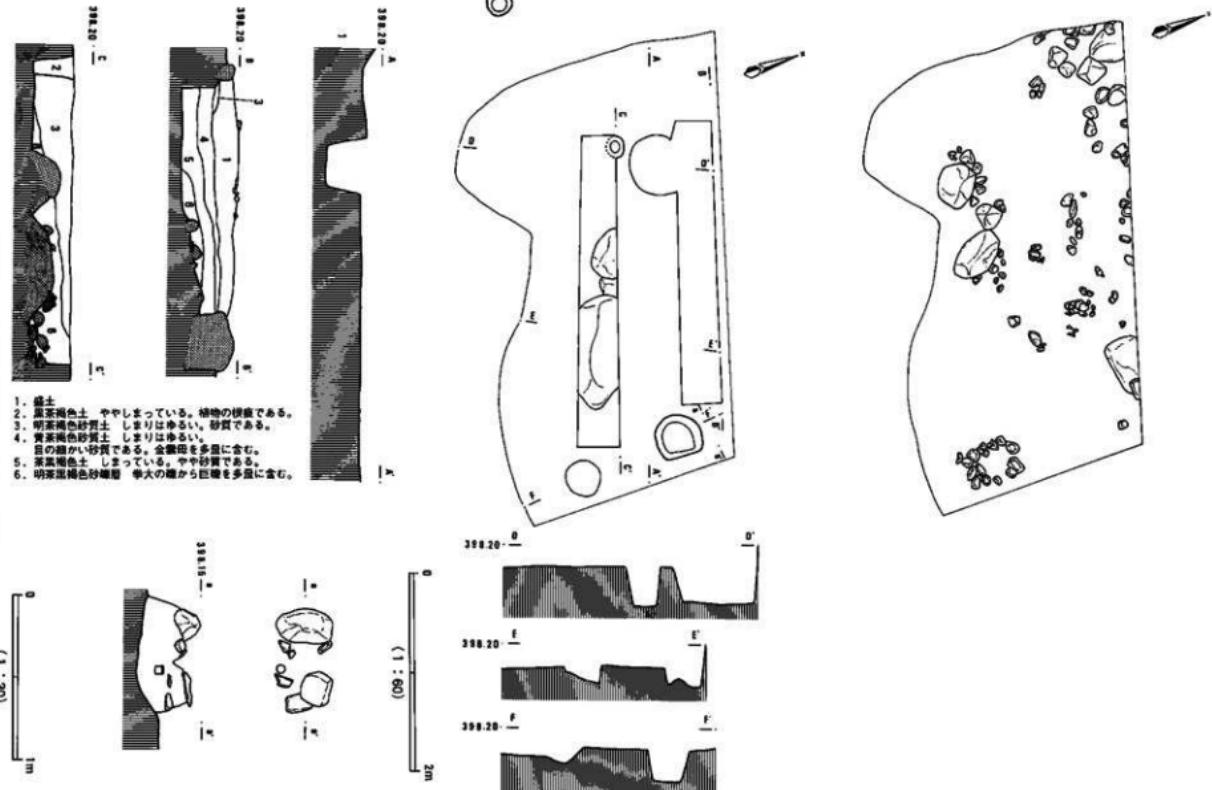


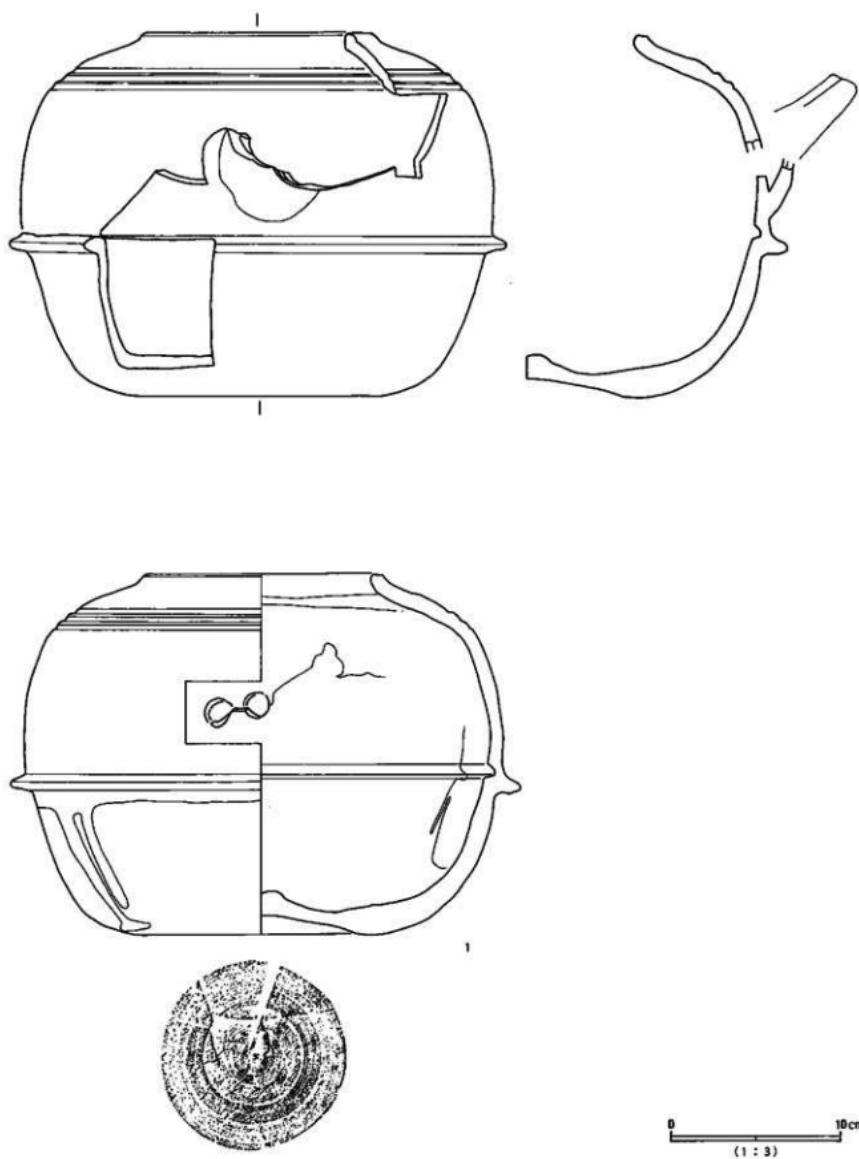
第94図 石造物⑨ (1:5 実測図のみ)



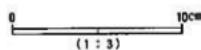
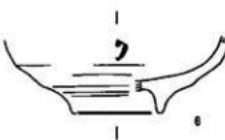
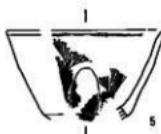
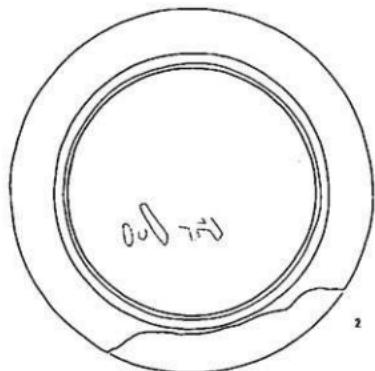
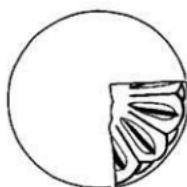
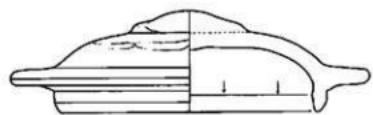
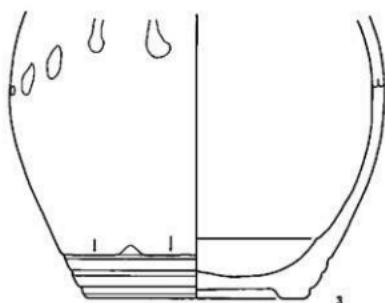
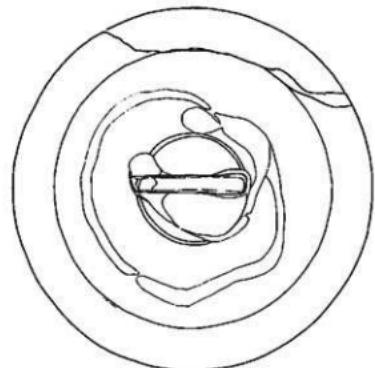
第95図 石造物⑩ (1:5 実測図のみ)

第96図 トレーンズ配圖・セクション図





第97図 出土遺物①



第96図 出土遺物②

8	7	6	5	4	3	2	1	No
一八三	一八八	一七八九	一七六七	一八一七	一八二六	一七三五	一七〇七	一八三八 年号 和年号
文政六	明治十五	明治十二	明和四	文化二	文政九	享保二十	寶永元	天保九 年号 和年号
(右圖)	(左圖)	(右圖)	(左圖)	(右圖)	(左圖)	(右圖)	(左圖)	(右圖)
文政六年正月一日	明治十五年一月二十日	明治十二年一月二十一日	明和四年十月十四日	文化九年五月十日	文政九年六月十五日	享保二十一年正月廿二日	寶永元年九月吉日	天保九年九月吉日
福泉院萬福寺住持大師	正徳院萬福寺住持大師	香明院玉美	幻機童女	夏得勝女	（正）良學昌信女	（右圖）板東秋父	（左圖）唐中旗主藤原氏立之	（右圖）西園四國
(左圖)	(右圖)	(左圖)	(右圖)	(左圖)	(右圖)	(左圖)	(右圖)	(左圖)

19	17	16	15	14	13
一七四九		一七九六	一六一五	一六六二	一六八〇
寔征三		貪政八	元祐四	東坡一	延祐八
(青面) 實征已		(右相面) 貪政	(左側面) 六義尊編	(正面) 傳心道祖碑定門	(左側面) 遷文正史
(正面) 實征父	(正面) 正榮宗宰主	(青面) 口口妹	(右側面) 元祐四至三月十六日	父	(右側面) 正榮第十二月
(右側面) 執事	(左側面) 西廬	(青面) 三月十號張去	(左側面) 明祐元之十一月八日	右側面 實文正史 四月十日	(左側面) 正榮第十一月九日
柏古祖繼大師		(右側面) 貪政八至占歲	(右側面) 貪政八至占歲	東坡一	(左側面) 延祐八申 十月十一月五日

保坂屋敷墓銘文表

## 第8章 山梨県保坂家屋敷墓出土人骨について

聖マリアンナ医科大学 平田和明

### 第1節 はじめに

山梨県に所在する保坂家屋敷墓遺跡から近世に属する1個体分の人骨が出土した。山梨県埋蔵文化財センターから鑑定を依頼されたので、ここにその結果を報告する。

### 第2節 人骨所見

人骨の保存状態は非常に不良で、頭蓋骨と四肢骨片が残存するだけである。同定出来た人骨片につき以下に述べる。

**頭蓋骨：**頭蓋の上半部が残存するだけで、歯は認められない。脳頭蓋最大幅は計測不能であるが、脳頭蓋最大長は179である。頭蓋冠の冠状縫合・矢状縫合・ラムダ縫合が認められ、これの内板は完全に閉鎖しているが、外板は一部は閉鎖しているが大部分は離開している。このことから、この個体の年齢は壮年期後半～熟年期であると思われる。

頭蓋冠の骨質は比較的薄い。また、前頭部の傾斜は垂直に近く、鼻弓および乳様突起の発達も比較的弱いことなどから女性であると推測される。

他には頭蓋冠片が多数（最大3×2cm大）認められるだけである。

**上肢骨：**左の鎖骨片（約4cm大）と上腕骨体片（約13cm大）が認められるだけである。この上腕骨体片は三角筋粗面と橈骨神経溝を含み、比較的細い。

**下肢骨：**左の大腿骨体片（約14cm大）が残存するだけである。この骨体片は殿筋粗面と粗線の上部を含み、上腕骨体片と同様に華奢である。

### 第3節 性別および年齢

この個体は、頭蓋の特徴や、上腕骨および大腿骨の骨体が細いことなどの点から、成人女性であると推定される。また、頭蓋縫合の閉鎖の程度から、年齢は壮年期後半～熟年期である可能性が高い。

### 第4節 まとめ

山梨県の保坂家屋敷墓遺跡から出土した近世に属する人骨は保存状態は非常に不良であるが、壮年期後半～熟年期女性1個体分であると推定される。四肢骨は比較的華奢で、骨病変などは見られなかった。

## 第9章 考 察

### 第1節 島東地域における古墳時代前期後半の様相

#### 第1項 はじめに

今回の調査のうち、97年度に調査を行った下西畠遺跡では、古墳時代前期に位置づけられる4基の方形周溝墓を確認した。近年県内において方形周溝墓の検出事例は増加傾向にあり、今まで空白地帯であった地域にも新たに方形周溝墓群が確認されるなど、盆地内では以前よりかなり多くの地域で方形周溝墓が分布する状況にある。島東地域においてはすでに塩山市西田遺跡<sup>(註1)</sup>で、5基の方形周溝墓の存在が知られている。今回下西畠遺跡で新たな方形周溝墓群が確認されたことにより、島東地方における方形周溝墓の地域性、及び当該時期の甲府盆地の特色の一端が明らかになったようと思われる。

本稿では西田遺跡と下西畠遺跡の方形周溝墓群から出土した土器を観察することで、島東地方の方形周溝墓の様相について若干の考察を行いたい。

#### 第2項 島東地域の方形周溝墓

下西畠遺跡の周溝墓群は重川に沿って北から南へ連続する小山状の台地の上、標高399m付近に造営されている。調査の結果これらの周溝墓群のうち、東限に第2号方形周溝墓が、南限に第4号方形周溝墓がそれぞれ位置することが推定でき、周溝墓群はさらに北西へ広がるものと思われる。規模はいずれも19m前後を測り、ブリッジはコーナーに所在するもの（1号周溝墓）、溝の中央部に所在するもの（3・4号周溝墓）が見られた。遺物はいずれの周溝墓でも、ブリッジ付近の周溝内に集中していた。出土土器は全体的に壺・甕が中心で、高杯・器台類は非常に少ないので印象的であった（第99図）。3号方形周溝墓で出土した壺はそのほとんどが焼成前に底部を穿孔したものであった。特に第99図22と23は、出土地点は離れていたものの、形状が非常に酷似している。また4号周溝墓から出土した第99図41のS字状口縁台付甕（以下S字甕）は、胴部器壁外面にケズリが施された後にハケ調整されており、従来の技法からやや変化した次世代への過渡的な技法が用いられている。本遺跡で出土したS字甕はいずれも肩部にヨコハケが巡らない、甲府盆地に定着し、在地的に変容する段階で見られるタイプのものである（註2）。高杯・器台類のうち17は、台付甕の台部を二次利用している特殊なものである。さらに第4号周溝墓では様々な種類の鉢が比較的数多く出土した。小型丸底鉢に分類できるもの（30・31・50～52）、碗状のもの（47～49）、逆八の字状に開くものの（53・54）、等が見られ、器壁がケズリにより調整されているものも見られる。

これらの出土遺物から、今回検出された4基の方形周溝墓は、ほとんど時間差なく築造されたものと推定できる。小型丸底鉢の存在やS字甕の形態等から帰属年代は4世紀後半に位置づけられるものと思われる。

西田遺跡は塩山市熊野から西広門田にかけての、重川沿いの自然堤防上標高364m付近に所在する。これまで3次にわたって発掘調査が実施され、古墳時代前期の方形周溝墓5基、住居跡65軒の他、縄文時代や奈良・平安時代、中世の構築等も確認されている。古墳時代前期の方形周溝墓はいずれもコーナーにブリッジを有し、規模は4号方形周溝墓が溝を含めて約14m弱、それ以外のものでは約12m前後を測る。出土遺物には壺・甕（S字甕を含む）・高杯・器台等が見られ、とくにA区1号方形周溝墓ではケズリによる調整を主体的に用いる壺や、高杯の脚部が柱状を呈するものが見られるなど、4世紀後半代でもかなり新相を呈する。一方C区4号方形周溝墓から出土したS字甕には、肩部外面にヨコハケが巡るものが見られることから、これらの方形周溝墓より若干古相であると思われる。従ってC区4号方形周溝墓は下西畠遺跡の周溝墓群よりやや先行して出現し、A区1号・C区3号方形周溝墓は下西畠遺跡のものより後に築造されるものと推測される。A区2号方形周溝墓は出土遺物が少ないので、年代の設定にやや不安は残るがS字甕の様相等から下西畠遺跡の周溝墓群とほぼ同時期ではないかと思われる。

これら西田遺跡及び下西畠遺跡の方形周溝墓群の存在から、島東地域の造墓活動について概観すると、現時点においては遅くとも4世紀第3四半期には方形周溝墓の造営が開始され、4世紀第4四半期頃には造墓活動

が定着したようである。そしてこれらの活動はおおむね4世紀終末まで続くものと思われる。

### 第3項 甲府盆地の方形周溝墓

以上狭東地域の方形周溝墓について概観してきた。それではこれらを取り巻く甲府盆地内はどのような環境にあるのか。ここではこれまでの研究を振り返った上で、盆地内の方形周溝墓および前期古墳について見ておくこととする。

甲府盆地の方形周溝墓研究については、中道町上の平遺跡の124基以上の方形周溝墓群の発掘調査をきっかけに大きく前進が見られ<sup>(註3)</sup>、近年においては当該期の土器編年研究と密接に絡み合いながら深められてきた経緯がある。橋本博文氏は上の平遺跡を中心に当時まだ検出例の少なかった各地域の方形周溝墓を弥生時代から古墳時代初頭の在地の墳墓と位置づけ、畿内の影響が色濃い前期古墳と対比させて捉えている<sup>(註4)</sup>。甲斐の方形周溝墓の研究は中山誠二氏の一連の研究によるところが大きい<sup>(註5)</sup>。中山氏は方形周溝墓を共同墓地的な群集墓と理解し、その上で基本的には弥生時代後期の方形周溝墓から古墳時代中期の低墳墓まで、その性格は維持されるものと位置づけた。さらに小林健二氏は方形周溝墓に限らず増加する古墳時代前期の資料を時間軸を設定し整理する中で、各時期の特徴を捉えその流れを明確にした<sup>(註6)</sup>。

このような研究成果を踏まえた上で盆地内の方形周溝墓に着目すると、周溝墓の造墓活動には、いくつかの画期が見いだされるように思われる。まず古墳時代の前期初頭段階であるが、当該期の住居跡は梅形町村前東A遺跡<sup>(註7)</sup>をはじめとするいくつかの遺跡で確認されているものの、方形周溝墓に至っては中道町上の平遺跡を除いて他にほとんど資料が見られない。しかし上の平遺跡の造墓活動が終焉を迎える頃には、各地域に方形周溝墓が造られるようになる。甲府市櫻田遺跡2号墳<sup>(註8)</sup>、三珠町上野遺跡1号墓<sup>(註9)</sup>、韮崎市坂井南(大原)遺跡1号墓<sup>(註10)</sup>、中道町宮の上遺跡9号墳<sup>(註11)</sup>、長坂町北村遺跡1・3号墳<sup>(註12)</sup>などがあげられる。この時期の周溝墓には周溝の中央部にブリッジが設定されるB1型墳<sup>(註13)</sup>が複数見られること、また周溝部内からパレススタイル壺が出土する墳墓があることなどから、伊勢湾系の墳墓の影響を受ける時期であると想定する。それらはちょうどS字壺の波及時期とも重なっており、一つの画期と捉えることが可能であると思われる。

小林健二氏の提唱する甲斐編年でいうⅢ期は、小平沢古墳を筆頭に古墳が出現する時期であり、これがまた一つの画期になり得るものと思われる。小平沢古墳は中道町に所在する全長72mの前方後方墳といわれており、現在甲府盆地の中では最古の古墳である。この古墳の出現に対峙するように対丘陵の米倉山の一支丘には米倉山B遺跡1号方形周溝墓<sup>(註14)</sup>が、また甲府市櫻田遺跡周溝墓では引き続き1・4号墳などが造営される。櫻田遺跡の東に位置する甲府市塩部遺跡<sup>(註15)</sup>に11基の方形周溝墓が造られるのもちょうどこのころである。また中道町大丸山古墳が築造されるころには、北巨摩郡でも北村遺跡2号墳が造られる。先述諸氏も再三述べられているとおり、この時期の方形周溝墓は甲府市桜井畠1号墓<sup>(註16)</sup>等に代表されるように、規模は大型化し周溝はブリッジを持たずに全周するタイプのものが登場する傾向がある。B1型墳や伝統的なコーナーにブリッジを有する周溝墓とともに次段階に継続していくものである。

ところで東日本でも屈指の前期前方後円墳である甲斐銚子塚古墳の出現は、方形周溝墓だけに止まらず、あらゆる意味で大きな画期となり得るのではないであろうか。土器について言えば、それまで波のように伊勢湾系の影響を受けたS字壺は、この時期それまでの客体的要素から完全に脱却し、甲府盆地独自の形に変容して「甲斐型」となることが既に述べられている<sup>(註17)</sup>。先に述べたようにこの時期、塩山地域にも西田遺跡・下西畠遺跡には相次いで方形周溝墓が造営される。現在、当該地域ではこれらの方形周溝墓群より古い墳墓は確認されていないことなどから見て、本段階において甲府盆地が安定し、塩山にもその勢力が及んだ結果として方形周溝墓群の造墓活動が開始されたと解釈することにそれほど無理はないと考える。ただし、このような地域が現在のところ本地域のみしか見られない。今後周辺地域で類例が増加することを期待する。

### 第4項 おわりに

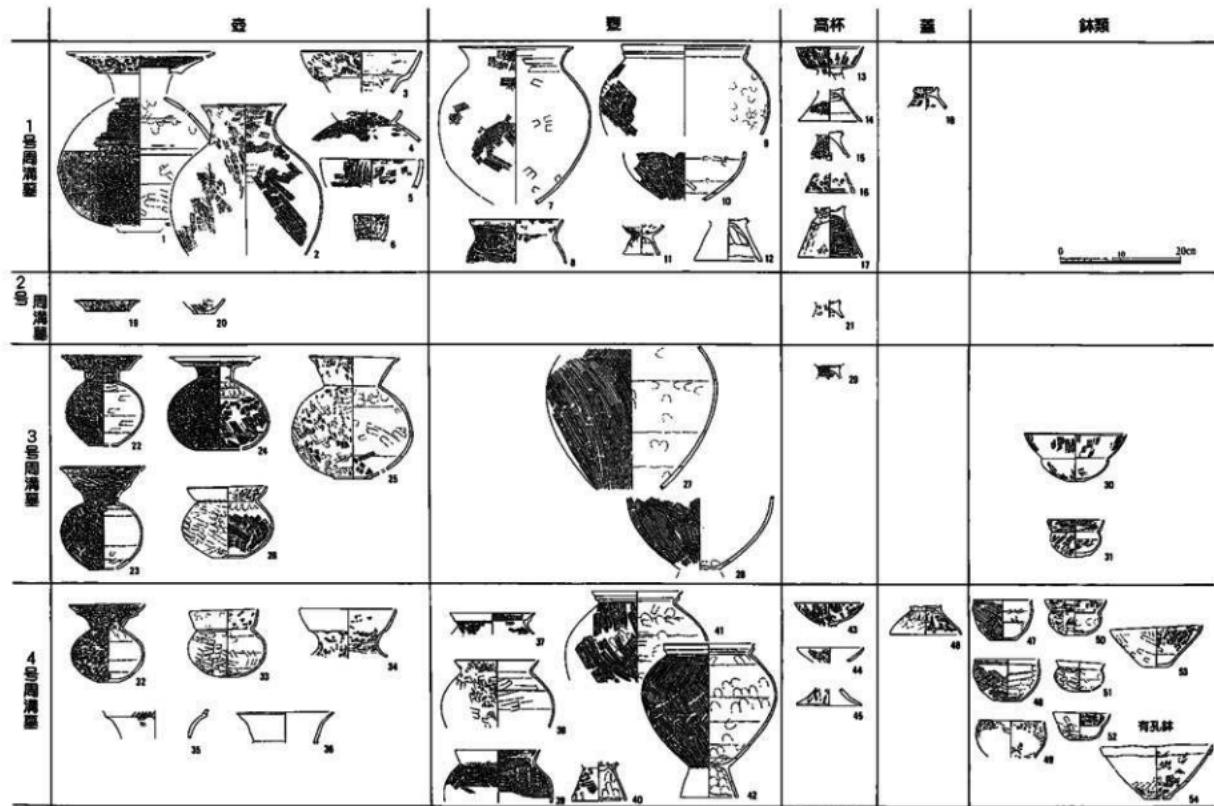
塩山市に所在する方形周溝墓を中心に据えながら、甲府盆地の方形周溝墓群について考えてきた。その中で古墳時代の方形周溝墓の造墓活動は、小平沢古墳や甲斐銚子塚古墳の出現期以前は伊勢湾系の影響を受け、古

墳出現期以降は古墳と密接に関連しているように思われることを述べてきた。ただしその出現が古墳被葬者による勢力の拡大に伴うだけのものではなく、例えば蘿崎市坂井南遺跡や長坂町北村遺跡などのように信濃ルートの影響など、立地環境等によるものにも左右されることがあること等も十分考慮する必要があるだろう。

さらに今回は小平沢古墳や甲斐銚子塚古墳など、古墳については曾根丘陵一帯の古墳にしか触れなかった。しかし当該時期には、これらの古墳以外にも各地に多数の前期古墳が所在する。実際には曾根丘陵に所在する古墳の影響を受けながらなお、各地域に所在する前期古墳も絡んで複雑な社会状況を醸し出していたに違いないと考えている。つまり方形周溝墓の個から見れば、弥生時代に共同墓地的な意味合いから造墓活動が始まる方形周溝墓は、やがて古墳時代に他地域の影響を受け、古墳の出現と同時に少しづつ社会の枠組みの中に組み込まれていくようと思われるのである。

#### 引用・参考文献

- (註1) 山崎金夫ほか 「西田遺跡第1次発掘調査報告書」山梨県遺跡調査団 1978.3  
(註2) 小林健二 「山梨県出土の東海形土器波及と定着と変容」『山梨県考古学協会誌』第10号 1998  
(註3) 小林広和ほか 「上の平遺跡(第1・2・3次調査)」山梨県教育委員会  
(註4) 橋本博文 「甲府盆地の古墳時代における政治過程」『甲府盆地その歴史と地域性』地方史研究協議会 1984  
(註5) 中山誠二 「弥生時代終末における上の平遺跡の集落構造」『研究紀要』4 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター 1987  
中山誠二 「甲斐盆地の方(円)形低墳墓」「シンボジウム古墳出現期の説3から5世紀の日本列島と甲斐」山梨県考古学協会 1989  
中山誠二 「中部・関東地方における弥生集団墓」の構成について』『山梨県考古学論集』II 山梨県考古学協会 1989  
中山誠二 「甲府盆地における方形低墳墓残存に関する一考察」「甲斐の成立と地方的展開」角川書店 1989  
中山誠二 「甲斐の方形周溝墓と前期古墳」「シンボジウム西相模の3・4世紀方形周溝墓をめぐってー」東海大学校地内遺跡調査団 1992  
(註6) 小林健二 「甲斐における古式土器群の成立3・4世紀の土器編年と墳墓」『専修考古学』第7号 専修大学考古学会 1998  
(註7) 三田村美彦ほか 「村前東A遺跡」 山梨県教育委員会 1999  
(註8) 高野玄妙ほか 「桜田遺跡」 山梨県教育委員会 1995  
(註9) 鶴ノ内泉ほか 「上野遺跡」三鷹町教育委員会 1989  
(註10) 山下孝司ほか 「坂井南(大原)遺跡」 蘿崎市教育委員会 1995  
(註11) 小林広和ほか 「立石・宮の上遺跡」 山梨県教育委員会 1996  
(註12) 小宮山隆ほか 「北村遺跡」 長坂町教育委員会 1996  
(註13) 赤塚次郎 「東海のB型墳」「シンボジウム西相模の3・4世紀方形周溝墓をめぐってー」 東海大学校地内遺跡調査団  
(註14) 坂本美夫ほか 「米倉山B遺跡」 山梨県教育委員会 1999  
(註15) 村石真澄ほか 「塩部遺跡」 山梨県教育委員会 1996  
(註16) 中山誠二ほか 「桜井畠遺跡A・C地区」 山梨県教育委員会 1990  
(註17) 小林健二 「甲斐における土器群の画期と交流東海形を中心にー」『庄内式土器研究』XVI 庄内式土器研究会 1998



第99図 下西畠遺跡方形周溝墓出土土器

## 第2節 影井遺跡出土の「鈴」について



第100図 鈴出土分布

ったのか考えていきたい。

### 第2項 出土事例

県内では、韮崎市中田小学校遺跡から金銅製の鈴1点と鉄製の鈴1点、高根町湯沢遺跡からは金銅製の鈴1点、また、2000年には明野村寺前遺跡において鉄製の鈴が出土と現在計5点の出土を見る。

現在の出土状況からみると、平安時代のものではあるが、時期的にはばらつきがみられる。また、現時点においては岐北地域に集中して分布する傾向が伺える。(第100図参照)

次に県内、各遺跡出土の鈴について述べる。(第101図参照)

**塩山バイパス関連影井遺跡** 塩山バイパス関連影井遺跡3号住居出土の鉄製の鈴は、直径4.3cmの円形で、中央部で上下の半球を接合し、上部に小環が取り付けられ、下部にはスリットが入っている。内部には鉄製の丸 $1.0$ cmが入っている。重さ52.83g。振ると鐘のためか、カラカラと低く鈍い音がした。この鈴は、同住居出土の土器から、11世紀末から12世紀初頭と考えられる。

**高根町湯沢遺跡(注1)** 高根町湯沢遺跡6号住居出土の金銅製の鈴は直径4cmの円形で、上下の半球を中心で接合、上部には環を取り付けてあった形跡があり、また下部にはスリットが入っている。8世紀末から9世紀前半と考えられている。

**韮崎市中田小学校遺跡(注1・2)** 韮崎市中田小学校遺跡13号住居出土の鈴は2点あり、金銅製の鈴は直径2.4cmの円筒形に近い球形を呈し、中央部で上下の半球を接合、上部に小環が取り付けられており、下部にはスリットが入っている。内部には鉄製の丸0.9cmが入っている。また、鉄製の鈴は直径2cmの球体で、上下の半球を中央部で接合し、上部には小環が取り付けられ、下部にはスリットが入っている。平安時代末と考えられている。

**明野村寺前遺跡(注3)** 明野村寺前遺跡では、重複した平安時代の住居跡中から、鉄製の鈴が出土した。また、付近からは「か帝」が出土している。

### 第1項 はじめに

1999年、塩山バイパス関連影井遺跡3号住居において、鉄製の鈴が出土した。

3号住居は、残念なことに調査区内からは全貌を何うことができなかつた。住居は、床面の中央に竈を配し、次の時代の団炉裏を連想させる。その竈内から、鉄製の鈴が出土した。

住居の生活面は極めて浅い状況で検出され、その土を掘り下げ、床面の下から、埋められるようにして鈴が出土した。鈴の他、竈からは皿、鉢、甕、灰釉陶器等が出土している。また、1号住居が隣接し、出土遺物等からほぼ同時期の住居と考えられる。以上のことから影井遺跡3号住居の「鈴」についてみていく。

また、県内出土の鈴は極めて少ないので、その出土事例を確認した上で、平安時代において、「鈴」にはどのような性格があ

出土の「鈴」は、2cmから4cmのものと大きさ、材質も一定ではないが、製作技法は、半球を重ね合わせたもので、上部には小環を取り付け、下部にはスリットを入れる、現在の鈴と類似点がみられる。(第101図参照(註4)) 現在出土の鈴は、すべてにおいて小環に対し、スリットが逆方向に入っていることが共通点として上げられる。現代の鈴では、小環と平行にスリットが入れられるものも見られるが、この製作技法が、音に関するものなのか、規則的なもののかまたは、得に意味をなさないものなのか現時点では不明である。丸の大きさについては、鈴本体の球形に対し大小関わりはないようである。

県内では、金属製の鈴は、現在、馬具として考えられており、馬の生産地域と結び付く一つの要素となっている。

以上の事柄をふまえ次に、鈴の使用方法について考えて行きたい。

### 第3項 使用方法

影井遺跡等で出土した金属の鈴は古くは古墳時代から現われる。(註5)

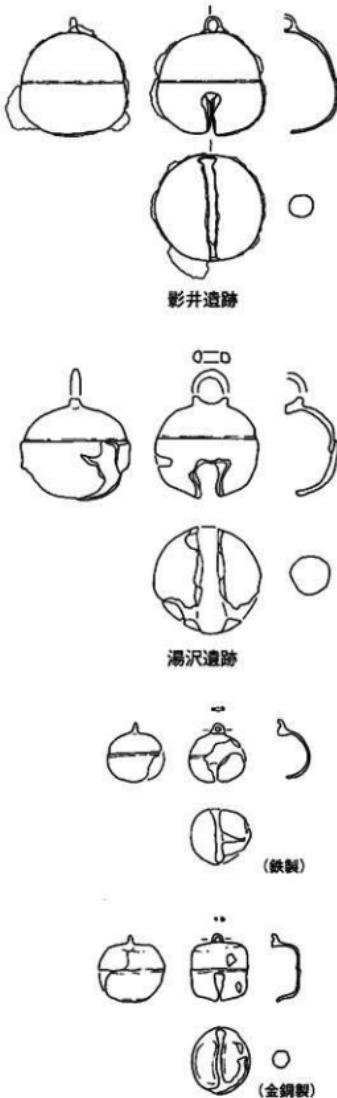
用途は装身具・楽器・鈴鏡・馬具等多様である。

古墳から出土した副葬品の中に馬具とともに、鈴が出土。また馬形埴輪のなかには装饰品として鈴が付けられているものもあることなどから馬鈴として考えられている。

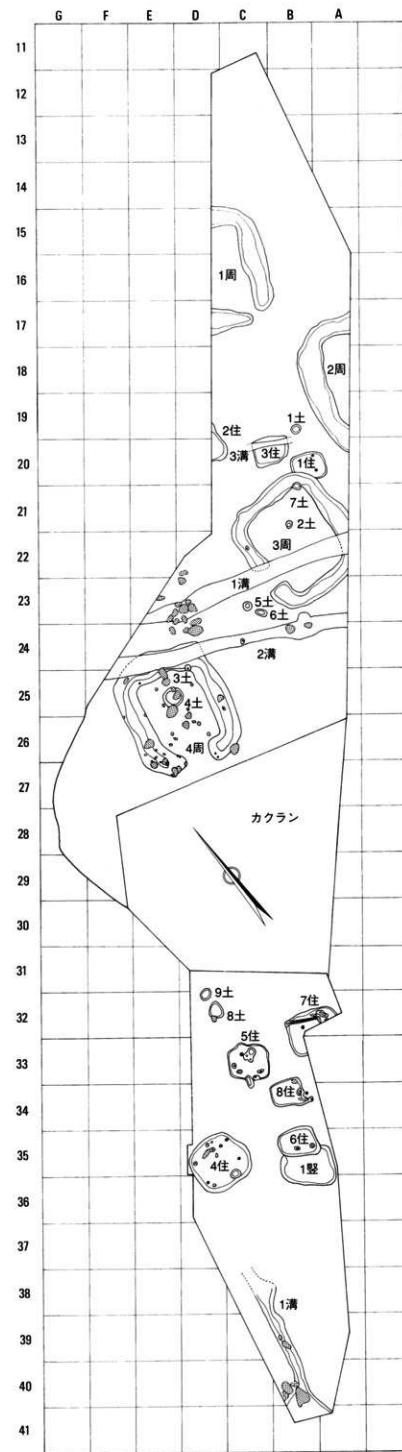
また、時代は下って『梁塵秘抄』(註6)の神歌(三二四)に「鈴はさや振る藤太巫女 目より上にぞ鈴は振る ゆらゆらと振り上げて 目より下にて鈴振れば 懶怠なりとて ゆゆし 神腹立ちたまう」(訳 鈴をそのように振ってもよいものか、藤太巫女よ。鈴は目より上の高さで振るもの。ゆらゆらと振り上げて。目の高さより下で振るようなことをすれば「怠けている」と神がお腹立ちになるぞ。恐ろしいことだ。)とあり、巫女神樂の時に使用する神楽鈴として鈴が使用されたことがわかる。また、「ゆらゆら」は多く東ねた鈴が触れて鳴る音を表現していることから、神楽鈴は複数の鈴を東ねた楽器であったことがわかる。鈴は魔よけ・悪霊を払うという呪術的装身具としての要素があったことが伺える。

また、能楽の演目である「翁」では「三番叟」が鈴を鳴らしながら舞う。「翁」は儀式性の濃い祝禱の舞で、祝賀会やお正月に公演される。また、鈴は「種まき」を意味し、五穀豊穣を祈る。ここで使用する鈴は、複数の鈴を東ねたもの鳴らす。

その他の用途として鈴は「熊除け」としても使用されている。



第101図 県内出土の鈴



0 5 10 20m

付図 下西畠遺跡全体図

#### 第4項 おわりに

文献資料、現在残っている民俗事例などから、鈴の使用方法について述べた。次に、影井遺跡3号住居から出土の鉄製の鈴について考えたい。

影井遺跡の鈴の場合、住居の床面下から出土していることから、日常に使っていたとは考えにくい。楽器としての鈴、馬具等ではなかったと考える。

また、県内の平安遺跡からの出土が少ないとから、広く一般に普及していたとも考えにくい。

以上の事から、鈴は何か特別な意味をもって、埋められていたと考える。しかし、鈴の出土例が少ないとから、使用方法に色々な可能性を残していると考えている。

合わせて、使用方法について鈴の大きさが一定ではないことから、鈴を单一で使用していたものと、巫女神樂の楽器のように、複数で一つとして使用していたものと使用方法には違いがあり、また音色も変わってくるのではないかと考える。

今後の資料の増加を期待したい。

(註1) 末木 健 「牧と馬」『山梨県史 資料編2 原始・古代2』山梨県 1999

(註2) 山下孝司 「中田小学校遺跡」『山梨県史 資料編1 原始・古代1』山梨県 1998

(註3) 川邊 享 「寺前遺跡」「2000年度下半期遺跡調査発表要旨」山梨県考古学協会 2001

(註4) 第101図の湯沢遺跡、中田小学校遺跡の鈴は『山梨県史』から、また影井遺跡の鈴は報告書第81図49より筆者が再トレースを行った。

(註5) 鈴には、土製のものと金銅製のものがあり、古くは繩文時代の土鈴が上げられる。(山梨県立郷土資料館) その構造は、半球状の粘土を二つ合わせ、内部には小さな粘土の玉を1~10個を入れている。本稿では、金銅製の鈴についてのみ、述べることにした。しかし、構造や用途には共通した面があると考える。

(註6) 1179年成立とされているが不詳。後白河法皇撰。平安末期の狂言の歌を分類集成したもの。

#### 参考文献

『角川日本史辞典』 株式会社角川書店 1966

『梁塵秘抄』『日本古典文学全集 25 神楽歌 催馬楽 梁塵秘抄 開吟集』 株式会社小学館 1976

『能・狂言事典』 株式会社平凡社 1976

『国史大辞典 第2巻 う~お』 株式会社吉川弘文館 1980

坂本美夫 『馬具』 ニューサイエンス社 1985

『平安時代史辞典 上』 株式会社角川書店 1994

『狂言ハンドブック』 株式会社三省堂 1995

『日本民具辞典』 株式会社ぎょうせい 1997

『日本民俗大辞典(上)』 株式会社吉川弘文館 1999

末木 健 「山梨の牧関連資料」「古代の牧と考古学」 山梨県考古学協会 2000

### 第3節 奈良・平安時代の遺物と集落様相

本節では下西畠遺跡、西畠遺跡、影井遺跡（以下、本遺跡群と略す）で検出した奈良・平安時代の遺物（土器・陶器類）の様相を捉え、さらに本遺跡群が立地する重川右岸の扇状地域における近年の発掘調査成果を踏まえ、本地域の該期集落の様相を概観してみたい。

#### 第1項 検出遺物（土器・陶器類）について

本遺跡群で検出した該期の土器・陶器類は土師器、黒色土器、須恵器、灰釉陶器、綠釉陶器の5種に分けられ、各住居址における器種構成を第1表に示した（註1）。各時期の出土量や住居址検出数が少く、各器種ごとの変遷は捉えづらい状況であるが、第1表から読みとれる器種構成の要点をまとめると以下のようである。

I期（8世紀中葉から甲斐V期）段階では、下西畠遺跡5号住居址で杯B（註2）と杯Cが共伴しており、甲斐型杯（杯A）の出現期の一様相として捉えられる。Ⅶ期（古代末2期）段階では、下西畠遺跡6号住居址や影井遺跡2号住居址で杯E・小皿・壺B・C・鉢B・Cが見られ、これらの各器種（杯・皿・壺・鉢など）の中における主体的な在り方や形態の変化と共に内外面ナデ調整技法の多用が捉えられ、甲斐型土器群からの脱却が窺える。IX・X期段階では、影井遺跡3号・1号住居址で柱状高台皿・羽釜C I・C II・鉢C・Dの出現あるいは壺C・羽釜Bの消滅による器種構成の変換が捉えられる。

#### 第2項 重川右岸地域における集落様相

今回の本遺跡群の調査では該期の住居址群、掘立柱建物群、溝状造構等を検出し、特に住居址群は東西方向へ横断する幾筋もの谷地形によりいくつかのブロックを形成しながら展開する状況が見られ、重川右岸地域の集落様相の一端を確認した。ここでは同じ重川右岸扇状地に立地する五反田遺跡、獅子之前遺跡、一ノ坪遺跡を含めた住居址構造の分析から本地域の集落様相を捉えてみたい。分析内容は第2表に示した。

各遺跡の住居址群はおおむねV期（甲斐Ⅸ期）のピークを境に、以後減少期を向かえ、再度Ⅶ期（古代末2期）より増加する変遷過程が捉えられる。

住居址構造では、カマドの位置が北壁あるいは南壁にあり、主軸方位を北東～南西方向に取るV期段階までのものからⅦ期（古代末1期）以降は南東隅や北東隅に位置し、北西～南東方向（註3）に主軸を取るものに主流が移行する。これはⅦ期以降から住居址規模の各類型（註4）の平均床面積が縮小し、小型化する傾向及び住居址形態（註5）の主体が隅丸長方形2となる状況とも考えあわせると小型住居址内におけるカマド占有率を押さえる現象と想定されよう。

以上、本地域の集落様相を概観したが、今後他地域との検討を行い、本県における該期集落の様相を捉えてみたい。

（註1）土師器の器種分類は該期前半期（8世紀中葉～10世紀前半）を甲斐型土器研究グループ（1992年）、後半期（10世紀後半～12世紀末葉）を森原明廣（1994年）による分類を基準とした。時期設定では出土資料の主体をなす土師器杯の変遷を基軸に10段階に捉え、他の器種構成を含めた本遺跡群の土器群全体の変遷を10期（I～X期）に区分した。また、各時期の年代は前半期が瀬田正明氏（1992年）、後半期が森原（1994年）の年代観と対応する。

（註2）甲斐型V期段階の杯Aと杯B（暗文をもつ盤状杯）との共伴については山下孝司（1992年）が韮崎市上本田遺跡8号住居例などをあげて甲斐型土器研究集会で報告している。

（註3）主軸方位はカマドが構築される壁に直交する方位を主軸方向とする。

（註4）住居址の規模は一辻3m位で床面積にして7.9～9.5m<sup>2</sup>（小型）、一辻3.5m位・10.4～13.4m<sup>2</sup>（中型1）、一辻4m位・14.1～17.6m<sup>2</sup>（中型2）、一辻5m位・19.7～25.1m<sup>2</sup>（大型）に4法量に分類される。

（註5）住居址の形態は方形、隅丸方形、隅丸長方形1・2に分類し、長辺と短辺の長さの差が長辺の10%未満を隅丸方形、10%以上～15%未満を隅丸長方形1、15%以上を隅丸長方形2とした。

#### 参考文献

甲斐型土器研究グループ 1992 「甲斐型土器—その編年と年代—」 山梨県考古学協会

森原明廣 1994 「山梨県地域における古代末期の土器様相」「丘陵」14 甲斐丘陵考古学研究会

瀬田正明 1992 「甲斐型土器の年代」「甲斐型土器—その編年と年代—」 山梨県考古学協会

山下孝司 1992 「杯」「甲斐型土器—その編年と年代—」 山梨県考古学協会

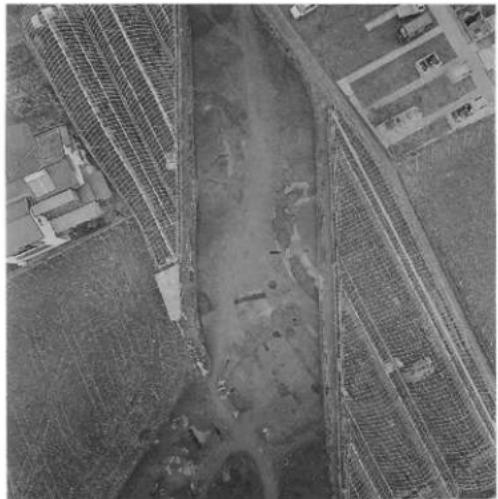
第1表 住居址出土土器・陶器類の器種構成（「S」は下西畠遺跡、「N」は西畠遺跡、「K」は影井遺跡の略、数字は住居址番号）

器種	器種	特 規 格 分		I期	II期	III期	IV期	V期	VI期	VII期	VIII期	IX期	X期
		年代	規格										
杯A	素面鏡形			S-中葉~平葉V	平葉VI	平葉VI	平葉VI	甲葉VI	甲葉VI	甲葉VI	甲葉VI	甲葉VI	甲葉VI
杯B	輪郭鏡形、無地の外、内側鏡形の口付、鏡部は全周鏡面			S-5	N-2	N-1	N-3	N-3	N-3	N-3	N-3	N-3	N-3
杯C	輪郭鏡形、外側鏡形の底付、内側鏡形底付縁文、みこみ底付縁文			S-5									
杯D	輪高台付、ロココ調、底部は輪高台を切り												
杯E	（土器と杯A）と同様、外側鏡形、底土が同じであるが内面に直斜状縫合												
馬蹄形	土器と杯Eと同様です。												
馬蹄形	馬蹄形				N-2								
馬蹄形	馬蹄形					N-3	N-3	N-3	N-4				
土	H10cm程度の土器と馬蹄形の土器と、分離となる。											K-2	K-3
皿A	素面鏡形												K-1
皿B	鏡口クロス切込み、内側鏡形口（窓かくい）、鋸工具によるナメ開削				N-2							S-6・K-2	
皿C	外側鏡形窓かくい鋸工具によるナメ開削、内面ナメ開削						N-7	N-4				K-2	K-3
小皿A	素面鏡形												
小皿B	素面鏡形				N-2							S-8	
小皿C	素面窓かくい鋸工具によるナメ開削											K-2	
小皿D	素面窓かくい鋸工具によるナメ開削											K-3	
小皿E	素面窓かくい鋸工具によるナメ開削											K-1	
小皿F	素面窓かくい鋸工具によるナメ開削											K-2	
小皿G	素面窓かくい鋸工具によるナメ開削											K-3	
小皿H	素面窓かくい鋸工具によるナメ開削											K-1	
小皿I	素面窓かくい鋸工具によるナメ開削											K-2	
小皿J	素面窓かくい鋸工具によるナメ開削											K-3	
小皿K	素面窓かくい鋸工具によるナメ開削											K-1	
小皿L	素面窓かくい鋸工具によるナメ開削											K-2	
小皿M	素面窓かくい鋸工具によるナメ開削											K-3	
小皿N	素面窓かくい鋸工具によるナメ開削											K-1	
小皿O	素面窓かくい鋸工具によるナメ開削											K-2	
小皿P	素面窓かくい鋸工具によるナメ開削											K-3	
小皿Q	素面窓かくい鋸工具によるナメ開削											K-1	
小皿R	素面窓かくい鋸工具によるナメ開削											K-2	
小皿S	素面窓かくい鋸工具によるナメ開削											K-3	
小皿T	素面窓かくい鋸工具によるナメ開削											K-1	
小皿U	素面窓かくい鋸工具によるナメ開削											K-2	
小皿V	素面窓かくい鋸工具によるナメ開削											K-3	
小皿W	素面窓かくい鋸工具によるナメ開削											K-1	
小皿X	素面窓かくい鋸工具によるナメ開削											K-2	
小皿Y	素面窓かくい鋸工具によるナメ開削											K-3	
小皿Z	素面窓かくい鋸工具によるナメ開削											K-1	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削、伝用具も見られる。				N-2							K-2	(板垣)
皿	外側は褐色、内面はナメ開削を行つた。						N-7						K-1
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。						N-3						
皿	外側は褐色、内面はナメ開削する。内面ナメ開削。						N-7						
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-2	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-3	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-1	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-2	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-3	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-1	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-2	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-3	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-1	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-2	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-3	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-1	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-2	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-3	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-1	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-2	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-3	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-1	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-2	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-3	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-1	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-2	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-3	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-1	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-2	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-3	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-1	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-2	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-3	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-1	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-2	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-3	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-1	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-2	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-3	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-1	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-2	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-3	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-1	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-2	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-3	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-1	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-2	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-3	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-1	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-2	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-3	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-1	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-2	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-3	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-1	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-2	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-3	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-1	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-2	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-3	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-1	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-2	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-3	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-1	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-2	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-3	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-1	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-2	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-3	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-1	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-2	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-3	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-1	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-2	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-3	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-1	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-2	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-3	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-1	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-2	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-3	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-1	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-2	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-3	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-1	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-2	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-3	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-1	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-2	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-3	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-1	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-2	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-3	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-1	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-2	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-3	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-1	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-2	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-3	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-1	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-2	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-3	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-1	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-2	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-3	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。											K-1	
皿	外側は褐色、内面はナメ開削。												

# 図版



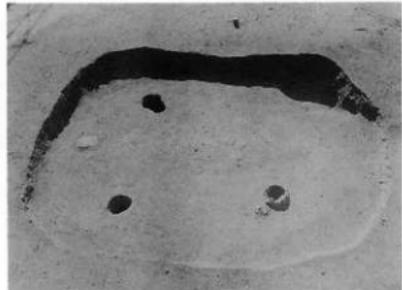
97下西畠遺跡遠景（南から）



97下西畠遺跡全景



調査風景



第1号住居跡



第3号住居跡



1号住居跡遺物出土狀況



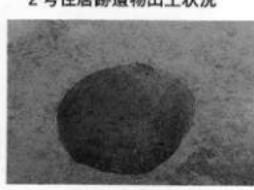
2号住居跡遺物出土狀況



3号住居跡遺物出土狀況



第1号土坑



第2号土坑



第2号土坑（遺物出土狀況）



第3号土坑



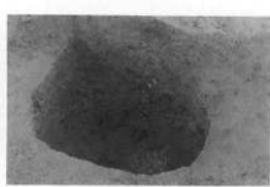
第4号土坑



第5号土坑



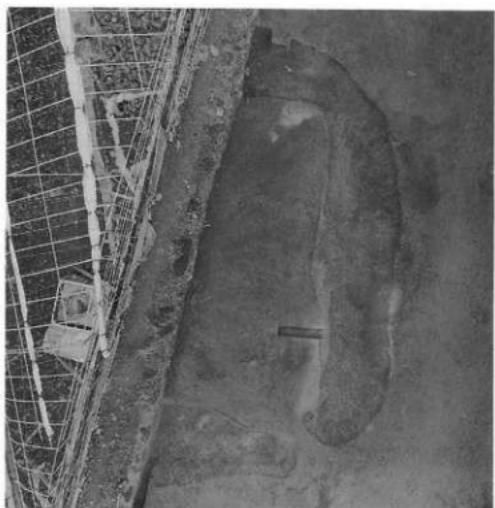
第6号土坑



第7号土坑



調査風景（2土）



第1号方形周溝墓



1号方形周溝墓セクション



1号方形周溝墓遺物出土状況



第2号方形周溝セクション

第2号方形周溝墓（北西から）



第3号方形周溝墓



第3号方形周溝墓遺物出土状況



第3号方形周溝墓調査風景



第3号方形周溝墓溝セクション



第4号方形周溝墓（南から）



第4号方形周溝墓溝セクション



第4号方形周溝墓遺物出土状況



第4号方形周溝墓遺物出土状況



第4号方形周溝墓



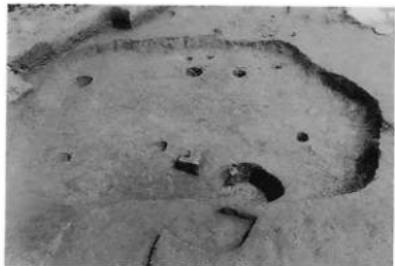
第8号土坑（98年度）



第9号土坑（98年度）



調査風景



第4号住居跡



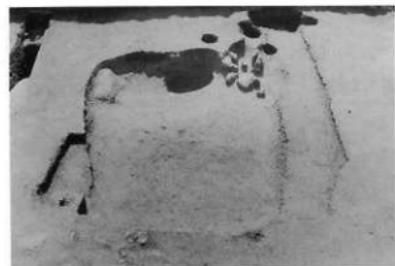
第5号住居跡



第6号住居跡



第7号住居跡



第8号住居跡



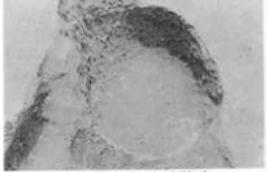
第1号竪穴状造構



第5号住居跡ピット



第8号住居跡ピット



第8号住居跡貯蔵穴



第1号竪穴状造構遺物出土状況



第4号住居跡掘り下げ状況



98年度調査区全景（北西から）



第3号住居跡出土土器



第3号住居跡出土土器



第3号住居跡出土土器



第3号住居跡出土土器



第2号土坑出土土器



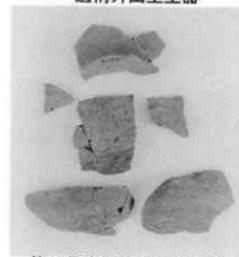
第2号土坑出土土器



遗構外出土土器



第1号住居跡出土土器



第1号方形周溝墓出土壺



第2号方形周溝墓出土土器



第3号方形周溝墓出土土器



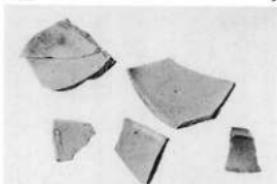
第3号方形周溝墓出土土器



第4号住居跡出土土器



第5号住居跡出土杯



第5号住居跡出土杯



第8号住居跡出土土器



第6号住居跡出土土器



第1号竪穴状造構出土土器



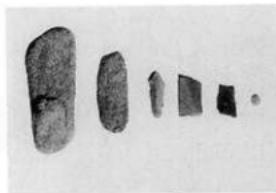
石器（石鎌・石匙・石錐）



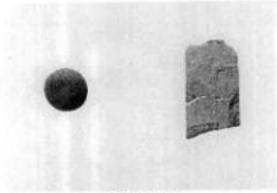
石斧・磨石・砥石



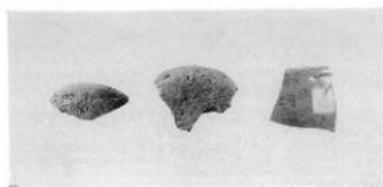
石皿



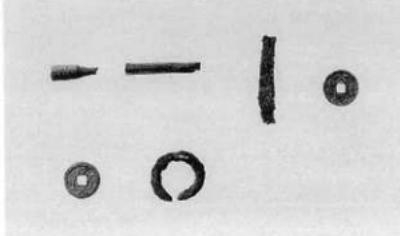
石器



石製品



遺構外出土遺物



鐵製品

### 西烟遺跡



試掘調查狀況



第1号住居跡



第2号住居跡



第2号住居跡  
出土杯



第2号住居跡  
出土甕



第3号住居跡



第3号住居跡遺物出土状況



第4号住居跡



住居跡検出状況



第5号住居跡



第6号住居跡



第7号住居跡



調査風景（奥は保坂家屋敷墓）



第1号溝



第2号溝



道路跡全景（北西から）



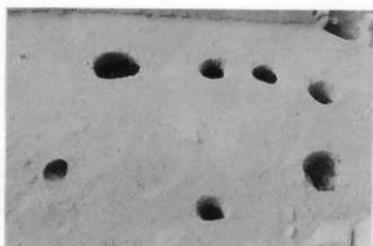
石垣①



石垣②



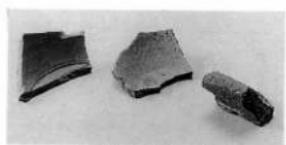
トレンチセクション



ピット群



遺跡全景（北東から）



第1号住居跡出土土器



第5号住居跡出土土器



第6号住居跡出土土器



第2号住居跡出土土器



第3号住居跡出土土器



第4号住居跡出土土器



第7号住居跡出土土器



墨書・刻書土器



造構外出土遺物



鐵製品



石製品



第1号住居跡



第1号住居跡  
カマド



第2号住居跡



第1号住居跡  
カマド周辺  
遺物出土状況



第2号住居跡  
カマド



第2号住居跡カマド（背面）



第2号住居跡遺物出土状況



第2号住居跡遺物カマドセクション



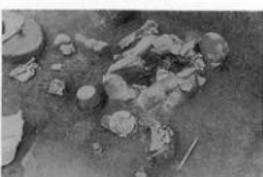
第3号住居跡



第3号住居跡  
カマド



第3号住居跡遺物出土状況



第3号住居跡カマド確認状況



第3号住居跡調査風景



第3号住居跡鉢・灰釉陶器碗出土状況



第3号住居跡壺出土状況



第3号住居跡杯出土状況



ピット群（掘建柱建物跡）①



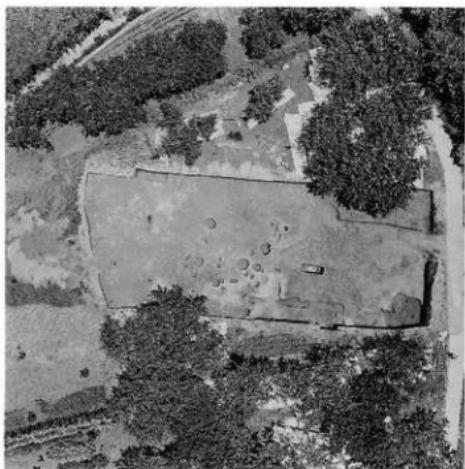
ピット群（掘建柱建物跡南から）②



ピット群（掘建柱建物跡）③



トレンチ内セクション



遺跡全景



中学生遺跡見学会



遺跡遠景（南西から）



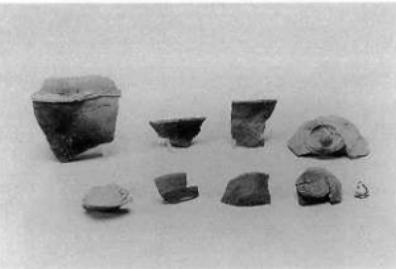
第1号住居跡出土土器



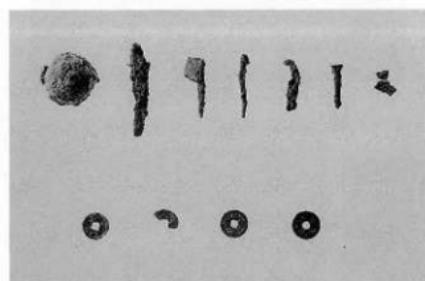
第2号住居跡出土土器



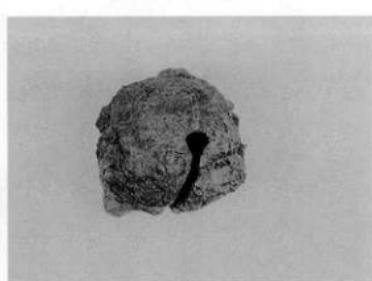
第3号住居跡出土土器



造構外出土土器



鐵製品



第3号住居跡出土鈴

保坂家屋敷墓



全 景



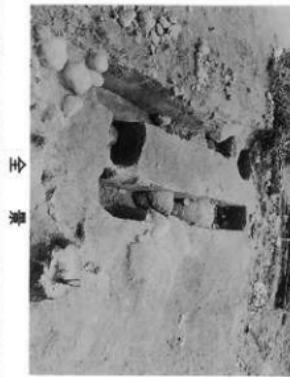
第1号石塔



第2号石塔（庚申塔）

図版 15 保坂東屋敷墓

墓坑



全  
景



トレンチセクション



第16号石塔



第4号石塔



第5号石塔



第17号石塔



第7号石塔



第20号石塔



第15号石塔



## 報告書抄録

ふりがな	しもにしはたいせき・にしはたいせき・かけいいせき・ほさかけやしきば						
書名	下西畠遺跡・西畠遺跡・影井遺跡・保坂家屋敷墓						
副題	一般国道411号（塩山東バイパス）建設工事に伴う発掘調査報告書						
シリーズ名	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第196集						
著者名	保坂和博・小林（石神）孝子・須長愛子						
発行者	山梨県教育委員会・山梨県土木部						
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター						
所在地・電話	〒400-1508 山梨県東八代郡中道町下曾根923 TEL055-266-3016						
発行日	西暦 2002年3月29日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 道路番号	北緯 ° °'	東経 ° °'	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
しもにしはたいせき 下西畠遺跡	やまなしけんえんざんし あかお 山梨県塩山市赤尾 769番地ほか	19203	35° 41' 45"	138° 44' 34"	平成9年10月13日 ～12月22日 平成10年5月19日 ～7月3日	2,500	国道411号（塩山東バイパス）建設工事
にしはたいせき 西畠遺跡	やまなしけんえんざんし あかお 山梨県塩山市赤尾 680番地ほか	19203	35° 41' 50"	138° 44' 36"	平成10年11月4日 ～12月18日	850	国道411号（塩山東バイパス）建設工事
かけいいせき 影井遺跡	やまなしけんえんざんし あかお 山梨県塩山市赤尾 225番地ほか	19203	35° 41' 37"	138° 44' 30"	平成11年6月8日 ～7月16日	1,055	国道411号（塩山東バイパス）建設工事
ほさかけやしきば 保坂家屋敷墓	やまなしけんえんざんし あかお 山梨県塩山市赤尾 675番地ほか	19203	35° 41' 52"	138° 44' 38"	平成10年6月22日 ～12月24日 平成10年6月22日 ～12月24日	100	国道411号（塩山東バイパス）建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
下西畠遺跡	散布地	绳文時代・前期・中期・古墳時代・奈良時代・平安時代	绳文時代中期住居跡1軒・古墳時代住居跡2軒・方形周溝墓4基・奈良・平安時代住居跡4軒・溝など	土器（绳文土器・古墳時代土師器・平安時代土師器・灰釉陶器）石器・鐵器等			
西畠遺跡	散布地	平安時代・近世	平安時代住居跡7軒・溝2条・近世道路跡	土器（平安時代土師器・耳皿・灰釉陶器）石器・鐵器・近世陶磁器等			
影井遺跡	散布地	平安時代	平安時代住居跡3軒・掘建柱建物跡	土器（平安時代土師器）瓦貨・铁製鎗等			
保坂家屋敷墓	屋敷内墓地	近世	石造物20基	近世陶磁器・人骨			

**山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第196集**

---

2002年3月22日 印刷

2002年3月29日 発行

**下西畠遺跡・西畠遺跡  
影井遺跡・保坂家屋敷遺跡**

—国道411号（塩山東バイパス）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

編 集 山梨県埋蔵文化財センター  
山梨県東八代郡中道町下曾根923  
TEL 055-266-3016

發 行 山梨県教育委員会  
山梨県土木部

印 刷 株式会社少国民社

---